

喜多町遺跡

J R両毛線伊勢崎駅付近連続立体交差事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011

群馬県伊勢崎土木事務所
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

両毛線は上野（群馬）・下野（栃木）の両毛地区の生糸や絹織物の輸送を目的として建設されました。伊勢崎市は、古くから絹の生産が盛んで、両毛線は生産された絹を運搬し、日本経済の一翼を支える役割を果たしてきました。現在、伊勢崎市の製造品出荷額は1兆円を超え、太田市に次いで県内第二位の規模となっています。また、同市の人口増加率は県内有数の伸びを示しており、2005年には20万人を超える地方都市となりました。

伊勢崎駅は、1889年の開設以来120年余が経過しましたが、連続立体化工事により、2010年（平成22年）5月30日に高架新駅舎が併用され、都市を支える駅に変貌を遂げました。

喜多町遺跡は、群馬県伊勢崎市曲輪町・太田町に所在し、このJ R両毛線伊勢崎駅付近連続立体交差事業に伴い、その一部が工事にかかるため、群馬県教育委員会の調整により埋蔵文化財発掘調査が実施されることとなりました。群馬県伊勢崎土木事務所の委託を受けた財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団は平成19年11月から平成20年1月にかけて発掘調査を実施し、その成果についてまとめた本報告書をようやくここに刊行する運びとなりました。

発掘調査により喜多町遺跡からは、縄文時代の集落跡や、古墳時代の集落跡が発見され、特に古墳時代前期の遺構群や出土品は、歴史上の大変革期ともいえる古墳出現期の具体的な様相を示す重要な資料を提示することができました。

本遺跡の発掘調査から報告書刊行まで、群馬県伊勢崎土木事務所、群馬県教育委員会、伊勢崎市教育委員会をはじめとする諸機関並びに地元関係者の皆様に多大なご理解ご協力を賜りました。本報告の刊行にあたり心から感謝申し上げます、序文といたします。

平成23年3月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 須田 栄一

例言

- 1 本報告書は、J R 両毛線伊勢崎駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施された、喜多町遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書に所収の遺跡名と発掘調査地の所在は、以下のとおりである。
喜多町（きたまち）遺跡 調査面積 1,200㎡ 群馬県伊勢崎市曲輪町・太田町地内
- 3 事業主体 群馬県伊勢崎土木事務所
- 4 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 調査組織及び発掘調査の実施期間と担当者は、以下の通りである。
実施期間：平成19年11月1日～平成20年1月31日 調査担当：唐澤至朗（主席専門員）、坂口 一（主任専門員・総括）
掘削請負工事：(有)毛野考古学研究所 地上測量：(株)シン技術コンサル前橋支店 航空写真撮影：技研測量設計（株）
- 6 整理組織及び発掘調査の実施期間と担当者は、以下の通りである。
整理担当 綿貫邦男（上席専門員） 実施期間 平成22年10月1日～平成23年3月31日
- 7 本書作成の担当者は次のとおりである。
執筆 第1章第1節 唐澤至朗（専門員）、第9章第1節 岩崎泰一（主席専門員）、第9章第2節 大木紳一郎（上席専門員）、遺構所見 唐澤至朗、坂口 一、その他 笹澤泰史（主任調査研究員）
写真撮影 佐藤元彦（補佐）
- 8 下記事項の観察
縄文土器 橋本 淳（主任調査研究員）、土師器・須恵器 神谷佳明（主席専門員）、石器 岩崎泰一
- 9 発掘調査及び出土遺物整理にあたっては、次の諸機関並びに諸氏にご教示、ご協力を賜った。（敬称略）
群馬県教育委員会・伊勢崎市教育委員会・赤塚次郎（愛知県埋蔵文化財センター）・阿部朝衛（帝京大学）・遠坂純伸（太田市教育委員会）・小倉淳一（法政大学）・川道 亨（伊勢崎市教育委員会）・須永光一（太田市教育委員会）・関川尚功（奈良県立橿原考古学研究所）・勢藤 力（伊勢崎市教育委員会）・田中清美（大阪文化財研究所）・出浦 崇（伊勢崎市教育委員会）・寺沢 薫（奈良県立橿原考古学研究所）・早川隆弘（伊勢崎市教育委員会）・深澤敦仁（群馬県教育委員会）・前原 豊（前橋市教育委員会）・右島和夫（専修大学）・横澤真一（伊勢崎市）
- 10 出土遺物・図面・写真・記録などの資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡例

- 1 本書中の遺構番号は、発掘調査時に付したものをそのまま使用している。
- 2 本書の挿図縮尺は、以下を基本とする。
住居、土坑・・・1/60、溝・・・1/200、土器・・・1/3・1/4、銭貨・・・1/1、全体図・・・1/200
- 3 遺構図の方位記号は国家座標の北を使用した。真北との偏差は0度22分52.78秒である。座標系は国家座標第IX系。
- 4 本文中の遺構の位置は、国家座標IX系を用いたグリッドで表した。国家座標IX系を5m方眼に区切り、XY軸の交点下3桁をグリッド名とした。462-136は、X軸=+54,462、Y軸=-74,136を指す。
- 5 本文中で使用したテフラの記号と降下年代は以下の通りである。
浅間B軽石（As-B）・・・1108（天仁元）年 榛名ニッ岳伊香保テフラ（Hr-FP）・・・6世紀中葉
榛名ニッ岳渋川テフラ（Hr-FA）・・・6世紀初頭 浅間C軽石（As-C）・・・4世紀初頭
※As-C軽石の降下年代については、3世紀に遡る可能性が指摘されている（若狭 徹 1998「群馬の弥生時代が終わるとき」『人が動く・土器が動く古墳が成立する頃の土器の交流』かみつけの里博物館、坂口 一 2010「高崎市・中居町一丁目遺跡周辺集落の動向」『中居町一丁目遺跡3』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)。
- 6 古墳時代の遺構は出土土器を型式分類し、時期設定を行った。隣接する平成18年度伊勢崎市教育委員会調査『喜多町遺跡』2008の概期の時期設定との対応は以下の表の通りである。本報告の期の設定は第9章第2節に示した。『喜多町遺跡』2008で設定した時期は、I期、II期、III期古、III期新、IV期、V期であるが、本報告では平成18年度調査と区別するために頭に市を付して、市I期、市II期、市III期古、市III期新、市IV期、市V期とする。

平成18年度調査 『喜多町遺跡』2008年伊勢崎市教委	I期 (市I期)	II期 (市II期)	III期古 (市III期古)	III期新 (市III期新)	IV期 (市IV期)	V期 (市V期)	
平成19年度調査(本調査)	I期	II期	III期古	III期中	III期新	IV期	V期

- 7 本調査区と平成18年度調査区の間には、調査範囲を設定する上で未調査部分が生じた。未調査部分は各図面で調査区外と記し、図示した。
- 8 遺物図に使用しているスクリーントーンの表示する意味は下記の通りである。

 付着物  煤  赤色塗彩  黒色

目次

序	
例言・凡例	
目次	
挿図・写真図版目次	
第1章 調査と整理の経過	1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の経過	
第3節 調査の方法	
第4節 整理の経過・方法	
第2章 遺跡の立地と環境	2
第1節 位置と地理的環境	
第2節 周辺の遺跡	
第3章 喜多町遺跡の概要	8
第1節 昭和27年度調査の概要	
第2節 平成18年度調査の概要	
第3節 平成19年度調査の概要	
第4章 基本土層	10
全体図	12
遺構一覧表	16
第5章 縄文時代の遺構と遺物	17
概要	
第1節 竪穴住居	
第2節 埋甕	
第3節 土坑	
第4節 遺構外出土遺物	
第6章 古墳時代の遺構と遺物	35
概要	
第1節 竪穴住居	
第2節 土坑	
第3節 溝・谷（水田耕作土）	
第4節 遺構外出土遺物	
第7章 古代以降の遺構と遺物	89
概要	
第1節 土坑	
第2節 井戸	
第3節 溝	
第4節 地震痕	
第8章 自然科学分析	95
概要	
第1節 喜多町遺跡の土層とテフラ	
第2節 喜多町遺跡における植物珪酸体（プラントオパール）分析	
第9章 まとめ	103
第1節 縄文洪水層と遺跡分布	
第2節 喜多町遺跡出土の古墳時代前期の土器	
観察表	117
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	喜多町遺跡周辺地勢図	2	第54図	C区3a号住居(2)	59
第2図	遺跡周辺の地質図	3	第55図	C区3a号住居出土遺物	60
第3図	喜多町遺跡周辺の主な遺跡	6	第56図	C区3b号住居と出土遺物	61
第4図	喜多町遺跡出土の土器	8	第57図	C区4号住居	62
第5図	喜多町遺跡調査区設定図	8	第58図	C区4号住居出土遺物	63
第6図	市3号土坑と出土した縄文時代前期前半の深鉢片	9	第59図	C区5号住居	63
第7図	市33号住居覆土出土の草創期～早期の土器片	9	第60図	C区7号住居	64
第8図	喜多町遺跡A～C区基本土層図	11	第61図	C区8号住居出土遺物	64
第9図	喜多町遺跡全体図(1)	12	第62図	C区8号住居	65
第10図	喜多町遺跡全体図(2)	13	第63図	C区市13a号住居と出土遺物	66
第11図	喜多町遺跡全体図(3)	14	第64図	C区市13b号住居と出土遺物	67
第12図	喜多町遺跡全体図(4)	15	第65図	C区市16a号住居(1)	68
第13図	縄文時代の遺構配置図	17	第66図	C区市16a号住居(2)	69
第14図	B区12号住居	18	第67図	C区市16b号住居(1)と出土遺物	70
第15図	B区12号住居出土遺物	19	第68図	C区市16b号住居(2)	71
第16図	C区6a・C区6b号住居	20	第69図	B区1号住居	72
第17図	C区6a号住居出土遺物(1)	21	第70図	B区2号住居と出土遺物(1)	72
第18図	C区6a号住居出土遺物(2)	22	第71図	B区2号住居と出土遺物(2)	73
第19図	C区6b号住居出土遺物(1)	23	第72図	B区3号住居(1)	73
第20図	C区6b号住居出土遺物(2)	24	第73図	B区3号住居(2)	74
第21図	B区1号埋喪位置図・平面図と出土遺物	24	第74図	B区3号住居出土遺物	75
第22図	B区3号土坑・C区1号土坑と出土遺物、C区6号土坑と出土遺物、C区2号土坑と出土遺物(1)	26	第75図	B区4号住居(1)	77
第23図	C区2号土坑出土遺物(2)、C区3号土坑と出土遺物	27	第76図	B区4号住居(2)と出土遺物	78
第24図	C区4号土坑と出土遺物、B区2号土坑・C区7～C区9号・C区市94号・C区市24ab号土坑	28	第77図	B区市2号住居	79
第25図	A区遺構外出土遺物・B区遺構外出土遺物(1)	30	第78図	B区市2号住居出土遺物	80
第26図	B区遺構外出土遺物(2)	31	第79図	C区市13c号住居と出土遺物	80
第27図	B区遺構外出土遺物(3)・C区遺構外出土遺物(1)	32	第80図	B区1号土坑と出土遺物、C区5号土坑と出土遺物	81
第28図	C区遺構外出土遺物(2)	33	第81図	A区1号溝・A区1号谷	82
第29図	喜多町遺跡2面全体図	34	第82図	A区1号溝・A区1号谷土層断面	83
第30図	古墳時代の遺構配置図	35	第83図	A区1号谷出土遺物	84
第31図	B区5号住居(1)	36	第84図	C区3号溝	85
第32図	B区5号住居(2)と出土遺物	37	第85図	C区3号、C区市3号溝とその周辺からの出土遺物	86
第33図	B区6号住居と出土遺物	38	第86図	B区遺構外出土遺物(1)	87
第34図	B区7号住居(1)	39	第87図	B区遺構外出土遺物(2)、C区遺構外出土遺物	88
第35図	B区7号住居(2)と出土遺物	40	第88図	古代以降の遺構	89
第36図	B区8号住居	41	第89図	A区1号・A区2号土坑・B区1号井戸	90
第37図	B区8号住居出土遺物	42	第90図	B区市1号溝	91
第38図	B区9号住居と出土遺物	43	第91図	C区1号溝と出土遺物、C区2号溝と出土遺物	92
第39図	B区10号住居	44	第92図	C区市2号溝	93
第40図	B区11号住居	45	第93図	A区・B区の地割れ・地震痕	94
第41図	B区13号住居	46	第94図	自然科学分析位置図	95
第42図	B区市3a号住居(1)と出土遺物	47	第95図	基本土層地点1の土層柱状図	98
第43図	B区市3a号住居(2)	48	第96図	基本土層地点2の土層柱状図	98
第44図	B区3b号住居(1)と出土遺物	49	第97図	喜多町遺跡基本土層1における植物珪酸体分析結果	101
第45図	B区3b号住居(2)	50	第98図	市域北部の地形区分図	103
第46図	B区市8a号住居と出土遺物	51	第99図	洪水層上面出土土器	104
第47図	B区市8b号住居	52	第100図	洪水層と出土土器	105
第48図	B区市10a号住居と出土遺物	53	第101図	下層洪水層下の包含層	105
第49図	B区市10b号住居	54	第102図	洪水層下出土土器(1)	106
第50図	C区1号住居と出土遺物	55	第103図	洪水層下出土土器(2)	106
第51図	C区2号住居(1)	56	第104図	洪水層下出土土器(3)	106
第52図	C区2号住居(2)と出土遺物	57	第105図	洪水層と出土土器	107
第53図	C区3a号住居(1)	58	第106図	外来系土器分類図	112
			第107図	Ⅲ期新段階の土器	113

写真図版目次

P L . 1	喜多町遺跡全景（東から前橋方面を望む） A区全景（東から） A区1号谷（東から） A区2面調査区全景（東から）			
P L . 2	A区2面粉砂（南から） B区1面全景（東から） B区2面全景（西から） B区1号谷2面全景（南から） B区1号谷2面土層断面（南から）			
P L . 3	B区土層断面（中央下の灰白色が縄文洪水層） C区全景（東から） C区2面調査区全景（西から） C区2面調査区全景（東から） A区1号谷基本土層（南から）			
P L . 4	A区台地部基本土層（南から） B区台地部基本土層（南から） B区2面1号谷基本土層（南から） C区1地点基本土層（南から中央の灰白色が縄文洪水層）			
P L . 5	B区12号住居全景（南から） B区12号住居埋喪・炉（西から） B区12号住居炉（南から） B区12号住居埋喪（南から） B区12号住居対ピット全景（東から） B区12号住居掘方全景（西から） C区6号住居全景（南西から） C区6a号住居土器炉（南西から）			
P L . 6	C区6a号住居土器炉全景 C区6b号住居1号埋喪周辺（南西から） C区6b号住居1号埋喪（南西から） C区6号住居掘方全景（南西から） B区1号埋喪土層断面（南から） B区3号土坑土層断面（南から） B区2号土坑全景（南から） C区1号土坑全景（南から）			
P L . 7	C区2号土坑全景（南から） C区3号土坑全景（南から） C区4号土坑全景（南から） C区6号土坑全景（南から） C区7号土坑全景（南から） C区8号土坑全景（南から） C区9号土坑全景（南から） C区市94号土坑土層断面（南から）			
P L . 8	B区5号住居全景（南から） B区5号住居遺物出土状態 B区6号住居貯蔵穴（北から） B区5号住居掘方全景（南東から） B区6号住居全景（南西から） B区6号住居掘方全景（南西から） B区7号住居全景（南西から） B区7号住居遺物出土状態			
P L . 9	B区8号住居全景 B区8号住居遺物出土状態 B区8号住居遺物出土状態 B区8号住居掘方全景（南西から） B区9号住居土層断面（南から） B区9号住居掘方全景（南西から） B区10号住居全景（南から） B区11号住居柱穴土層断面（南東から）			
P L . 10	B区11号住居全景（南西から） B区11号住居柱穴（南東から） B区市3a号住居全景（南から） B区市3b号住居全景（南西から） B区市8a号住居全景（南から） B区市8b号住居全景（南西から） B区市10a号住居全景（南西から） C区1号住居掘方全景（南西から）			
P L . 11	C区2号住居全景（南西から） C区2号住居遺物出土状態（南西から） C区2号住居遺物出土状態（南西から） C区2号住居遺物出土状態（南西から） C区2号住居遺物出土状態（南西から） C区2号住居炉（南東から）			
		C区3a号住居全景（南西から） C区3a号住居遺物出土状態 C区3a号住居遺物出土状態 C区3a号住居掘方全景（南西から） C区4号住居全景（南西から） C区4号住居掘方全景（南西から） C区5号住居全景（北東から） C区5号住居掘方全景（北東から） C区市13a号住居全景（南から） C区市13a号住居掘方全景（南から） C区市13b号住居全景（南から） C区市13b号住居遺物出土状態（南から） C区市13a・市13c号住居全景（南から） C区市13a・市13c号住居掘方全景（南から） C区市16a号住居全景 C区市16a号住居炭化材遺物出土状態 C区市16a号住居炭化材遺物出土状態 C区市16a号住居掘方全景（南西から） C区市16b号住居全景（南から） C区市16b号住居遺物出土状態（南から） C区市16b号住居貯蔵穴全景（南から） C区市16b号住居遺物出土状態（南から） B区1号住居全景（東から） B区2号住居全景（北東から） B区2号住居遺物出土状態（北東から） B区2号住居遺物出土状態（北東から） B区2号住居掘方全景（北東から） B区3号住居全景（南西から） B区3号住居竈全景（南東から） B区3号住居竈掘方 B区3号住居竈掘方全景（南東から） B区4号住居全景（南東から） B区4号住居地震地割れ痕（南東から） B区4号住居竈全景 B区4号住居貯蔵穴土層断面（北東から） B区4号住居地震のために凹んだ痕跡（南東から） B区4号住居南壁土層断面（北から） B区4号住居に食い込んだ地割れの土層断面（北から） B区4号住居掘方全景（南東から） B区市2号住居全景（南から） B区1号土坑全景（南から） C区5号土坑全景（北から） C区3号溝全景（南から） C区3号溝土層断面（南から） C区市3号溝全景 C区市3号溝土層断面（南から） A区1号土坑全景（南から） B区1号井戸土層断面（南から） B区1号溝全景（北から） C区1号溝全景（西から） C区2号溝全景（南から） C区市2号溝全景（南から） 赤坂川 赤坂川合流	P L . 12	
			P L . 13	
			P L . 14	
			P L . 15	
			P L . 16	
			P L . 17	
			P L . 18	
			P L . 19	
			P L . 20	
			P L . 21	
			P L . 22	
			P L . 23	
			P L . 24	
			P L . 25	
			P L . 26	
			P L . 27	
			P L . 28	
			P L . 29	
			P L . 30	

第1章 調査と整理の経過

第1節 調査に至る経緯

東日本旅客鉄道株式会社（JR東日本）両毛線は、古くから両毛地域と呼ばれてきた群馬県南東部から栃木県南西部を結ぶ、新前橋駅（群馬県前橋市）－小山駅（栃木県小山市）間の84.4kmを結ぶ幹線鉄道である。開業は明治21（1888）年の両毛鉄道（小山－足利間）に始まり、翌明治22（1889）年に小山－前橋間まで延伸され、現在の原型が成立している。その後日本鉄道への譲渡と上越線側への接続や明治39（1906）年の国有化を経て、明治42（1909）年に両毛線の呼称が設定され、現在に至っている。両毛地域では古くから生糸がさかんに生産され、桐生や伊勢崎の織物産業の振興もあって、この鉄道は開業当初から両毛地域の発展に寄与してきた。

一方、沿線都市の発展はそれぞれの都市構造の変化をもたらし、鉄道横断か所のさらなる利便性と安全性を求めるところとなり、新たな都市計画の策定と併せて各所で高架工事が行われるに至っている。伊勢崎駅周辺における連続立体交差事業は、このような社会的要請にもとづいて計画され、この事業に関わる埋蔵文化財の保護が緊急の課題となった。群馬県教育委員会文化財保護課では、平成16～19年度にわたり当該事業予定地内の試掘調査を行い、喜多町遺跡の一部がこれに含まれることを確認した。

喜多町遺跡は、伊勢崎駅北西部の曲輪町及び太田町に所在し、縄文時代から古墳時代にわたる埋蔵文化財包蔵地として『群馬県史』などによって知られており、その保護に関わる協議が、群馬県・群馬県教育委員会・伊勢崎市・東日本旅客鉄道株式会社によって行われ、やむを得ず発掘調査による記録保存とする方向が示された。これを受けて、事業主体となる群馬県中部県民局伊勢崎土木事務所と群馬県教育委員会との調整によって、新たな高架工事に関わる1,200㎡を発掘調査対象とすることとなったのである。

以上、前年度までの協議結果に基づき、発掘調査は群馬県中部県民局伊勢崎土木事務所を委託者とし財団法人

群馬県埋蔵文化財調査事業団を受託者として、平成19年11月1日から平成20年1月31日までの3ヶ月間、実施することとなった。

第2節 調査の経過

この遺跡は、伊勢崎市市街地の北西部でJR両毛線伊勢崎駅の西側に位置し、赤坂川左岸の伊勢崎台地上に立地する。工事計画に沿って調査対象地をA・B・C区の3区画に分割し、調査面は①縄文時代中期以降（As-C混土下面）、②縄文時代中期以前（縄文洪水層下面）の2面に設定して発掘調査を実施した。調査面積は①が1,200㎡、②が780㎡で、延べ1,980㎡である。

また、伊勢崎市都市計画事業伊勢崎駅周辺第二土地区画発掘調査事業に伴う平成18年度に実施された喜多町遺跡（伊勢崎市教育委員会が実施）は本調査区に並行して隣接しているため、調査区をまたいだ遺構を多く検出した。本調査にあたっては、『喜多町遺跡』2008伊勢崎市教育委員会の調査成果を確認しながら遺構の確定を行った。両遺跡をまたぐ遺構については伊勢崎市教育委員会発行の『喜多町遺跡』2008で付した遺構番号を生かし、市〇〇号と付して調査を行った。

遺構の確定には、伊勢崎市教育委員会のご協力を得た。

調査日誌抄

平成19年11月1日	西から東へA～C区を設定し、試掘調査を開始。
平成19年11月5日	A区表土掘削（本調査）開始
平成19年11月5日	A区表土掘削（本調査）開始
平成19年11月8日	A区基本土層確認。撮影、作図。
平成19年11月9日	B区表土掘削（本調査）開始
平成19年11月14日	B区遺構確認、翌日から住居調査開始。テフラサンプル（自然科学分析）採取。
平成19年11月16日	A区終了。B区溝・井戸調査開始。
平成19年12月1日	B区1面調査終了。翌日からB区2面調査開始。
平成19年12月18日	B区2面調査終了。C区1面調査開始。
平成19年12月18日	B区2面調査終了。C区1面調査開始。
平成20年1月18日	C区1面調査終了。C区2面調査開始。
平成20年1月23日	C区2面調査終了。C区埋戻し開始。
平成20年1月30日	現場引渡し。

第3節 調査の方法

- (1) 国家座標第IX系を基準にグリッドを設定した。
- (2) 遺構名称は各区で種別ごとに、通し番号を付した。遺物の取り上げに際しては、遺構単位を基本とし、位置をとどめるものについては、番号を付し、記録した。
- (3) 出土遺物の取り上げに際しては図化等を行ったが、埋没土中から出土した小破片は一括して取り上げた。
- (4) 調査区を西から東へA～C区まで設定した。
- (5) 調査は各調査区ごとに試掘を先行し、本調査を実施した。

第4節 整理の経過・方法

整理は平成22年10月から23年3月までの6カ月間行った。平成23年2月に報告書原稿を整え、印刷及び製本作業ののち同年3月に刊行した。

- (1) 出土遺物は遺構・グリッド等出土位置に応じた分類から開始し、種別分類、接合、復元、選別、写真撮影、実測、トレースと順次進めた。土器については遺存度の高いもの、時期認定の証たるものを優先して選定し報告書に掲載することとした。
- (2) 遺構図は、伊勢崎市教育委員会調査遺構との照合と修正、合成図作成に作業の主眼をおいた。



全体図の照合作業

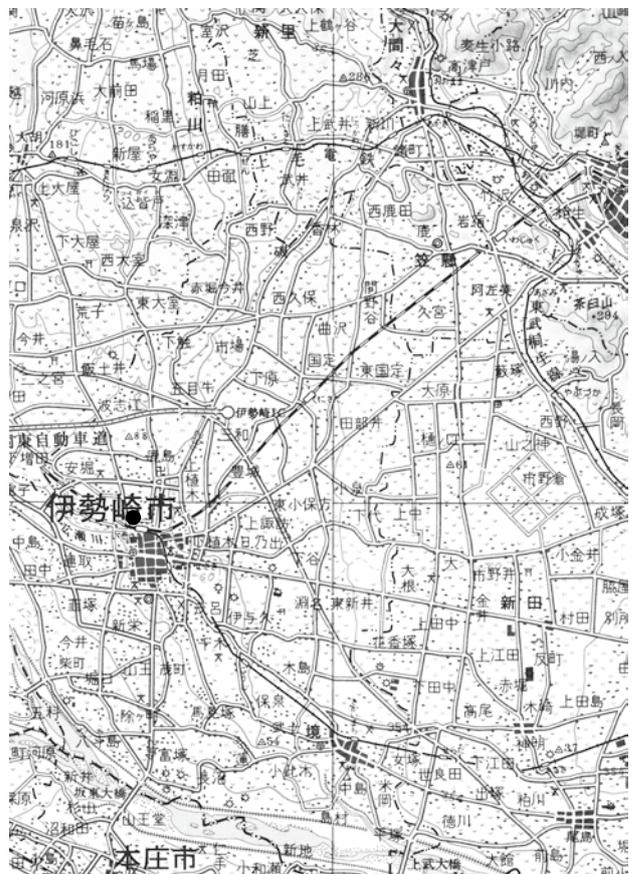
第2章 遺跡の立地と環境

第1節 位置と地理的環境

喜多町遺跡は群馬県伊勢崎市太田町、曲輪町に所在する。J R 両毛線伊勢崎駅北西200mにあり、標高は約65m、J R 両毛線線路に北接する市街地にある。現状では遺跡周辺はほぼ平坦で、洪水起源と考えられるシルト層・砂層が堆積している。調査区付近は近年に埋め立てられて宅地・畑地となっているが、周辺には水田の残る地区もある。

伊勢崎市は西を広瀬川、東を粕川によって画された幅3キロほどの平坦地形の上に立地している。遺跡は関東平野北西部に位置するため、大きな起伏に乏しい。広瀬川は本遺跡西0.5km、粕川は本遺跡の東約1.0kmを流れる。調査区西に接している赤坂川は広瀬川の支流である。

地形上は、広瀬川と粕川に挟まれた伊勢崎台地に分類



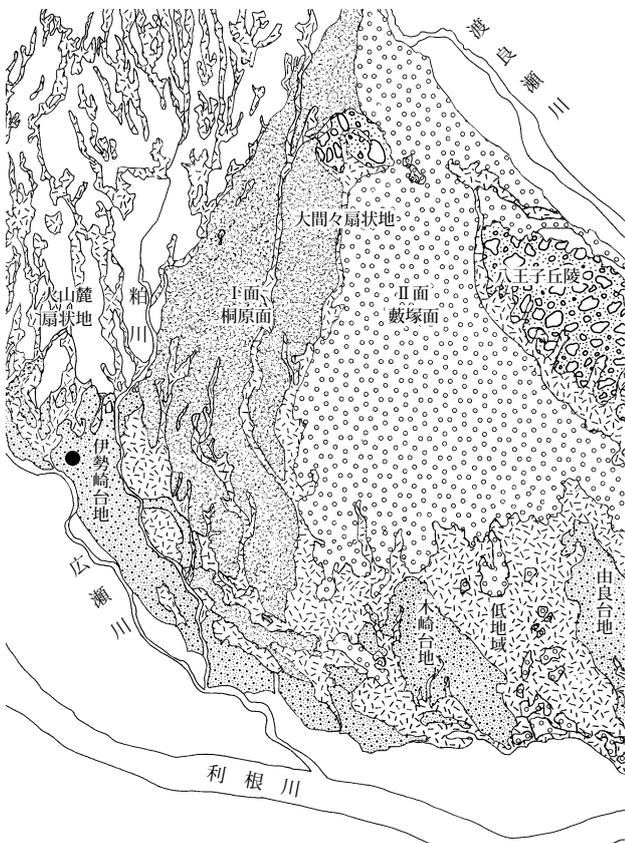
第1図 喜多町遺跡周辺地勢図
(国土地理院1/200,000「宇都宮」)

される。伊勢崎台地は、神沢川と広瀬川を西限として、東は粕川に至る比較的広範囲に展開する。地形を構成する地層は、伊勢崎砂層とされる角礫砂質層や砂質シルト層など5層からなり、厚さは10m前後に達するといわれている。その成因は火山麓扇状地からの大量の砂質物質が、比較的短時間に堆積したものとみられる。形成時期は、前橋台地が伊勢崎台地の下にのびていることや、板鼻褐色軽石層や黄色軽石層との関係で約1万年前に推定されている（『伊勢崎市史通史編1』1987）。

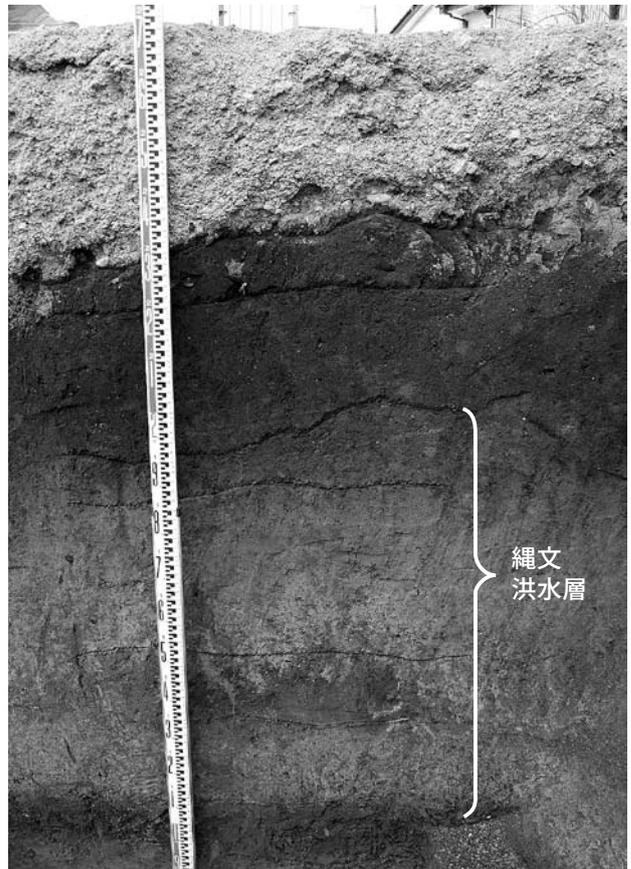
本遺跡では縄文時代前期前半以降、中期後半以前の洪水層が検出された。洪水層の下位から、縄文時代前期前半の土坑（平成18年度伊勢崎市教委）が検出され、一方、洪水層の上位から、縄文時代中期後半（加曾利E3式）の敷石住居（平成19年度群埋文）が検出されている。この洪水層は、洪水砂の堆積状況及び洪水層直下の地形（IX層上面）からみて、A区1号谷・B区1号谷・B区2面1号谷がその供給源だが（第8図 土層断面参照）、全てがこの谷から供給されたのではなく、おそらく上流から網状流となって堆積した可能性が高い。洪水層は喜多町遺跡付近の台地上で厚さ約1mを測り、伊勢崎台地を形成する縄文時代前期前半以降、中期後半以前の洪水層

として注目される。

また、市域東の赤城山東南麓には大間々扇状地が広がる。大間々扇状地は、みどり市大間々町桐原を扇頂とする渡良瀬川が更新世に形成した扇状地で、南北16km、扇端の幅12kmの広い地域を指す。大間々扇状地は東遷する渡良瀬川の侵食・堆積作用によって形成され、形成年代から早川の東に平行する崖線を境に西側を桐原面、東側を敷塚面と2つに分けることができる。桐原面が古い扇状地面であり、形成時期は、湯ノ口軽石の降下堆積より古い時期の6万年前辺りと考えられている。これに対して敷塚面はその形成時期が約2万年前と比較的新しい。旧石器時代や縄文時代の遺跡などは、標高90m付近に点在する「あまが池」や「男井戸」などの扇状地の端部の湧水点や河川沿いに分布しており、扇中央部は水を得ることが困難な遺跡空白地域として認識されている。



第2図 遺跡周辺の地質図（S=1/200,000）
（群馬県史1付図2を使用一部改変）



喜多町遺跡（H19）C区1地点基本土層

引用・参考文献

- 女屋和志雄 2009「遺跡の位置と地形」『南久保遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 坂口一 2008「遺跡の位置と地形」『本関町古墳群』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 松島榮治ほか 1987「第一章 原始社会の伊勢崎」『伊勢崎市史 通史編1』伊勢崎市史編さん委員会
- 南田法正 2008「第三章 遺跡の立地と環境」『喜多町遺跡』伊勢崎市教育委員会

第2節 周辺の遺跡（第3図、表1）

旧石器時代

旧石器時代の遺跡は赤城山南麓地域の火山麓扇状地や「大間々扇状地桐原面」に点在している。本遺跡周辺では波志江西宿遺跡（11）、波志江中宿遺跡（12）がみられる。波志江西宿遺跡では尖頭器、ナイフ形石器、彫器、搔器、石刃などの石器が多数出土しており、石器群は3時期に分かれる。波志江中宿遺跡では2面の旧石器時代の文化層が検出された。波志江地域の旧石器の遺跡は、これまでに発見された伊勢崎市域から北の赤城山南麓に展開する旧石器時代の遺跡の最南端に位置する遺跡であるが、波志江地域以南から本遺跡周辺にかけて旧石器時代の遺跡が発見されないのは、伊勢崎台地を形成する洪水層に覆われていることがその要因であると考えられる。

縄文時代

市域北部は縄文期洪水層に厚く覆われ、地形の平坦化が著しい。縄文期洪水層は縄文前期後半と中期前半に堆積し、更新世の台地を埋没させるほどで、それ以前の遺跡の分布については断片的に判明しているのにすぎない。

草創期の遺跡は萩原遺跡（2）、間之山遺跡（16）などがある。間之山遺跡の実態は不明だが、萩原遺跡では爪形文・押圧縄文土器が少量出土している。間之山遺跡と同じ、西桂川流域の五目牛新田遺跡では同時期の集落が発見されており、周辺域にはそうした少量の土器を残す遺跡が散在するのであろう。早期から前期については洪水層下に遺跡が埋まり実態は明らかではないが、早期の撚糸文期後半の包含層が波志江中屋敷東遺跡（9）で確認されており、いずれも遺跡増加期とされるものである。市域北部の洪水層下の地形は赤城山南麓端部と同様であることが予想され、小規模集落が散在することになる。

中期以降の遺跡分布については、神沢川流域に波志江中野面遺跡（4）、波志江中屋敷遺跡（8）などがある。このうち波志江中野面遺跡は、縄文時代中期後半の加曾利E式期の竪穴住居跡が10軒検出されている集落遺跡で

ある。その他にも阿玉台式期、勝坂式期、称名寺式期、堀ノ内式期、加曾利B式期、安行式期の土器が出土しており、縄文時代中期から後期にかけての遺跡であることがわかる。伊勢崎市教育委員会調査の喜多町遺跡でも洪水層の上位から縄文時代中期後半（加曾利E3式）の土坑や埋甕が検出された。

縄文時代後期の遺跡では前述した波志江中野面遺跡（4）や飯土井二本松遺跡、荒砥二之堰遺跡がある。伊勢崎市教育委員会調査分を含む本遺跡では中期後半（加曾利E式期）から後期初頭（称名寺式期）の住居が検出されている。遺跡は赤坂川流域の扇状地内にあり、継続性に乏しく、小規模遺跡であることが特徴である。これらについては、市域東の曲沢遺跡や天ヶ堤遺跡などの大規模環状集落に対する分村的性格を帯びた集落ということであろう。晩期遺跡については、同じ神沢川流域の八坂遺跡（28）以外その存在が知られていない。同時期の遺跡は県内でも激減しており、環境悪化に伴い、人口支持力が相当に落ち込んだものと推測されている。

弥生時代

当該期の遺跡は萩原遺跡（2）や中組遺跡（33）で中期集落が、西太田遺跡（30）で中期から後期の集落がある。この他、太田本郷遺跡（36）や宮下遺跡（38）も弥生期の遺跡とされている。萩原遺跡を除く各遺跡はいずれも神沢川―赤坂川間の遺跡であり、弥生期遺跡が密集している。波志江中屋敷東遺跡ではAs-Cを巻き込んだ洪水層の下に水田が確認されているように、市域北部の水田開発は古墳時代に入り本格化することが確実だが、当地の弥生遺跡の分布をみる限り、神沢川―赤坂川間の一帯が最初期の水田開発地域とすることができる。

古墳時代

古墳時代前期の遺跡は多く、喜多町遺跡（1）、萩原遺跡（2）、新井太田関遺跡（3）、波志江中野面遺跡（4）、波志江中屋敷東遺跡（9）、波志江中宿遺跡（12）、間之山遺跡（16）、新屋敷遺跡（17）、上西根遺跡（19）、華蔵寺裏山古墳（20）、中組遺跡（33）などがある。

古墳時代前期の墓制は前方後円墳・前方後方墳・方形周溝墓が主体となるが、本遺跡周辺では、華蔵寺裏山古墳で主軸長40mを測る4世紀後半の前方後方墳、波志江

中野面遺跡・間之山遺跡・上西根遺跡・中組遺跡で方形周溝墓がみられる。波志江中野面遺跡や中組遺跡などは周溝墓といった墓域とともに同時期の竪穴住居が検出されており、古墳時代前期の集落と墓域の関係が垣間見られる。特に波志江中野面遺跡は方形周溝墓19基と竪穴住居28軒が検出されており、台地上に墓域、生産域を望む台地の縁辺に集落が営まれている様相が明らかになっている。また、波志江中野面遺跡で検出された方形周溝墓19基のうち2基は前方後方形周溝墓であり、注目される。伊勢崎地域では波志江中野面遺跡の他に、舞台遺跡で2基、伊勢崎・東流通団地で1基の前方後方形周溝墓が検出されている。

古墳時代前期の集落は、伊勢崎台地上に数多く見られるようになり、周辺には喜多町遺跡(1)、萩原遺跡(2)、波志江中野面遺跡(4)、波志江中屋敷東遺跡(9)、波志江中宿遺跡(12)、間之山遺跡(16)、新屋敷遺跡(17)、上西根遺跡(19)、中組遺跡(33)などがある。現在の伊勢崎市市街地中心部での遺跡調査例は少ないが、市街地のある北からのびる舌状台地の縁辺から周辺の低地部まで広域に古墳時代前期の集落が展開していることが遺跡の分布状況から類推される。舌状台地東の縁部から低地部にさしかかる上西根遺跡(19)は竪穴住居1軒と同時期と考えられる方形周溝墓5基が検出されている。また、中組遺跡でも竪穴住居と方形周溝墓が検出されており、波志江中野面遺跡同様、この時期の集落と墓域との関係が推測できる資料となっている。

群馬県地域では火山灰や洪水層を指標とした水田や畠跡が多く検出されている。As-C軽石は浅間山を給源とした火山堆積物であるが、その降下時期は考古学的資料から、3世紀末から4世紀初頭であると考えられている。遺跡周辺ではAs-C軽石に完全に覆われた水田跡は検出されていないが、As-C軽石を耕作土に含む水田の基底面が、新井太田関遺跡・波志江中屋敷遺跡・波志江中屋敷東遺跡・萩原遺跡などで検出されている。古墳時代後期のHr-FA上で洪水により埋没した水田が検出される例が前橋市荒砥地区の二之宮宮下東遺跡などで検出されている。古墳時代初頭からの集落遺跡の立地が、古墳時代後期の水田跡周辺の微高地に分布することから、古墳時代初頭にはすでに水田が営まれていたと推測されている。

また、波志江中宿遺跡(12)では古墳時代前期の粘土

採掘坑66基が検出された。粘土採掘坑はS字状口縁台付甕を主とする土器群の原料採取用と推測され、上野地域内における古墳時代前期の土器製作実態の解明に欠かせない資料となっている。

古墳時代中期から後期の遺跡は前期に引き続き、本地域周辺で数多く展開する。喜多町遺跡(1)、萩原遺跡(2)、波志江中野面遺跡(4)、岡屋敷遺跡(6)、波志江中屋敷東遺跡(9)、波志江中宿遺跡(12)、上西根遺跡(19)、八幡町遺跡(21～23)、南久保遺跡(24)、お富士山古墳(29)、西太田遺跡(30)、中組遺跡(33)などでそれらの墓域・居住域の遺跡が発見されている。

お富士山古墳は伊勢崎市域最大規模を誇る前方後円墳である。開墾などで現在は消滅してしまっているが、周辺にはこの古墳を中核とした古墳群が形成されていたと考えられている。埋葬施設の調査は行われていないが、後円部に置かれている長持形石棺がこの古墳のものであると考えられている。古墳は出土した円筒埴輪や古墳の形状から5世紀中葉の所産であると推測されている。

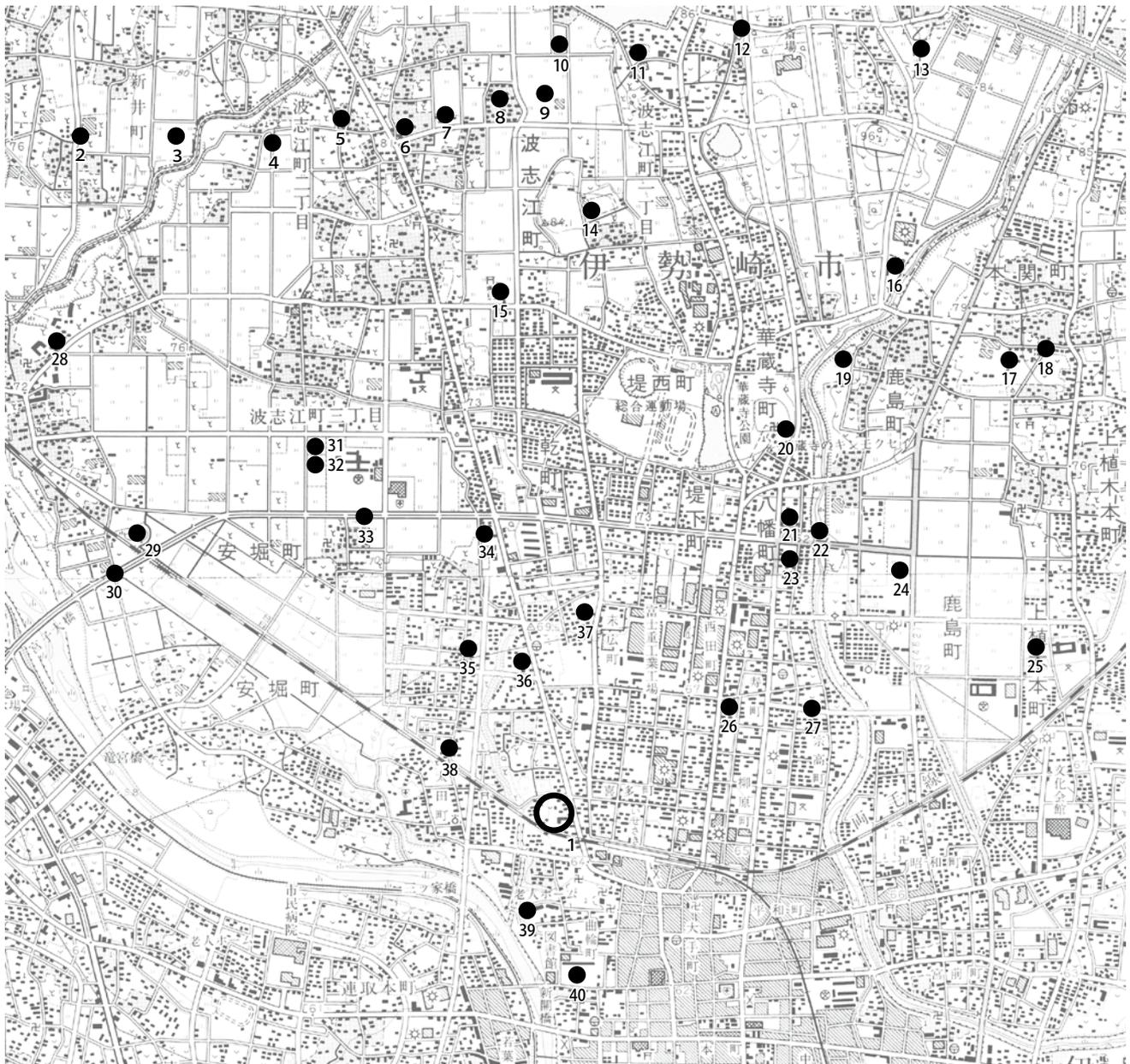
中期から後期の集落遺跡は、喜多町遺跡、萩原遺跡、波志江中野面遺跡、波志江中屋敷東遺跡、波志江中宿遺跡、上西根遺跡、八幡町遺跡、南久保遺跡、西太田遺跡、中組遺跡で確認されている。なかでも、本遺跡北西約1.5kmに位置する西太田遺跡では、古墳時代中期から後期の150軒以上の竪穴住居が検出されている。また、岡屋敷遺跡では115軒、八幡町遺跡では69軒の古墳時代後期の住居が展開している。

古代以降

伊勢崎市域は古代佐位郡の範囲とほぼ一致する。本遺跡東2kmの上植木本町周辺には郡衙推定地の正倉跡が検出された三軒屋遺跡(25)、7世紀後半の上植木廃寺などがあり、佐位郡の中心地であったことがうかがえる。また、南久保遺跡(24)では郡衙併行時の道路状遺構や平安時代の水田が検出されている。集落は西太田遺跡・中組遺跡など本遺跡周辺でも確認されている。

参考文献

- 『伊勢崎市史』1987 伊勢崎市
『本関町古墳群』2008 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団



第3図 喜多町遺跡周辺の主な遺跡 (1/25,000地形図国土地理院発行「大胡」伊勢崎を改変)

表1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	文献等
1	喜多町遺跡	伊勢崎市喜多町	壺、甕、台付甕など東海の特徴を示す古墳時代前期の土器が出土。古墳時代前期～中期の住居、縄文時代中期後半～後期前半の住居跡。	『伊勢崎市史』通史編1987、『喜多町遺跡』伊勢崎市教委2008、本報告書
2	萩原遺跡	前橋市二宮町	縄文時代陥穴、弥生時代中期の竪穴住居3軒、古墳時代前期～平安時代の竪穴住居跡59軒、掘立柱建物跡2棟、As-B下水田跡、溝15条。近世の井戸4、近世以降の土坑、墓坑多数。	『萩原遺跡・新井太田関遺跡』群埋文2004
3	新井太田関遺跡	前橋市新井町	古墳時代前期、古墳時代後期、平安時代初期3面の水田跡、溝。平安時代の住居跡4軒。As-B下水田。	『萩原遺跡・新井太田関遺跡』群埋文2004
4	波志江中野面遺跡	伊勢崎市波志江町	縄文時代中期の住居8軒・土坑8基・埋甕10基。古墳時代の集落(住居29軒・掘立柱建物柱2棟)・方形周溝墓17基・前方後方形周溝墓2基。奈良・平安時代集落(住居45件・掘立柱建物5棟)。As-B下水田・畠。	『波志江中野面遺跡』群埋文2000・2001
5	波志江西屋敷遺跡	伊勢崎市波志江町	古墳時代の掘立柱建物柱跡2棟。奈良・平安時代の竪穴住居跡28軒、溝23条。中近世の井戸15、溝23条、土坑多数。	『波志江西屋敷遺跡』群埋文2002
6	岡屋敷遺跡	伊勢崎市波志江町	浅間大窪沢軽石を含む褐色ローム中で石器・礫群。古墳時代後期の竪穴住居跡115軒。土坑、溝、鍛冶工房。奈良・平安時代の竪穴住居跡15軒。中近世の屋敷跡、堀、掘立柱建物跡、井戸24、土坑、墓。近現代の土坑多数。	『岡屋敷遺跡』群埋文2005
7	波志江中屋敷西遺跡	伊勢崎市波志江町	縄文時代の集石遺構。As-C混土水田。奈良・平安時代の住居5軒・畠。中世の館、掘立柱建物柱2棟)混土水田。	『波志江中屋敷西遺跡』群埋文2005
8	波志江中屋敷東遺跡	伊勢崎市波志江町	縄文時代早期～中期の遺物包含層・住居跡、古墳時代の水田跡、平安時代の竪穴住居跡、中近世の環濠屋敷跡、堀跡、掘立柱建物跡。	『波志江中屋敷東遺跡』群埋文2003
9	波志江中屋敷東遺跡	伊勢崎市波志江町	縄文時代前期の土坑、ピット。古墳時代前期の水田跡、溝21条。As-B下水田跡、溝、土坑。	『波志江中屋敷東遺跡』群埋文2002

第2節 周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	文献等
10	大沼下遺跡	伊勢崎市 波志江町	古墳時代前期～奈良・平安時代の竪穴住居跡1軒。古墳時代の溝。井戸2基。ピット。	『大沼下遺跡・西稲岡遺跡』伊勢崎市教委1977
11	波志江西宿遺跡	伊勢崎市 波志江町	旧石器時代の遺物。縄文時代早期の土器、打製石斧、石鏃。古墳時代後期の竪穴住居跡19軒、掘立柱建物柱跡1棟。中近世の溝、土坑600基、井戸17基、畠耕作痕。	『波志江西宿遺跡』群埋文2002、『波志江西宿遺跡Ⅰ・伊勢山遺跡』群埋文2002
12	波志江中宿遺跡	伊勢崎市 波志江町	旧石器時代の文化層2面、縄文時代の遺物包含層。古墳前期の竪穴住居跡1軒、粘土採掘坑66基、古墳時代の溝、土坑600基、井戸17基、畠耕作痕。As-C混水田跡。As-B下水田跡、平安時代の溝。中近世の井戸、土坑、ピット、溝。	『波志江中宿遺跡』群埋文2001
13	五目牛東遺跡群	伊勢崎市 五目牛町	3地点で調査。A地点は縄文時代早期の山形押型文・沈線土器出土。古墳時代住居12軒。B地点は古墳時代～平安時代集落（住居22軒）。C地点は縄文時代前期の住居2軒（黒浜式・諸磯式）。	『五目牛東遺跡群及び赤堀村8号墳発掘調査報告』赤堀村教委1980
14	波志江権現山遺跡	伊勢崎市 波志江町	縄文時代早期条痕文土器・捺糸文土器・押型土器・スタンプ型石器等が採取されている。	『伊勢崎市史通史編1』伊勢崎市1987
15	西稲岡遺跡	伊勢崎市 波志江町	古墳時代の溝。奈良・平安時代の溝、井戸。	『大沼下遺跡・西稲岡遺跡』伊勢崎市教委1977
16	間之山遺跡	伊勢崎市 波志江町	蟹沼東古墳群の南端部に間之山丘陵にかかる意向を名称変更して、間之山遺跡とした。縄文時代草創期の土器片。弥生時代後期の住居跡1軒。古墳時代前期の住居跡1棟、方形周溝墓。	『蟹沼東古墳群・宮貝戸下遺跡』伊勢崎市教委1978、『伊勢崎市史通史編』伊勢崎市1987
17	新屋敷遺跡	伊勢崎市 本関町	古墳時代初頭の住居跡。平安時代の住居跡1軒。墨書土器が出土。	『伊勢崎市史通史編1』伊勢崎市1987
18	上植木廃寺	伊勢崎市 上植木町	白鳳期創建の地方寺院。金堂・講堂・塔・中門・回廊・基壇を検出。瓦・三彩陶片・墨書土器・瓦塔が出土。	『上植木廃寺』1984・1985・1986・1987・1988・1992・1994
19	上西根遺跡	伊勢崎市 鹿島町	古墳時代前期～奈良・平安時代の住居跡26軒（古墳時代前期1軒、後期25軒）、方形周溝墓5基、石櫛1基、溝15条。中近世の井戸3基。	『上西根遺跡』伊勢崎市教委1985
20	華蔵寺裏山古墳	伊勢崎市 華蔵寺町	古墳時代前期の主軸長約40mの前方後方墳。	『華蔵寺裏山古墳』『伊勢崎市史通史編1』伊勢崎市1987
21	八幡町遺跡B	伊勢崎市 八幡町	古墳時代中期・後期の住居跡、平安・近世の溝跡。	『八幡町遺跡（B）』伊勢崎市教委1988
22	八幡町遺跡D	伊勢崎市 八幡町	古墳時代後期の住居跡、井戸跡、溝跡、土坑跡。	『八幡町遺跡（D）』伊勢崎市教委1990
23	八幡町遺跡	伊勢崎市 八幡町	古墳時代後期竪穴住居跡69軒、溝、井戸、土坑、ピット。B区より石製模造品出土。	『八幡町遺跡』伊勢崎市教委1999
24	南久保遺跡	伊勢崎市 鹿島町	古墳時代の住居跡・畠、都衙併行期の道路状遺構、平安時代の水田（As-B下）溝、中世の屋敷跡・掘立柱建物、縄文時代前期後葉、中期後半、後期前半の土器が出土。	『南久保遺跡』群埋文2009
25	三軒屋遺跡	伊勢崎市 上植木町	上野国佐位郡都御正倉跡。八角形礎石建物、大形礎石建物、掘立柱建物、竪穴建物、区画溝、鍛冶工房など。平成22年11月現在で、16次調査まで実施。	『三軒家遺跡Ⅰ』伊勢崎市教委2007、『三軒家遺跡Ⅱ』伊勢崎市教委2010
26	寿町遺跡	伊勢崎市 寿町	奈良・平安の集落。皇朝十二銭「隆平永寶」出土。	『伊勢崎市文化財保護年報』伊勢崎市教委2007
27	宗高遺跡	伊勢崎市 宗高町	古墳後期住居51、平安住居13、土坑墓。	『年報17』群埋文1998（伊勢崎市教委1997・1998調査）
28	八坂遺跡	伊勢崎市 波志江町	配石遺構。	『八坂遺跡調査概報』東国古文化研究所1972
29	お富士山古墳	伊勢崎市 安堀町	全長125mの前方後円墳、墳丘は3段に構築されている。幅約30mの盾形の周堀をもつ。乳文鏡、石製模造品の刀子・斧、白玉。管玉、円筒埴輪などが出土。後円部頂に長持形石棺が置かれている。5世紀中葉の首長墓の可能性が高い。	『お富士山古墳』伊勢崎市教委1989
30	西太田遺跡	伊勢崎市 安堀町	弥生時代中期～平安時代の住居跡、209軒。（弥生時代中期住居跡3軒・後期1軒。竪穴住居跡の8割は古墳時代の中期・後期）掘立柱建物9棟、井戸17基、溝8条。	『西太田遺跡』伊勢崎市教委1983
31	中組遺跡	伊勢崎市 波志江町	奈良時代の住居跡、奈良・平安時代の住居跡、溝跡。	『中組遺跡』県教委1985
32	中組遺跡	伊勢崎市 波志江町	古墳時代住居跡前期1棟・中期4棟、奈良・平安時代21棟。土坑、井戸。	『中組遺跡』群埋文2001
33	中組遺跡	伊勢崎市 安堀町	弥生時代後期から古墳時代前期の土器、古墳時代前期の方形周溝墓。奈良・平安時代の住居跡。	『中組遺跡』県教委1981
34	本郷上遺跡	伊勢崎市 太田町	古墳、奈良、平安時代	伊勢崎市教育委調査1997
35	本郷下遺跡	伊勢崎市 安堀町	古墳、奈良、平安時代	伊勢崎市教育委調査1993、1997～1999
36	太田本郷遺跡	伊勢崎市 太田町	弥生、古墳、奈良、平安時代	『群馬県文化財情報システム埋蔵文化財包蔵地資料』群馬県教委2002
37	赤坂遺跡	伊勢崎市 太田町	古墳、奈良、平安時代	『群馬県文化財情報システム埋蔵文化財包蔵地資料』群馬県教委2002
38	宮下遺跡	伊勢崎市 太田町	弥生、古墳、奈良時代	伊勢崎市教委調査1996
39	タネンブチ遺跡	伊勢崎市 太田町	縄文時代	『群馬県文化財情報システム埋蔵文化財包蔵地資料』群馬県教委2002
40	北小学校校庭遺跡	伊勢崎市 曲輪町	古墳時代	『群馬県文化財情報システム埋蔵文化財包蔵地資料』群馬県教委2002

※伊勢崎市教委：伊勢崎市教育委員会、群馬県教委：群馬県教育委員会、群埋文：財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

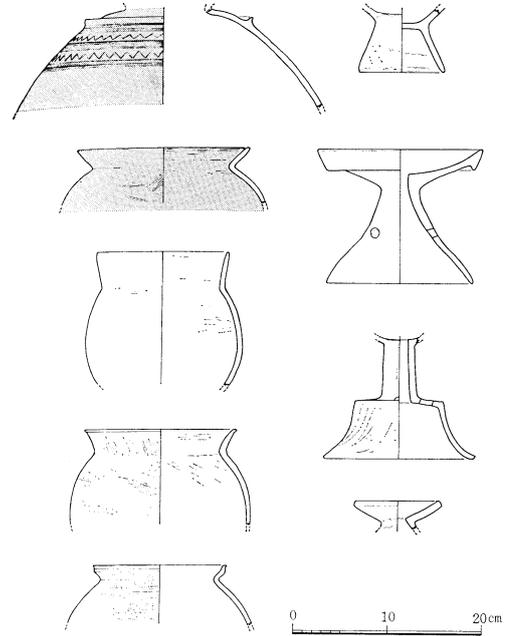
第3章 喜多町遺跡の概要

第1節 昭和27年度調査の概要

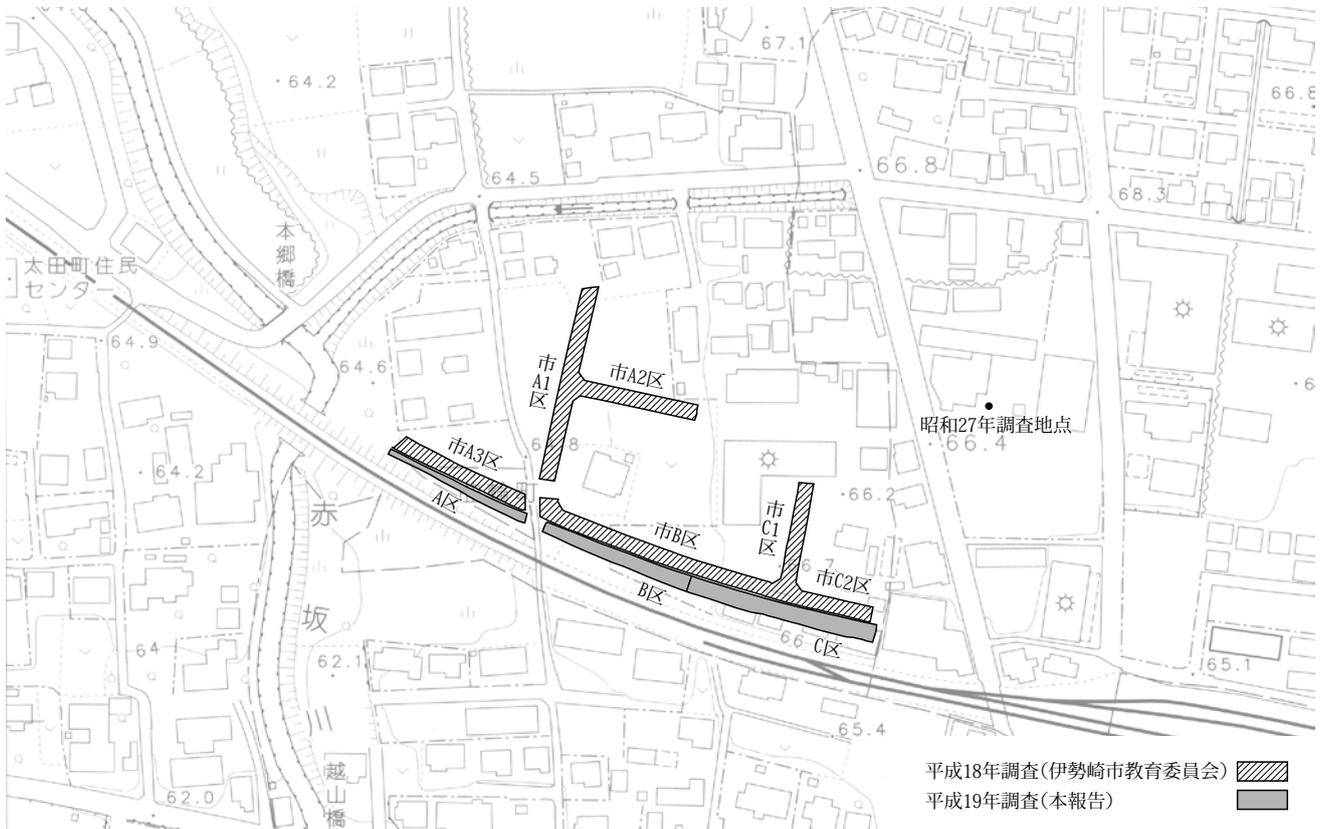
初めて喜多町遺跡が認知された調査は、県立伊勢崎女子高校地歴クラブの生徒が、昭和26年に溝掘削中の土中から土器片を採取したことからはじまった。この土器片は昭和26年8月に、赤堀町24号墳を調査していた群馬大学尾崎研究室に持ち込まれ、これを契機に群馬大学尾崎研究室による、発掘調査が昭和27年に実施された。

調査地点は谷地で、調査では数十 cm の黒色土層及びその下層のシルト質の泥土層から遺物が採取された。遺構は検出されなかったために、土器片の包蔵地とされているが、近接した微高地の集落から流れ込んだものであるのではないかと考えられている。

遺物はパレススタイル壺、甕、S字状口縁台付甕、大型器台を含み、東海系の系譜の特色を示している。これらは、群馬県における古墳時代前期の土器編年研究において学史上欠かすことのできないものとなった。



第4図 喜多町遺跡出土の土器（『群馬県史資料編2』から）



第5図 喜多町遺跡調査区設定図（1/2,500伊勢崎市発行「伊勢崎市現況図28・29」を改変）

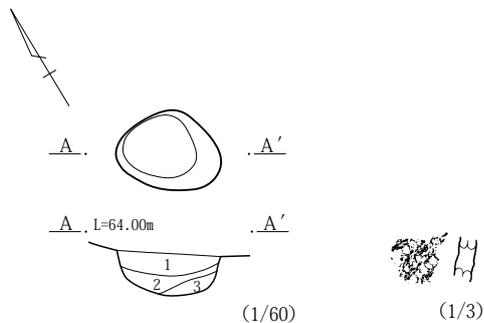
第2節 平成18年度調査の概要

平成18年度の発掘調査は、伊勢崎都市計画事業伊勢崎駅周辺第二土地区画発掘調査事業に伴い、伊勢崎市教育委員会が主体となり調査された。その成果は膨大で、総遺物量は145箱、遺構は縄文時代前期から古代以降まで幅広く検出されている。

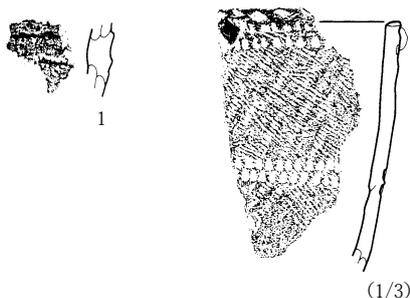
縄文時代はB区の基本土層第Ⅷ層（第4章参照）より下層から検出された市3号土坑がもっとも古い時期の遺構で、縄文時代前期前半の深鉢土器片が出土している。伊勢崎台地での前期前半から前期後葉に堆積した洪水層下層からの遺構の検出は極めて少なく、貴重な証拠資料となっている。なお、草創期から早期の土器片が市33号住居（市A1区古墳時代中期）の覆土中から出土しており、洪水層であるⅧ層が堆積した際の紛れ込みであると推定されている。

縄文時代の遺構の中心は、基本土層第Ⅷ層上層で検出された縄文時代中期後葉加曾利E3～後期前葉堀之内2式期である。遺構は、市A3区を除く全面で確認されている。竪穴状遺構3基、配石1基、埋甕3基、土坑66基、埋没谷2か所などが検出されている。

古墳時代の遺構は豊富で、前期の竪穴住居が31軒、前



第6図 市3号土坑と出土した縄文時代前期前半の深鉢片



第7図 市33号住居覆土出土の草創期～早期の土器片

期推定の竪穴住居が4軒、中期の竪穴住居が10軒、後期の竪穴住居が1軒、溝が6条、周溝状遺構が1基、土坑が15基、小穴が20基、遺物集中部が1か所、埋没谷が2か所など検出された。周溝状の遺構や大型の溝（4号溝）が検出され、古墳時代の墓域・居館・用水路などの可能性が予察されている。また、中期の遺構では、一辺が11mを越す大型住居跡やTK-208型式の須恵器小型壺が出土しており、本遺跡が当地域での中核的集落である可能性が高いことが指摘されている。

群馬県遺跡地図によると、喜多町遺跡の範囲はおよそ62,500㎡とされており、平成18年度調査面積の1,643㎡は、全体の2.6%ほどである。調査で判明した時期を中心として、長期間にわたる遺構群が広く密集して分布している。本遺跡は古墳時代前期でも比較的早い段階から集落が展開し、中期に移行している。古墳時代後期以降の遺構は少なく、古墳時代後期では1軒、平安時代では1軒の竪穴住居跡、中近世ではそれぞれ1基の土坑・井戸が確認されている。

第3節 平成19年度調査(本報告)の概要

本報告での検出された主な遺構は、縄文時代の中期加曾利E3式期の竪穴住居2軒・土坑11基、古墳時代前期の竪穴住居28軒、中期の竪穴住居4軒や土坑・溝・用水路、古代以降の土坑2基・井戸1基などである。遺構の主体は古墳時代前期である。

検出された遺構の一覧は16頁表2に、各時代の遺構の概要は、各章の頭に記載した。本調査は平成18年度調査区に接しており、調査区をまたいだ遺構が数多い。各章には本調査と平成18年度調査で検出された遺構を合わせて掲載している。平成18年度調査分の遺構は、本調査と区別するために市〇〇と付して掲載した。

参考文献

- 『伊勢崎市史』1987 伊勢崎市
- 『喜多町遺跡』2008 伊勢崎市教育委員会
- 『三軒家1遺跡』2007 伊勢崎市教育委員会

第4章 基本土層

本調査の基本土層は平成18年度調査の基本土層と対応している。本調査は、Ⅶ層下面付近を第1面、Ⅷ層（縄文洪水層 Ⅷa～Ⅷi）下面付近を第2面として行った。

基本土層

- I 盛土。
- II 黒褐色土。φ 1～5 mmの白色軽石を含む。
- III 暗褐色土。φ 1～10mm白色軽石、小礫を含む。
- IV 暗黒褐色土。φ 1～3 mmの白色・褐色軽石を含む。As-Bを含む。（第8章 自然科学分析より）。
- V 灰黒色土。φ 1～5 mmのAs-Cを多量に含む（C混土）。A区1面1号谷（基本土層1）内では、水田耕作土。Hr-FAを含む。（第8章 自然科学分析より）。
- VI 黒色土。φ 1～3 mmのAs-Cを含む。上半にはHr-FAを含む。A区1号谷では下半は古墳時代前期の水田耕作土。
- VII 粘質黒色土。台地上では砂質。上位にAs-Cを含む。
- VII a 灰白色粗粒洪水砂。φ 1～10mmの礫を含む。
- VII b 暗黄色粗粒洪水砂。φ 1～3 mmの白色軽石を多量に含む。
- VII c 灰黄色細流洪水砂。
- VII d 灰白色洪水砂。シルト質。φ 1～3 mmの白色軽石を多量に含む。
- VII e 青灰色粗粒洪水砂。ラミナ状堆積。φ 1～20mmの礫を多量に含む。洪水本体。一連の縄文洪水層。
- VII f 褐色洪水砂。硬いシルト質。洪水本体。
- VII g 暗灰白色洪水砂。シルト質。φ 1～3 mmの白色軽石を多量に含む。
- VII h-1 褐色砂質土。青灰色洪水砂を斑に含む。IX層を巻き込んだ洪水砂。
- VII h-2 褐色砂質土。IX層を巻き込んだ洪水砂。
- VII i 明灰白色洪水砂。シルト質。
- IX 褐色粘質土。φ 1～3 mmの白色軽石を多量に含む。
- X 黄褐色粗粒洪水砂。φ 5～20mmの礫を多量に含む。
- X I 青灰色粗粒洪水砂。

縄文洪水層（Ⅷa～Ⅷi）

Ⅷ層（Ⅷa～Ⅷi）は、土壌化した間層を挟むことのない一連の洪水層である。洪水層の下位からは縄文時代前期前半の土坑（平成18年度伊勢崎市教育委員会）、洪水層の上位からは縄文時代中期後半（加曽利E3式）の敷石住居（平成19年度群馬県埋蔵文化財調査事業団）が検出されたことから、洪水層の年代は縄文時代前期前半以降、同中期後半以前であることが明らかになった。本報告では、Ⅷ層をまとめて縄文洪水層と呼称する。

縄文洪水層は、洪水砂の堆積状況及び洪水層直下の地形（IX層上面）からみてA区1号谷・B区1号谷がその供給源と考えられるが（第8図）、全てがこの谷から供給されたのではなく、おそらく上流から網状流となって堆積した可能性が高いと考えられる。

洪水の構造の概略は以下のとおりである。

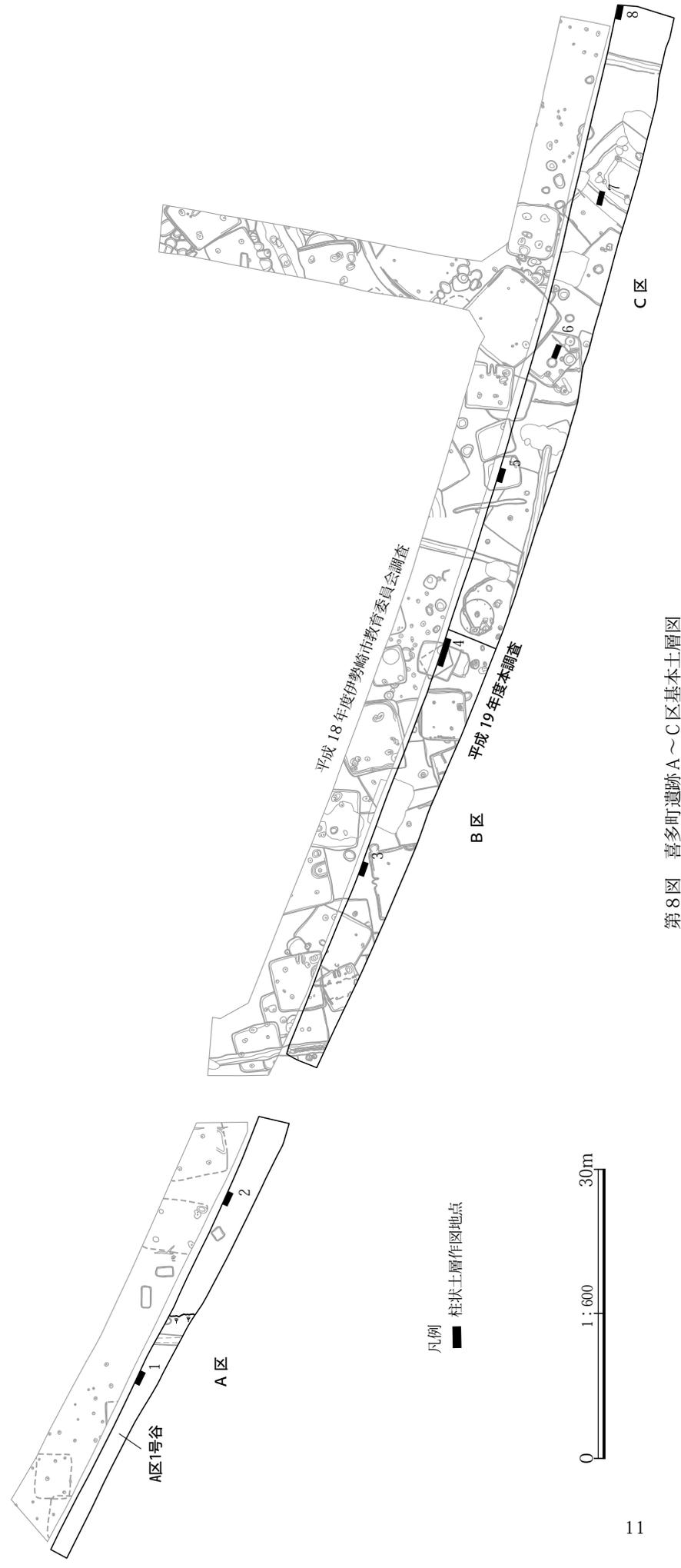
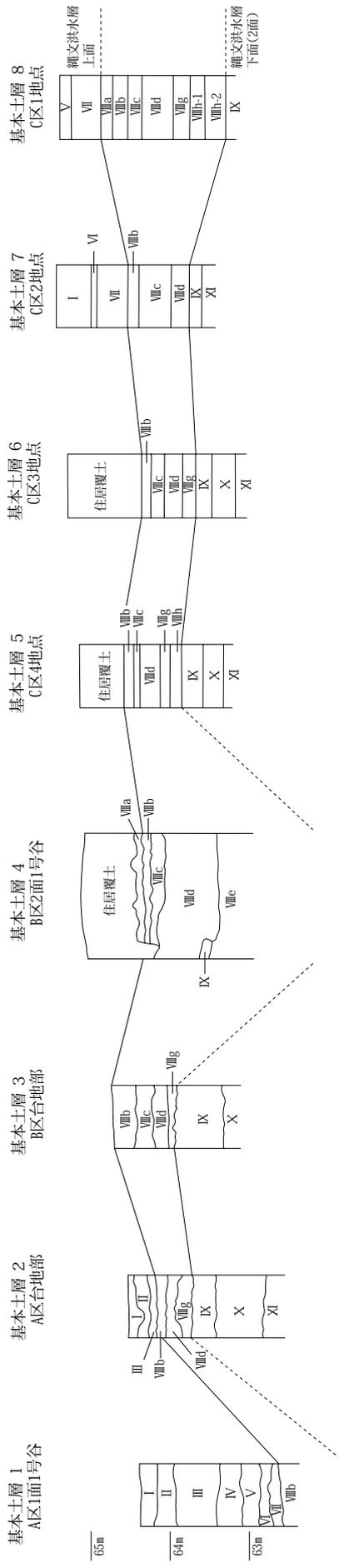
- ①明灰白色シルト質（Ⅷi）から始まるこの洪水は、洪水本体の前に水位の上昇があったことを示す。
- ②次に洪水本体の褐色シルト（Ⅷf）、青灰色粗粒洪水砂（Ⅷe）が流れる。
- ③この時点で谷地のほとんどが埋没し、土砂を呑みきれずにこの付近一帯が滞水する状況になったと考えられる。この滞水によって灰白色シルト（Ⅷd）が堆積したと推測される。
- ④付近一帯の水位が下がった後に、②より弱い洪水（Ⅷa層）がⅧd層上面の凹みを埋めるように堆積して洪水が終了したと考えられる。洪水層はほぼ谷を埋め周囲の地形は平坦化した。

トレンチはA区2地点、B区2地点、C区4地点に設定した。

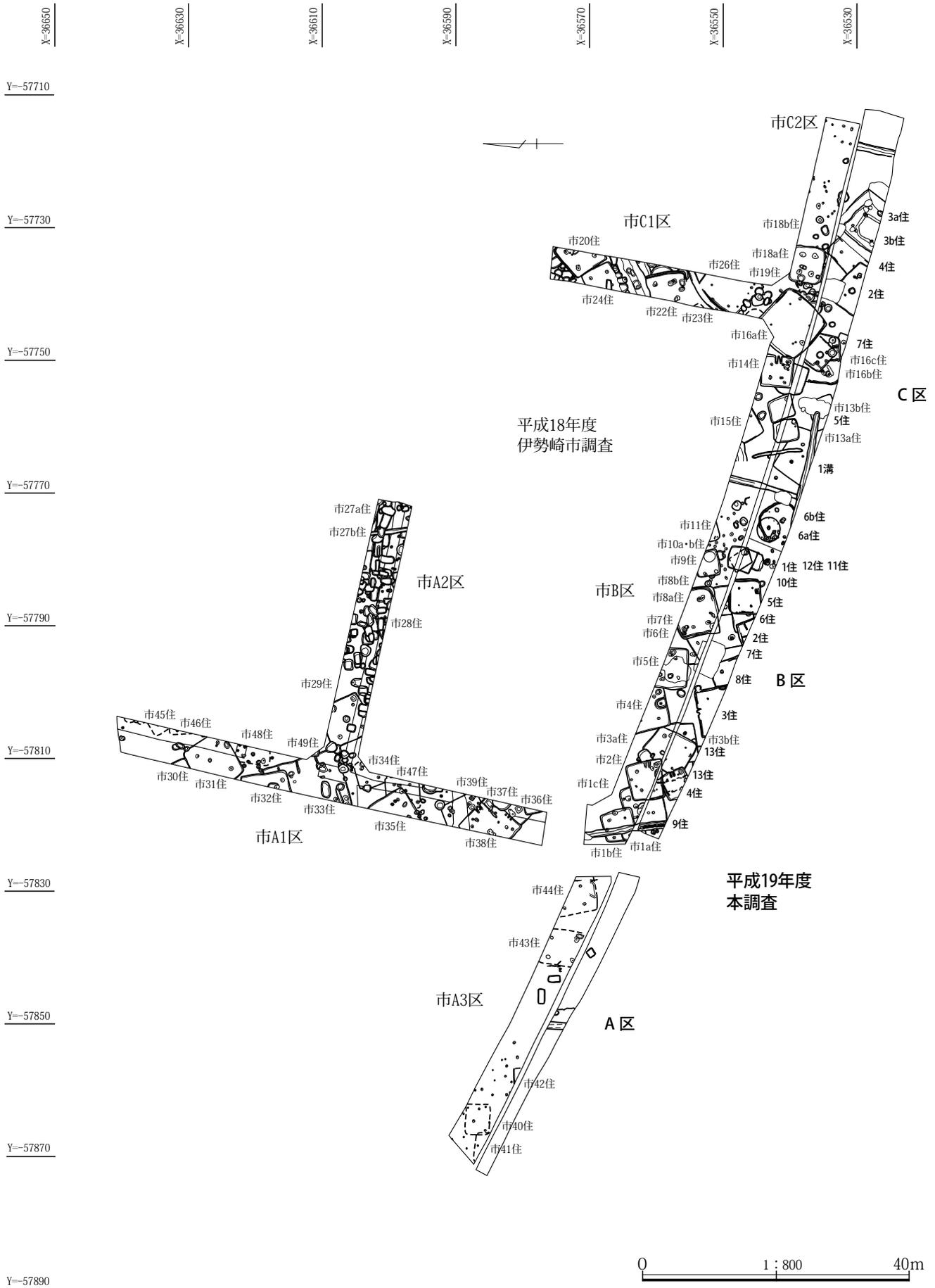
台地部に残存する洪水層でも厚さは約1 mあり、谷地ではさらに堆積が厚いと考えられる。谷地では縄文洪水層の下面まで調査することはできなかったが、おそらく数メートルを超える洪水層の堆積があると推測される。洪水層の上面は後世の攪乱を受けているので、当時の洪水層は、さらに厚かったと考えられる。

本遺跡の調査では、テフラ分析をA区で2カ所、プラントオパール分析はA区で1カ所行った（第8章）。テフラ分析により土層の年代観が補強され、プラントオパール分析により、遺構が検出されなかったものの、水田が営まれていた可能性が高いことが示された。

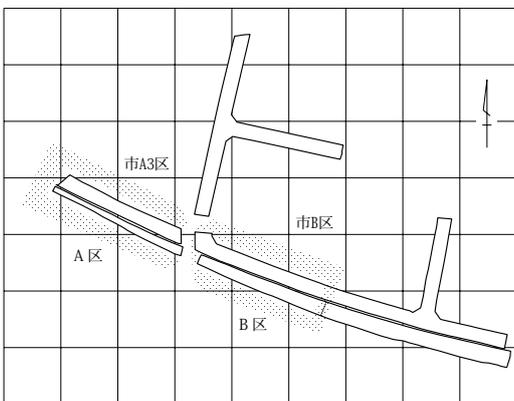
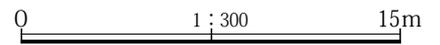
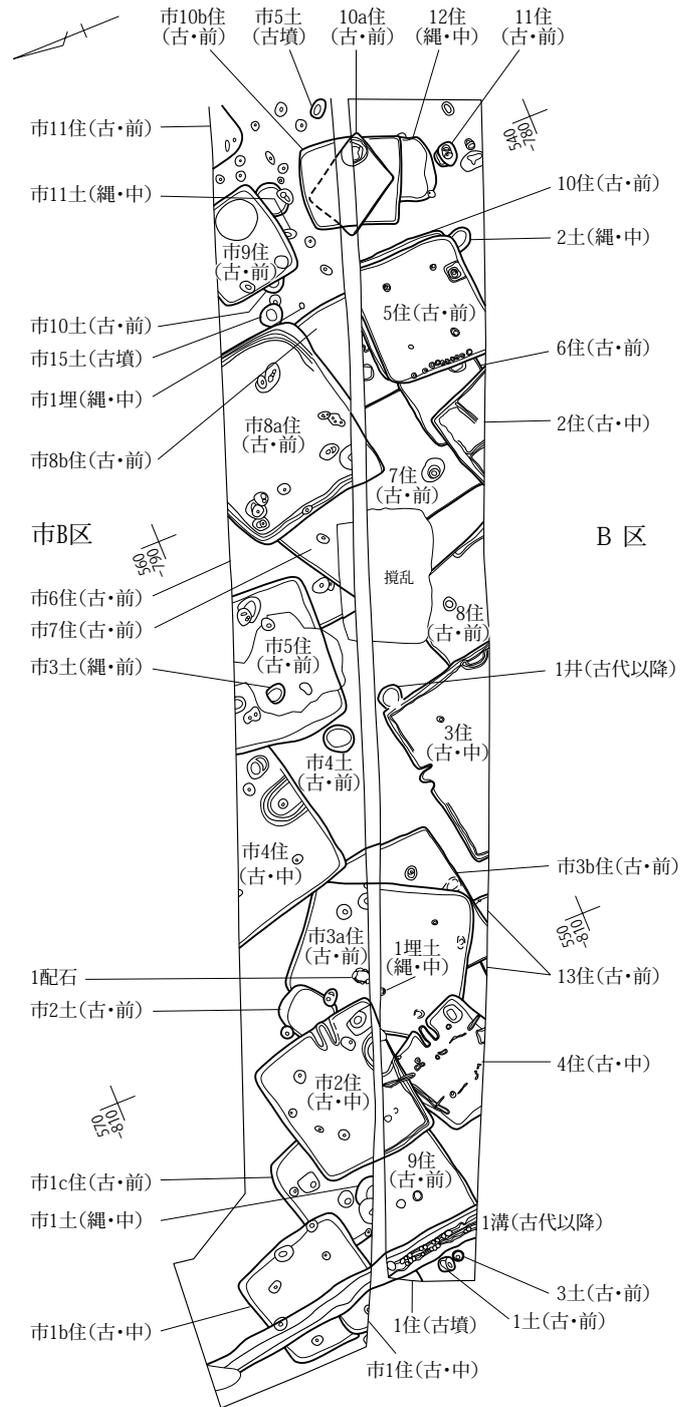
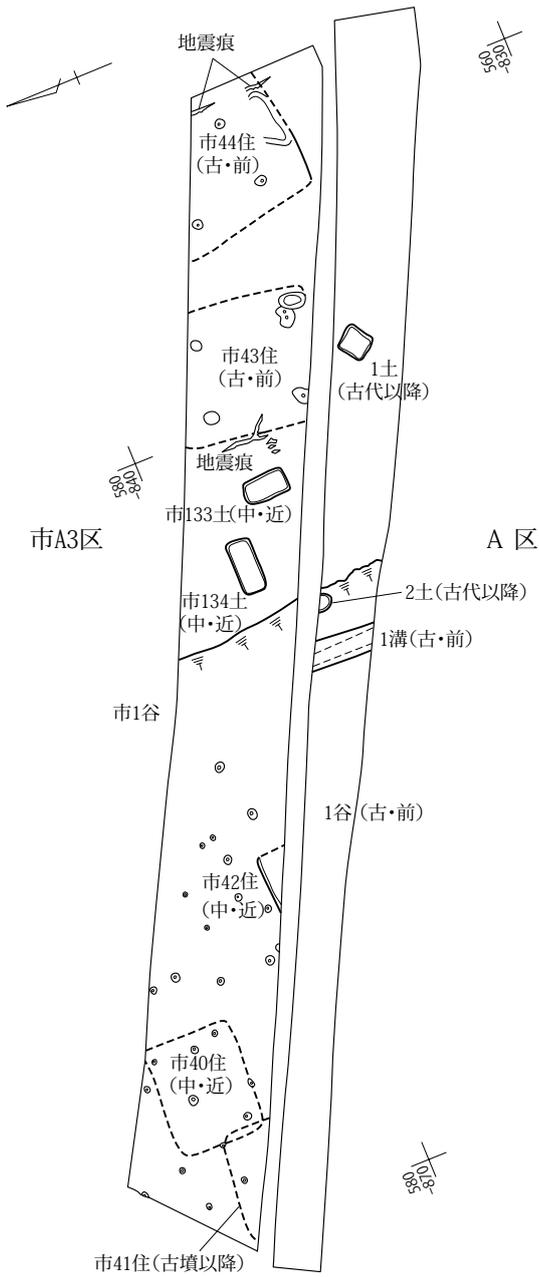
伊勢崎市域における古墳時代前期の中核的な集落遺跡である喜多町遺跡での生産域を推定できる資料の発見は、特出される。



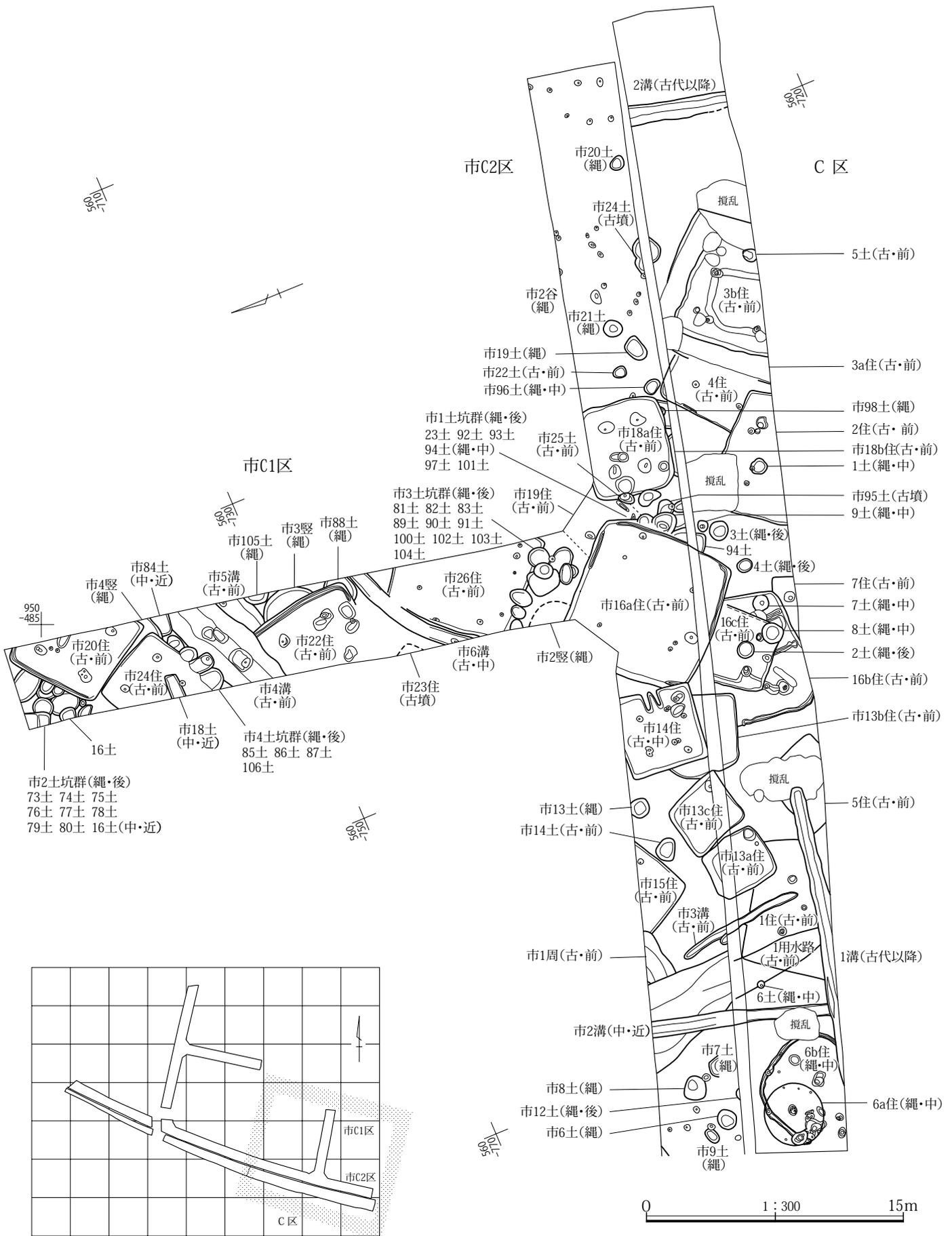
第8図 喜多町遺跡A～C区基本土層図



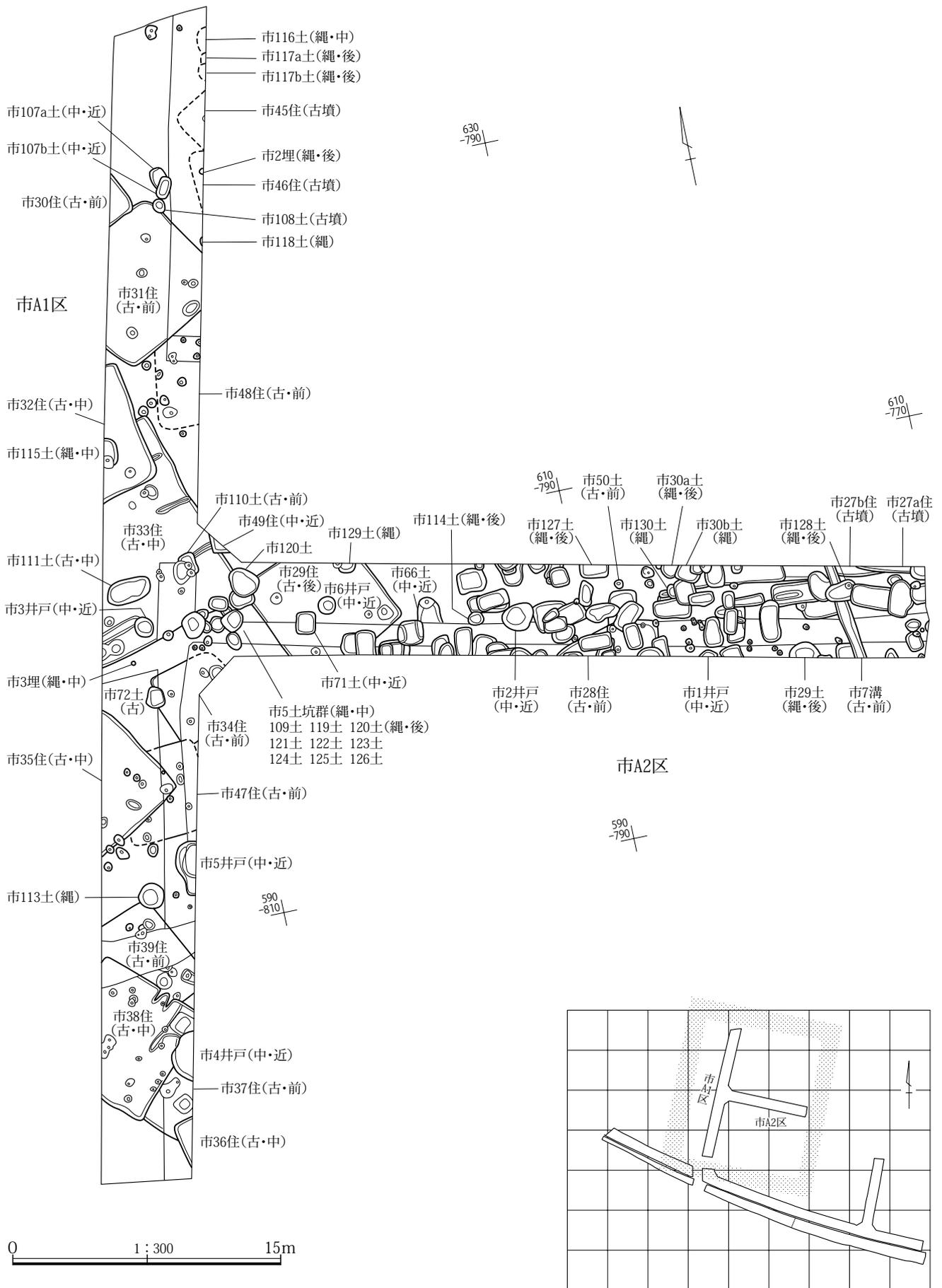
第9図 喜多町遺跡全体図（平成18年度伊勢崎市教育委員会調査・本調査）（1）



第10図 喜多町遺跡全体図（平成18年度伊勢崎市教育委員会調査・本調査A区・B区）（2）



第11図 喜多町遺跡全体図 (平成18年度伊勢崎市教育委員会調査・本調査C区) (3)



第12図 喜多町遺跡全体図（平成18年度伊勢崎市教育委員会調査）（4）

表2 喜多町遺跡遺構一覽表

縄文時代

住居

No	区	遺構名称	位置	形状	規模 (m)			時期	時期詳細区分	備考	掲載頁
					面積	長軸	短軸				
1	B	12号住居	546-782	円形	3.99	2.31	1.82	縄文時代中期	加曾利E4式期		18-19
2	C	6ab号住居	545-777	円形	—	5.78	—	縄文時代中期	加曾利E4式期		20-24

埋糞

1	B	1号埋糞	559-810	円形	0.22	—	0.21	縄文時代中期	加曾利E4式期		24
---	---	------	---------	----	------	---	------	--------	---------	--	----

土坑

1	B	2号土坑	545-784	円形	—	0.81	0.25	縄文時代	—		28
2	B	3号土坑	560-821	円形	0.42	0.40	0.08	縄文時代中期	加曾利E4式期		25-26
3	C	1号土坑	541-740	円形	0.94	0.88	0.25	縄文時代中期	加曾利E4式期		25-26
4	C	2号土坑	535-745	円形	1.02	0.96	0.57	縄文時代後期	称名寺I式期		25-27
5	C	3号土坑	735-743	円形	1.14	1.10	0.45	縄文時代後期	称名寺I式期		25-27
6	C	4号土坑	534-745	円形	0.91	0.76	0.26	縄文時代後期	称名寺I式期		25-28
7	C	6号土坑	542-768	円形	0.43	0.39	0.27	縄文時代中期	加曾利E4式期		25-26
8	C	7号土坑	534-748	円形	0.93	0.92	0.53	縄文時代	—		28
9	C	8号土坑	533-748	円形	1.24	1.18	0.46	縄文時代	—		28
10	C	9号土坑	535-742	円形	0.66	0.58	0.59	縄文時代	—		28
11	C	市24a号土坑	533-726	方形	(1.70)	1.58	0.39	縄文時代	—		28
12	C	市94号土坑	536-743	方形	—	—	0.30	縄文時代	—		28

古墳時代

住居

1	B	5号住居	549-788	方形	21.38	4.72	4.42	古墳時代前期	Ⅱ期		36-37
2	B	6号住居	549-791	長方形	—	3.22	—	古墳時代前期	Ⅱ～Ⅲ期		37-38
3	B	7号住居	555-793	方形・長方形	—	4.95	—	古墳時代前期	Ⅱ～Ⅲ期		38-40
4	B	8号住居	551-800	方形・長方形	—	—	—	古墳時代前期	Ⅲ古～新期		41-42
5	B	9号住居	563-820	方形・長方形	—	—	—	古墳時代前期	—		43-44
6	B	10号住居	549-788	方形	20.91	4.60	4.40	古墳時代前期	—		44
7	B	11号住居	545-781	不明	—	—	—	古墳時代前期	—		45
8	B	13号住居	555-811	方形・長方形	—	—	—	古墳時代前期	—		46
9	B	市3a号住居	559-812	長方形	30.66	6.88	5.61	古墳時代前期	Ⅲ新期		46-48
10	B	市3b号住居	556-811	方形・長方形	—	5.68	—	古墳時代前期	Ⅲ古期		48-50
11	B	市8a号住居	557-791	長方形	—	6.65	5.88	古墳時代前期	Ⅲ新期		50-51
12	B	市8b号住居	550-789	不明	—	—	—	古墳時代前期	—		52
13	B	市10a号住居	549-781	長方形	6.98	2.85	2.40	古墳時代前期	Ⅲ新期		52-53
14	B	市10b号住居	547-782	長方形	12.39	4.02	3.29	古墳時代前期	—		54
15	C	1号住居	542-767	方形・長方形	—	7.72	—	古墳時代前期	—	I～Ⅳ期の混合	54-55
16	C	2号住居	533-742	方形・長方形	—	7.06	—	古墳時代前期	Ⅲ古～中期		56-57
17	C	3a号住居	532-733	方形・長方形	—	8.35	—	古墳時代前期	Ⅲ期新		58-60
18	C	3b号住居	530-733	方形・長方形	—	—	—	古墳時代前期	—	3a号住居の堀方か	60-61
19	C	4号住居	533-736	方形・長方形	—	4.80	3.15	古墳時代前期	Ⅲ期新		60-63
20	C	5号住居	534-760	方形・長方形	—	4.56	3.78	古墳時代前期	—		63
21	C	7号住居	534-751	方形・長方形	—	4.83	—	古墳時代前期	—		64
22	C	8号住居	638-751	長方形	—	4.18	—	古墳時代前期	I～Ⅲ中期	北陸系	64-65
23	C	市13a号住居	542-763	長方形	9.83	3.30	3.04	古墳時代前期	I～Ⅱ期	覆土中にⅢ期の遺物	65-66
24	C	市13b号住居	542-755	長方形	15.05	4.41	3.74	古墳時代前期	Ⅲ古～中期		67
25	C	市16a号住居	543-747	方形	33.97	8.00	7.94	古墳時代前期	—		67-69
26	C	市16b号住居	537-754	方形	45.33	7.30	7.24	古墳時代前期	Ⅲ古～中期		69-71
27	B	1号住居	563-821	不明	—	—	—	古墳時代	—		71-72
28	B	2号住居	548-791	方形・長方形	—	—	—	古墳時代中期	Ⅳ期		72-73
29	B	3号住居	553-807	方形・長方形	—	6.73	—	古墳時代中期	Ⅴ期		73-75
30	B	4号住居	560-813	方形	15.48	3.83	3.50	古墳時代中期	Ⅴ期		76-78
31	B	市2号住居	563-817	長方形	25.95	5.35	4.98	古墳時代中期	Ⅴ期		79-80
32	C	市13c号住居	541-759	長方形	10.51	3.23	3.18	古墳時代中期	Ⅳ期		80

土坑

1	B	1号土坑	561-822	隅丸方形	0.62	0.58	0.26	古墳時代前期	—		81
2	C	5号土坑	528-734	円形	0.87	0.78	0.92	古墳時代前期	—		81

溝

1	A	1号溝	577-850	—	2.35	1.75	0.40	古墳時代前期	—	用水路か	82-85
2	C	3号溝	543-769	—	5.25	1.95	0.62	古墳時代前期	—	用水路か	84-86
3	C	市3号溝	543-769	—	3.81	0.42	0.28	古墳時代前期	—		85-86

古代以降

土坑

1	A	1号土坑	570-840	方形	1.16	1.06	0.10	近世	—		90
2	A	2号土坑	576-840	楕円形	(0.74)	—	0.16	近世	—		90

井戸

1	B	1号井戸	555-800	円形	0.98	0.97	—	近世	—		90
---	---	------	---------	----	------	------	---	----	---	--	----

溝

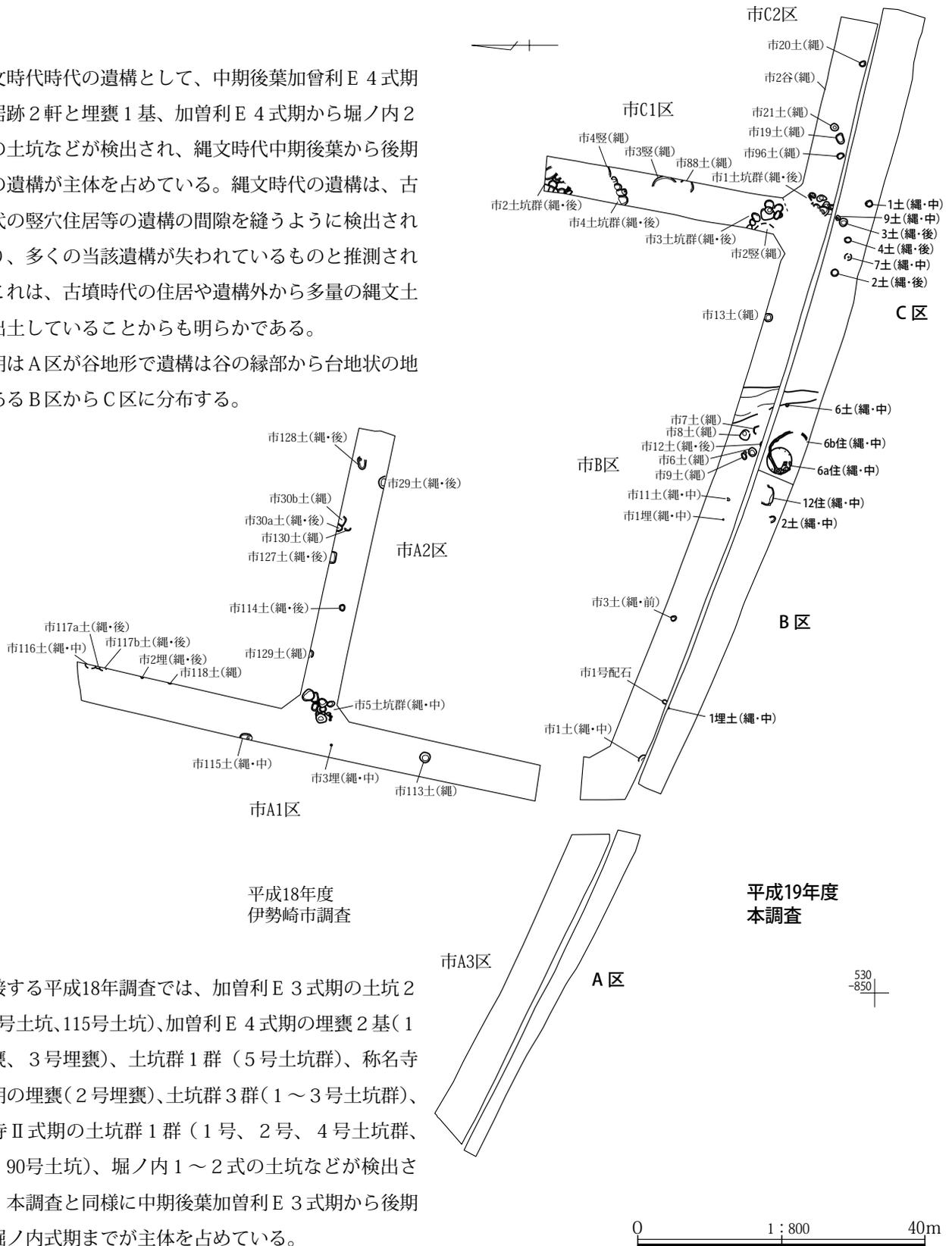
1	B	市1号溝	560-820	—	4.03	0.60	0.36	近世	—		91
2	C	1号溝	540-770	—	17.93	0.84	0.38	近世	—		92-93
3	C	2号溝	529-719	—	5.81	1.09	0.40	近世	—		92-93
4	C	市2号溝	540-770	—	5.25	0.71	0.25	近世	—		93

第5章 縄文時代の遺構と遺物

概要

縄文時代時代の遺構として、中期後葉加曾利 E 4 式期の住居跡 2 軒と埋甕 1 基、加曾利 E 4 式期から堀ノ内 2 式期の土坑などが検出され、縄文時代中期後葉から後期前葉の遺構が主体を占めている。縄文時代の遺構は、古墳時代の竪穴住居等の遺構の間隙を縫うように検出されており、多くの当該遺構が失われているものと推測される。これは、古墳時代の住居や遺構外から多量の縄文土器が出土していることから明らかである。

概期は A 区が谷地形で遺構は谷の縁部から台地状の地形である B 区から C 区に分布する。



隣接する平成18年調査では、加曾利 E 3 式期の土坑 2 基(11号土坑、115号土坑)、加曾利 E 4 式期の埋甕 2 基(1号埋甕、3号埋甕)、土坑群 1 群(5号土坑群)、称名寺 I 式期の埋甕(2号埋甕)、土坑群 3 群(1~3号土坑群)、称名寺 II 式期の土坑群 1 群(1号、2号、4号土坑群、12号、90号土坑)、堀ノ内 1~2 式の土坑などが検出された。本調査と同様に中期後葉加曾利 E 3 式期から後期前葉堀ノ内式期までが主体を占めている。

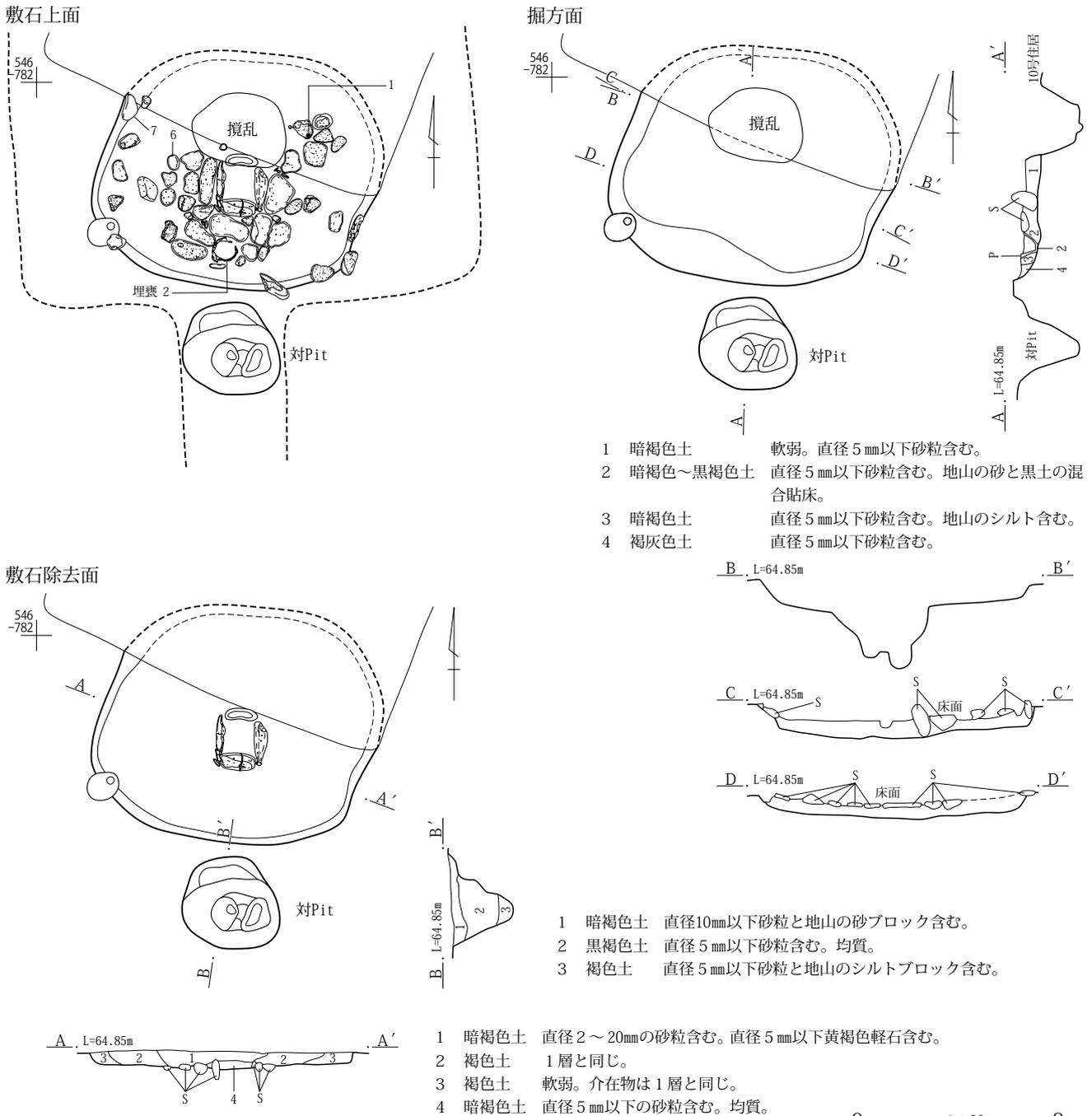
第13図 縄文時代の遺構配置図

第1節 竪穴住居

B区12号住居(第14・15 図、PL. 5・19)

検出状況 本住居は古墳時代前期のB区市10号住居により北壁を切られるようにして検出された。石敷き・石囲炉・埋甕などの残存が良好であった。住居南に2対のピットを検出し、柄鏡形(敷石)住居であると考え、破線

の様な住居範囲を推測した。床面中央に円形の攪乱がある。位置 X=546-782 形状 長軸2.32m、短軸1.82mの円形を呈する。面積 3.99㎡ 壁高 15cm 覆土 暗褐色土層が主体である。床面 掘方面から厚さ約17cmの埋め土を施して平坦な面を造る。炉の周辺に、床面に敷いた偏平な礫が出土しており、敷石住居の特徴がみられる。掘方面は中心が窪む椀状を呈する。壁溝なし 柱穴 東南の壁際で1基、炉の北で2基確認した。



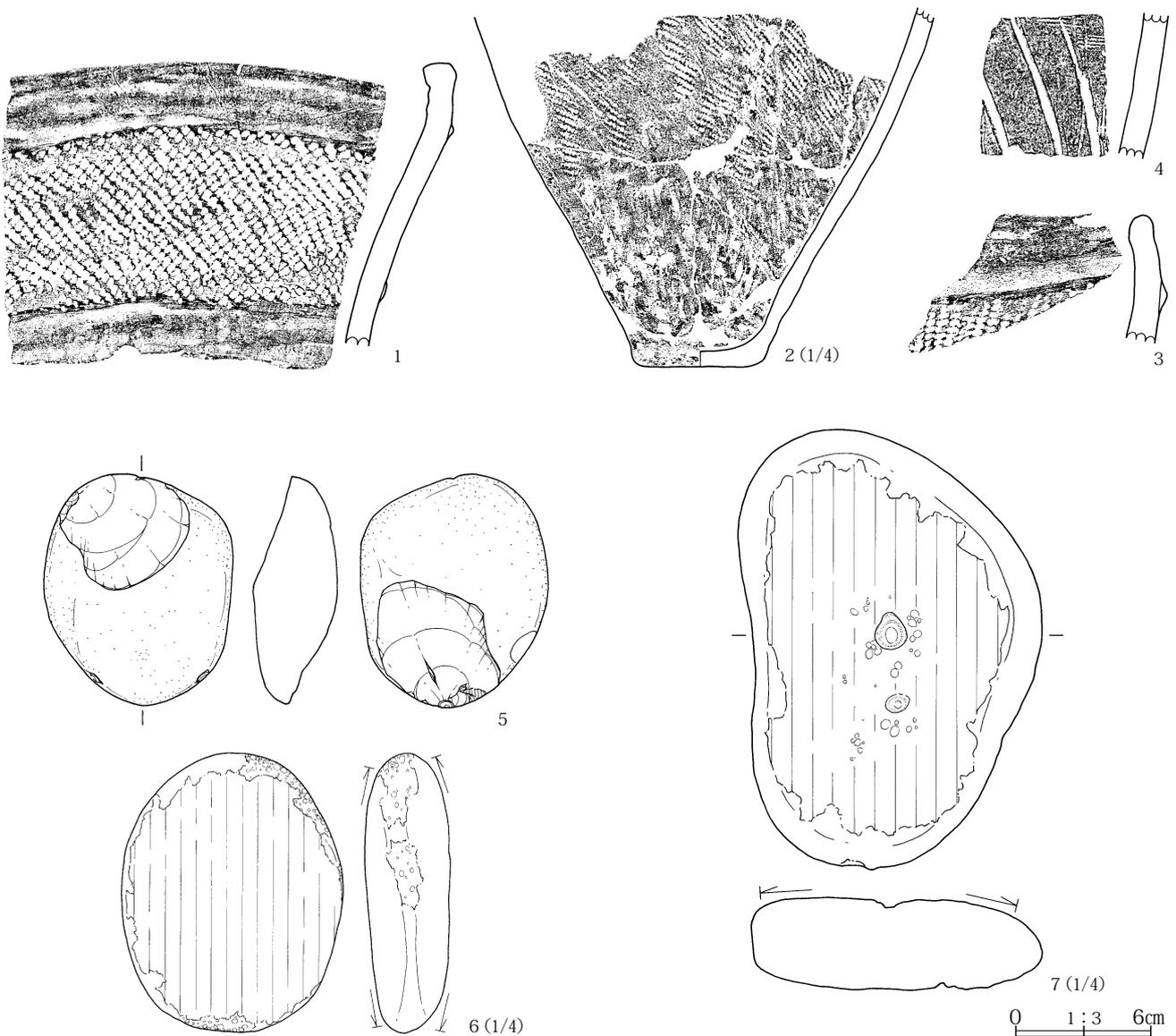
第14図 B区12号住居

対ピットは、直径20cmを測る円形のピットと長軸32cm・短軸21cmを測る楕円形のピットが中心間41cmで並んでいる。 炉 住居中央で検出された。長軸約40cmの扁平な礫を方形に囲むように埋めて、炉としている。北辺の礫は出土しなかったが、礫を埋め込んだ痕跡が検出された。炉内の覆土は暗褐色土主体で、焼土や炭化物の検出はない。 埋没状況 自然埋没 遺物 炉と南壁面の中間で埋甕が検出された(2)。また、敷石直上(1)、ピットの覆土(3)から深鉢の口縁部片が出土した。これらは本遺構に伴う遺物であると判断した。いずれも加曾利E4式に比定される。その他に覆土から称名寺Ⅱ式期の深鉢の体部片(4)が出土しているが、混入物である

と考えられる。

土器片はその他に、加曾利E式期の破片7点と、称名寺Ⅱ式期の破片2点が出土している。石器は石核あるいは敲石の可能性のある石器(5)が覆土から、また、側縁小口部に打痕がある磨石(6)・多孔石(7)が床面直上で出土している。掲載以外に敷石材など43点の礫が出土している(観察表117頁)。

所見 遺構に伴う1~3の深鉢から、本遺構は加曾利E4式期の遺構であると考えられる。円形の住居の中央に石囲炉を設置し、炉周辺の床面に扁平の礫を敷いた縄文中期後半の敷石住居である。柄鏡形の敷石住居であると考えられる。

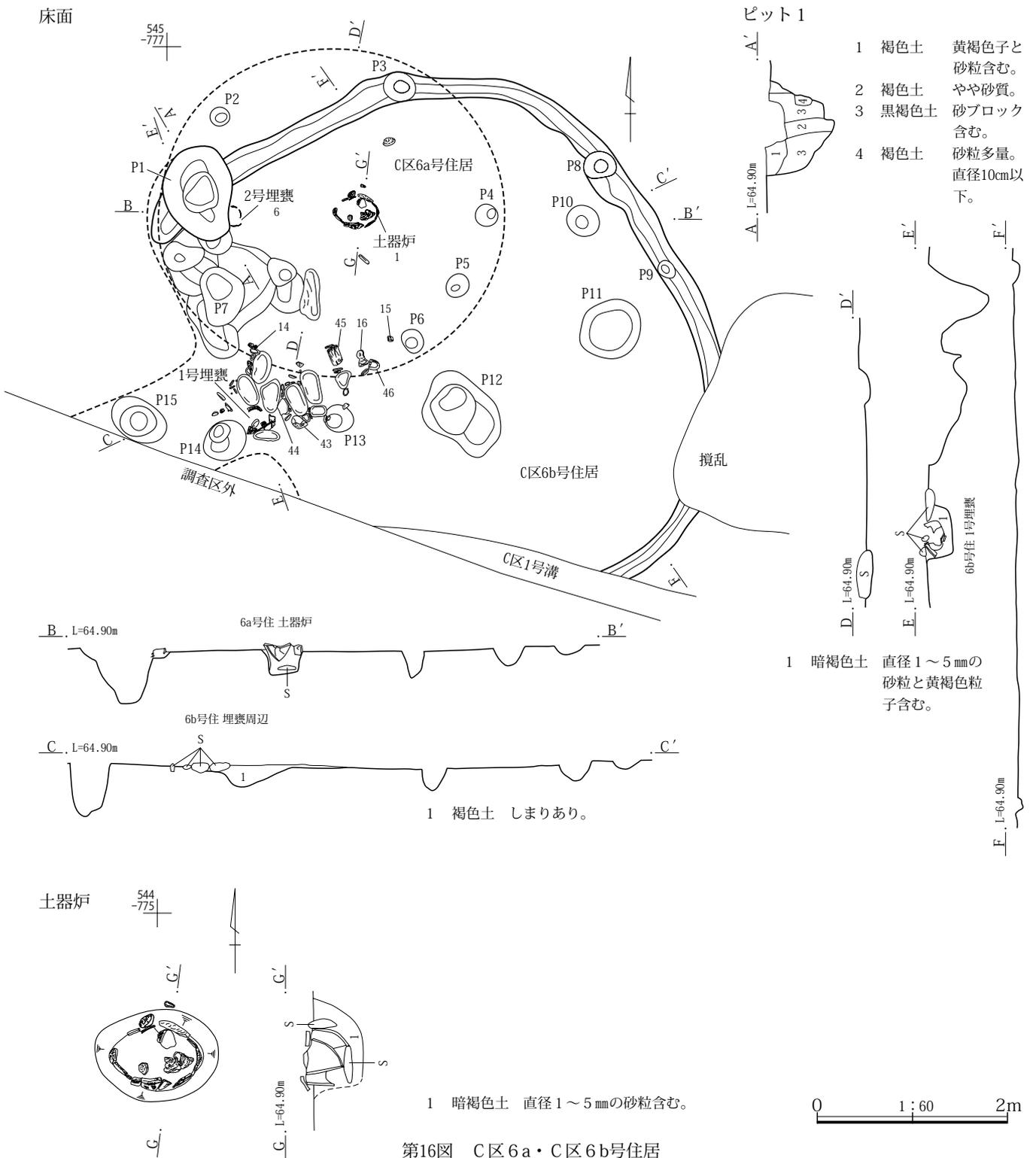


第15図 B区12号住居出土遺物

C区6a・6b号住居(第16～20図、PL.5・6・19・21)

検出状況 壁際に溝状の窪みを持つ6b号住居を検出したが、炉やピットの配列から住居が重複すると推定し、6a号住居とした。6a号住居に土器埋設炉が検出されたことから、6b号住居を6a号住居が切ると考えた。
位置 X=545-777 **形状** 6b号住居の平面形状は円形もし

くは隅丸方形で、長軸5.78mを測る。住居の壁際は壁溝が確認された。
壁高 遺構確認面がほぼ床面。
覆土 埋甕や住居内の土坑で、覆土を確認した。暗褐色土層・褐色土層が主体である。
床面 遺構確認面がほぼ床面。
壁溝 6b号住居で、壁溝が確認された。幅約20cm、深さ約9cmを測る。壁溝の中には直径25～30cm程度のピ



第16図 C区6a・C区6b号住居

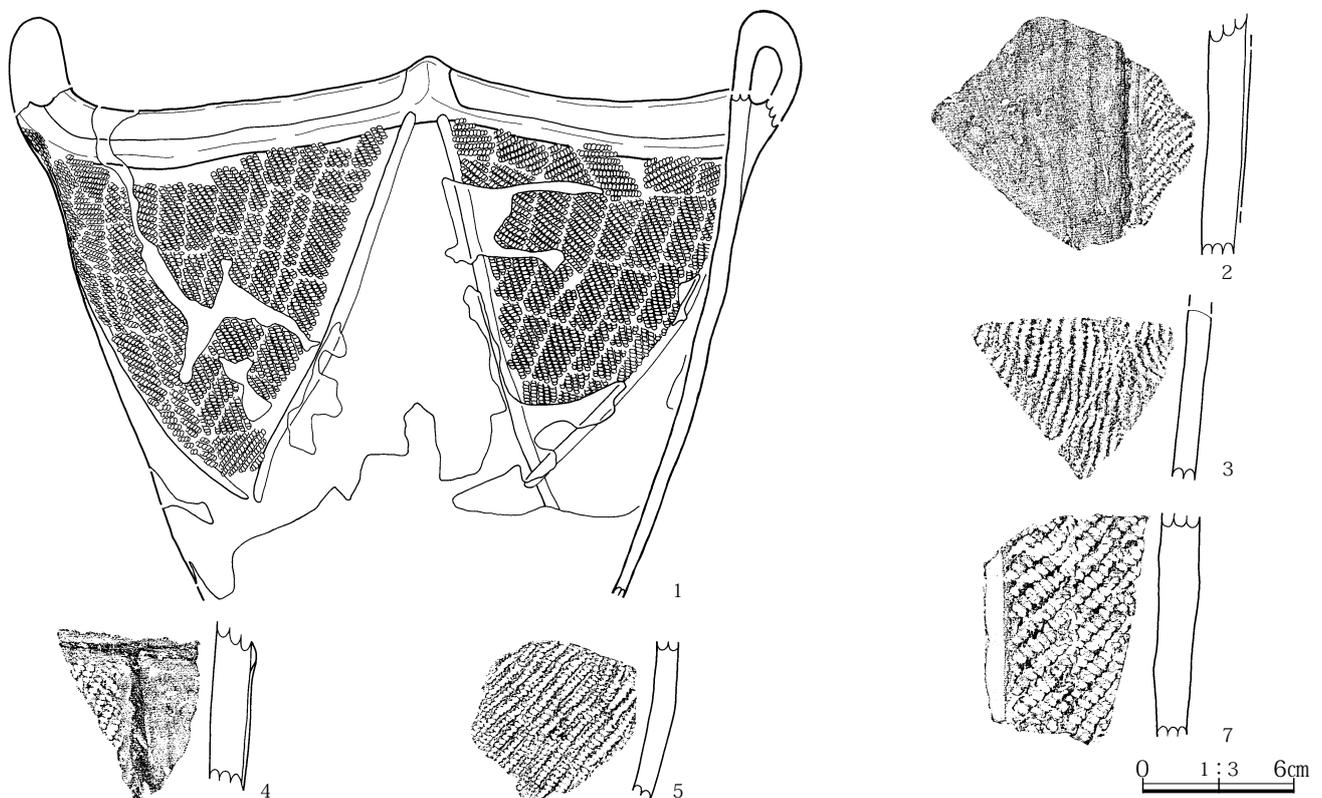
ットが2基検出されている。柱穴 土器炉と7基のピット（P1～7）から6a号住居の範囲を推定した。

6b号住居では、住居内に6基ピット（P10～15）を確認した。P14、15はそれぞれ対ピットの一つである可能性が高い。 炉 6a号住居の中央で土器埋設炉（1）が検出された。6b号住居では炉は確認されず、6a号住居で壊された可能性が高い。 埋没状況 自然埋没 遺物 6a号住居の土器炉（1）、2号埋甕（6）、6b号住居の1号埋甕（22）のそれぞれが、加曾利E4式期の土器である。

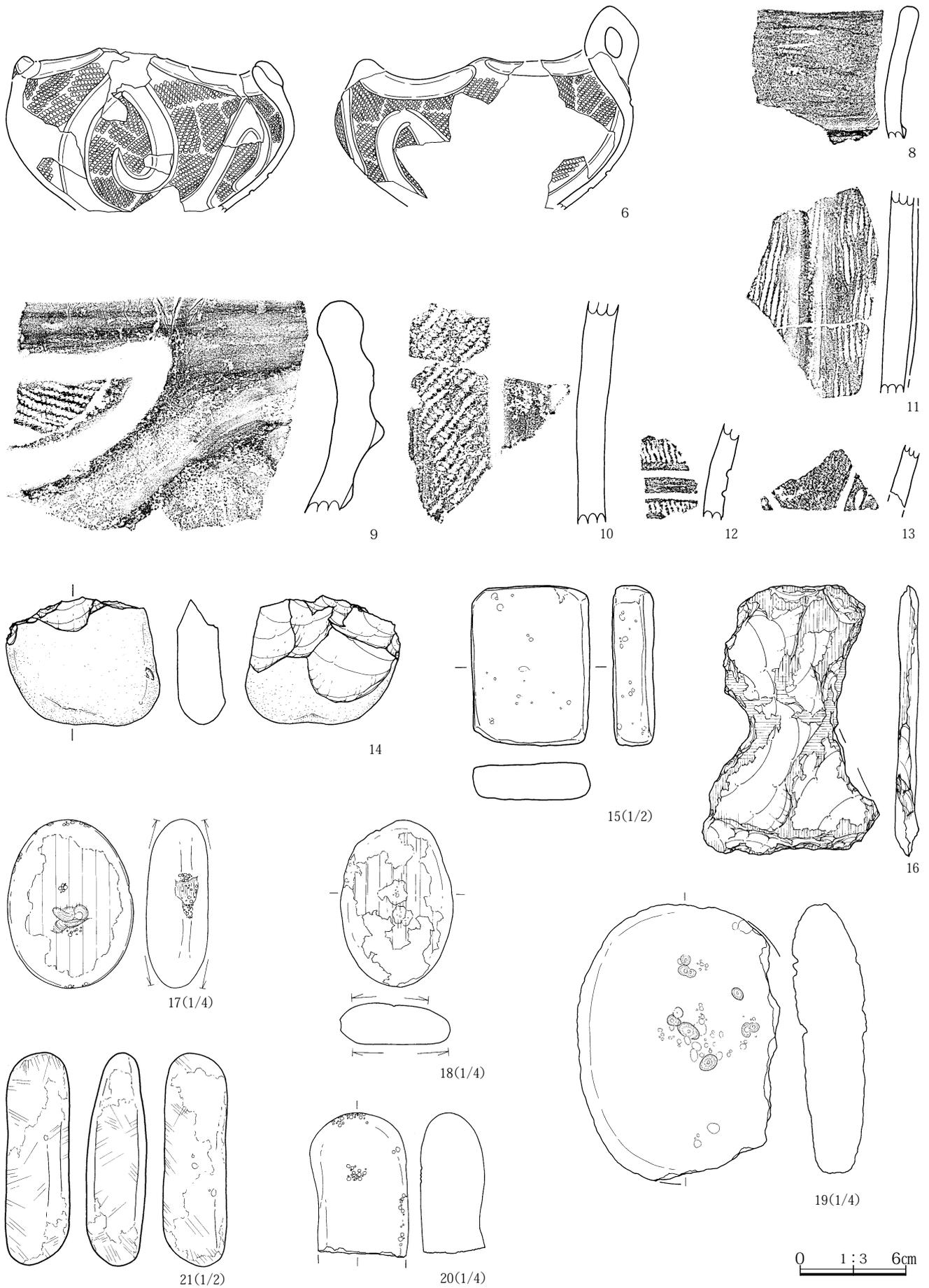
6a号住居に帰属するとして遺物は1～21である。1～13は土器類である。1は炉に設置された後期初頭の深鉢で胴部下半を欠失している。2～12は加曾利E3・4式期、13は称名寺Ⅱ式期の土器である。6は2号埋甕に設置された後期初頭の深鉢である。6a号住居から出土した石器類は、石核（14）、打製石斧（16）、凹石（17、18）、多孔石（19）、敲石（20）、石製研磨具（21）であるとの調査所見を得た。6a号住居の掲載以外の土器類に加曾利E4式期の土器片9点と細片のために分類でき

ない土器片20点がある。

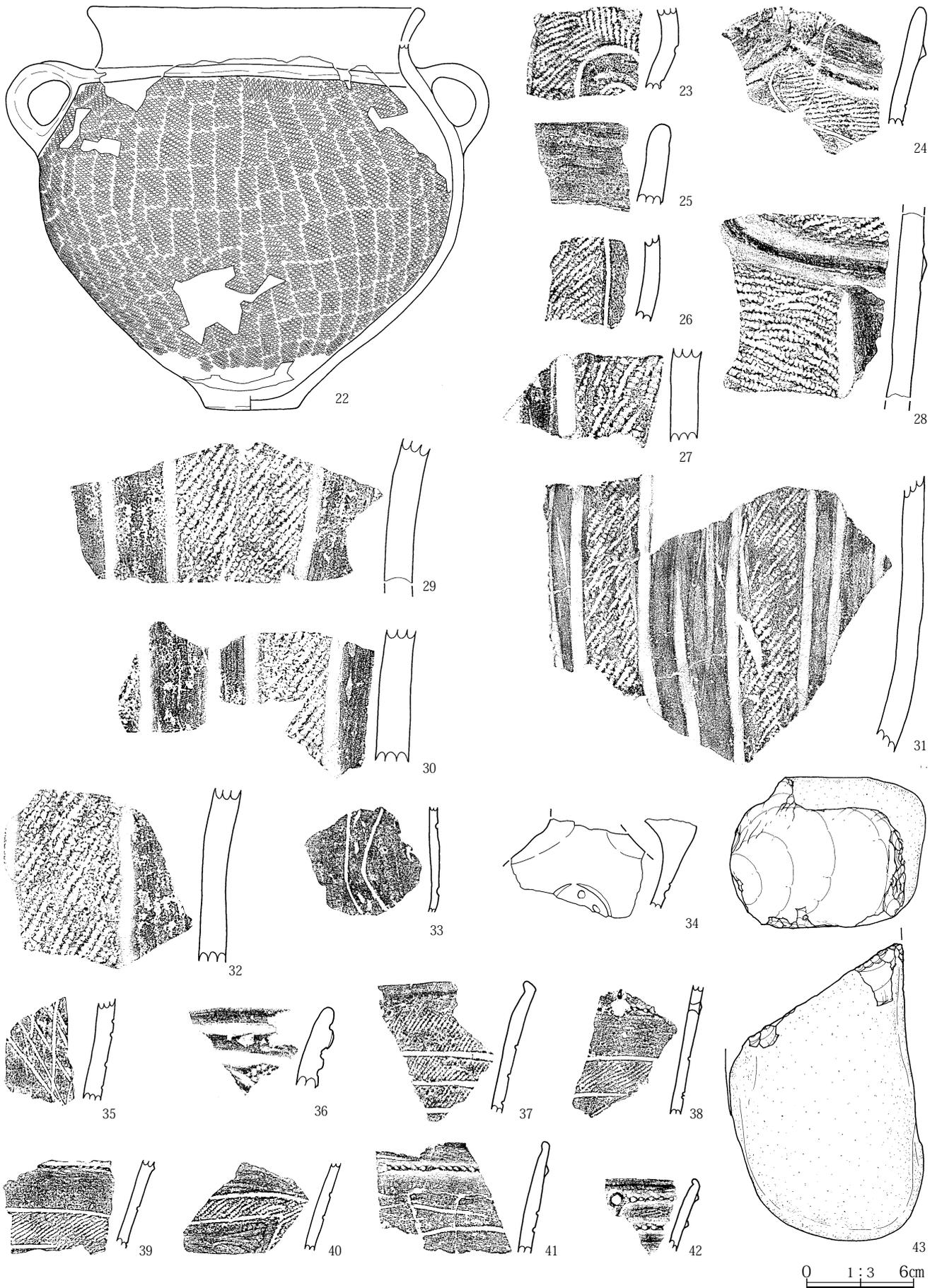
6b号住居に帰属すると取り上げられた遺物は22～47である。22～42は土器類である。22は、1号埋甕に設置された深鉢である。22～32が加曾利E4式期の土器で、33・34の称名寺Ⅱ式期、35・36の堀ノ内Ⅰ式期、37～42の堀ノ内Ⅱ式の土器である。石器類は、石核（43）、石皿（44）、凹石（46、47）である。6号住居からは掲載以外に5点の石核や加工痕のある礫類などが出土している。6b号住居の掲載以外に加曾利E式期の土器片66点、称名寺式期の土器片5点、堀ノ内式期の土器片7点が出土している（観察表117～119頁）。基本的に埋設土器以外は、遺物の混在状況が見られ、6a・6b号住居で分離は難しい可能性がある。 所見 6a号住居に伴う土器埋設炉・2号埋甕の検出状況から、6a号住居が6b号住居に後出すると考えられる。6a号住居が後期初頭、6b号住居が加曾利E4式期に比定されたと考えた。6b号住居は1号埋甕周辺で偏平な礫が十数点出土しており、柄鏡形の敷石住居の可能性が高いと考えられる。



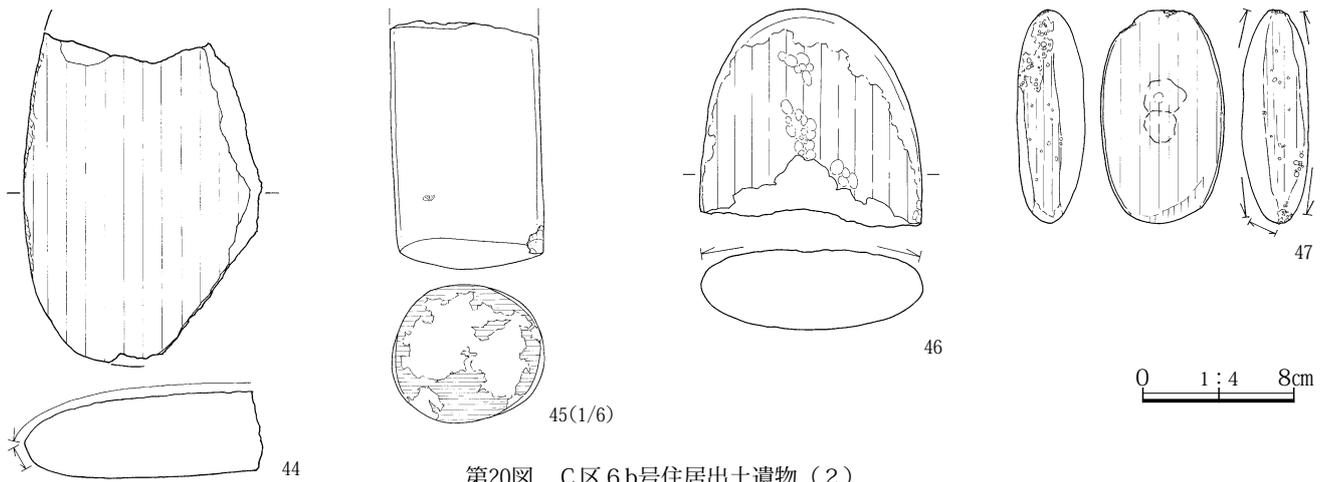
第17図 C区6a号住居出土遺物（1）



第18図 C区6a号住居出土遺物(2)



第19图 C区6b号住居出土遺物(1)

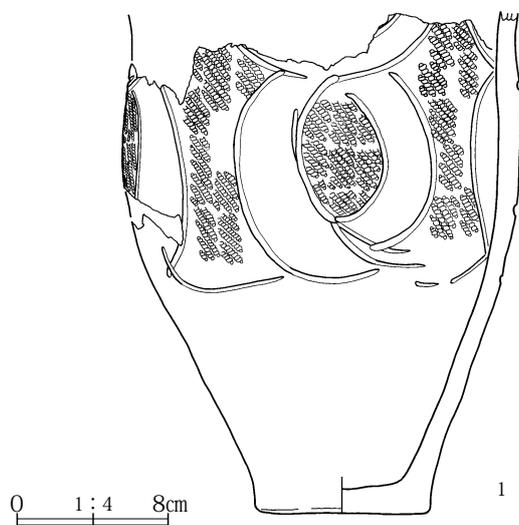
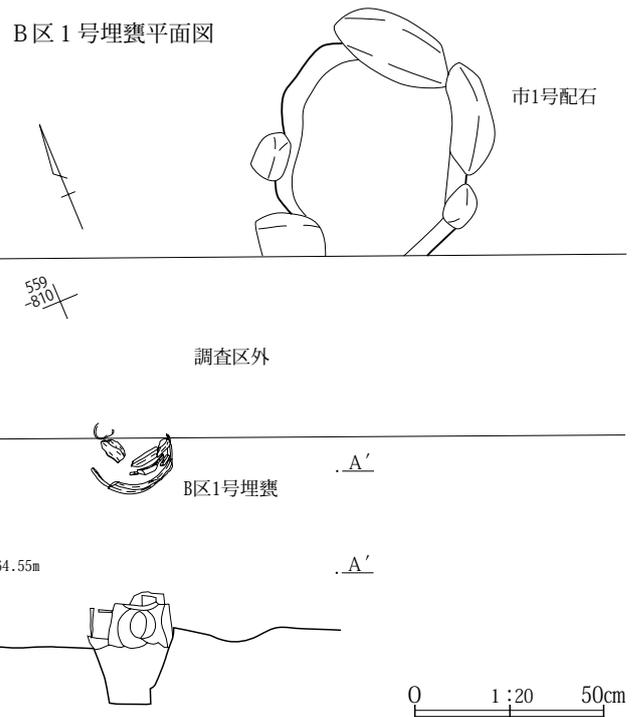
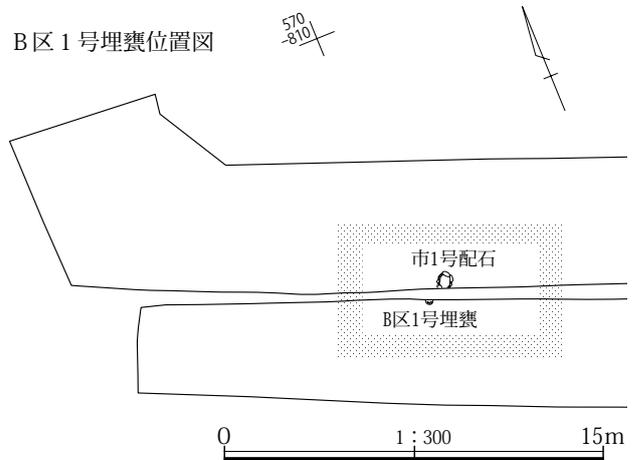


第20図 C区6b号住居出土遺物(2)

第2節 埋甕

B区1号埋甕(第21図、PL. 6・21)

位置 X=559-810 方位 — 形状 平面形状は、長軸0.22mのほぼ円形。深さ0.21m。重複 なし 覆土 — 遺物 上半部を欠失した深鉢が埋甕に使用されている(観察表119頁)。所見 出土した深鉢から縄文時代後期初頭に比定される。埋甕の口縁部は後世の攪乱のために欠損している。平成18年度調査で検出された1号配石は、5点の礫が楕円状に配されており、竪穴住居に伴う石囲炉の可能性が高い。1号配石から遺物の出土はなかったが、重複する古墳時代前期の市3号住居から加曽利E4式期~堀ノ内2式期までの遺物が出土している。本遺構はほぼ同時期の埋甕であり、その位置関係から1号配石とセットで、同一住居の施設である可能性が高いが、住居主体部の掘り込みは確認できなかった。



第21図 B区1号埋甕位置図・平面図と出土遺物

第3節 土坑

概要

本調査ではB区から2基、C区から10基の縄文時代の土坑が検出された。土坑は、住居が検出されない箇所に集中する傾向がある。検出された土坑のうちB区3号土坑・C区1～4号土坑・6号土坑からは土器が出土している。出土土器から、B区3号土坑、C区1号・6号土坑が中期末葉加曾利E4式期、C区2～4号土坑が後期前葉称名寺I式期に比定される。

出土土器の無い土坑は、As-C軽石を含まない覆土の特徴などから縄文時代の土坑とした。このうちB区2号土坑、C区市24ab号土坑は人為的な埋没土の可能性があり、他の遺構の埋設土は自然埋没である。遺構ごとの計測値などは16頁の表2に示した。

B区3号土坑(第22図、PL. 6・21)

位置 X=560,Y=821 **方位** — **形状** 長軸0.42m、短軸0.40mのほぼ円形。深さ0.21m。 **重複** なし **覆土** 均一な褐色土。 **埋没状況** 覆土の状況から人為的である可能性があるとの調査所見を得た。 **遺物** 完形の器台が基部が天を向いて出土(観察表119頁)。 **所見** 出土した器台から縄文時代中期末葉加曾利E4式期に比定される。

C区1号土坑(第22図、PL. 6・21)

位置 X=541,Y=740 **方位** — **形状** 長軸0.94m、短軸0.88mのほぼ円形。深さ0.25m。 **重複** なし **覆土** As-C軽石を含まない黒色～黒褐色土 **埋没状況** 自然埋没 **遺物** 覆土から、加曾利E4式期の深鉢片が出土している。掲載以外に加曾利E4式期の土器片が3点出土している(観察表119頁)。 **所見** 出土した深鉢から縄文時代中期末葉加曾利E4式期に比定される。

C区6号土坑(第22図、PL. 6・21)

位置 X=541,Y=740 **方位** — **形状** 長軸0.43m、短軸0.39mのほぼ円形。深さ0.27m。 **重複** なし **覆土** — **遺物** 覆土から加曾利E4式期の深鉢片が出土している。掲載以外に加曾利E式期の土器片が2点出土している(観察表119頁)。 **所見** 出土した深鉢片から縄文時代後期初頭に比定される。

C区2号土坑(第22・23図、PL. 7・22)

位置 X=535,Y=745 **方位** — **形状** 長軸1.02m、短軸0.96mのほぼ円形。深さ0.57m。 **重複** なし **覆土** — **遺物** 称名寺I式期の深鉢片4点(1～4)、堀ノ内1式期の深鉢片1点(5)、加曾利E4式期の深鉢片7点(6～12)を掲載した。掲載以外に称名寺式期の土器片が7点、加曾利E式期の土器片が41点出土している。石器では、覆土から石錐(13)と石製研磨具(14)が出土した。掲載以外には、加工痕がある剥片が4点出土している(観察表119頁)。 **所見** 称名寺I式期の土器片が出土したことから、後期前葉に比定されると考えられるが、縄文時代中期末葉加曾利E4式期の土器片も多く含まれている。

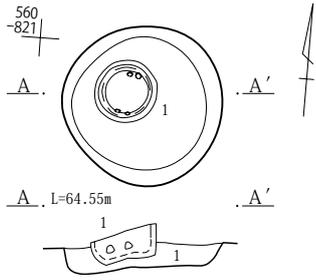
C区3号土坑(第23図、PL. 7・22)

位置 X=735,Y=743 **方位** — **形状** 長軸1.14m、短軸1.10mのほぼ円形。深さ0.45m。 **重複** なし **覆土** As-C軽石を含まない黒褐色～褐色土。 **遺物** 称名寺I式期の深鉢片2点(1～2)、加曾利E4式期の深鉢片5点(3～7)を掲載した。掲載以外に称名寺式期の土器片が2点、加曾利E式期の土器片が8点出土している。石器は、覆土から削器の可能性が高い石器(8)、凹石(9)が出土した(観察表119・120頁)。 **埋没状況** 自然埋没 **所見** 称名寺I式期の土器片が出土したことから、後期前葉に比定されるが、縄文時代中期末葉加曾利E4式期の土器片も多く含まれる。

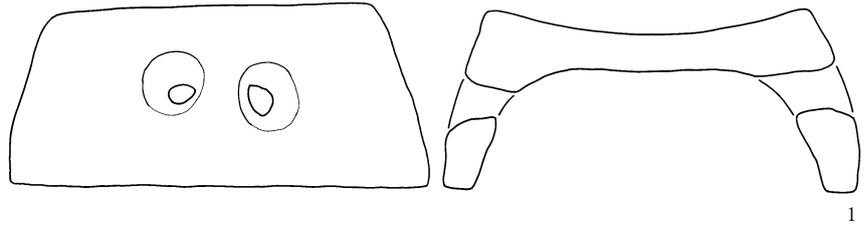
C区4号土坑(第24図、PL. 7・22)

位置 X=534,Y=745 **方位** — **形状** 長軸0.91m、短軸0.76mのほぼ円形。深さ0.26m。 **重複** なし **覆土** As-C軽石を含まない黒色～黒褐色土。 **埋没状況** 自然埋没 **遺物** 称名寺I式期の深鉢片1点(1)、堀ノ内1式期の深鉢片1点(2)、加曾利E4式期の深鉢片3点(3～5)を掲載した。掲載以外に称名寺式期の土器片が2点、堀ノ内1式期の土器片1点、加曾利E式期の土器片が4点出土している(観察表120頁)。 **所見** 称名寺I式期の土器片が出土したことから、後期前葉に比定されるが、中期末葉加曾利E4式期の土器片も多く含まれる。

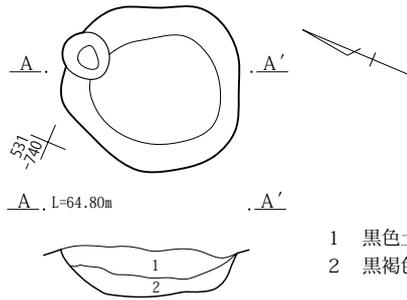
B区3号土坑



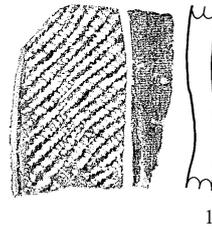
1 褐色土 均質。



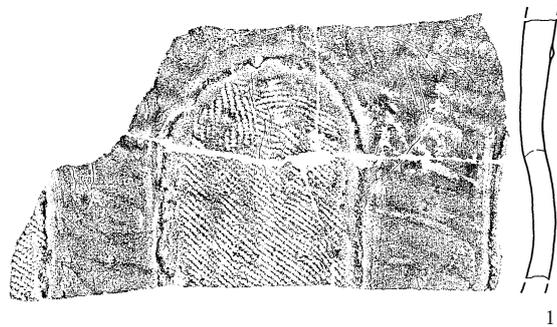
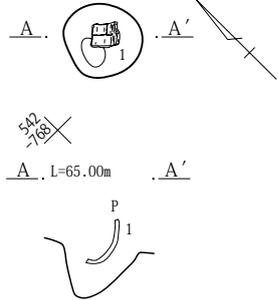
C区1号土坑



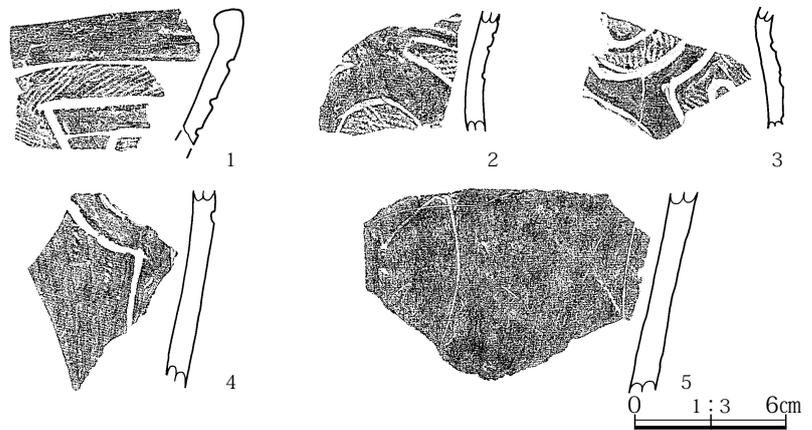
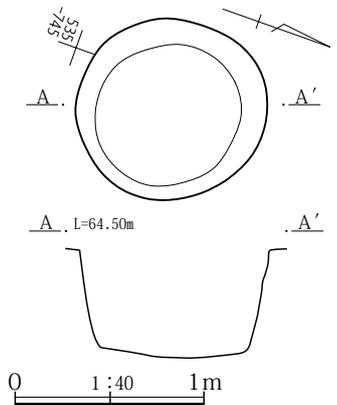
1 黒色土 直径1~5mmの礫含む。
2 黒褐色土 1層と同じ。



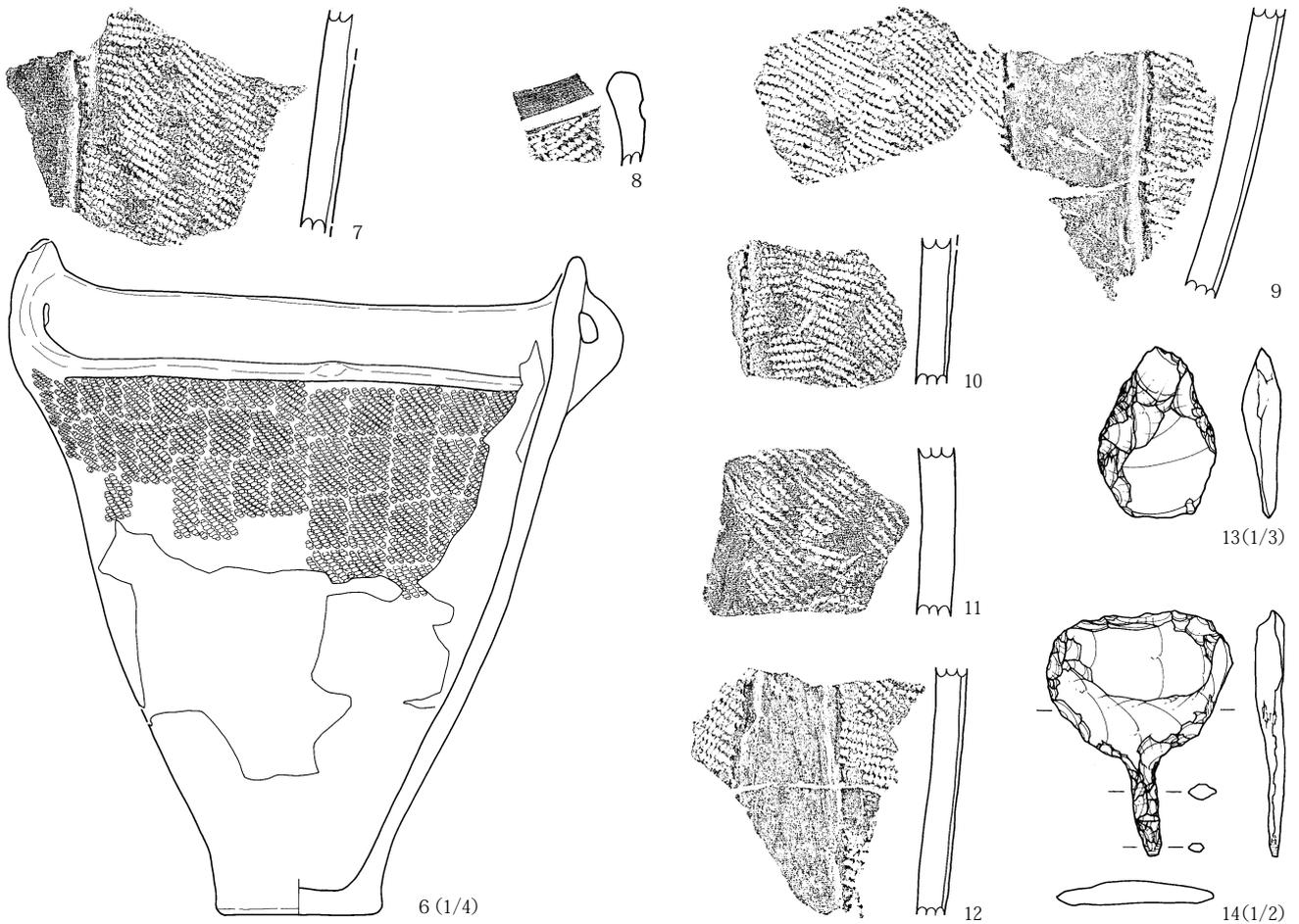
C区6号土坑



C区2号土坑

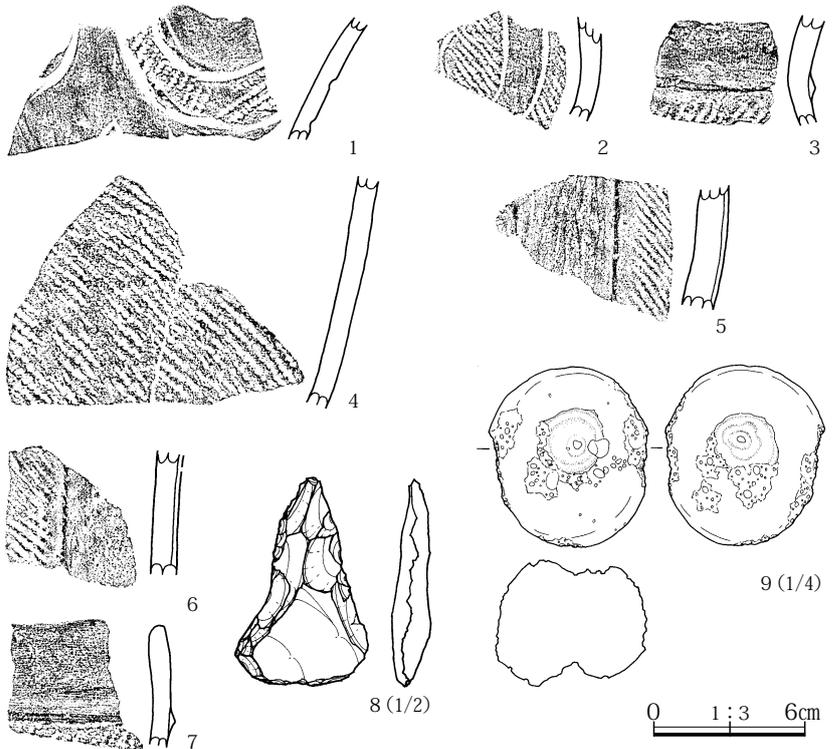
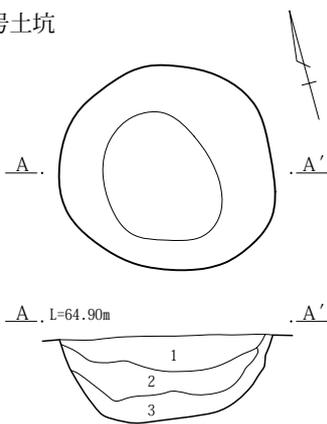


第22図 B区3号土坑・C区1号土坑と出土遺物・6号土坑と出土遺物、C区2号土坑と出土遺物(1)



C区3号土坑

535
743



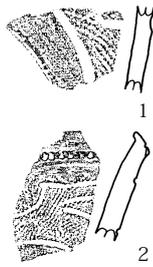
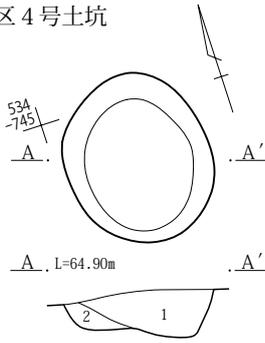
- 1 黒褐色土 黄褐色粒（直径3mm以下）と砂粒（直径5mm以下）多量。
- 2 暗褐色土 黄褐色粒（直径3mm以下）と砂粒（直径5mm以下）微量。均質。
- 3 褐色土 黄褐色粒（直径3mm以下）と砂粒（直径5mm以下）微量。砂質。

0 1:40 1m

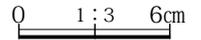
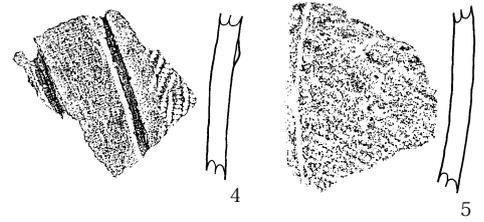
0 1:3 6cm

第23図 C区2号土坑出土遺物（2）、C区3号土坑と出土遺物

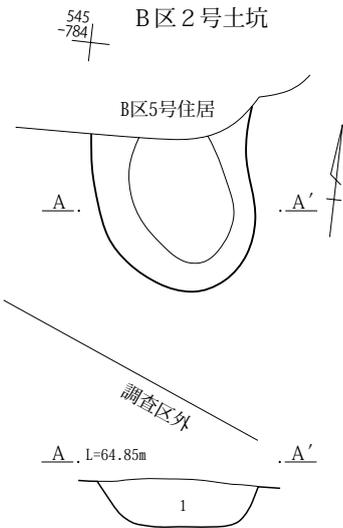
C区4号土坑



- 1 黒色土 直径1~3mmの白色・赤褐色軽石含む。
- 2 黒褐色土

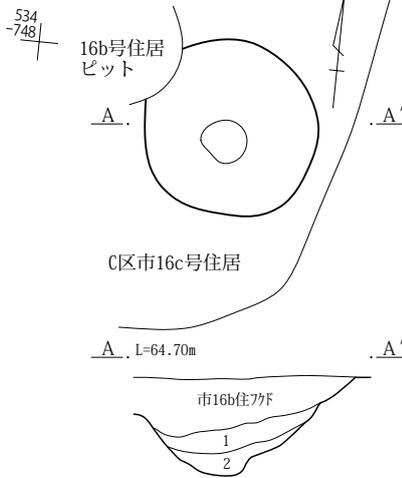


B区2号土坑



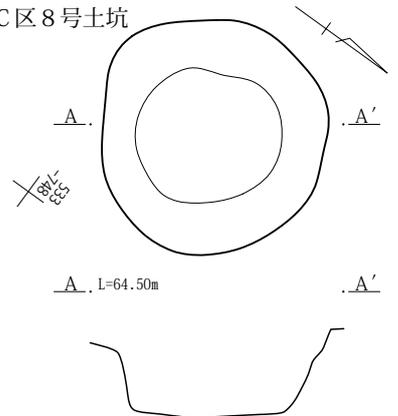
- 1 黒褐色土 直径1~2mm As-C、直径3mm以下砂粒含む。均質。

C区7号土坑

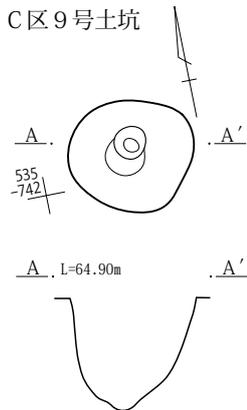


- 1 暗褐灰色土 砂主体。
- 2 褐灰色土 1層と同じ。

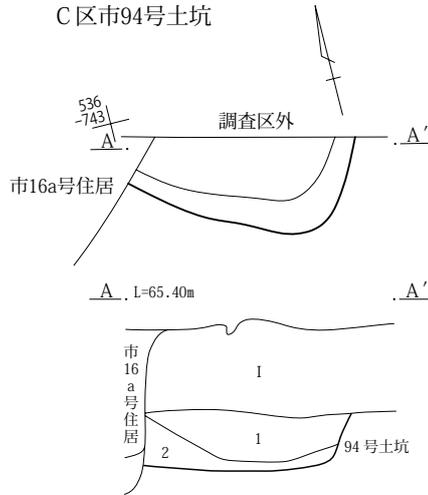
C区8号土坑



C区9号土坑

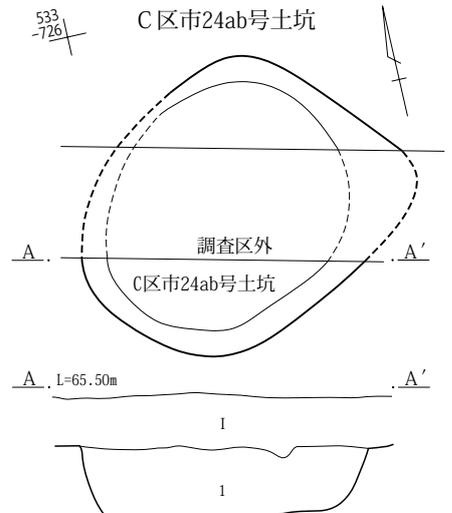


C区市94号土坑



- 1 黒褐色土 直径1~5mm砂粒含む。
- 2 暗褐色土 1層と同じ。

C区市24ab号土坑



- 1 黒褐色土 As-C微量含む。直径1~5mm砂粒多量。

第24図 C区4号土坑と出土遺物、B区2号土坑・C区7~9号・C区市94号・C区市24ab号土坑

第4節 遺構外出土遺物 (第25～28図、PL.23～25)

本節ではA～C区の各区で出土した縄文時代の遺構外出土遺物について扱う。

縄文時代中期後葉以降の地形は、縄文洪水層により、B区の谷がほぼ埋まり、B～C区が平坦な台地で、A区から西側の赤坂川に向かい地形は下がり谷地形になる(第5図)。A区には概期の遺構がみられず、B～C区に遺構が展開する様子がわかる(第13図)。

喜多町遺跡は古墳時代前期の遺構が密集し、縄文時代の遺構はその攪乱により、多く失われている可能性が高いことは前述した通りであるが、縄文時代の遺構が濃密であった様相は、遺構外から出土した遺物からも垣間見ることができる。

A区は、遺構外からの縄文時代の出土遺物も少なく、出土遺物は15点である。ここでは、このうち7点を掲載した。掲載遺物は、1～3が加曽利E 4式期の深鉢片、4・5が称名寺式期の深鉢の口縁部片、7が後期前葉の深鉢の底部片である(観察表120頁)。

B区の縄文時代の遺構外の出土遺物は、縄文土器183点・石器類28点があり、70点の土器と、6点の石器を掲載した。掲載した縄文土器は1～15が加曽利E 式期、16～27が称名寺式期、28～58が堀ノ内式期の土器である。出土した土器は加曽利E 式期24% (45点)、称名寺

式期5% (10点)、堀ノ内式期40% (75点)、加曽利B 式期1% (3点)、分類不能30%であり、中期末葉加曽利E 式期から後期前葉堀ノ内式期が主体である。71～76は石器類である。石核(71、72)、短冊形打製石斧(73)～撥型打製石斧(74、75)、石鐘(76)などが出土している。出土した石器の器種と石材の組成表は表3に示した(観察表120～123頁)。

C区の縄文時代の遺構外の出土遺物は、概期の遺構に反映して多く、縄文土器182点、石器類20点が出土し、44点の土器と、9点の石器を掲載した。掲載した縄文土器は1～10が加曽利E 式期、13～32が称名寺式期、33～42が堀ノ内式期、43が加曽利B 1式期の土器である。出土した土器は加曽利E 式期39% (72点)、称名寺式期35% (63点)、堀ノ内式期15% (29点)、加曽利B 式期1% (2点)、分類不能10%と、中期後葉加曽利E 式期から後期前葉堀ノ内式期が主体である。45～53は石器である。石鏃(45～48)、撥型打製石斧(49)、石核(50)、石錘(51)、凹石(52、53)などが出土している(観察表123・124頁)。出土した石器の器種と石材の組成表は表4に示した。また、34項第31図は縄文洪水層(縄文時代前期前半以降、同中期後半以前の洪水層・基本土層Ⅷa～Ⅷ層)下面の調査面の全体図である(第2面)。縄文洪水層下面では、窪みなどの地形が確認されたが、遺構は検出されなかった。地震跡や地割れ跡は古代以降の痕跡であると推測される(94項参照)。

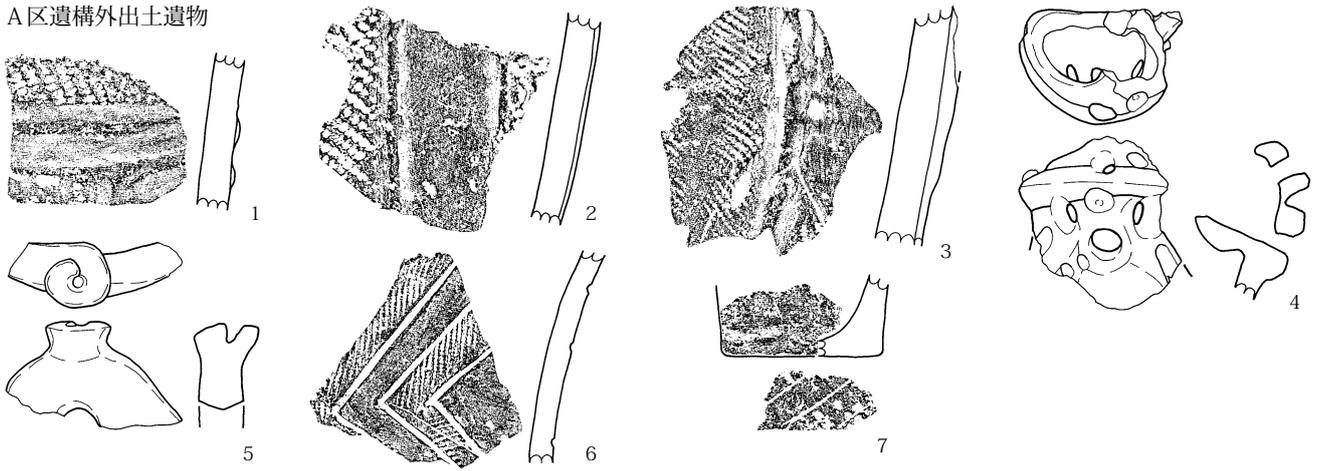
表3 B区遺構外出土 石器器種・石材組成表

	黒色頁岩	黒色安山岩	黒曜石	ホルンフェンス	粗粒輝石安山岩	花崗岩	石英閃緑岩	文象斑岩	変質玄武岩	雲母石英片岩	灰色安山岩	総計
打製石器	2										1	3
石鏃		2										2
削器	4											4
石核	1		1									2
加工痕ある礫	3	1										4
石錘										1		1
凹石					4							4
磨石					2	1	1	1				5
敲石				1	1				1			3
総計	10	3	1	1	7	1	1	1	1	1	1	28

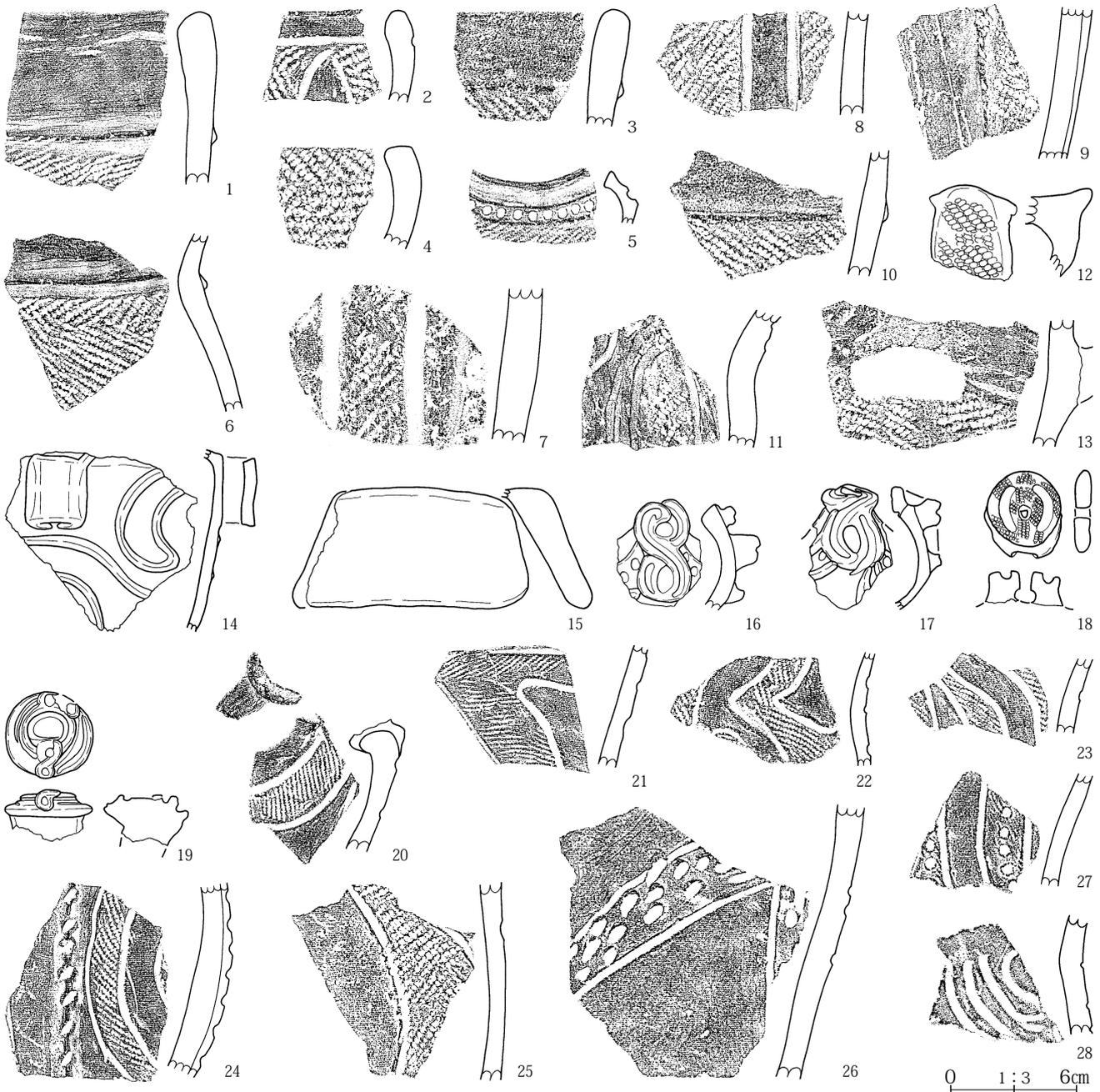
表4 C区遺構外出土 石器器種・石材組成表

	黒色頁岩	珪質頁岩	砂質頁岩	黒色安山岩	黒曜石	チャート	細粒安山岩	粗粒輝石安山岩	変質玄武岩	緑色片岩	総計
打製石器	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
礫石器									1		1
石鏃	1				1	2					4
削器	1			1							2
石核				1							1
加工痕ある礫	1	1		2			1				5
石錘										1	1
凹石								2			2
磨石								1			1
敲石			1								1
総計	5	1	1	4	1	2	1	3	1	1	20

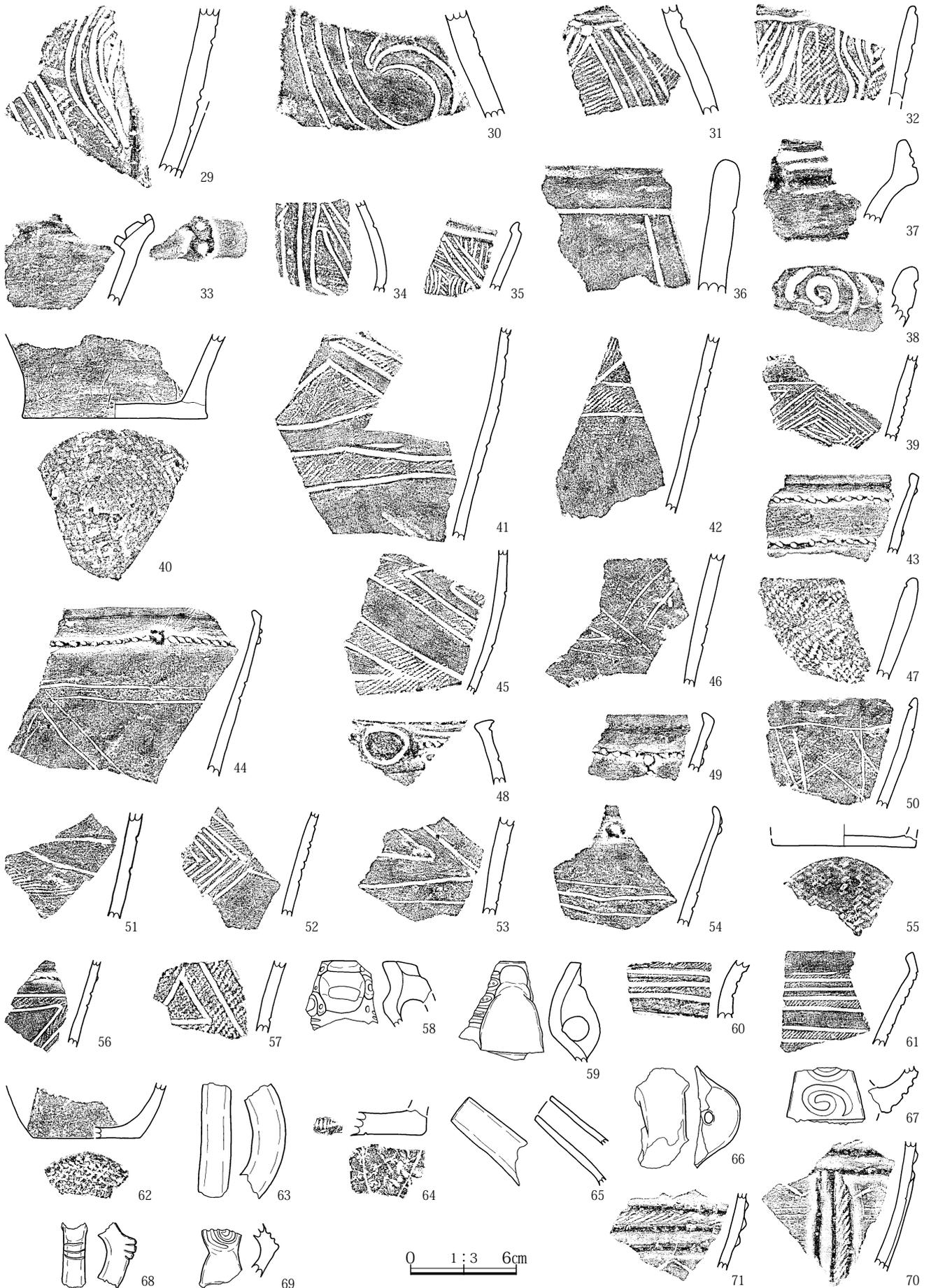
A区遺構外出土遺物



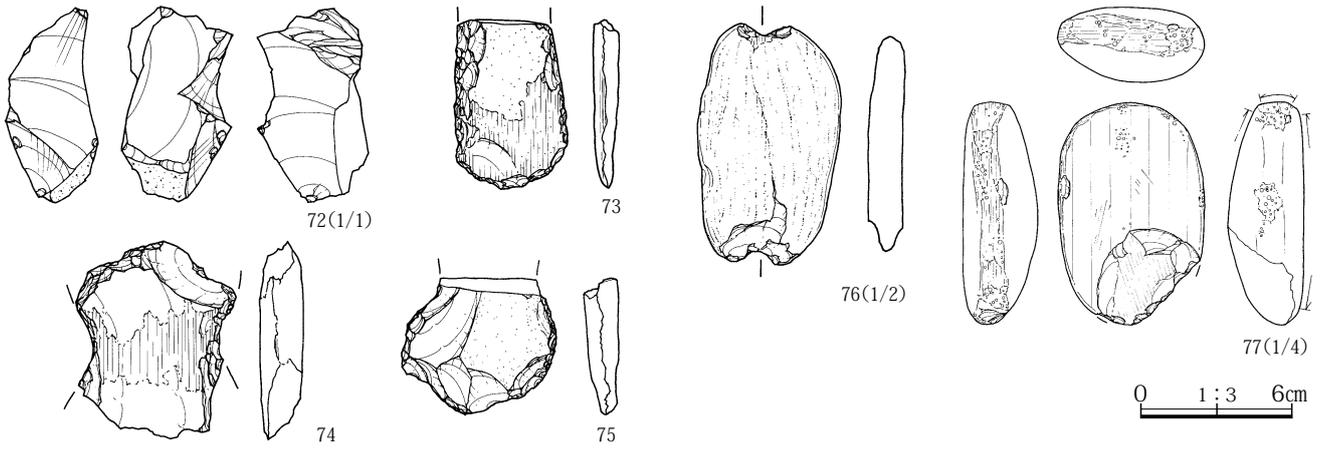
B区遺構外出土遺物



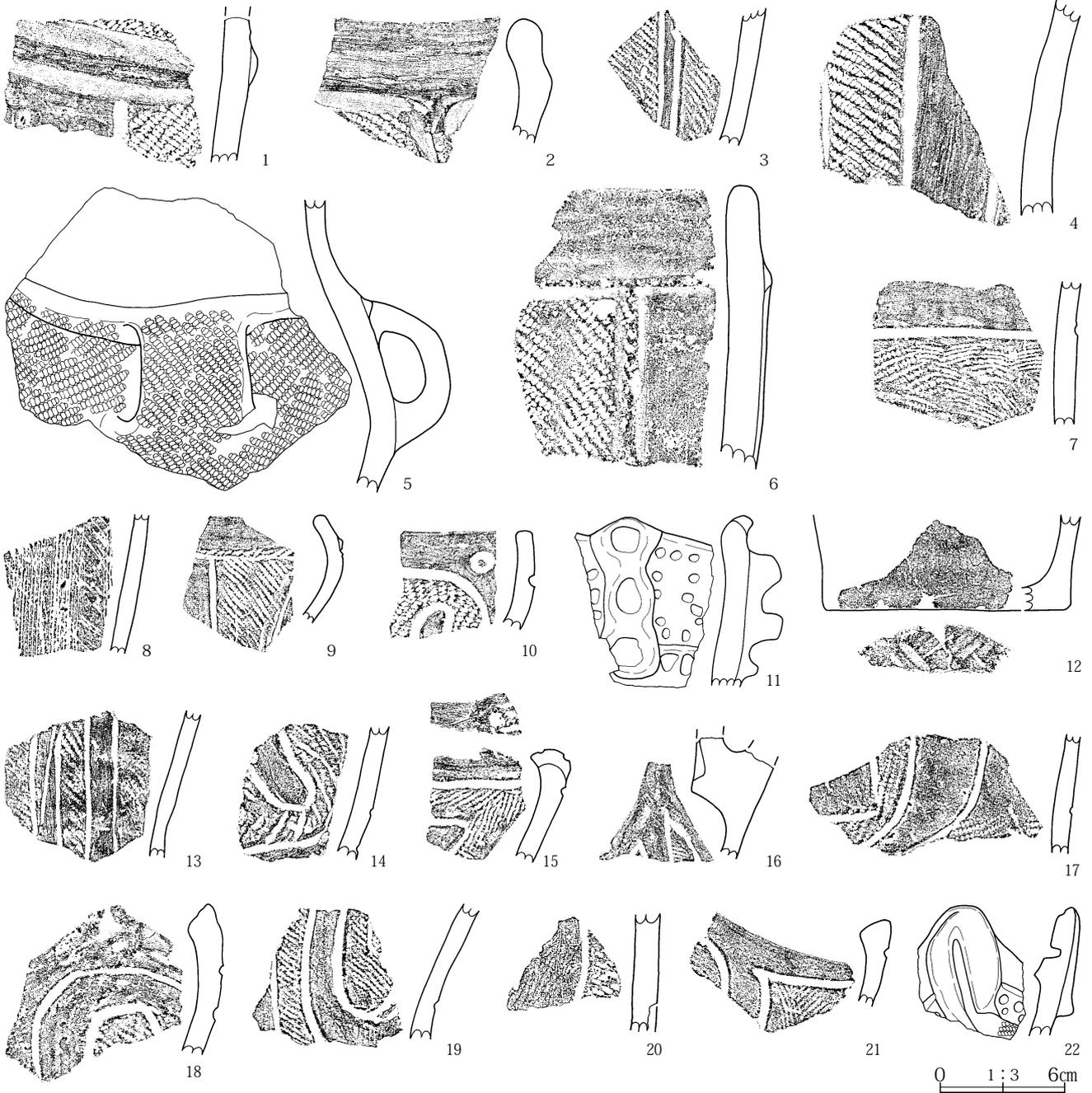
第25図 A区遺構外出土遺物・B区遺構外出土遺物(1)



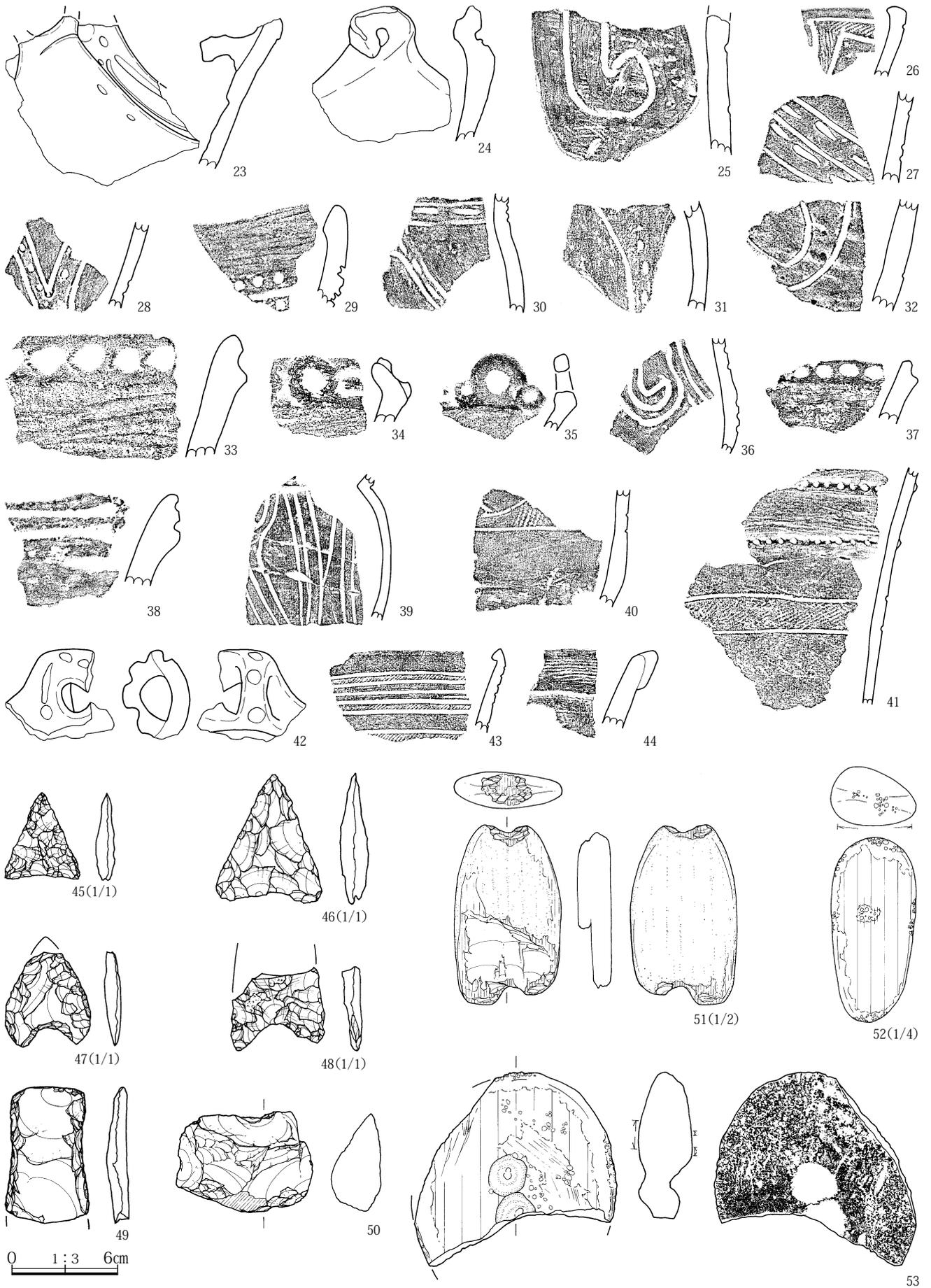
第26图 B区遺構外出土遺物(2)



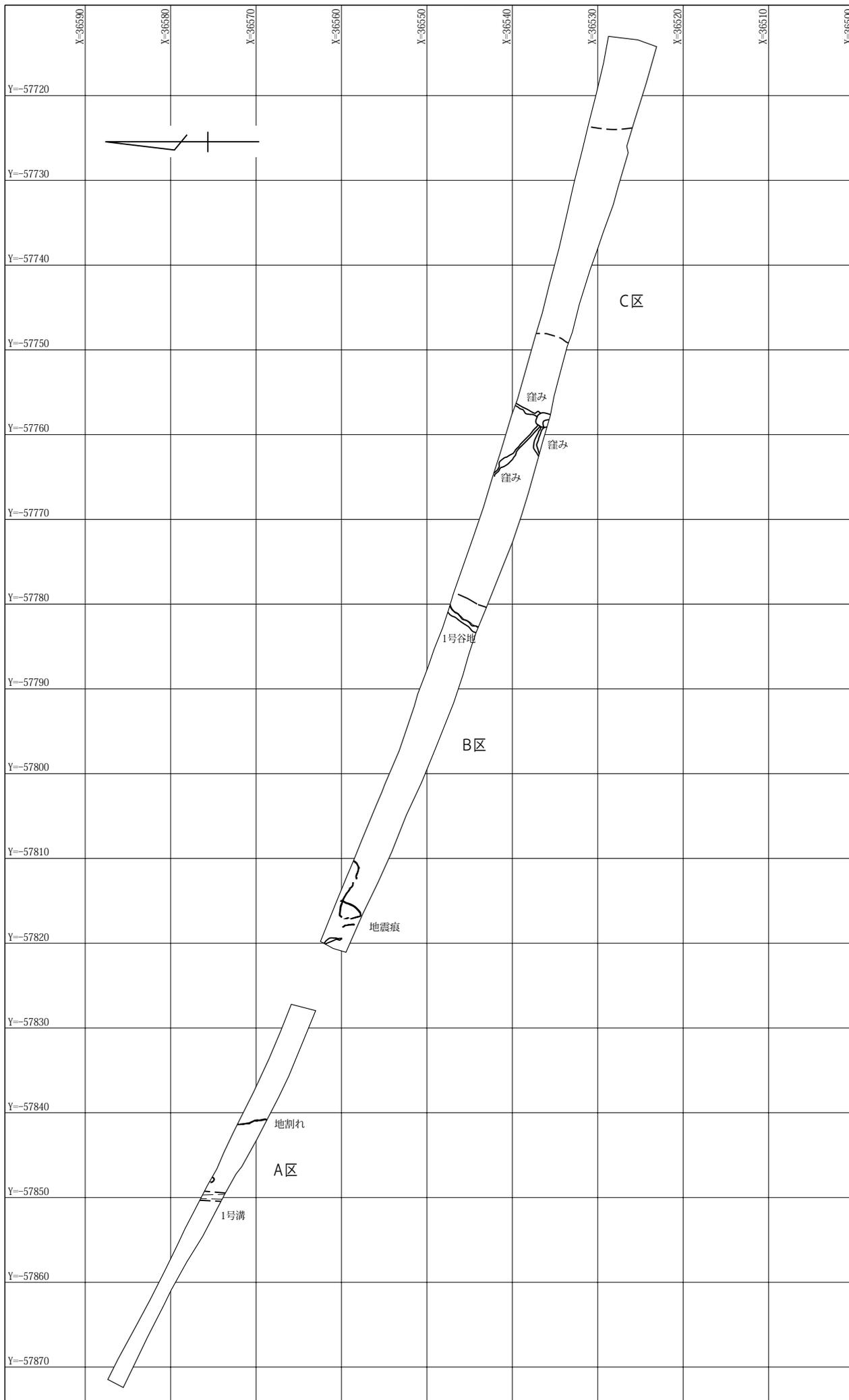
C区遺構外出土遺物



第27図 B区遺構外出土遺物(3)・C区遺構外出土遺物(1)



第28圖 C区遺構外出土遺物(2)



第29図 喜多町遺跡2面全体図

第6章 古墳時代の遺構と遺物

概要

古墳時代の遺構は台地状の地形であるB区からC区で濃密である。遺構は前期が中心で、前期から中期まで検出される。

前期は、竪穴住居が26軒・土坑2基・溝3条が検出されている。また、A区に谷地形があり、A区1号谷と付した。A区1号谷では水田遺構の検出はできなかったが、植物珪酸体分析を行い、水田耕作が行われていた可能性が高いことが明らかになった。自然科学からの検証で、喜多町遺跡における古墳時代前期からの台地上に広がる集落とそれに接する低地部の水田耕作域が推定できたこ



第30図 古墳時代の遺構配置図

とは特筆される。

中期は、竪穴住居が5軒が検出された。中期の遺構は、前期に比較して密度が薄いが、B区にまとまっている。A区1号谷の植物珪酸体分析では、①Hr-FA降下以

降、②Hr-FA降下以前のそれぞれから水田稲作がおこなわれていたと推定できるほどの植物珪酸体が検出されており、古墳時代中期においても水田域であった可能性が高いことが指摘できる。

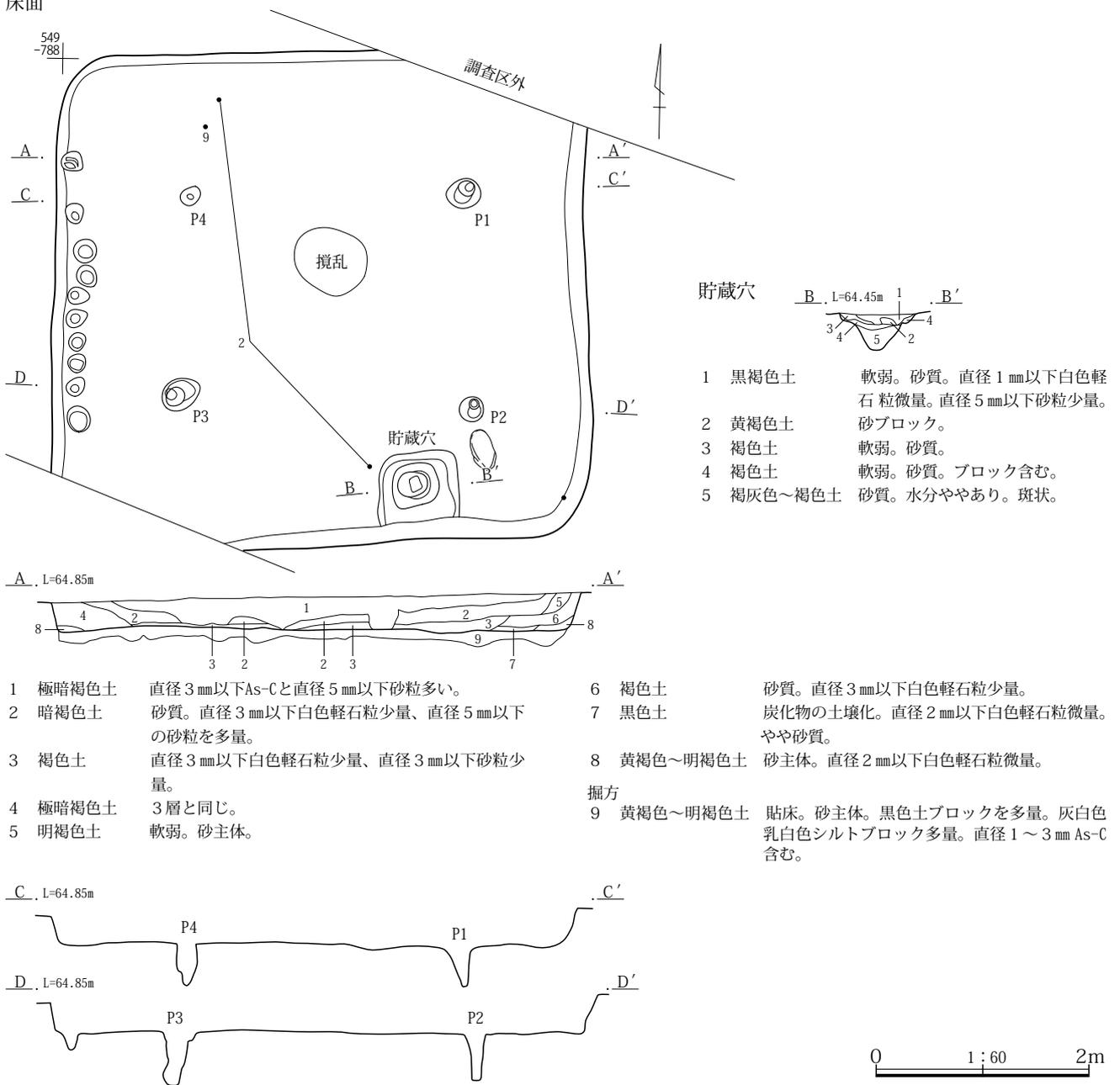
第1節 竪穴住居

B区5号住居(第31・32図、PL. 8・26)

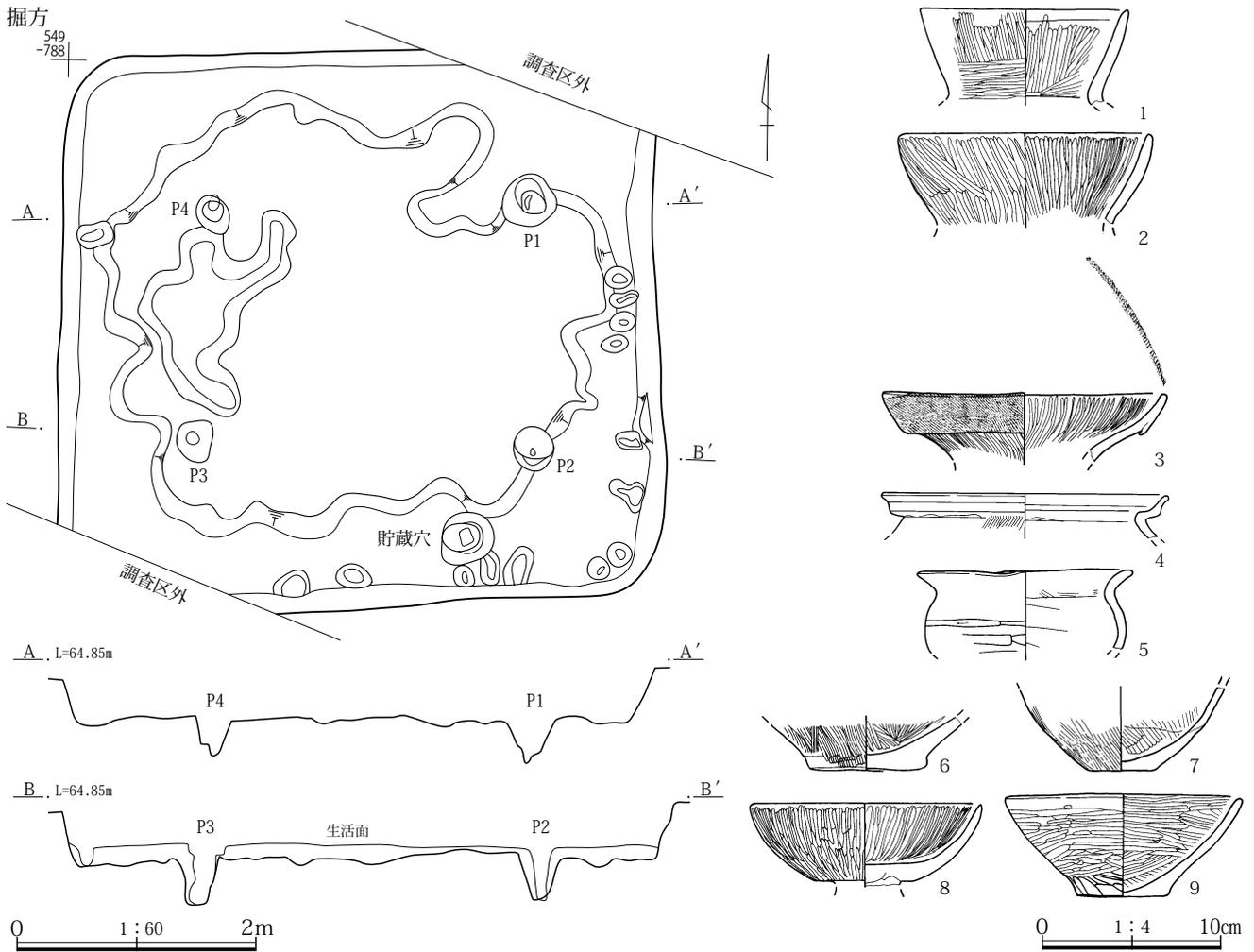
検出状況 本住居は、調査区内に中心をもち、遺構のほぼすべての範囲を調査することができた。住居中央に床面まで到達した攪乱があるが、床面のほとんどすべてが良好に残存している。B区6号、10号、市8b号住居、2号土坑と重複。遺構の切り合いから、本遺構が最も後出である。**位置** X=549-788 **形状** 長軸4.72m、短軸4.42mの方形を呈する。ほぼ東西・南北に主軸をもつ

ように構築されている。面積 21.38㎡ 壁高 35cm
覆土 黒褐色～褐色土層が主体であり、As-C軽石を含む。
床面 掘方面から厚さ約13cmの埋め土を施して平坦な面を造る。掘方面は中心が窪む。**壁溝** なし **柱穴** 4基確認した。北東の柱穴から時計回りにP1～P4と付した。P1は直径29cmのほぼ円形を呈し、床面からの深さは35cmを測る。P2は直径21cmのほぼ円形を呈し、深さ42cmを測る。P3は長径35cm・短径30cmの楕円形を呈し、深さ52cmを測る。P4は直径18cmのほぼ円形を呈し、深さ40cmを測る。P2、P3では柱痕を検出した。**貯蔵穴** 住居南壁の東よりで確認された。平面形状は方形

床面



第31図 B区5号住居(1)



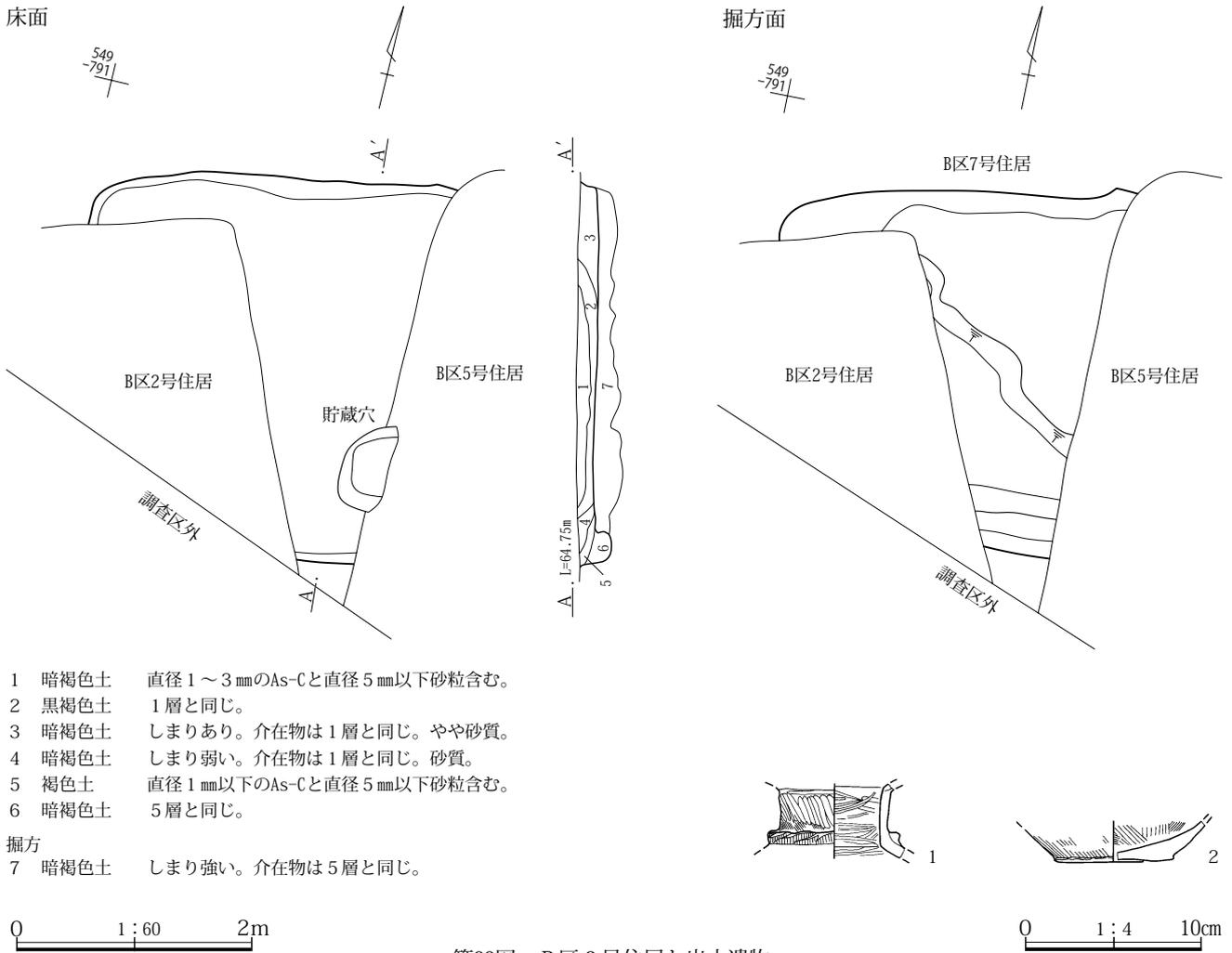
第32図 B区5号住居(2)と出土遺物

で、長軸75cm、短軸65cmを測る。底面はロータ状に窪む形状である。 炉 確認されなかった。住居中央の攪乱により、破壊された可能性がある。 埋没状況 自然埋没 出土遺物 本遺構から出土した遺物のうち、器形を復元できる9点を掲載した。掲載以外に、土師器甕・壺類800gがある。住居の床面から土師器壺(2)・弥生系鉢(9)、覆土から土師器甕・台付甕・鉢・壺・高杯、弥生系壺が出土した。床面から出土した土師器壺(2)・弥生系鉢(9)は、壁面に近い床面直上からの出土である。これらは古墳時代前期・第Ⅱ期に比定される(観察表125頁)。 所見 本遺構は、出土遺物から古墳時代前期、第Ⅱ期の遺構であると考えられることができる。

B区6号住居(第33図、PL. 8)

検出状況 本住居はB区7号住居(古墳時代前期)、2号・3号住居(古墳時代中期)に重複しているが、床面を良好に検出した。重複関係はB区7号住居→本遺構→

2号・3号住居である。 位置 X=549-791 形状 長軸不明、短軸は3.22mを測る。平面形状は長方形である。主軸は南北軸より12°西に傾く。 壁高 15cm 覆土 黒褐色～褐色土層が主体であり、全ての土層にAs-C軽石を含む。 床面 掘方面から厚さ約20cmの埋め土を施して平坦な面を造る。掘方面は南西隅が窪む。 壁溝 なし 柱穴 なし 貯蔵穴 住居南東の壁よりで確認された。平面形状は方形か。長軸は72cmを測る。 炉 確認されなかった。 埋没状況 自然埋没 出土遺物 本遺構から出土した遺物のうち、器形を復元できる2点を掲載した。掲載以外に、土師器甕・壺類150g、高杯・器台・鉢類10gがある。土師器壺(1)は覆土からの出土である(観察表125頁)。 所見 覆土から出土した土師器壺は第Ⅱ～Ⅲ期の様相を示す。本遺構に切られるB区7号住居から出土している遺物も第Ⅱ～Ⅲ期であることから、本遺構が第Ⅲ期、B区7号住居がⅡ期である可能性が高い。



第33図 B区6号住居と出土遺物

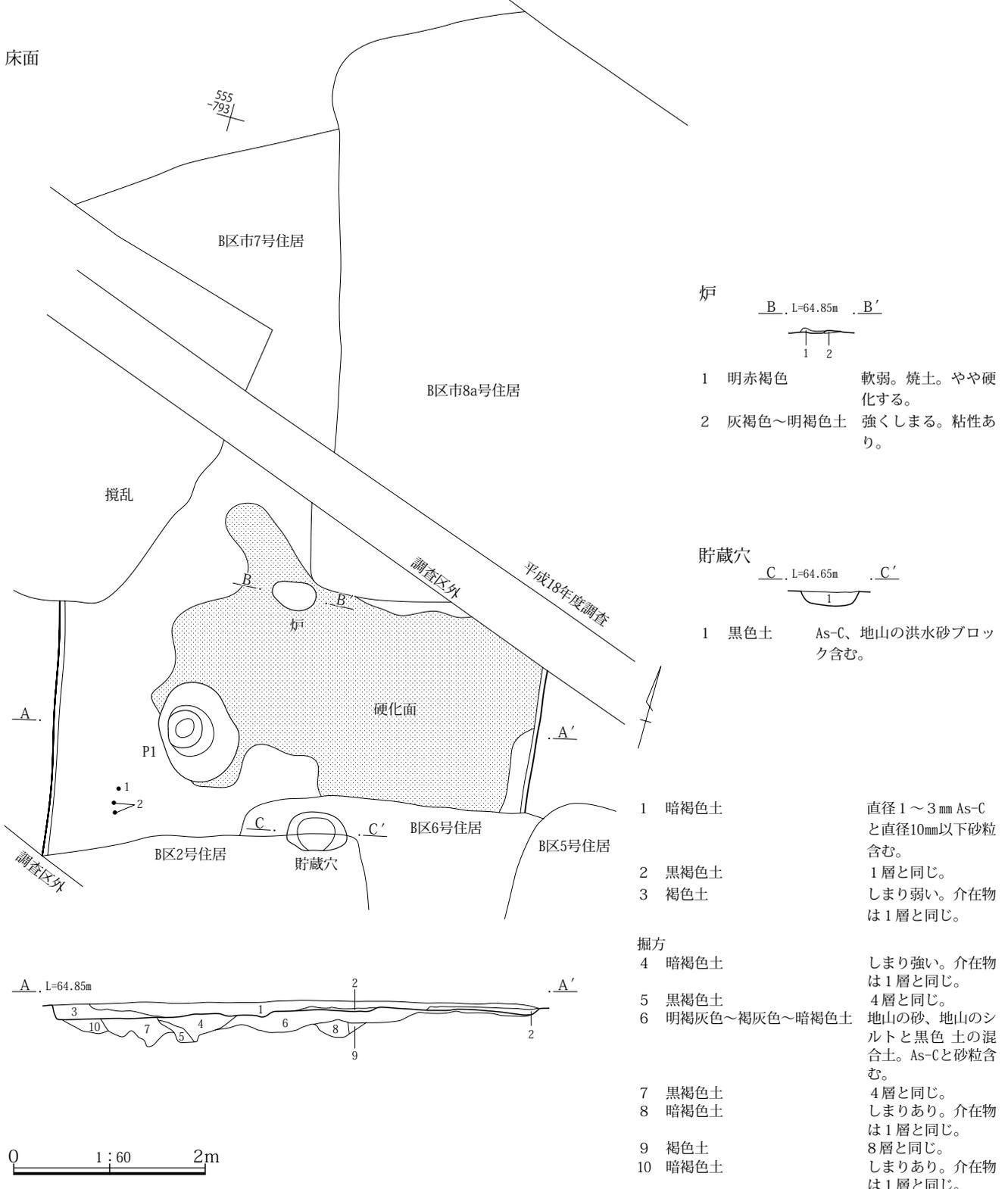
B区7号住居(第34・35図、PL. 8)

検出状況 本住居は、調査区北寄りで検出された。本遺構は、B区市7号住居と北側で切り合っており、本遺構あるいはB区市7号住居の壁面が検出されることが考えられるが、本遺構とB区市7号住居との重複関係を明らかにすることはできなかった。本遺構の南壁はB区2号住居(古墳時代中期)と6号住居(古墳時代前期)に切られており、遺構の東西壁だけが確認された。B区2号住居(古墳時代中期)、6号住居(古墳時代前期)、市7号住居、8b号住居との重複関係からは、本遺構が最も最初に構築されていたことがわかる。**位置** X=555-793 **形状** 東西軸で4.95mを測る。方形あるいは長方形を呈すると考えられる。主軸は南北軸より12°西に傾く。**壁高** 15cm **覆土** 黒褐色～明褐色土層が主体であり、全ての土層にAs-C軽石を含む。**床面** 掘方面から最大

厚約25cmの埋め土を施して平坦な面を造る。炉の南側で、特に明瞭な硬化面が検出された。掘方面は凹凸があり、土坑状の窪みが点在する。**壁溝** なし **柱穴** 南東の柱穴が推定される個所で明瞭な床面の硬化面が検出されていることから、床面を掘りぬくような柱穴が4か所あったとは考えにくい。ただし、柱穴の可能性のあるピットを炉の南西で1基検出した(P1)。P1は長軸105cm・短軸95cmの楕円形を呈し、深さは25cmを測る。**貯蔵穴** 住居南よりで確認された。平面形状は楕円形を呈し、長軸61cm、短軸35cmを測る。底面は平底の形状である。**炉** 住居の中央やや西よりで検出された。平面形状は楕円形を呈し、長軸45cm・短軸25cmを測る。床面をほとんど掘り窪めずに構築されており、明赤褐色～灰褐色の硬化した焼土がわずかに検出された。**埋没状況** 自然埋没 **出土遺物** 本遺構から出土した遺物のうち、器形を

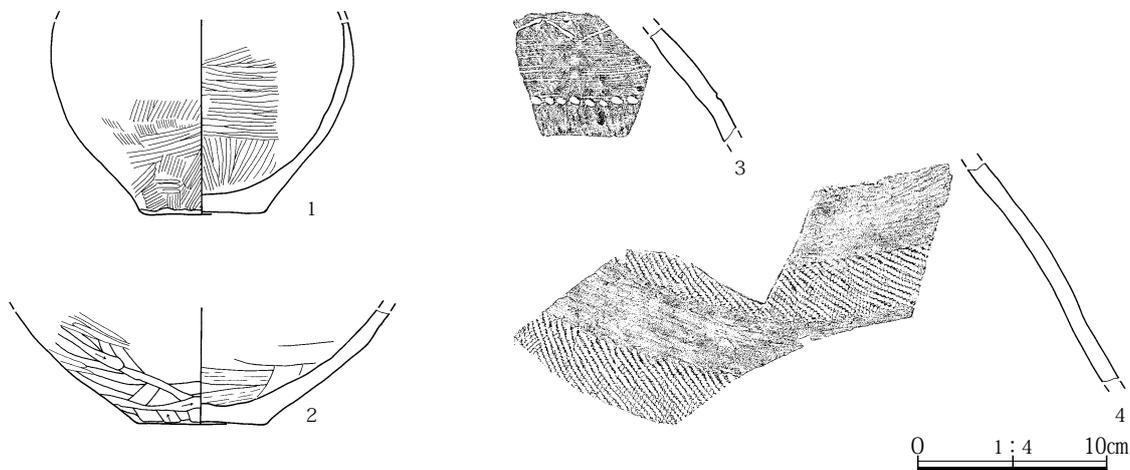
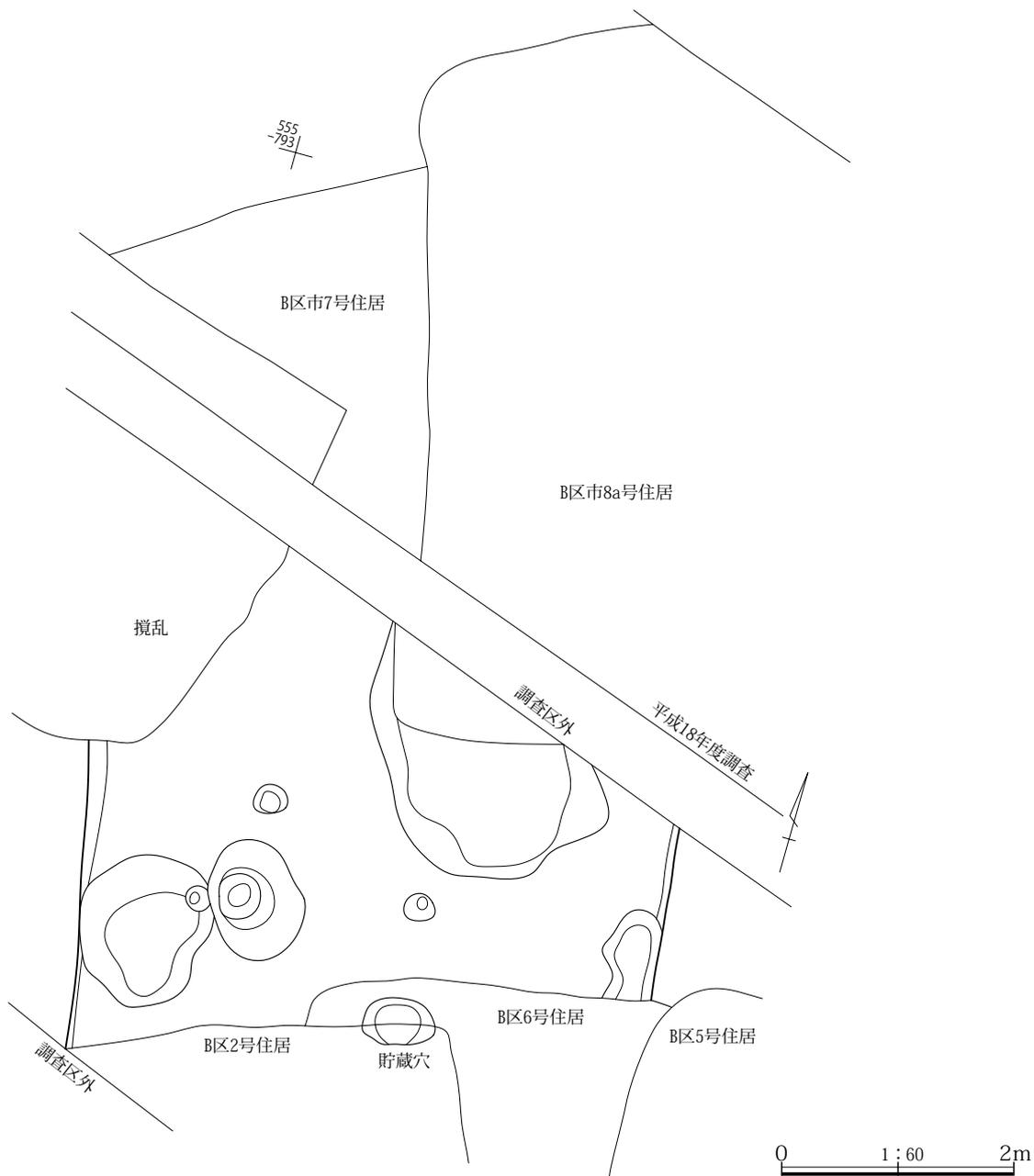
復元できる4点を掲載した。掲載以外に、土師器甕・壺類200g、埴60gがある。住居の床面から土師器甕（1・2）、覆土から土師器甕・赤井戸・吉ヶ谷系壺が出土した。床面から出土した土師器甕（1・2）は、壁面に近い床面直上からの出土である。これらは古墳時代前期、第Ⅱ～Ⅲ期に比定される（観察表125頁）。 **所見 遺構**

に伴うと考えられる出土遺物は古墳時代前期、第Ⅱ～Ⅲ期に比定される。床面からの出土遺物は、いずれも壺の底部のみで、Ⅱ期あるいはⅢ期であるか判断することができなかった。本遺構を切るB区7号住居から出土している遺物が第Ⅱ～Ⅲ期であることから、本遺構が第Ⅱ期、B区6号住居がⅢ期であるかもしれない。



第34図 B区7号住居（1）

掘方面

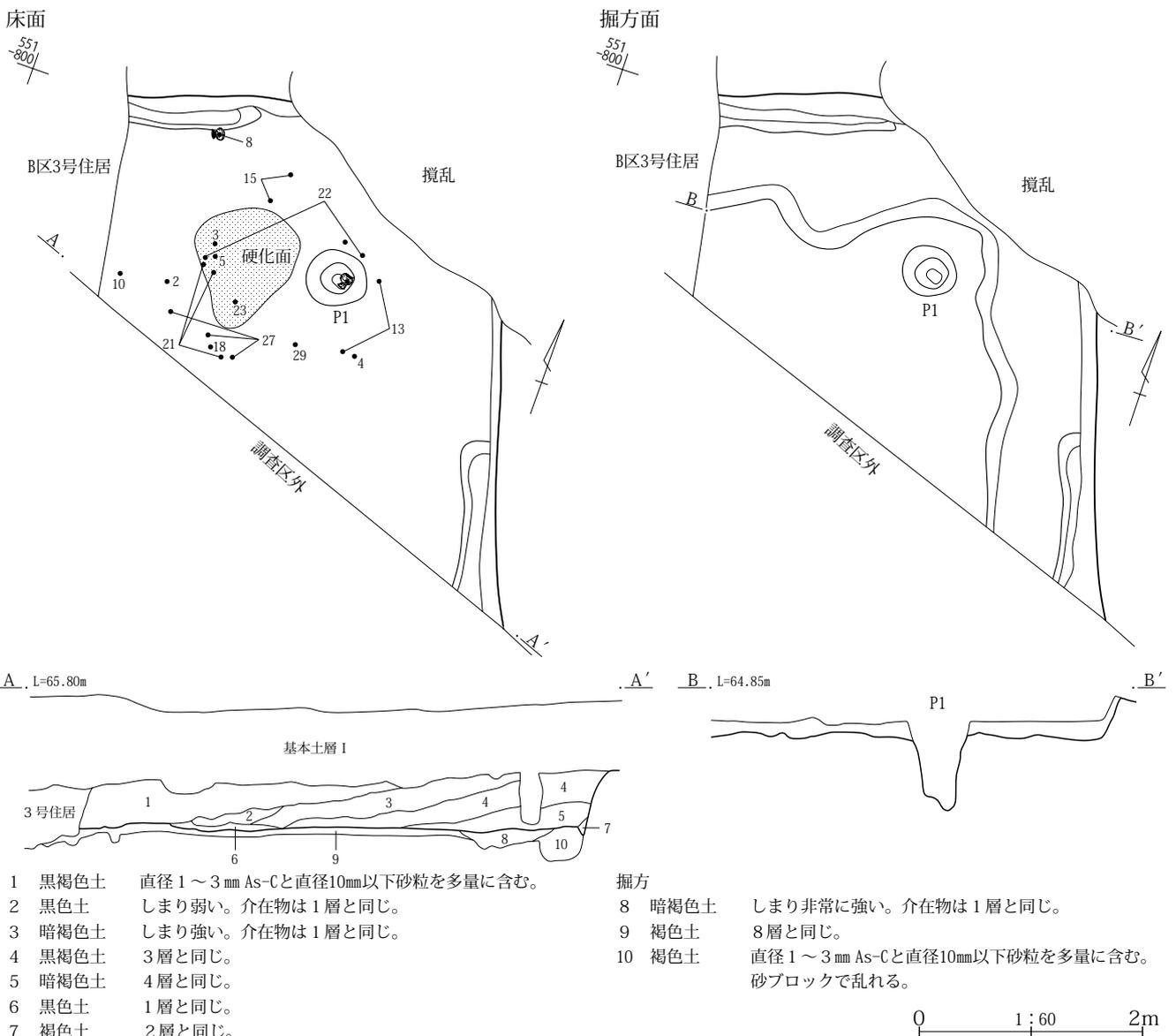


第35図 B区7号住居(2)と出土遺物

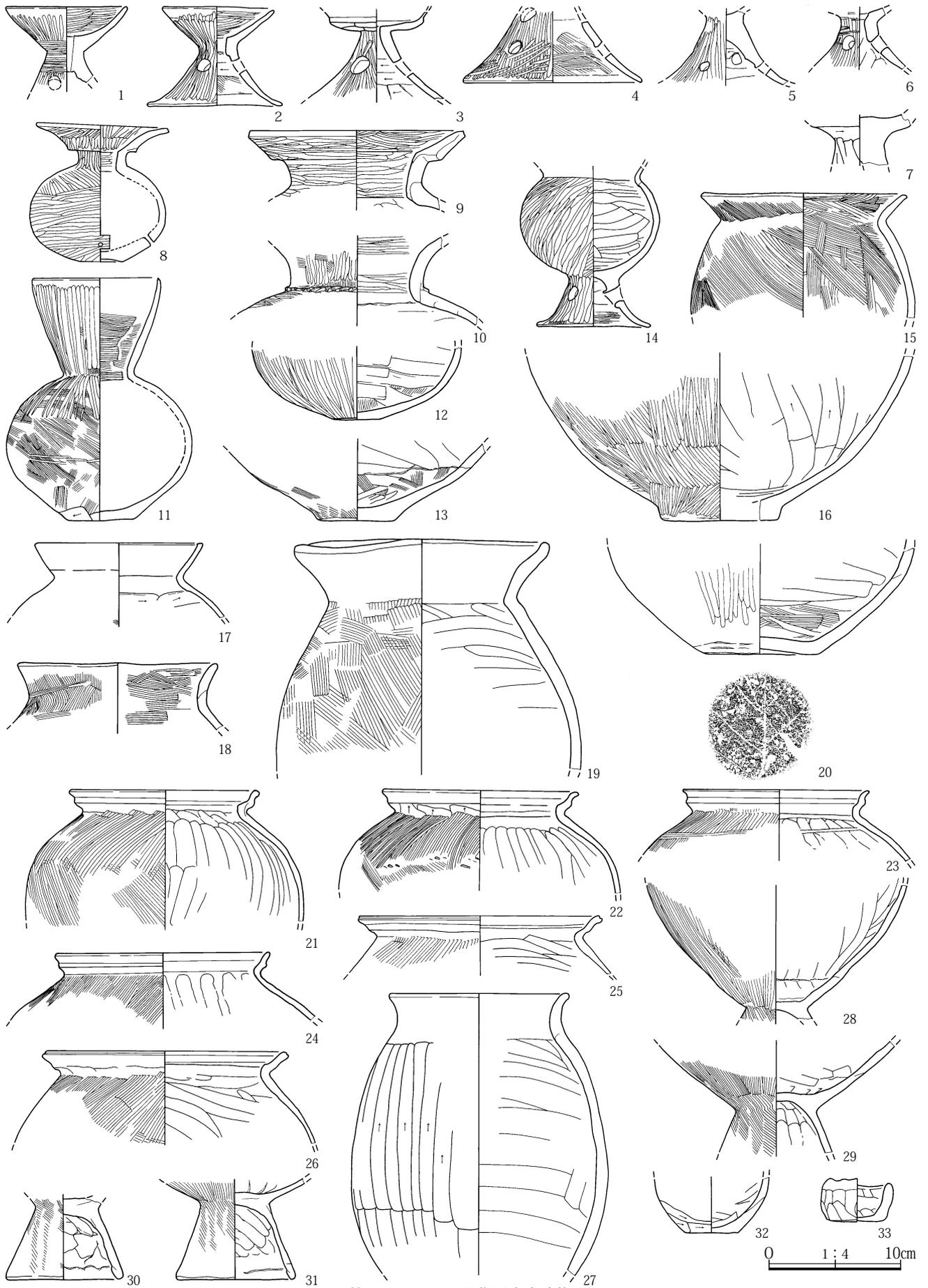
B区8号住居(第36・37図、PL. 9・26)

検出状況 住居の北東部分が検出された。南西部分は調査区外にある。B区3号住居(古墳時代中期)と後世の攪乱により、一部が破壊されている。**位置** X=551-800 **形状** 方形あるいは長方形を呈すると考えられる。主軸は南北軸より19°西に傾く。**壁高** 52cm **覆土** 黒色~褐灰土層が主体であり、全ての土層にAs-C軽石を含む。**床面** 掘方面から最大厚約12cmの埋め土を施して平坦な面を造る。掘方面には、壁面に平行するように中央に方形の掘り込みがある。**壁溝** なし **柱穴** 調査区内では柱穴の可能性のあるピットを1基検出した。P1は長軸55cm・短軸50cmのほぼ円形を呈し、深さは83

cmを測る。**貯蔵穴** 確認されなかった。**炉** 確認されなかった。P1の西に硬化面を検出したが、焼土などの痕跡は確認できなかった。**埋没状況** 自然埋没 **出土遺物** 本遺構から出土した遺物のうち、器形を復元できる32点を掲載した。掲載以外に、土師器甕・壺類1,700g、高杯・器台・鉢類70gがある。ほとんどが床面からの出土であり、良好な資料であるが、床面出土遺物でも古墳時代前期・第Ⅲ古~新期の様相を示し、古墳後期と思われる甕(27)もあり一括性の判断が難しい。また覆土出土ではあるが、外来系の布留式甕(17)、畿内型二重口縁壺が特筆される(観察表125~127頁)。**所見** 床面出土遺物は第Ⅲ古~新期と幅広いが、S字甕(21・22)型式的特徴からはⅢ新期とするのが妥当だろう。



第36図 B区8号住居

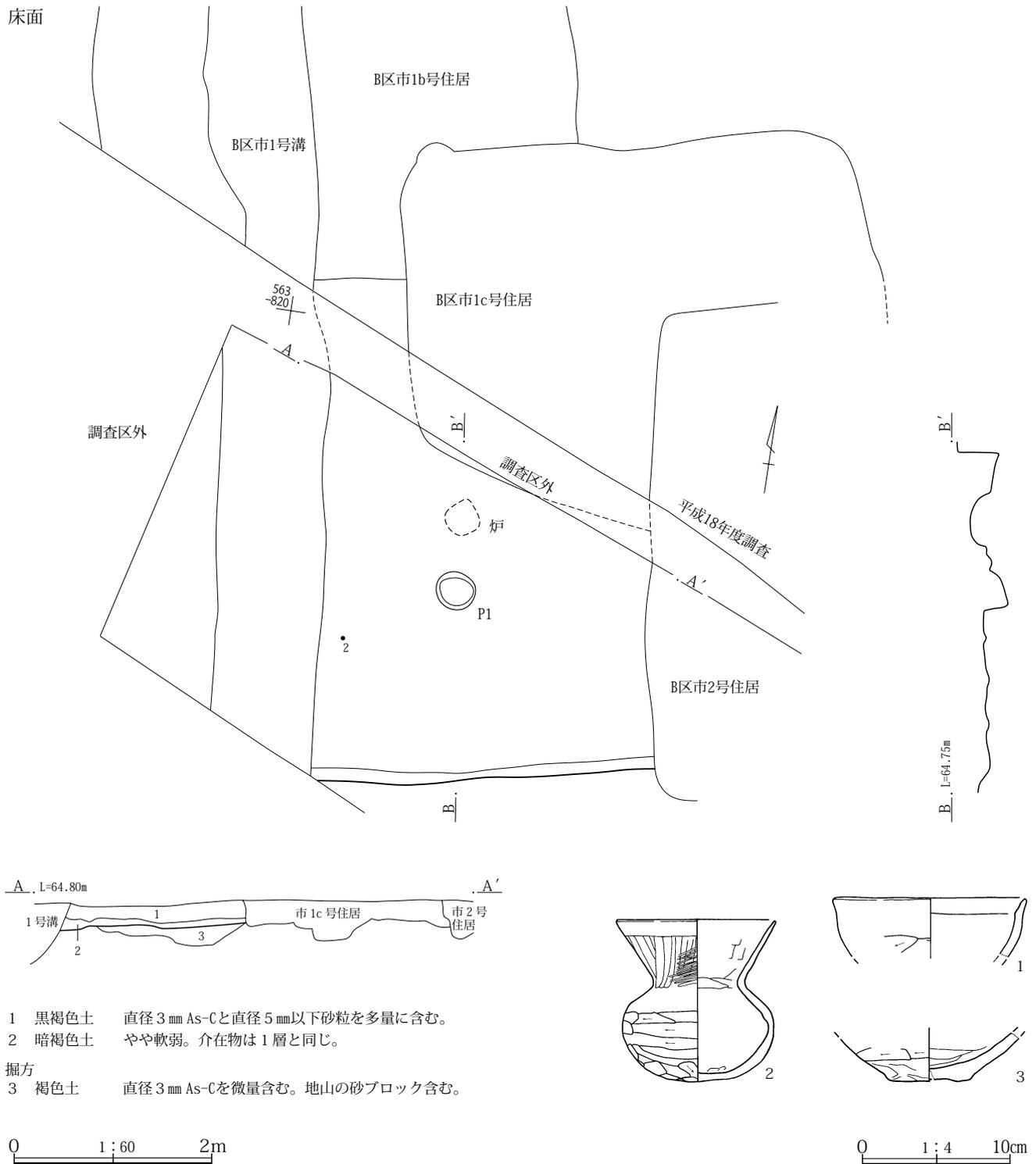


第37図 B区8号住居出土遺物

B区9号住居(第38図、PL. 9・26)

検出状況 本住居は、調査区北寄りに中心をもち、北辺は平成18年度調査のB区市1b号住居（古墳時代中期）、市1c号住居（古墳時代前期）、東辺は市2号住居（古墳

時代中期）、西辺はB区1号溝（近世）に破壊されている。本遺構の壁面は、南辺のみの検出である。 **位置** X=563-820 **形状** 遺構の大部分が破壊されており、全体形状は明らかでない。方形または長方形を呈すると推定される。残存する南辺から推定すると、主軸は南北軸

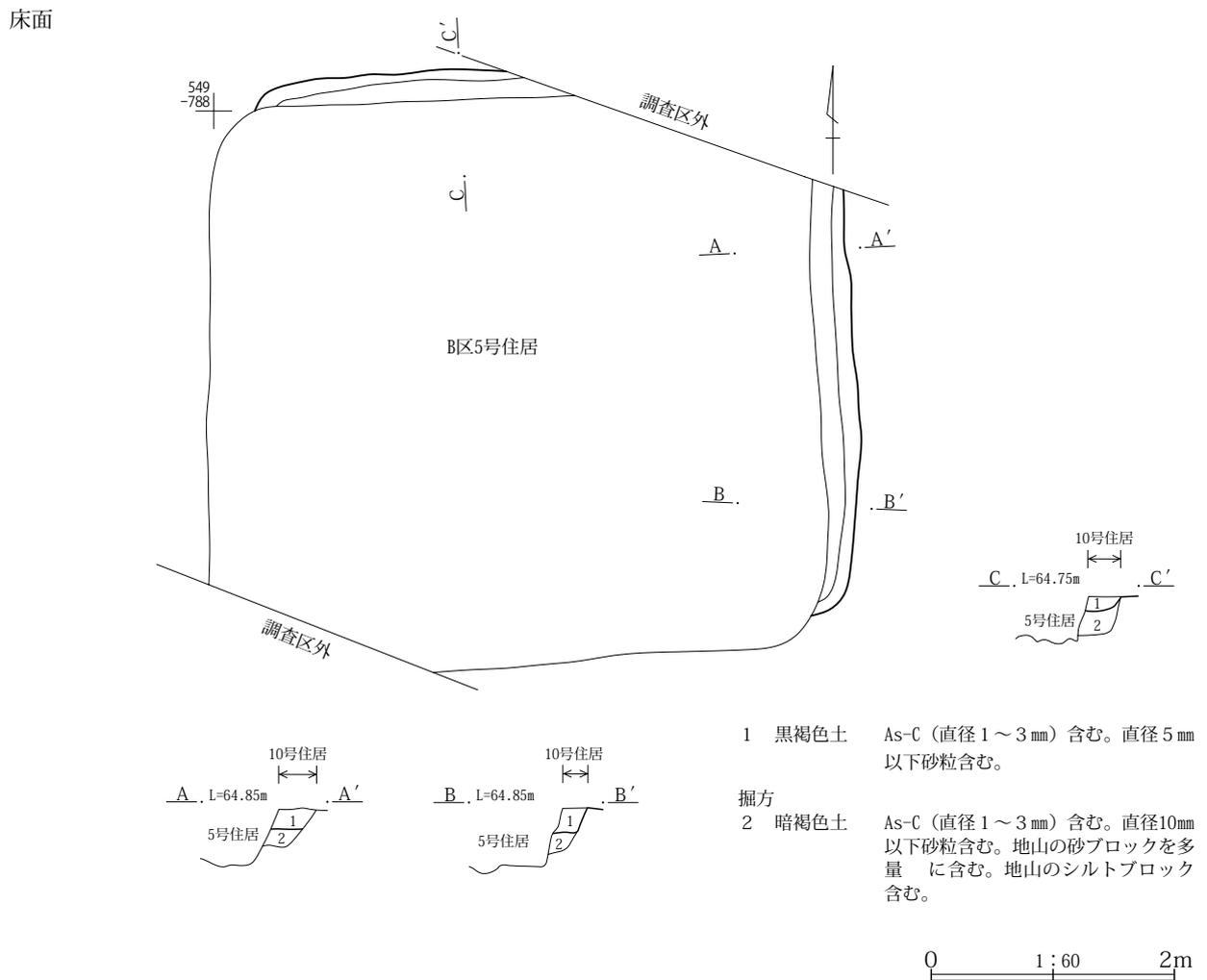


第38図 B区9号住居と出土遺物

より14°西に傾くと考えられる。壁高 20cm 覆土 黒褐色～褐色土層が主体であり、全ての土層にAs-C軽石を含む。床面 掘方面から厚さ約16cmの埋め土を施して平坦な面を造る。掘方面は凹凸があり、土坑状の窪みが点在する。壁溝 なし 柱穴 柱穴は確認できなかったが、炉の南にピットを1基検出した(P1)。P1は直径40cmのほぼ円形を呈し、深さは25cmを測る。炉との位置関係から柱穴の可能性は低い。貯蔵穴 確認されなかった。炉 直径35cmのほぼ円形を呈する。焼土がわずかに確認できるが、明確な窪みは検出されなかった。埋没状況 自然埋没 出土遺物 本遺構から出土した遺物のうち、器形を復元できる3点を掲載した。掲載以外に、土師器甕・壺類200gがある。掲載した土師器壺・罎・甕は覆土からの出土である(観察表127頁)。所見 出土遺物は古墳時代前期、第Ⅱ期の様相を示す。

B区10号住居(第39図、PL. 9)

検出状況 本住居は、調査区内に中心をもち、ほとんどすべてがB区5号住居によって破壊されており、北壁と東壁際のみが検出された。遺構の切り合いから、本遺構が前出である。位置 X=549-788 形状 長軸4.60m、短軸4.40mの方形を呈する。ほぼ東西・南北に主軸をもつ。面積 20.91㎡ 壁高 32cm 覆土 黒褐色～暗褐色土層が主体であり、As-C軽石を含む。床面 検出されたのが壁際の僅かで、明確な貼床・掘方面が検出されなかった。壁溝 なし 埋没状況 自然埋没 出土遺物 なし 所見 古墳時代前期のB区5号住居に切られる調査所見から、古墳時代前期・Ⅱ期以前の遺構であると考えた。



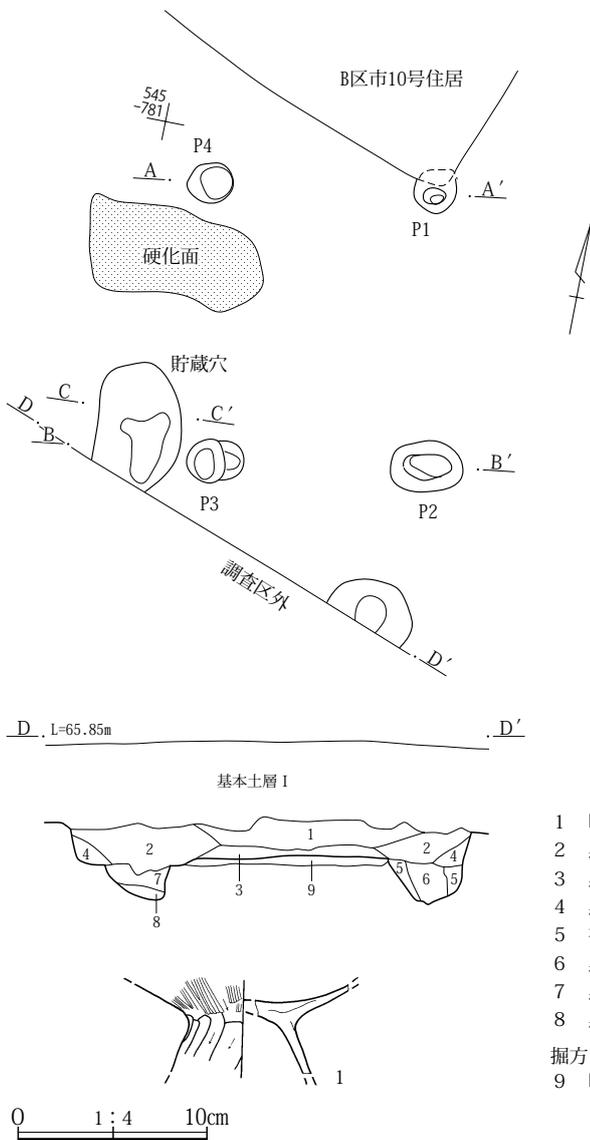
第39図 B区10号住居

B区11号住居(第40図、PL.9・10)

検出状況 本住居は、遺構確認面が掘方面より下位であり、柱穴のみの検出である。遺構南にかかる調査区南の壁面の土層断面により、遺構の床面・壁面・掘方面が確認できる。P 1は、B区市10号住居と重複するが、新旧関係は明らかにできなかった。**位置** X=545-781
形状 不明 **壁高** 30cm **覆土** 黒褐色土層が主体であり、As-C軽石を含む。**床面** 掘方面から最大厚約10cmの埋め土を施して平坦な面を造る。**壁溝** 不明 **柱穴** 4か所の柱穴が確認された。P 1は長軸35cm・短軸34cmのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは30cmを測る。P 2は長軸58cm・短軸40cmの楕円形を呈し、確認面からの

深さは45cmを測る。P 3は長軸45cm・短軸35cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは35cmを測る。P 4は長軸35cm・短軸30cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは10cmを測る。**貯蔵穴** P 3の西、住居の南西よりで確認された。平面形状は楕円形、長軸100cm、短軸65cm、深さ40cmを測る。**炉** 明確な炉は確認できなかった。P 4の南に硬化面が検出されている。**埋没状況** 自然埋没
出土遺物 本遺構から出土した遺物のうち、器形を復元できる1点を掲載した。掲載以外に、土師器甕・壺類140gがある。掲載した土師器甕は覆土からの出土である(観察表127頁)。**所見** 出土遺物は古墳時代前期に比定される。

床面

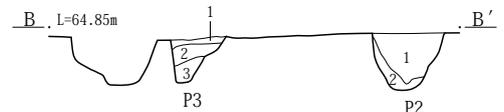


ピット



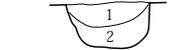
- P4 1 黒褐色土 直径1～3mm As-Cと直径1～10mm砂粒含む。
 P1 1 褐色土 軟弱。直径1～3mm As-Cと直径1～5mm砂粒含む。砂質。

貯蔵穴とピット



- P3 1 黒褐色土 直径1～3mm As-Cと直径5mm以下の砂粒を多量に含む。
 2 褐色土 軟弱。直径1～3mm As-C微量含む。褐色砂を均質に多く含む。
 3 暗褐色土 軟弱。均質。
 P2 1 黒褐色土 均質で軟弱。直径3mm以下As-C微量含む。
 2 黒褐色土 直径3mm以下As-C微量、黄褐色砂ブロックを多量に含む。

貯蔵穴



- 1 黒褐色土 直径3mm As-C微量と直径5mm以下砂粒微量含む。
 2 黒褐色土 砂ブロック斑状に含む。直径3mm以下As-C微量含む。

- 1 暗褐色土 直径1～3mm As-Cと直径10mm以下砂粒含む。
 2 黒褐色土 しまりやや強い。介在物は1層と同じ。
 3 黒褐色土 しまり弱い。介在物は1層と同じ。
 4 黒色土 砂質で均質。直径1～3mm As-Cと直径10mm以下砂粒含む。
 5 褐色土 1層と同じ。
 6 黒褐色土 しまり強い。直径1～3mm As-Cと直径10mm以下砂粒含む。
 7 黒褐色土 直径3mm As-C微量、と直径5mm以下砂粒微量含む。
 8 黒褐色土 砂ブロック斑状に含む。直径3mm以下As-C微量含む。
掘方
 9 暗褐色土 直径1～3mm As-Cと直径10mm以下砂粒含む。

第40図 B区11号住居

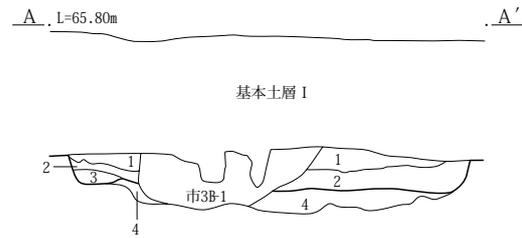
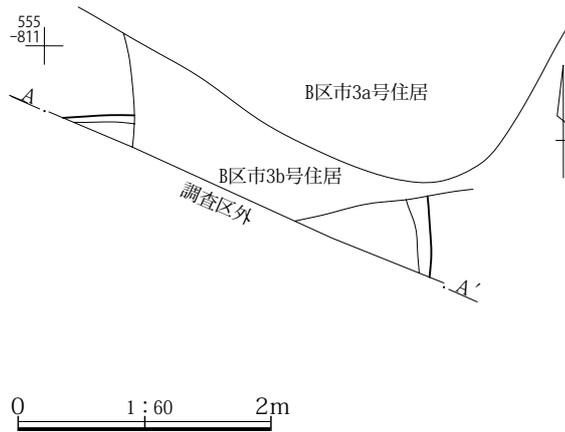
B区13号住居(第41図)

検出状況 本住居は、調査区南寄りで検出された。遺構の大部分は調査区外である。遺構の大部分はB区市3b号住居(古墳時代前期・Ⅲ古期)に破壊されている。

位置 X=555-811 **形状** 方形あるいは長方形を呈すると思われる。主軸はほぼ南北軸である。 **壁高** 34cm

覆土 黒褐色土層が主体で、全ての土層にAs-C軽石を含む。 **床面** 掘方面から最大厚約12cmの埋め土を施して平坦な面を造る。 **壁溝** なし **埋没状況** 自然埋没 **出土遺物** なし **所見** 古墳時代前期のB区市3b号住居に切られる調査所見から、古墳時代前期(古墳時代前期・Ⅲ古期以前)の遺構であると考えた。

床面



- 1 黒褐色土 直径1～3mm As-Cと直径10mm以下砂粒含む。
- 2 黒褐色土 ややしまる。介在物は1層と同じ。
- 3 黒褐色土 直径1～3mm As-Cと直径10mm以下砂粒微量含む。

掘方

- 4 黒褐色土 直径1～3mm As-Cと直径10mm以下砂粒含む。地山のブロック含む。

第41図 B区13号住居

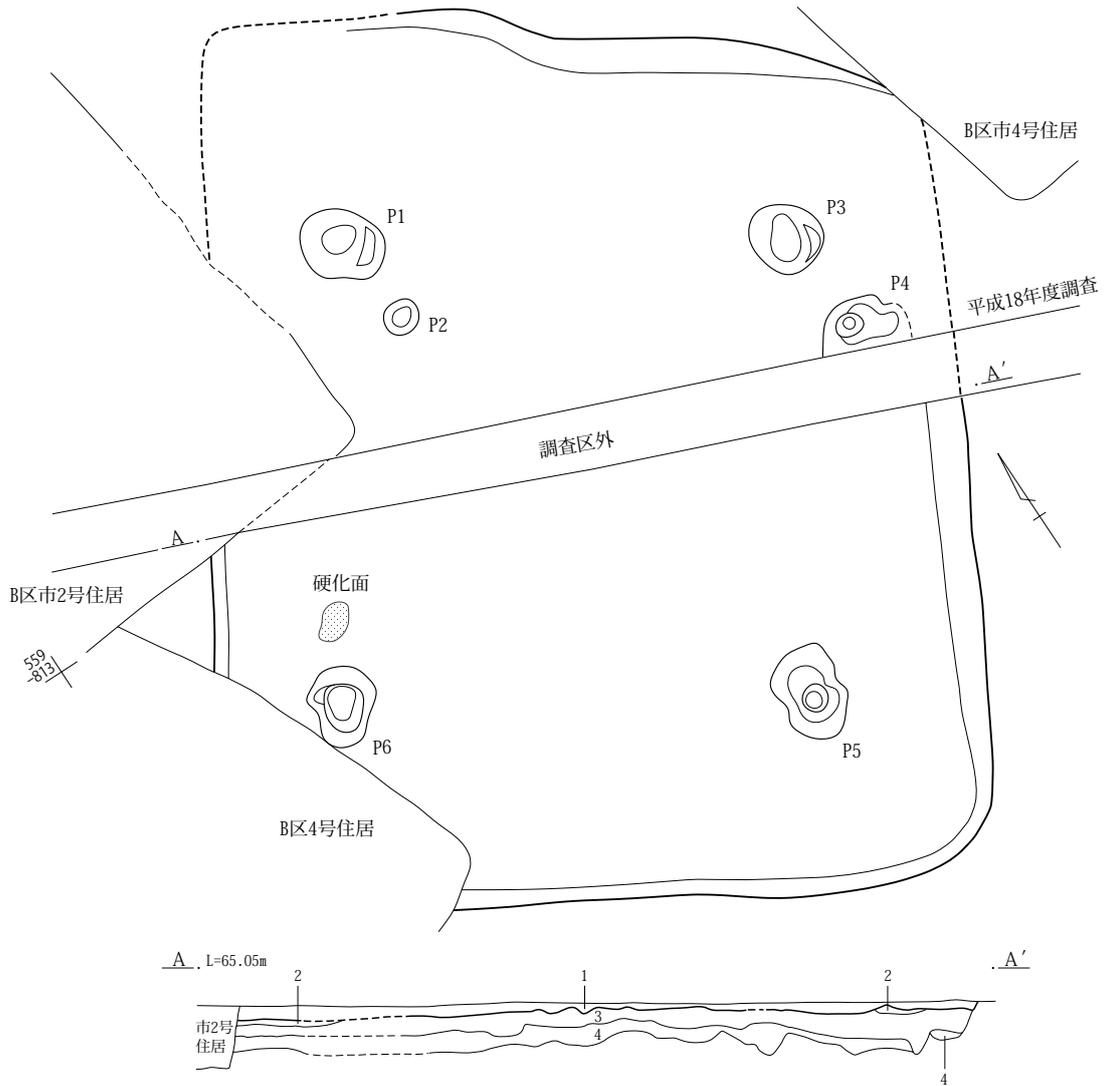
B区市3a号住居(第42・43図、PL.10)

検出状況 本住居は、調査区北寄りで検出された。遺構の北半分は平成18年度にすでに調査されている。 **位置** X=559-812 **形状** 長軸6.88m、短軸5.61mの長方形を呈する。主軸は南北軸より30°東に傾く。 **壁高** 9cm

覆土 暗褐色～明褐色土層が主体であり、全ての土層にAs-C軽石を含む。 **床面** 掘方面から最大厚約35cmの埋め土を施して平坦な面を造る。掘方面は中央が壁面と平行に方形に窪む形状である。 **壁溝** なし **柱穴** 4か所の柱穴(P1・P3・P5・P6)を検出した。P1は長軸68cm・短軸55cmの不整形円形を呈し、深さは46cmを測る。P3は長軸60cm・短軸54cmのほぼ円形を呈し、深さは50cmえお測る。P5は長軸72cm・短軸45cmの不整形円形を呈し、深さは62cmを測る。P6は長軸62cm・短軸41cmの不整形円形を呈し、深さは52cmを測る。P2はP1の補助的な柱穴であると想定される。 **貯蔵穴** 掘方面で検出した東南の土坑状の窪みが貯蔵穴の可能性があると

の調査所見を得た。掘方面で検出された形状は長軸50cm、短軸25cm、深さ15cmの楕円形の土坑状の窪みであるが、床面での検出を想定すれば、平面形状が一回り大きく、深さは45cmとなるので、貯蔵穴の可能性が十分にある。 **炉** 明確な比熱痕のある炉は検出されなかった。P6のやや北に長軸33cm・短軸20cmの楕円形状の硬化面がある。 **埋没状況** 自然埋没 **出土遺物** 本遺構から出土した遺物のうち、器形を復元できる7点を掲載した。掲載以外に、土師器甕・壺類60g、高杯・器台・鉢類10gがある。出土した土師器壺・台付甕・甕・高杯または器台は、覆土からの出土である(観察表127頁)。 **所見** 出土遺物は古墳時代前期、第Ⅲ新期の遺物に比定される。覆土のみの出土であるが、本遺構に切られるB区市3b号住居の遺物が床面からの出土で古墳時代前期、第Ⅲ古期の様相を示すことから、本遺構は覆土からの出土遺物が示す古墳時代前期、第Ⅲ新期の可能性がある。

床面



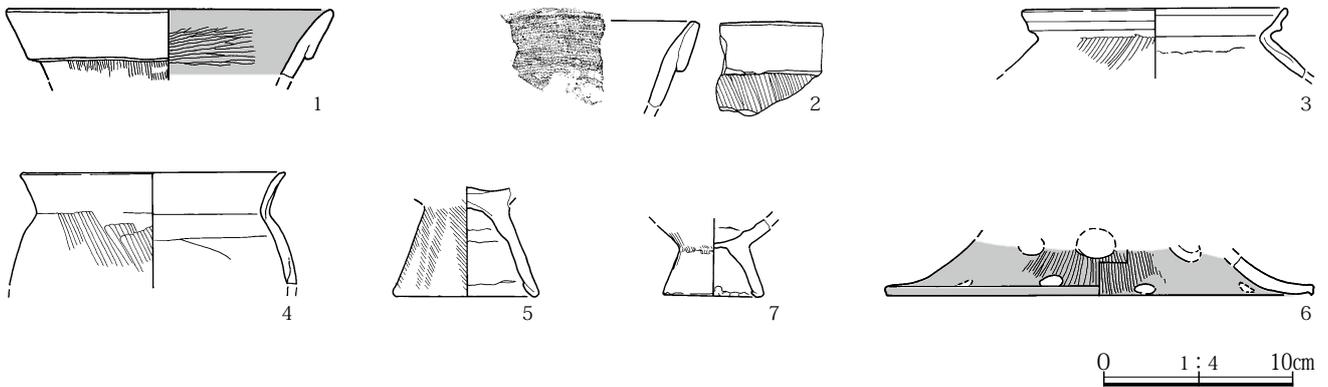
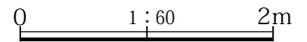
1 暗褐色土 直径1～3mm As-Cと直径10mm以下砂粒含む。

掘方

2 明褐色～褐色土 直径1～3mm As-Cと直径10mm以下砂粒含む。地山の砂と地山のシルト多い。

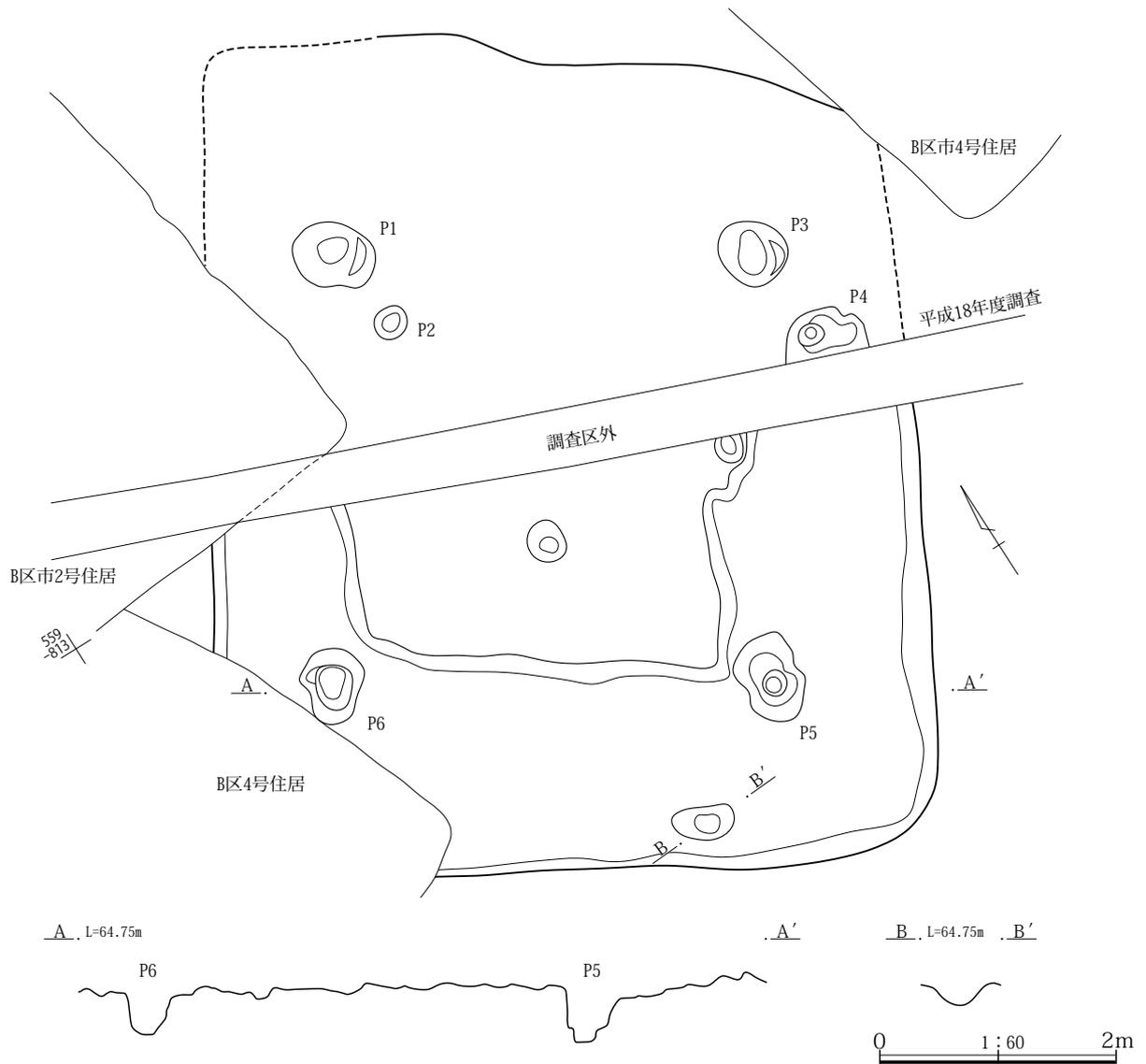
3 暗褐色土 しまり強い。直径1～3mm As-Cと直径10mm以下砂粒含む。

4 褐色土 1層と同じ。



第42図 B区市3a号住居(1)と出土遺物

掘方面



第43図 B区市3a号住居(2)

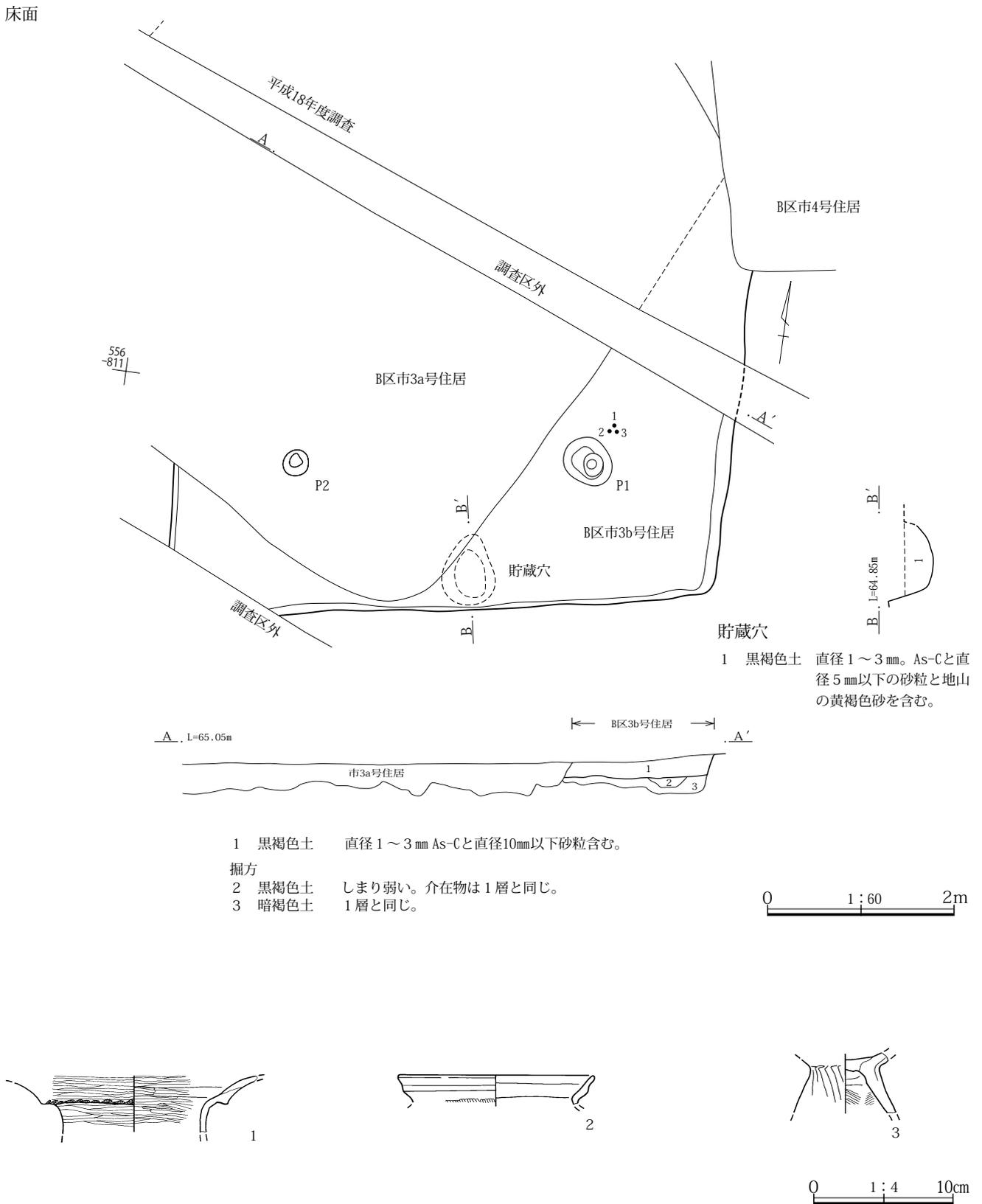
B区市3b号住居(第44・45図、PL.10)

検出状況 本住居の北半分は平成18年度にすでに調査されており、本調査では南半分が検出された。B区市3a号住居と切りあっており、本遺構が前出である。B区市3a号住居と掘方面はほぼ同レベルであり、掘方面での本遺構とB区市3a号住居が重複する部分は、どちらの掘方面であるか判別できなかった。**位置** X=556-811 **形状** 長軸5.68の方形あるいは長方形を呈する。主軸は南北軸より8°西に傾く。**壁高** 28cm **覆土** 黒褐色土層が主体であり、全ての土層にAs-C軽石を含む。**床面** 掘方面から最大厚約20cmの埋め土を施して平坦な面を造る。**壁溝** なし **柱穴** 2か所の柱穴(P1、P2)を検出した。P1は長軸55cm・短軸45cmの楕円形を

呈し、深さは52cmを測る。P2はB区市3a号住居と重複する箇所の掘方面で確認した。直径25cmのほぼ円形を呈し、深さは48cmを測る。**貯蔵穴** 床面で確認できなかったが、掘方面で土坑状の窪みを検出し、貯蔵穴であると推定した。掘方面で検出された形状は長軸85cm、短軸59cm、深さ15cmの楕円形状の土坑であるが、床面での検出を想定すれば、平面形状は一回り大きくなると考えられる。**炉** 不明 **埋没状況** 人為的な埋没の可能性が高い。**出土遺物** 本遺構から出土した遺物のうち、器形を復元できる3点を掲載した。掲載以外に、土師器甕・壺類50gがある。掲載した土師器壺(1)・台付甕(2・3)は住居の床面からの出土である。掲載遺物は人為的な埋没土の可能性が高い1層下層の床面からの出土

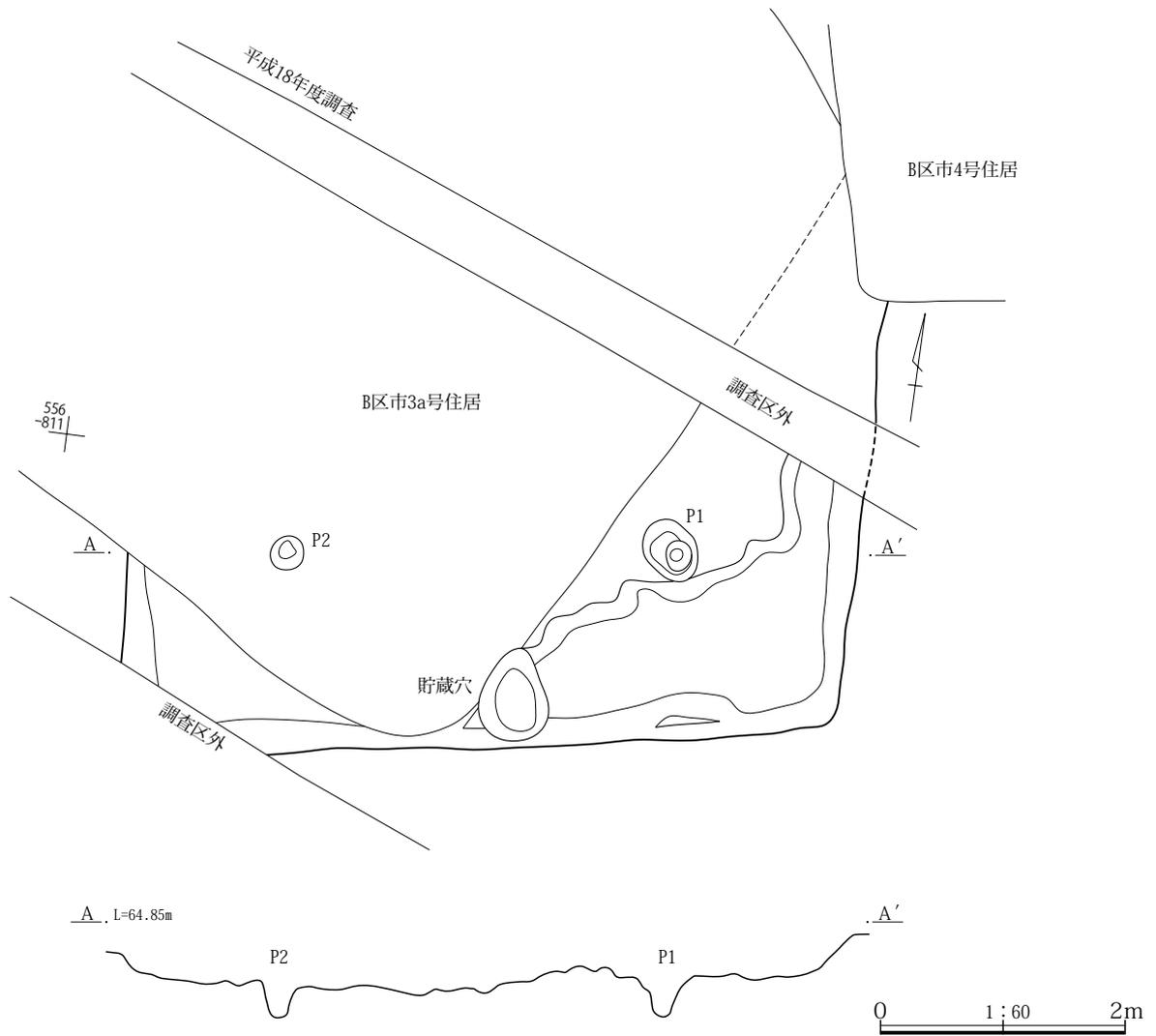
で、遺構に伴う遺物であると考えられる（観察表127頁）。
 所見 床直出土の土器が古墳時代前期、第Ⅲ古期の様相

を示すことから、本遺構も概期に比定されたと考えた。



第44図 B区3b号住居（1）と出土遺物

掘方面



第45図 B区3b号住居(2)

B区市8a号住居(第46図、PL.10・26)

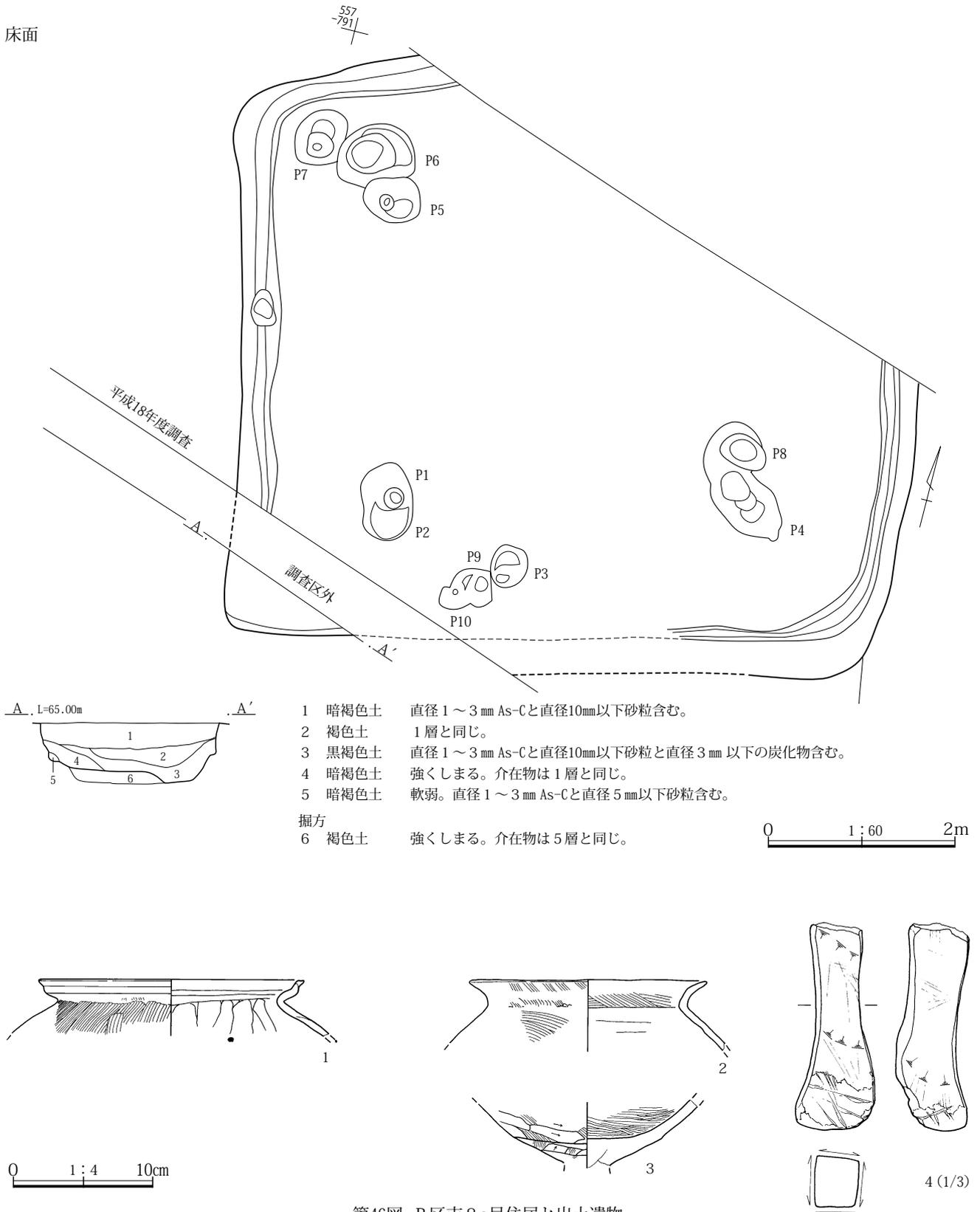
検出状況 本住居は、平成18年度調査区内に中心をもち、本調査では南西隅の僅かな範囲を調査した。調査範囲では、古墳時代前期・第Ⅲ新期の土器類や砥石が出土した。
位置 X=557-791 **形状** 長軸6.65m、短軸5.88mの長方形を呈する。主軸は南北軸より11°西に傾く。**壁高** 51cm **覆土** 黒褐色～褐色土層が主体であり、As-C軽石を含む。**床面** 掘方面から厚さ約13cmの埋め土を施して平坦な面を造る(6層)。**壁溝** 幅約30cm、深さ8～16cmで全周する。**柱穴** P1・P2・P4～6・P8が支柱穴であると報告されている。P1は直径50cmのほぼ円形、深さは71cmを測る。P2は長径52cm・現存短径32cmであるが、ほぼ円形の平面形状が推測され、深さは84cmを測る。P4は長径134cm・短径60cmの楕円形、深

さ72cmを測る。P5は長径64cm・短径62cmのほぼ円形、深さ73cmを測る。P6は長径84cm、短径60cmの楕円形、深さ53cmを測る。P8は長径52cm、短径32cmの楕円形、深さ88cmを測る。P1・P6・P8はいずれも埋め土が施され、床面として埋め戻されていたようである。よって、検出状況としてはP1・P6・P8を柱穴とした後に、P2・P4・P5を柱穴として、建て替えられたと考えられる。**貯蔵穴** P7とした長軸64cm・短軸50cm・深さ40cmの土坑状の窪みが貯蔵穴の可能性ある。**炉** 明確な炉は確認されなかった。P1の北西部の貼床面にローム・シルト状の土壌が多く含まれており、地床炉の可能性ある。**埋没状況** 自然埋没 **出土遺物** 本調査で出土した遺物のうち、器形を復元できる4点を掲載した。掲載以外に、土師器甕・壺類520g、高杯・器台

鉢類70gがある。出土した土師器台付甕(1)・甕(2)・高杯(3)は覆土から、砥石(4)は掘方覆土から出土した。土器類は古墳時代前期、第Ⅲ新期に比定される(観察表127・128頁)。 所見 本調査では掘方の覆土か

らではあるが、砥石が出土した。平成18年度調査では鉈が出土しており、古墳時代前期の遺構から砥石と鉈のセット確認されたことは特出される。本住居の出土遺物は古墳時代前期・第Ⅲ新期に比定される。

床面

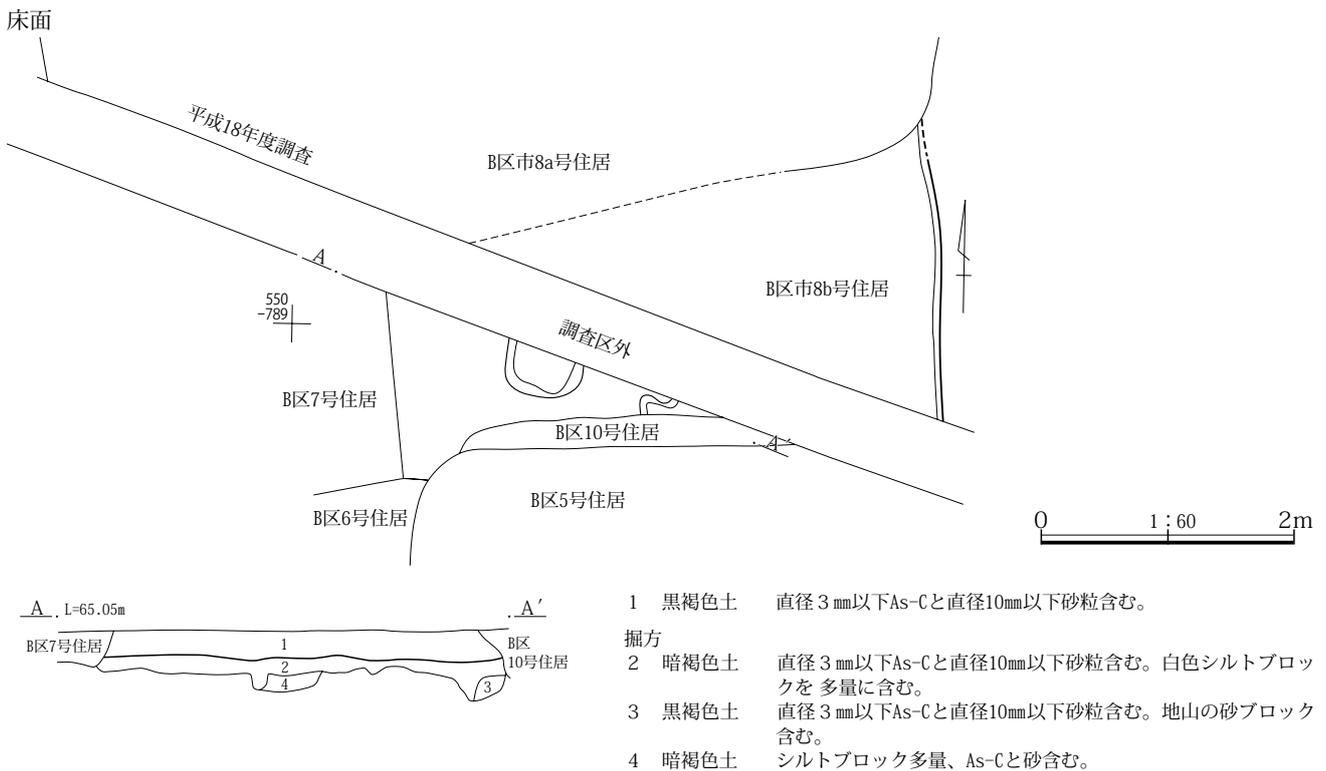


第46図 B区市8a号住居と出土遺物

B区市8b号住居(第47図、PL.10)

検出状況 本調査では、床面中央付近を検出した。平成18年度調査では東壁付近を検出している。本遺構は北をB区市8a号住居（古墳時代前期・第Ⅲ新时期）、西をB区7号住居（古墳時代前期・第Ⅱ期）、南をB区5号住居（古墳時代前期・第Ⅱ期）、6号住居（古墳時代前期・第Ⅲ期か）、10号住居（古墳時代前期第Ⅱ期）に破壊されている。遺構平面図は掘方面を掲載した。 **位置** X=550-

789 **形状** 不明 **壁高** 21cm **覆土** 黒褐色～暗褐色土層が主体であり、As-C軽石を含む。 **床面** 掘方面から厚さ約8～30cmの埋め土を施して平坦な面を造る。掘方面には土坑状の窪みが検出された。 **埋没状況** 自然埋没 **出土遺物** なし **所見** 本調査、平成18年度調査とも図示できるような遺物は出土しなかった。覆土や遺構の切り合いの前後関係から、古墳時代前期・第Ⅱ期以前の遺構であると考えられる。



第47図 B区市8b号住居

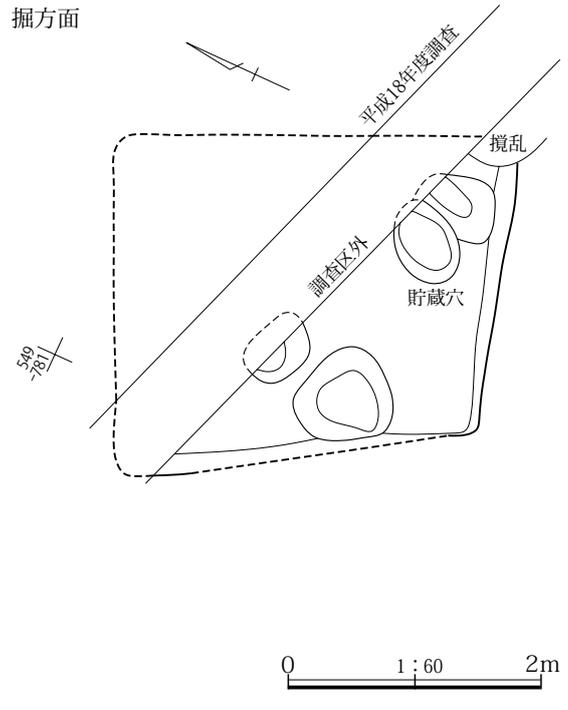
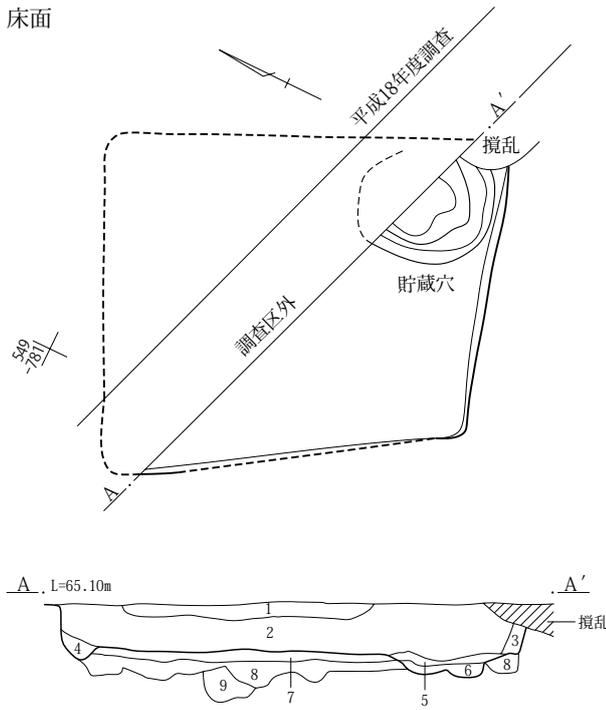
B区市10a号住居(第48図、PL.10・26)

検出状況 本住居は、B区市10b号住居に収まるように主軸を45度傾けて構築している。本遺構はB区市10b号住居を破壊しているが、床面や掘方面はほとんど段差がない。平成18年度調査では、土層断面で明確に住居跡を確認したものの平面プランは不確かであった。本調査では南壁と南西隅を検出した。 **位置** X=549-781 **形状** 長軸2.85m、短軸2.40mの長方形を呈する。主軸は南北軸より16°西に傾く。 **面積** 6.98㎡ **壁高** 38cm **覆土** 黒褐色～明褐色土層が主体であり、As-C軽石を含む。 **床面** 掘方面から厚さ約20cmの埋め土を施して平坦な面

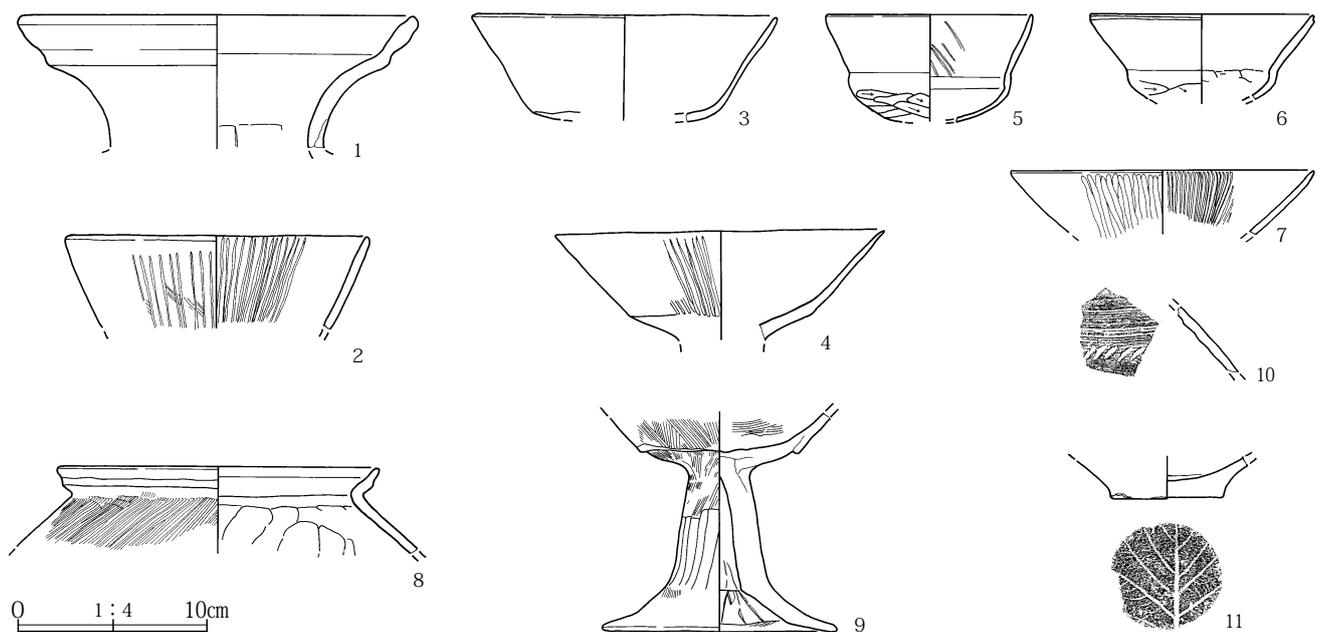
を造る。 **壁溝** 西壁に幅約21cm、深さ9cmの壁溝の可能性ある窪みが土層断面で確認できる。南壁際では壁溝が検出されなかった。 **柱穴** 不明 **貯蔵穴** 住居南東隅に貯蔵穴を検出した。直径92cmのほぼ円形の平面形状を呈し、深さ38cmである。 **炉** 不明 **埋没状況** 自然埋没 **出土遺物** 本遺構から出土した遺物のうち、器形を復元できる11点を掲載した。掲載以外の出土遺物はない。出土した土師器壺・埴・高坏・台付甕・甕は、覆土からの出土である（観察表128頁）。 **所見** 出土遺物は、古墳時代前期・第Ⅲ新时期に比定される。

床面

掘方面



- A, L=65.10m
- 1 黒褐色土 直径1～2mm白色軽石粒 (As-C) やや多く含む。
 - 2 暗褐色土 直径1～2mm白色粒 (As-C) やや多い。直径5mm以下の砂粒少量含む。
 - 3 褐色土 直径1～2mm白色粒 (As-C) を微量含む。直径5mm以下の砂粒やや多く含む。
 - 4 黒褐色土 直径1～2mm白色軽石粒 (As-C) を微量含む。直径5mm以下の砂粒微量含む。
 - 5 黒褐色土 直径1～2mm白色粒 (As-C) を少量含む。直径5mm以下の砂粒微量含む。
 - 6 暗褐色土 直径1mm以下白色軽石粒 (As-C) を極微量含む。直径5mm以下の砂粒やや多く含む。
- 掘方
- 7 褐色土 直径1mm以下白色軽石粒 (As-C) を極微量含む。直径5mm以下の砂粒を多量に含む。黄褐色砂ブロックを多量に含む。
 - 8 暗褐色土 直径1mm以下白色軽石粒 (As-C) を極微量含む。直径5mm以下の砂粒少量含む。黄褐色砂ブロック少量含む。
 - 9 明褐色土 白色粒 (As-C) なし。直径5mm以下の砂粒を多量に含む。黄褐色砂を多量に含む。

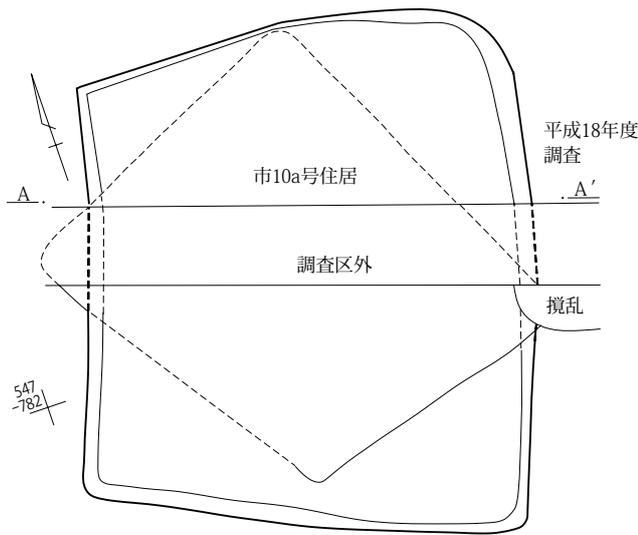


第48図 B区市10a号住居と出土遺物

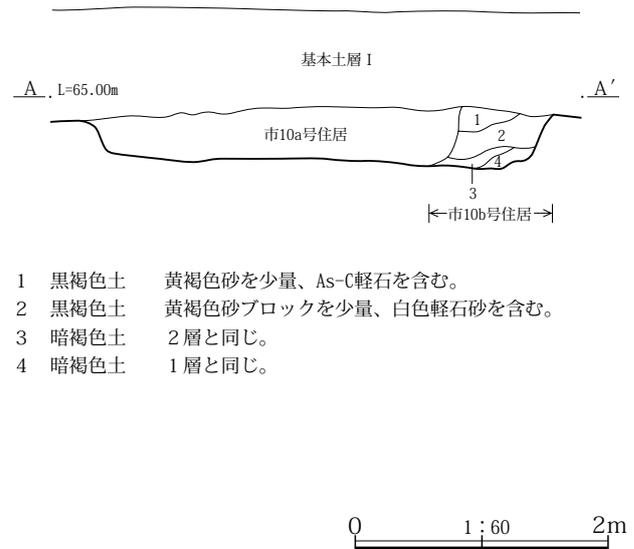
B区市10b号住居(第49図)

検出状況 本住居は、遺構の中央をB区市10a号住居（古墳時代前期・第Ⅲ新时期）に破壊されている。床面や堀方面はほとんど段差がない。**位置** X=549-781 **形状** 長軸4.02m、短軸3.29mの長方形を呈する。主軸は南北軸より19° 東に傾く。**面積** 12.39㎡ **壁高** 38cm

床面



覆土 黒褐色～明褐色土層が主体であり、As-C軽石を含む。**床面** 掘方面がほぼ床面である。**柱穴** 不明 **貯蔵穴** 不明 **炉** 不明 **埋没状況** 自然埋没 **出土遺物** なし **所見** 本調査では遺物が出土しなかったが、平成18年度調査で土師器器台・椀・甕・台付甕・壺などが出土した。出土遺物は、古墳時代前期・第Ⅱ期に比定される。



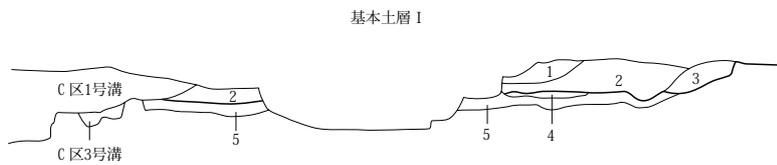
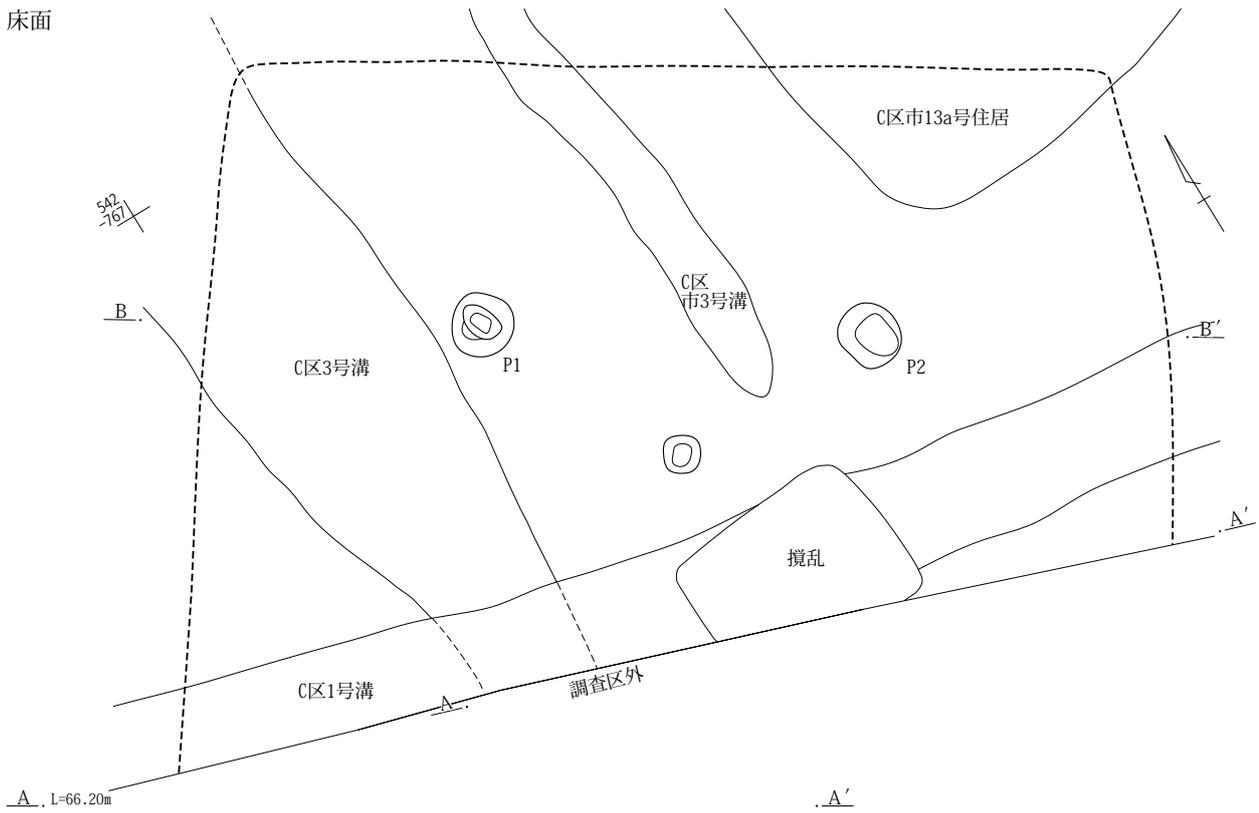
第49図 B区市10b号住居

C区1号住居(第50図、PL.10)

検出状況 本住居は、遺構確認面が掘方面より下位になってしまったことから、柱穴のみの検出である。遺構の床面・壁面・掘方面は調査区壁面の土層断面から推定した。遺構の南半部は調査区外である。遺構はC区1号溝（古墳時代前期）・1号水路（古墳時代前期）・市3号溝（古墳時代前期）・市13a号住居（古墳時代前期・Ⅰ～Ⅱ期）と重複する。1号溝に切られることは明らかであったが、その他の遺構との重複の前後関係は不明である。**位置** X=542-767 **形状** 方形または長方形。**壁高** 25cm **覆土** 黒褐色～明褐色土層が主体であり、As-C軽石を含む。**床面** 掘方面から最大厚約15cmの埋め土を施して平坦な面を造る。**壁溝** 不明 **柱穴** 2か所の柱穴が確認された。残り2か所は1号溝に破壊されたか、調査区外であると推測される。P1は直径52～53cmの

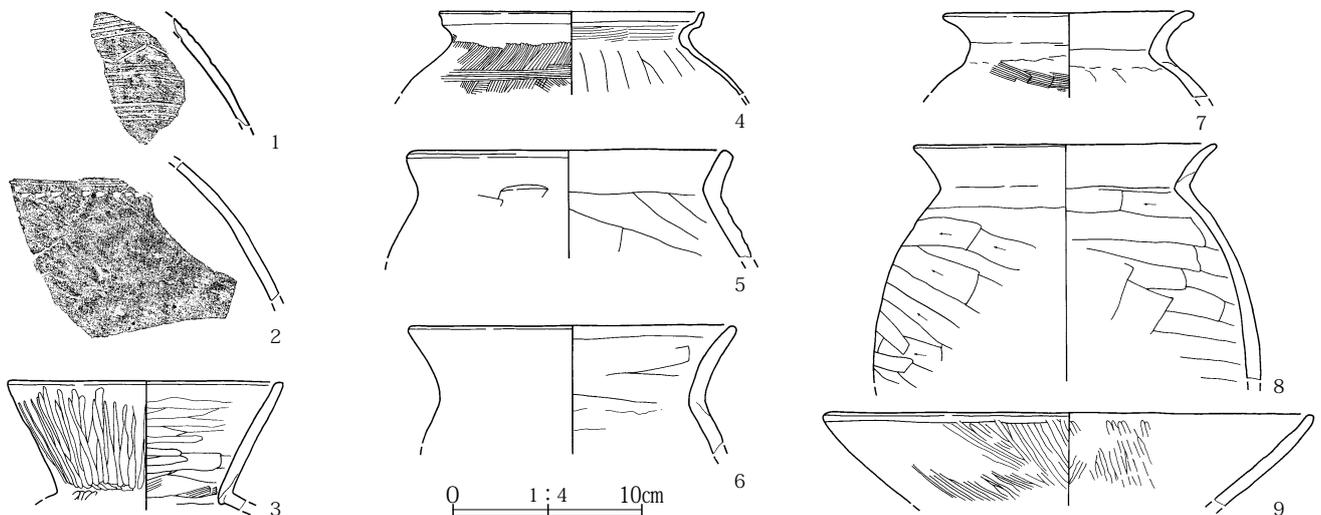
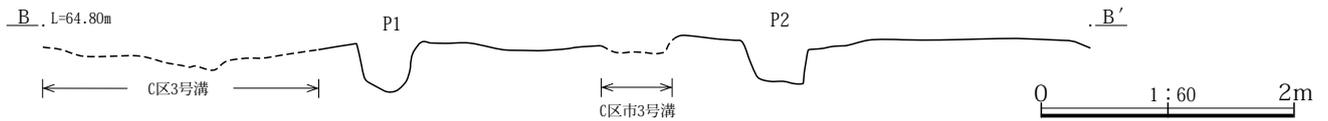
ほぼ円形を呈し、確認面からの深さは41cmを測る。P2は長軸51cm・短軸46cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは27cmを測る。**貯蔵穴** 不明 **炉** 不明 **埋没状況** 自然埋没 **出土遺物** 本遺構から出土した遺物のうち、器形を復元できる9点を掲載した。掲載以外に、甕・壺類290g、高坏・器台80gが出土した。出土した東海西部系壺（1・2）、土師器直口壺（3）、土師器高杯・台付甕・甕は覆土からの出土である（観察表128頁）。**所見** 出土遺物は古墳時代前期のⅠ～Ⅳ期に比定され、幅広い時期の遺物の混合が見られる。本遺構は古墳時代の溝と重複しており、出土位置も覆土であることから、溝の遺物が混入している可能性もある。遺物の混入の可能性があり、古墳時代前期の遺構ではあるが、時期を特定することはできなかった。

床面



- | | |
|--------|---------------------------|
| 1 黒褐色土 | As-Cと直径1~5mmの砂粒含む。 |
| 2 黒褐色土 | しまり強い。介在物は1層と同じ。 |
| 3 暗褐色土 | しまり弱い。介在物は1層と同じ。 |
| 掘方 | |
| 4 明褐色土 | 地山の砂多量。As-Cと直径1~5mmの砂粒含む。 |
| 5 暗褐色土 | 1層と同じ。 |

掘方



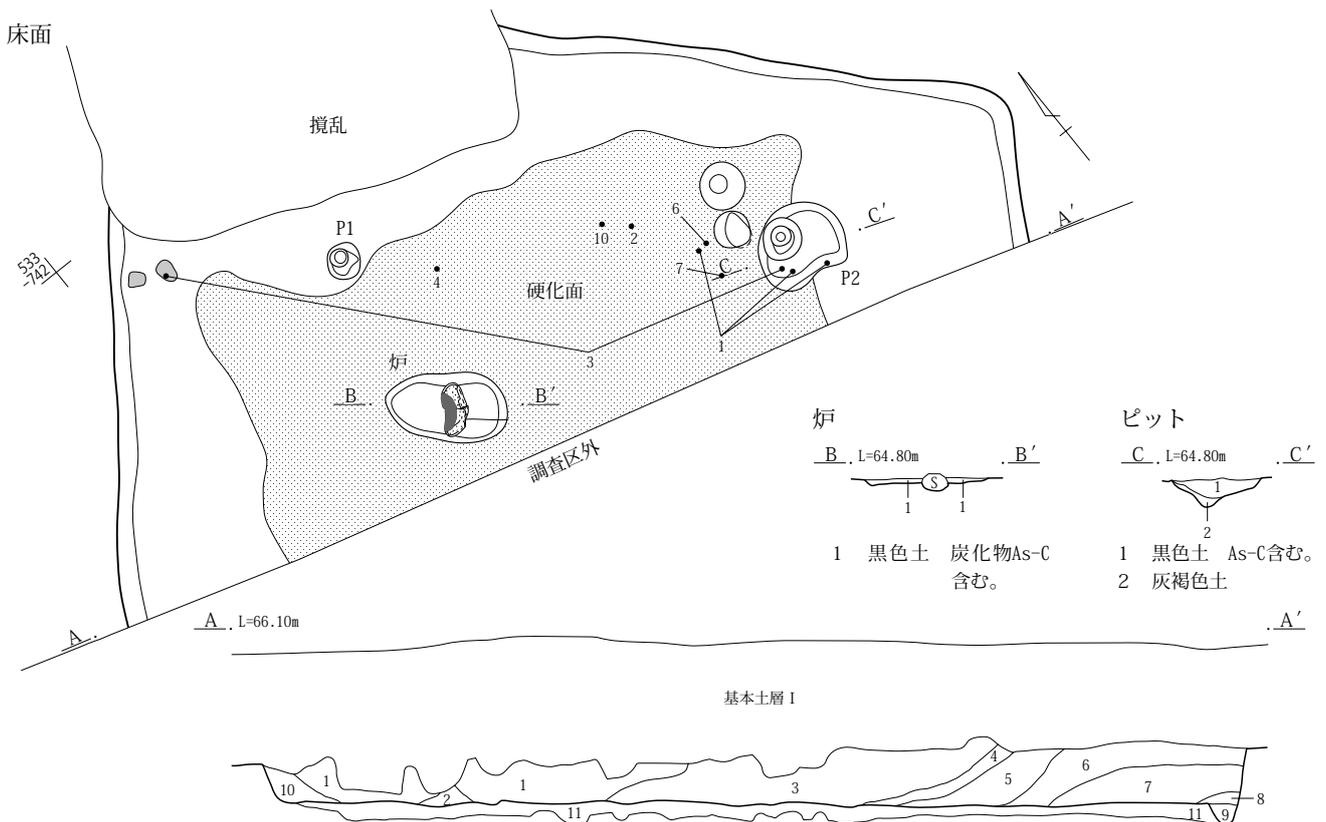
第50図 C区1号住居と出土遺物

C区2号住居(第51・52図、PL.11・27)

検出状況 住居の北半部が検出された。南半部は調査区外にある。攪乱により、北西の隅が破壊されている。

位置 X=533-742 **形状** 方形あるいは長方形を呈する。主軸は南北軸より43° 東に傾く。 **壁高** 48cm **覆土** 黒色～褐色土層が主体であり、全ての土層にAs-C軽石を含む。 **床面** 掘方面から最大厚約18cmの埋め土を施して平坦な面を造る。住居中央に明確な硬化面がある。 **床面** 中央の広い範囲に硬化面を検出した。 **壁溝** なし **柱穴** 2か所の柱穴が確認された。残り2か所は調査区外にあると推測される。P1は直径24～25cmのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは65cmを測る。P2は長軸75cm・短軸70cmの不整楕円形を呈し、確認面からの深さは51cmを測る。 **貯蔵穴** 確認されなかった。 **炉** 中央やや西寄りに炉を確認した。検出状況は長軸95cm・短軸57cmの土坑状の窪みの中央に礫が設置するように見

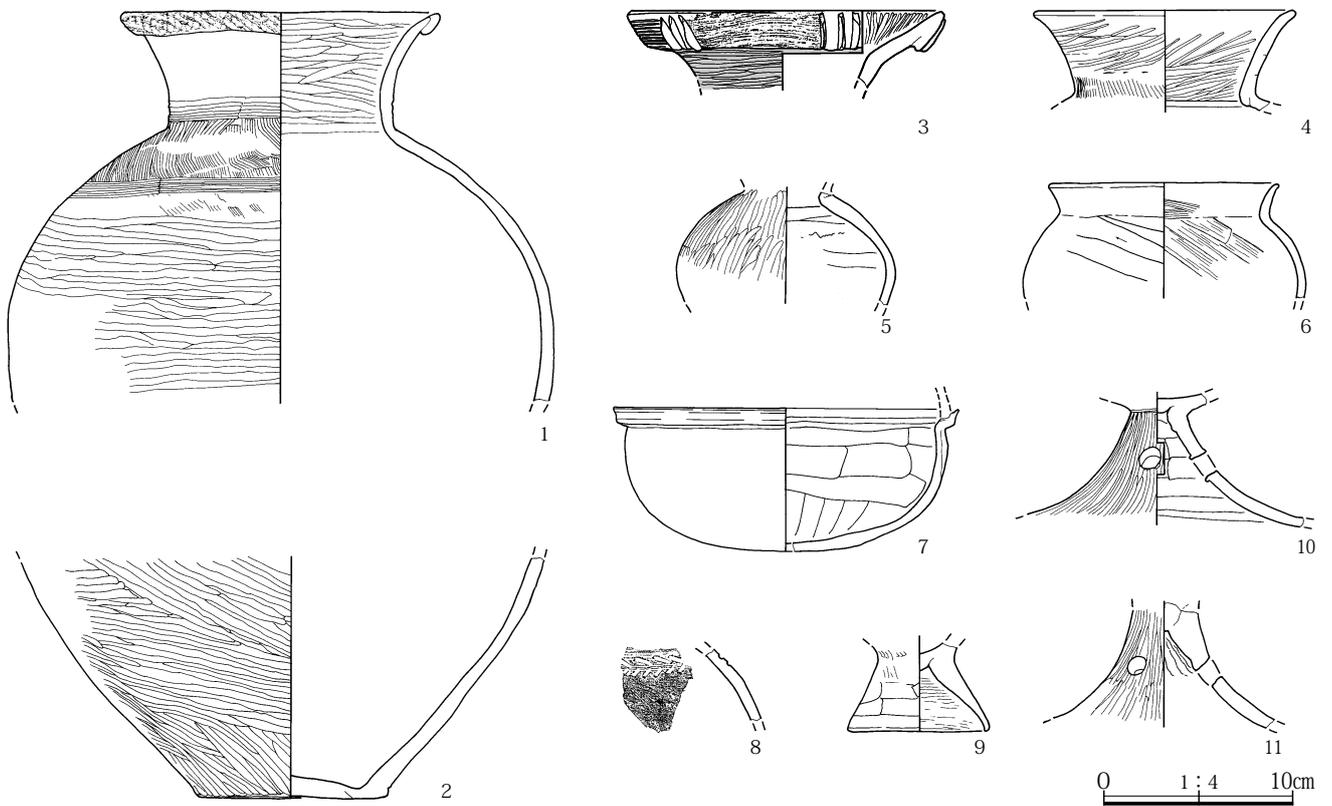
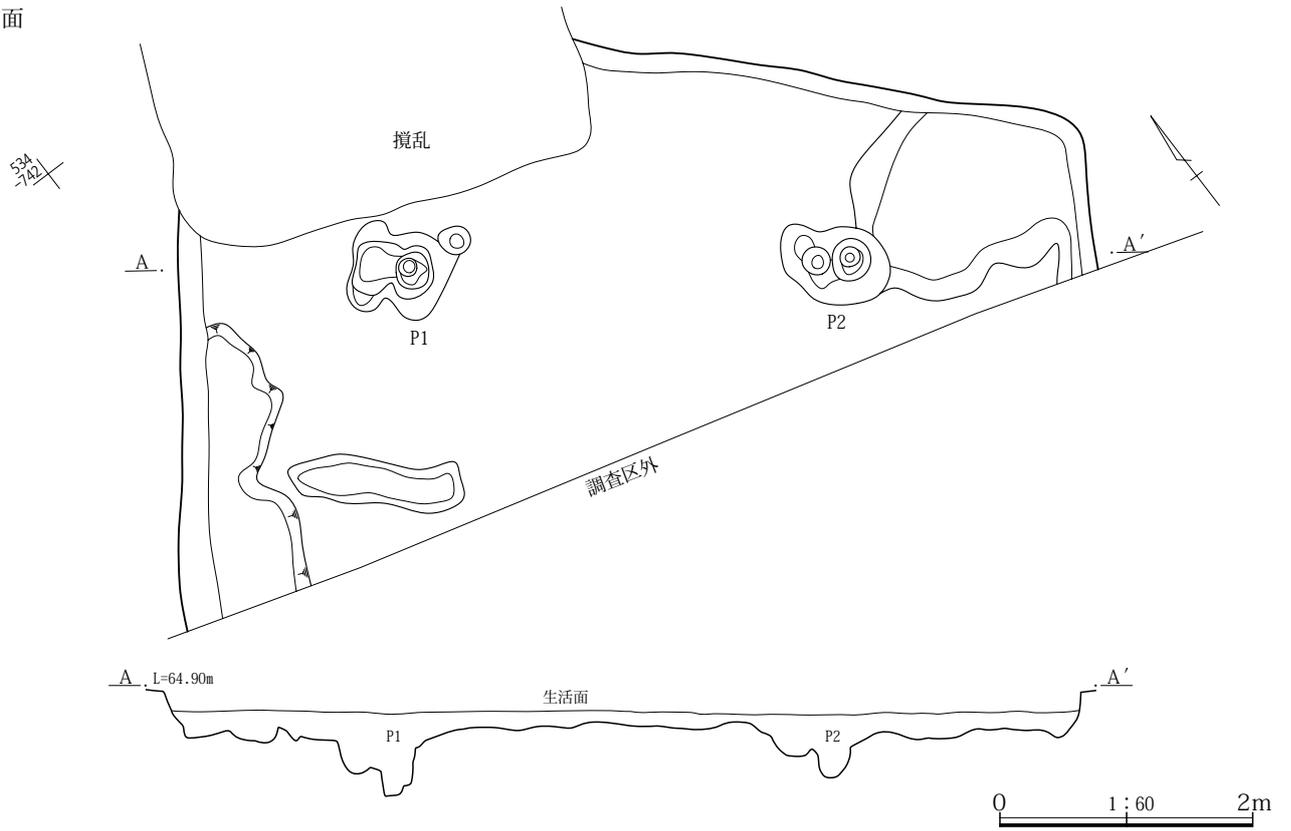
えるが、礫の西面だけに被熱痕が確認されていることから、炉の本体は、西半分の長軸47cm・短軸46cmの平面形状円形部であると推測される。炉床に明瞭な被熱痕はなが、覆土は炭化物が主体である。 **埋没状況** 自然埋没 **出土遺物** 本遺構から出土した遺物のうち、器形を復元できる11点を掲載した。掲載以外に、甕・壺類440g、高杯・器台60gが出土した。遺物は、床面出土が多数を占める。住居の床面から樽式土器壺(1・2)・弥生土器壺(3)・土師器壺(4)・甕(6)・手焙形土器(7)・高杯(10)、覆土から土師器埴・東海系壺・土師器台付甕・高杯が出土した。遺構に伴う可能性の高い床面出土の土器は、古墳時代前期・第Ⅲ古～中期に比定される(観察表129頁)。 **所見** 床面からの出土遺物が、古墳時代前期・第Ⅲ古～中期と幅広い時期が混在している。遺構中央の床面付近からの出土であり、床面からの出土ではあるが、廃絶時に混入した可能性もある。



- | | |
|----------------------------|--|
| 1 暗褐色土 As-Cと直径1～10mmの砂粒含む。 | 9 暗褐色土 7層と同じ。 |
| 2 褐色土 1層と同じ。 | 10 黒色土 4層と同じ。 |
| 3 黒褐色土 1層と同じ。 | 11 黒褐色土 貼床。As-Cと直径1～10mmの砂粒含む。地山のブロック多量。 |
| 4 暗褐色土 しまり弱い。介在物は1層と同じ。 | |
| 5 黒褐色土 しまりあり。介在物は1層と同じ。 | 掘方 |
| 6 黒色土 1層と同じ。 | 11 黒褐色土 貼床。As-Cと直径1～10mmの砂粒含む。地山のブロック多量。 |
| 7 黒褐色土 しまり強い。介在物は1層と同じ。 | |
| 8 暗褐色土 しまりあり。介在物は1層と同じ。 | |

第51図 C区2号住居(1)

掘方面



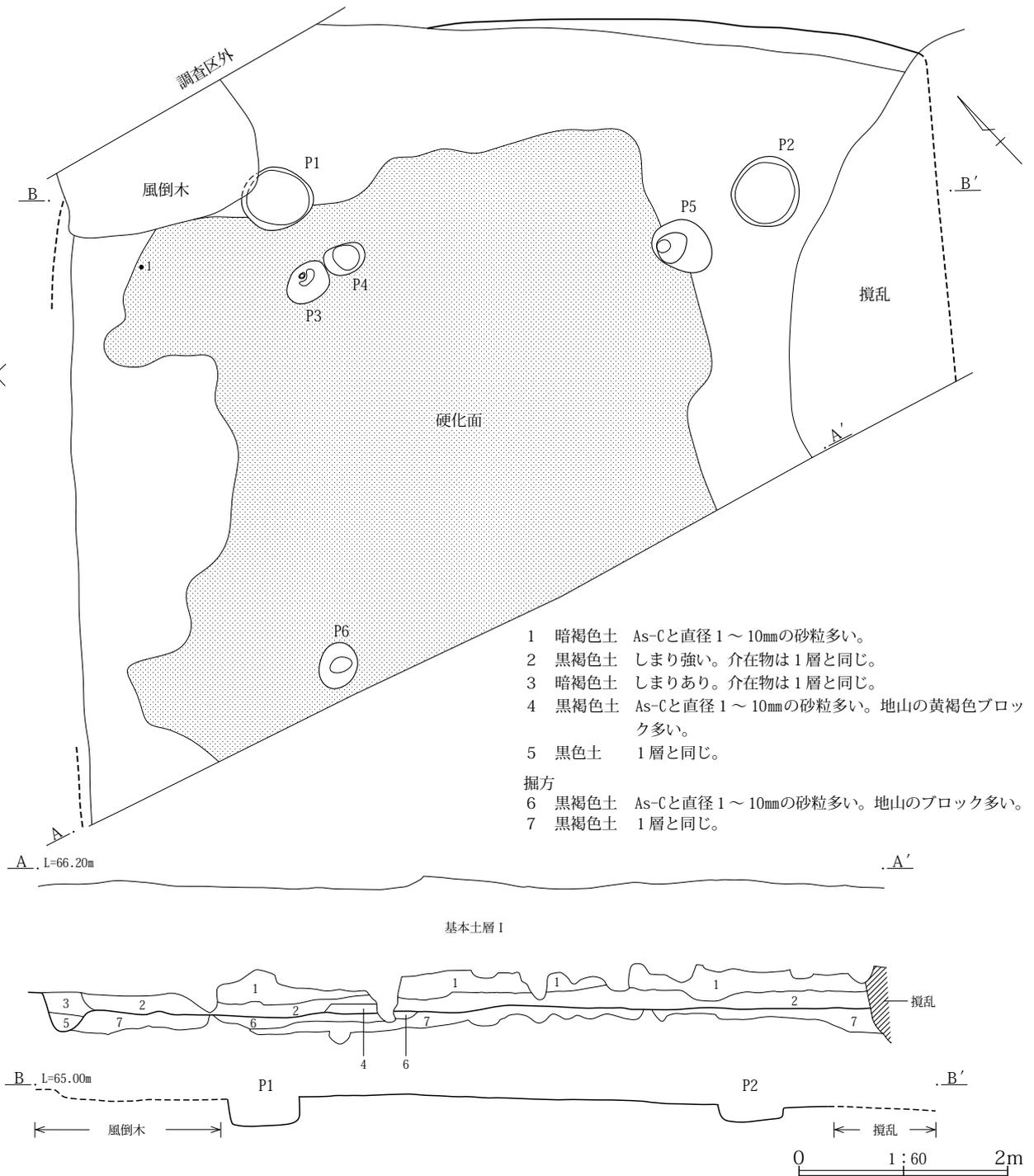
第52図 C区2号住居(2)と出土遺物

C区3a号住居(第53～55図、PL.11・12・27)

検出状況 調査区の中央やや南に遺構の中心があり、住居の南から南東角部は調査区外にある。攪乱により住居東、風倒木により住居北西隅が破壊されている。 **位置** X=532-733 **形状** 方形あるいは長方形を呈すると考えられる。主軸は南北軸より54° 東に傾く。 **壁高** 40cm

覆土 黒色～暗褐色土層が主体であり、全ての土層にAs-C軽石を含む。 **床面** 掘方面から最大厚約22cmの埋め土を施して平坦な面を造る。掘方面は、凹凸があり、土坑状の窪みが点在する。住居中央に硬化面が検出された。 **壁溝** なし **柱穴** 床面で6基のピットを検出した。このうち主柱穴は、掘方面まで深く掘削されたP3

床面

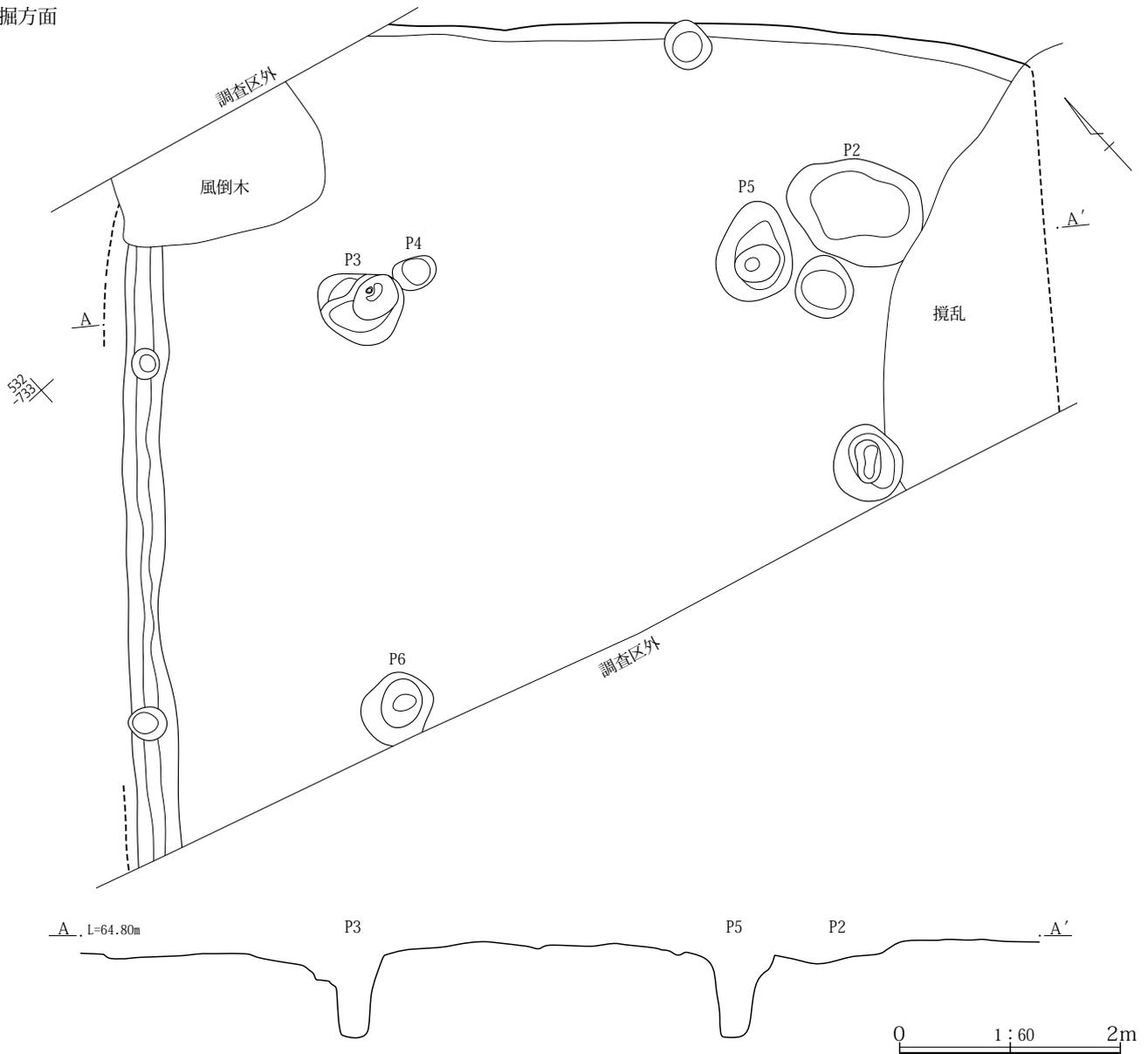


第53図 C区3a号住居(1)

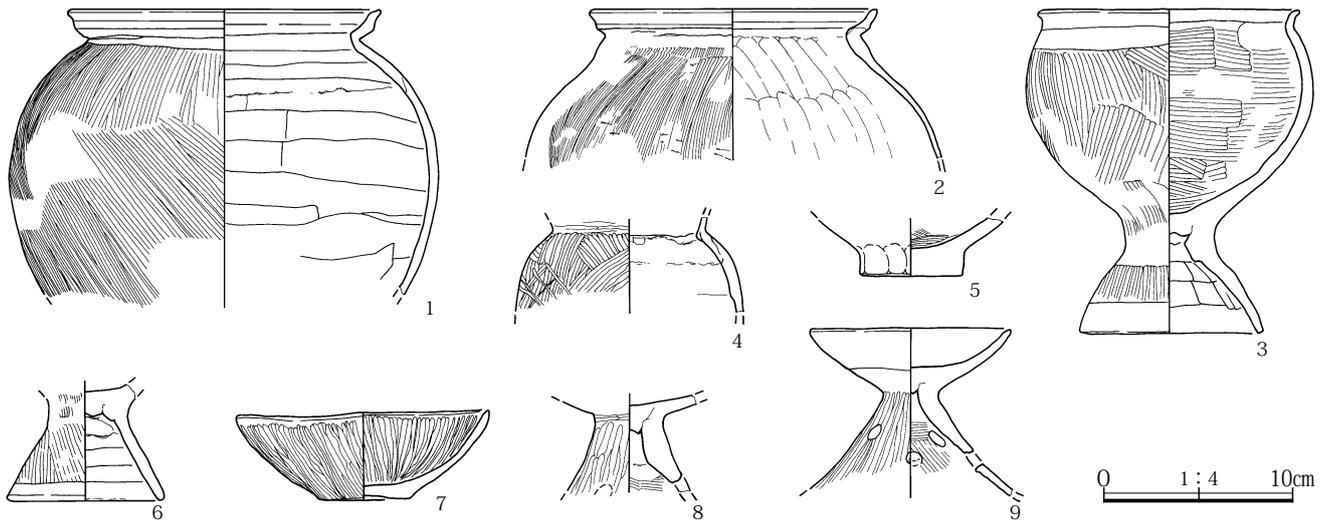
・P5・P6の3基であると考えられる。残り1か所は調査区外にあると推定される。P4はP3の補助的な柱穴である可能性が高い。P1・P2は床面を掘り込んでいるものの、掘削深度が浅く、支柱穴であった可能性は低い。P1は直径57～60cmのほぼ円形を呈し、床面からの深さは29cmを測る。P2は直径65～70cmのほぼ円形を呈し、床面からの深さは18cmを測る。P3は長軸38cm・短軸28cmの楕円形を呈し、床面からの深さは95cmを測る。P4は長軸40cm・短軸26cmの楕円形を呈し、床面からの深さは62cmを測る。P5は長軸57cm・短軸45cmの楕円形を呈し、床面からの深さは96cmを測る。

P6は長軸42cm・短軸35cmの楕円形を呈し、床面からの深さは93cmを測る。貯蔵穴 不明 炉 不明 埋没状況 自然埋没 出土遺物 本遺構から出土した遺物のうち、器形を復元できる9点を掲載した。掲載以外に、土師器甕・壺類300g、高杯・器台・鉢類50gがある。住居の床面から土師器台付甕（1）が出土した。その他の土師器台付甕・壺・椀・高杯・器台は、覆土からの出土である。床面から出土した土師器台付甕（1）は、壁面に近い床面からの出土である（観察表129・130頁）。
所見 覆土からの出土遺物が多いが、床面、覆土それぞれの遺物は古墳時代前期・第Ⅲ新时期である。

掘方面



第54図 C区3a号住居（2）



第55図 C区3a号住居出土遺物

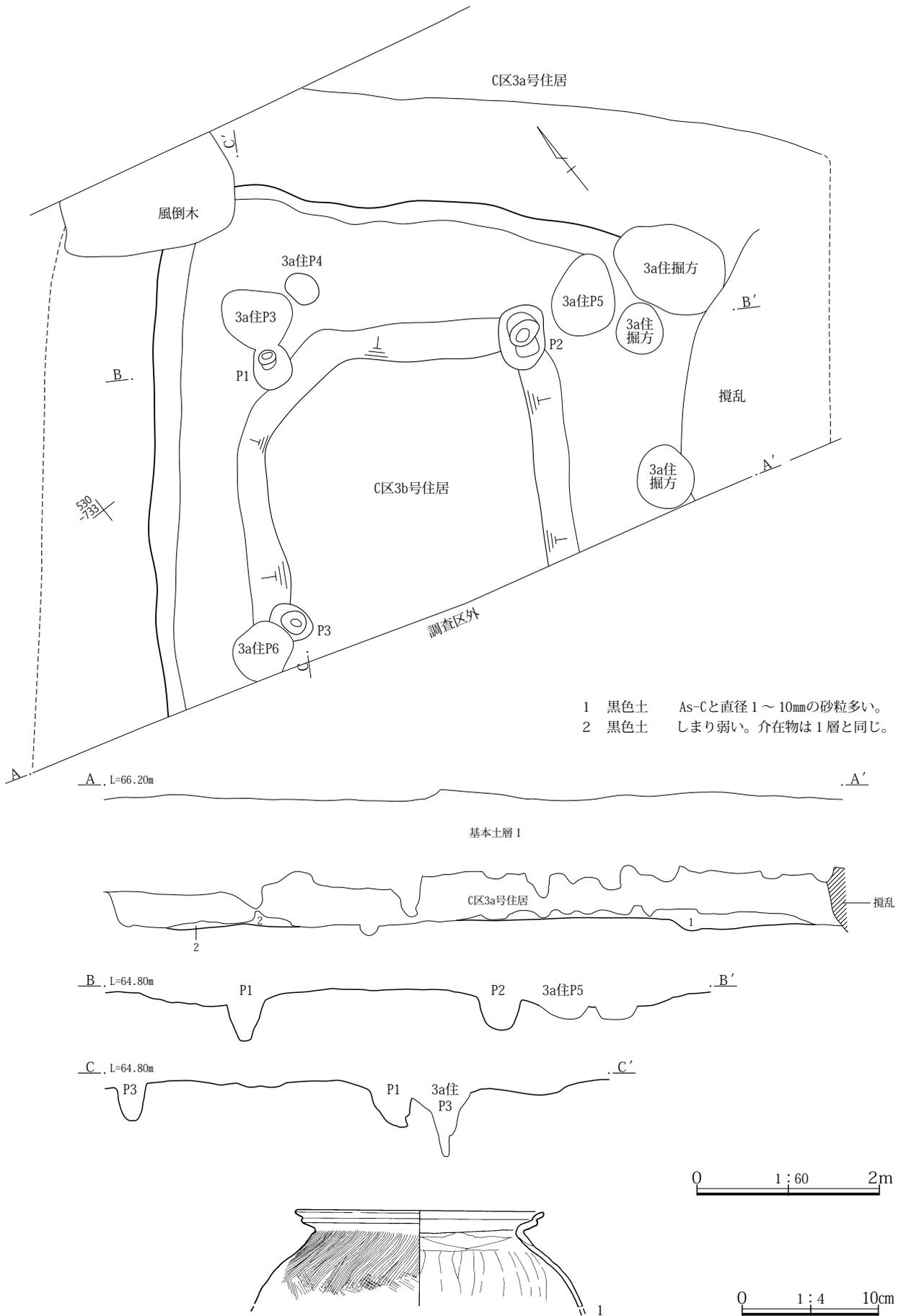
C区3b号住居(第56図、PL.27)

検出状況 本遺構は、3a号住居下面で、掘方面のみが検出された。3a号住居によって床面が破壊された遺構であるとの調査所見であるが、本遺跡には掘方面で中央部が壁面に平行して方形に堀窪められる住居も存在することから（B区市3a号住居）、3a号住居の掘方面の可能性もある。その場合、検出された3基の柱穴は上屋の建て替えの痕跡かもしれない。**位置** X=532-733 **形状** 方形あるいは長方形を呈すると考えられる。主軸はC区3b号住居と同じく、南北軸より54°東に傾く。**柱穴** 3基の柱穴を検出した。P1は長軸51cm・短軸42cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは45cmを測る。P2は長軸71cm・短軸52cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは38cmを測る。P3は長軸48cm・短軸35cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは42cmを測る。**出土遺物** 覆土から土師器台付甕1点が出土した。掲載以外に出土遺物はない（観察表130頁）。**所見** 出土遺物は3a号住居から出土した土器と同時期と考えても矛盾がなく、本遺構は3a号住居の掘方面の可能性もある。

C区4号住居(第57・58図、PL.12・27)

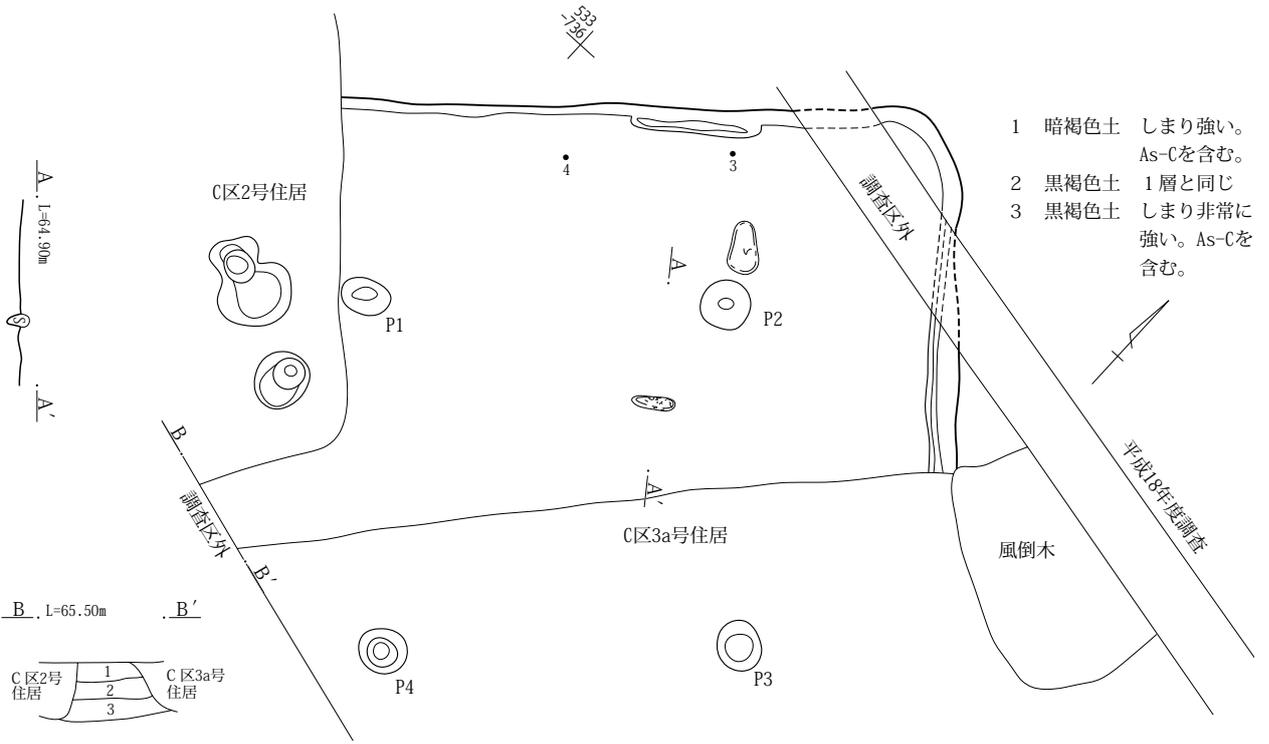
検出状況 本住居は、調査区北寄りで検出された。本遺構の北隅は、平成18年度に99号土坑として調査されている。本遺構はC区2号住居（古墳時代前期・Ⅲ古～中期）・3a号住居（Ⅲ新期）と重複しており、本遺構が最も前出である。**位置** X=533-736 **形状** 長軸4.80m・短軸3.15mが残存する。方形あるいは長方形を呈すると

考えられる。主軸は南北軸より42°西に傾く。**壁高** 44cm **床面** 掘方面から最大厚約18cmの埋め土を施して平坦な面を造る。掘方面は凹凸があり、土坑状の窪みが点在する。**壁溝** 北東壁と北西壁の一部で壁溝を確認した。幅8～12cm、深さ5～12cmを測る。**柱穴** 柱穴を4か所確認した。P1は長軸41cm・短軸28cmの楕円形を呈し、床面からの深さは45cmを測る。P2は直径35cmのほぼ円形を呈し、床面からの深さは47cmを測る。P3は長軸40cm・短軸32cmの楕円形を呈し、床面からの深さは51cmを測る。P4は長軸41cm・短軸35cmの楕円形を呈し、床面からの深さは60cmを測る。**貯蔵穴** 不明 **炉** 平面プランは確認できなかったが、P2の南にわずかな窪みと床面に埋め込まれた扁平な棒状の礫を検出した。明確な被熱痕は検出されなかったが、礫の北西側の窪みが炉の可能性はある。**埋没状況** 自然埋没 **出土遺物** 本遺構から出土した遺物のうち、器形を復元できる6点を掲載した。掲載以外に土師器甕・壺類40g、高杯・器台・鉢類が40gある。住居の床面から土師器壺(3)・高杯か器台(4)、覆土から高杯、掘方覆土から砥石が出土した。床面から出土した壺(3)・高杯か器台(4)は、壁面に近い床面からの出土である。これらは古墳時代前期・第Ⅲ新期に比定される（観察表130頁）。**所見** 本遺構の床面からの出土遺物(3・4)は、古墳時代前期・第Ⅲ新期に比定される。本遺構は古墳時代前期・Ⅲ古～中期の遺物を床面から出土したC区2号住居と、Ⅲ新期の遺物を床面から出土した3a号住居に切られており、出土遺物と遺構の切り合い関係に矛盾がある。

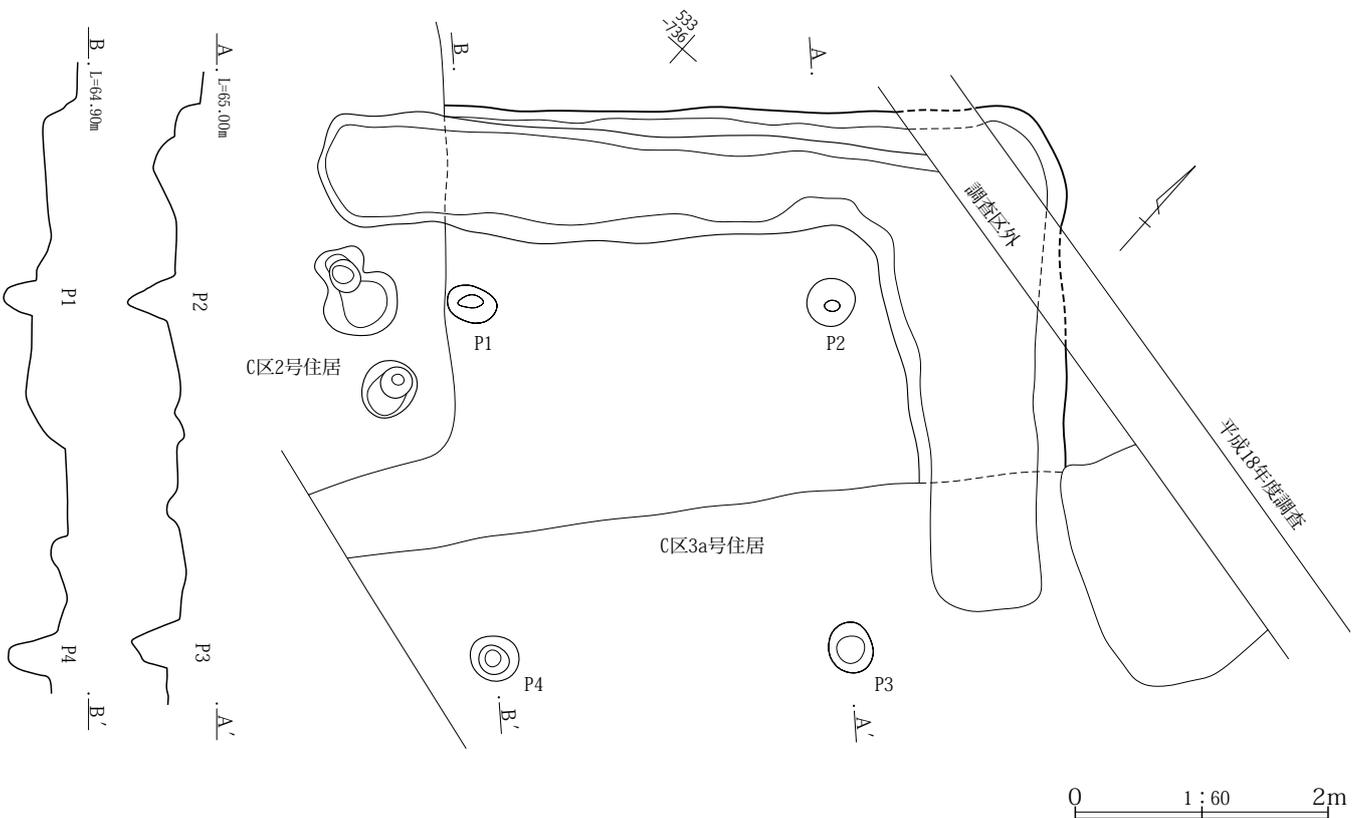


第56図 C区3b号住居と出土遺物

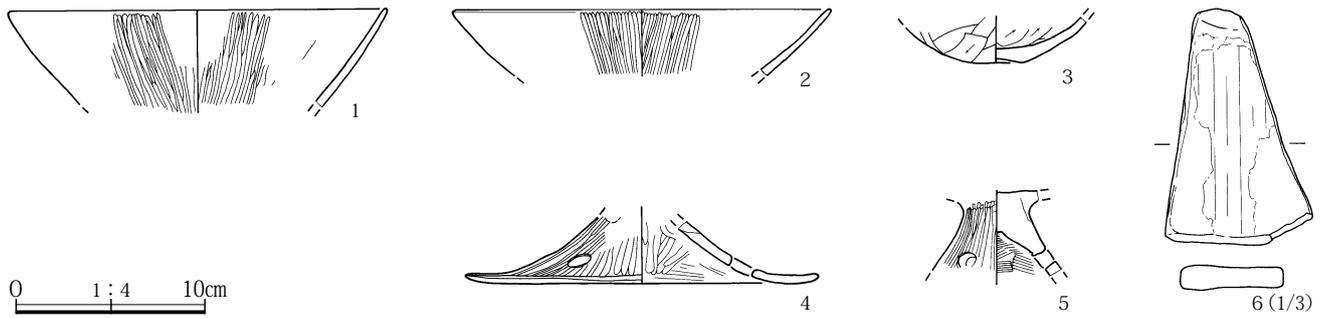
床面



掘方面



第57図 C区4号住居



第58図 C区4号住居出土遺物

C区5号住居(第59図、PL.12)

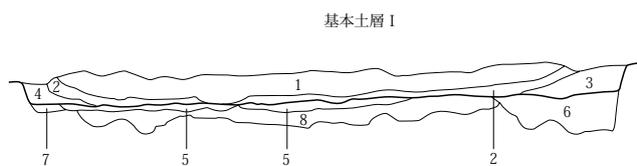
検出状況 本住居は、調査区南寄りで検出された。本遺構はC区1号溝(近世)と、攪乱により遺構の大部分が破壊されている。**位置** X=534-760 **形状** 長軸4.56m・短軸3.78mが残存する。方形あるいは長方形を呈すると考えられる。主軸は南北軸より20°西に傾く。**壁高** 20cm **覆土** 黒色～褐色土層が主体であり、As-C軽

石を含む。**床面** 掘方面から最大厚約22cmの埋め土を施して平坦な面を造る。中央南から西よりに明確な硬化面がある。掘方面は中央が大きく窪む形状で、土坑状の窪みが点在する。**壁溝** なし **柱穴** 不明 **貯蔵穴** 不明 **炉** 不明 **埋没状況** 自然埋没 **出土遺物** なし **所見** 出土遺物は出土しなかったが、覆土と住居の形状から、古墳時代前期の遺構であると推測した。

床面



A, L=65.90m A'



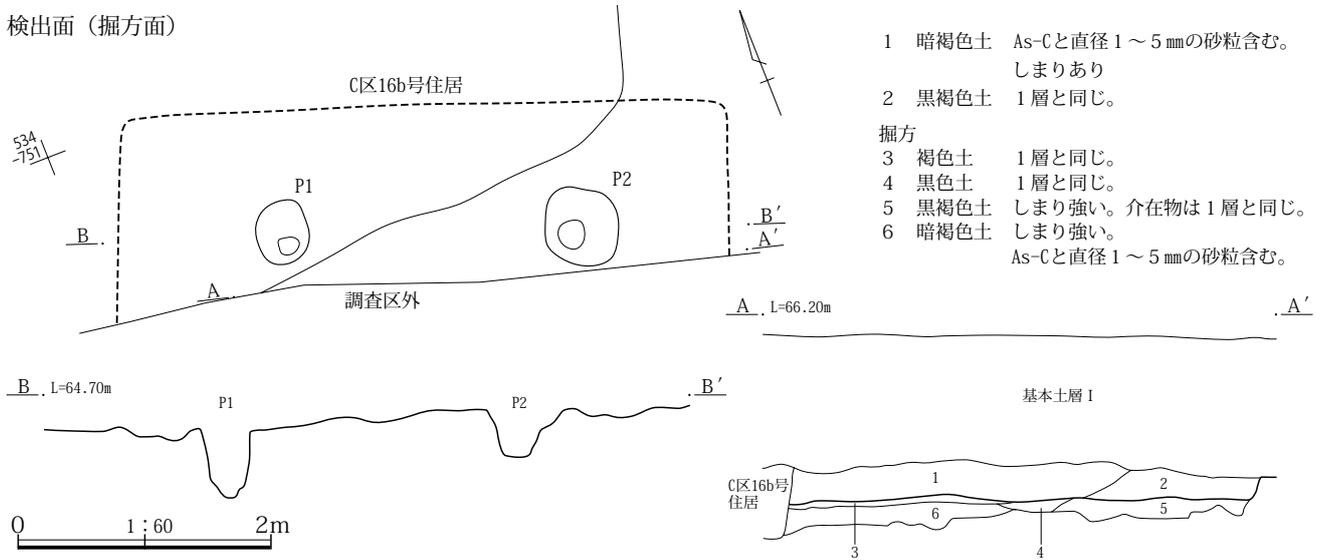
- | | | |
|-----------|---------|------------------------------|
| 1 | 暗褐色～褐色土 | As-Cと直径1～5mmの砂粒含む。 |
| 2 | 黒褐色土 | 1層と同じ。 |
| 3 | 暗褐色土 | 1層と同じ。 |
| 4 | 黒色土 | 1層と同じ。 |
| 5 | 黒褐色土 | As-Cと直径1～5mmの砂粒含む。地山のブロック含む。 |
| 掘方 | | |
| 6 | 黒色土 | 5層と同じ。 |
| 7 | 黒褐色土 | しまりあり。介在物は1層と同じ。 |
| 8 | 黒褐色土 | しまり強い。介在物は1層と同じ。 |

第59図 C区5号住居

C区7号住居(第60図)

検出状況 本住居は、遺構確認面が掘方面より下位であることから、柱穴のみが検出された。調査区壁面の土層断面から、遺構の範囲を推定した。遺構の南半部は調査区外である。遺構は市16b号住居（古墳時代前期・Ⅲ古～中期）に切られている。**位置** X=534-751 **形状** 方形または長方形か。**壁高** 28cm **覆土** 黒褐色～褐色土層が主体であり、As-C軽石を含む。**床面** 掘方面から最大厚約25cmの埋め土を施して平坦な面を造る。

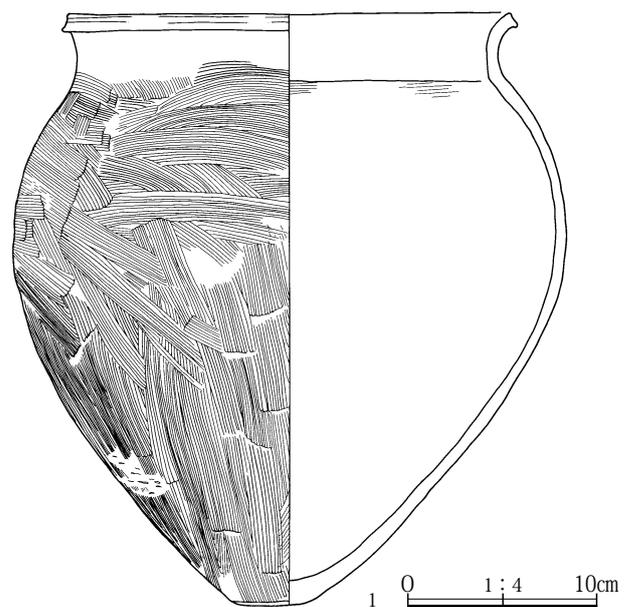
壁溝 不明 **柱穴** 2か所の柱穴が確認された。P1は長軸51cm・短軸44cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは51cmを測る。P2は長軸65cm・短軸58cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは34cmを測る。**貯蔵穴** 不明 **炉** 不明 **埋没状況** 自然埋没 **出土遺物** なし **所見** 出土遺物はなかったが、本遺構は市16b号住居（古墳時代前期・Ⅲ古～中期）に切られていることから、それ以前に構築された古墳時代前期の住居であると考えられる。



第60図 C区7号住居

C区8号住居(第61・62図、PL.27)

検出状況 本住居は、市16b号住居の床面下位で検出した。床面は市16b号住居に破壊され、掘方面のみの調査となった（第70図参照）。**位置** X=638-751 **形状** 短軸4.18mの長方形を呈する。主軸は南北軸より42°東に傾く。**柱穴** 3基の柱穴を検出した。P1は長軸45cm・短軸40cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは45cmを測る。P2は直径45cmのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは40cmを測る。P3は長軸51cm・短軸42cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは39cmを測る。**炉** 不明 **出土遺物** 本遺構から出土した遺物のうち、器形を復元できる1点の土師器甕を掲載した。掲載以外に、出土遺物はない。掲載した土師器甕（1）は覆土からの出土である。遺物は特徴的で、北陸系「千種甕」の様相を示し、

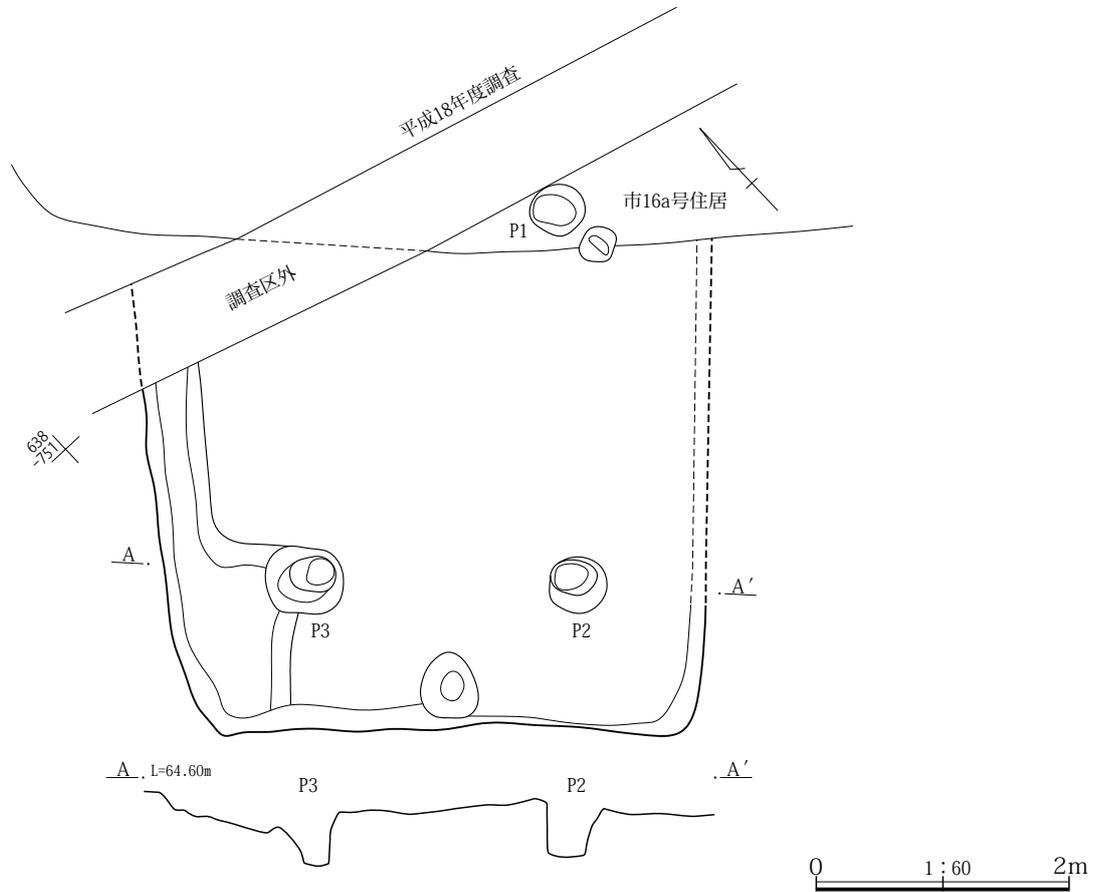


第61図 C区8号住居出土遺物

第I～III中期に比定される(観察表130頁)。所見覆土からではあるが、I～III中期の様相を示す北陸系の甕が出土した。本遺構は、古墳時代前期・III古～中期の

様相を示す土器が出土している市16b号住居より前出で、遺構は、それ以前の第I～II期の可能性が高いと推測される。

床面



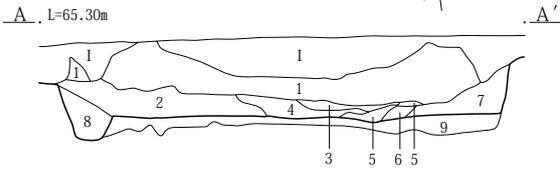
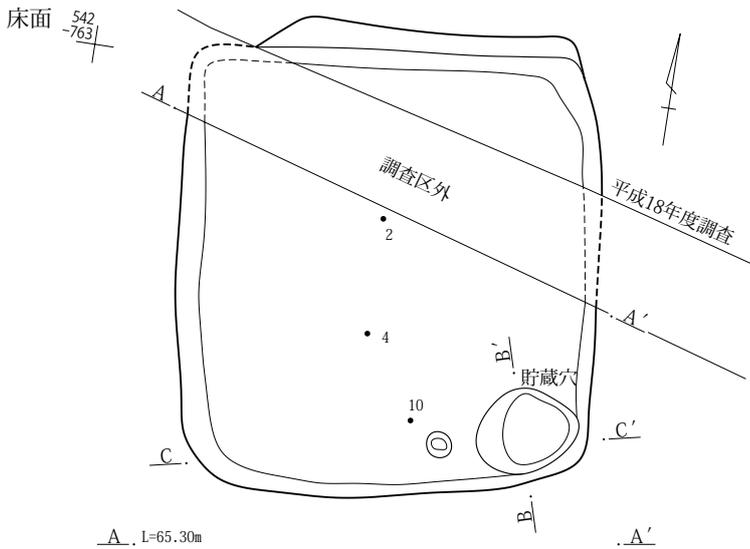
第62図 C区8号住居

C区市13a号住居(第63図、PL.12・13・28)

検出状況 本住居は、調査区北寄りで検出された。遺構の北東部は平成18年度にすでに調査されている。**位置** X=542-763 **形状** 長軸3.30m、短軸3.04mの長方形を呈する。主軸は南北軸より8°東に傾く。**面積** 9.83㎡ **壁高** 35cm **覆土** 黒褐色～褐色土層が主体である。**床面** 掘方面から最大厚約18cmの埋め土を施して平坦な面を造る。掘方面は中央が高く、隅が土坑状に窪む形状である。**壁溝** 壁溝の可能性のある窪みが西壁際にあることが、土層断面と掘方面で確認された。**柱穴** 不明 **貯蔵穴** 住居東南隅に貯蔵穴を検出した。平面形状は楕円形。規模は長軸83cm・短軸65cm・床面からの深さ35cmを測る。覆土にはAs-C軽石と炭化物を多く含む。**炉** 不明 **埋没状況** 覆土下層に地山ブロックを含む土

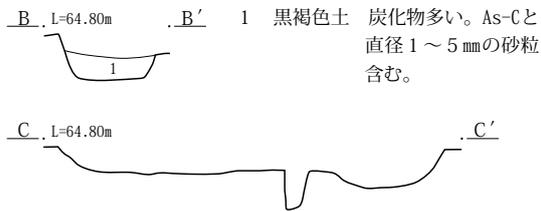
層があり、人為的に埋められている可能性がある。**出土遺物** 本遺構から出土した遺物のうち、器形を復元できる12点を掲載した。掲載以外に、土師器甕・壺類160g、高杯・器台・鉢類10gがある。住居の床面から土師器高杯(2)・碗(4)・器台(10)、覆土から土師器壺・甕・高杯・台付甕・器台・手づくね土器(12)が出土した。器台(10)は、壁面に近い床面からの出土である。器台(10)は古墳時代前期、第I～II期に比定される。覆土から出土した土師器甕(3)、土師器甕(6・8)、土師器台付甕(7)は、古墳時代前期・第III期の様相を示す(観察表130・131頁)。**所見** 本遺構に伴う可能性が高い床面出土の土器は、古墳時代前期、第I～II期に比定される。覆土からは古墳時代前期・第III期の遺物が出土した。

第6章 古墳時代の遺構と遺物



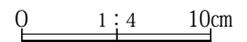
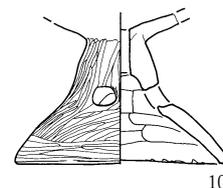
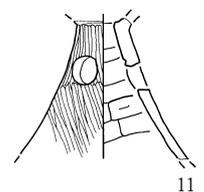
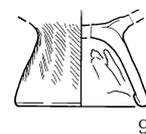
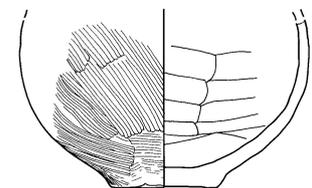
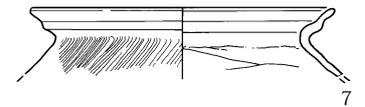
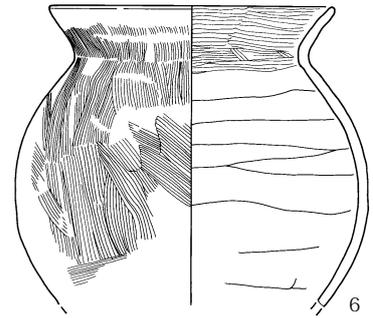
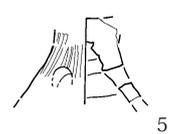
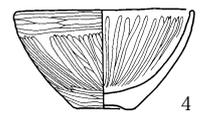
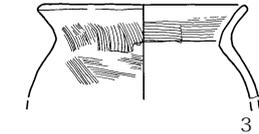
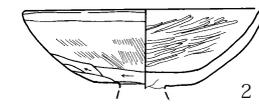
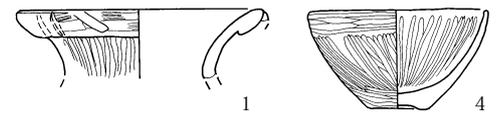
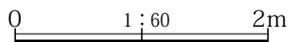
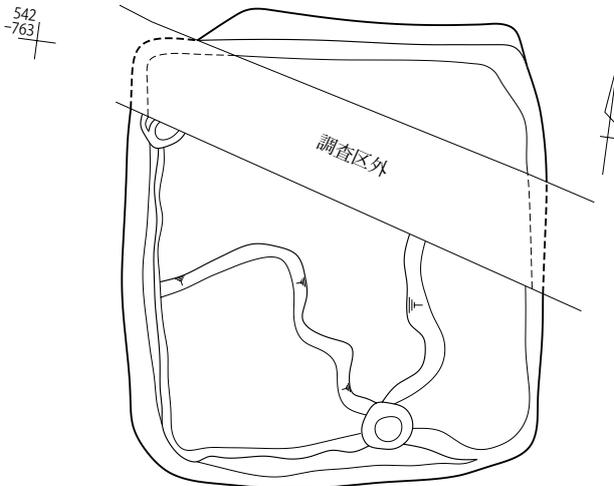
- 1 暗褐色土 しまる。
- 2 暗褐色土 強くしまる。
- 3 褐色土 炭化物含む。
- 4 黒褐色土 地山のブロック含む。
- 5 黒色土 3層と同じ。
- 6 黒褐色土 地山の砂やや多い。
- 7 黒褐色土 強くしまる。
- 8 暗褐色土 地山のブロック含む。
- 9 褐色土 8層と同じ。

貯蔵穴



- 1 黒褐色土 炭化物多い。As-Cと直径1~5mmの砂粒含む。

掘方面

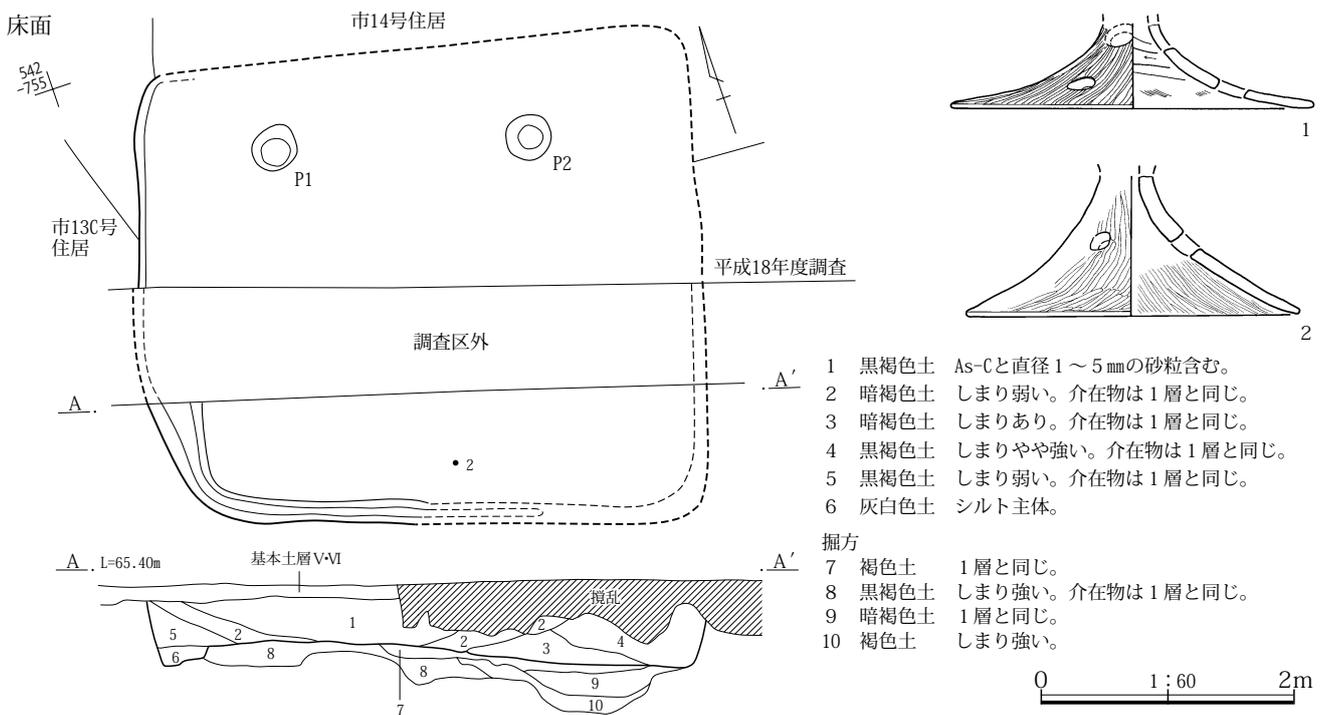


第63図 C区市13a号住居と出土遺物

C区市13b号住居(第64図、PL.13・28)

検出状況 本住居は、調査区北寄りで検出された。遺構の北部は平成18年度にすでに調査されている。東壁は市16b号住居の竪穴住居を、西壁は市13c号住居の南東隅部を破壊している。また、本住居の北半分は市14号住居に破壊されている。本調査では南壁・西壁の一部が検出された。**位置** X=542-755 **形状** 長軸4.41m、短軸3.74mの長方形を呈する。主軸は南北軸より17° 東に傾く。**面積** 15.05㎡ **壁高** 35cm **覆土** 黒褐色～褐色土層が主体であり、As-C軽石を含む。壁際の壁溝跡に灰白色のシルト層を含む。**床面** 掘方面から厚さ約9～25cmの埋め土を施して平坦な面を造る。掘方面の北東隅が土坑状に窪む形状である。**壁溝** 南壁・西壁際で壁溝を

検出した。規模は幅18～22cm・床面からの深さ16cmを測る。**柱穴** 平成18年度調査で2基の柱穴を検出した。本調査では柱穴は検出されなかった。平面形状から推測すると、調査区外にある可能性が高い。**貯蔵穴** 不明 **埋没状況** 自然埋没 **出土遺物** 本遺構から出土した遺物のうち、器形を復元できる2点を掲載した。掲載以外に、土師器甕・壺類50gがある。住居の床面から土師器器台(2)、覆土から土師器高杯が出土した。土師器器台(2)は、壁面に近い床面からの出土である(観察表131頁)。**所見** 床面から出土した遺物は、古墳時代前期・Ⅲ古～中期に比定される。本調査ではわずかな遺物量であるが、平成18年度調査の出土遺物も概期の様相を示し、床面から出土した土師器器台(2)は遺構の時期決定の有力な資料の一つである。



第64図 C区市13b号住居と出土遺物

C区市16a号住居(第65・66図、PL.13)

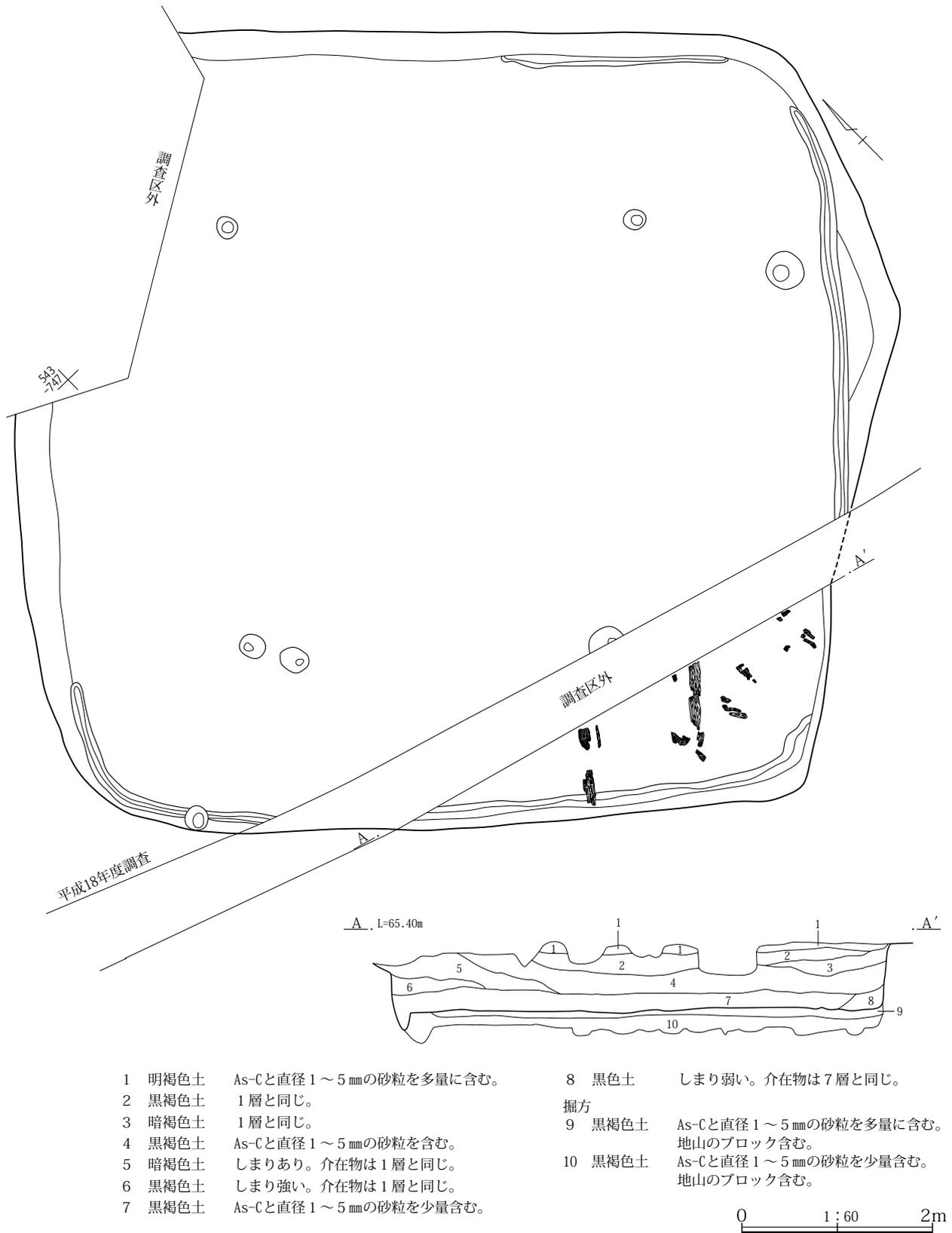
検出状況 本住居は、調査区北壁際で検出された。遺構の大部分は平成18年度にすでに調査され、報告されている。ここでは主に本調査で検出された部分について記載する。**位置** X=543-747 **形状** 長軸8.00m、短軸7.94mのほぼ正方形を呈する。主軸は南北軸より40° 東に傾く。

面積 33.97㎡ **壁高** 72cm **覆土** 黒褐色～明褐色土層が主体であり、すべての土層でAs-C軽石を含む。**床面** 掘方面から厚さ約15～25cmの埋め土を施して平坦な面を造る。**壁溝** 南壁で壁溝を検出した。規模は幅18～25cm・床面からの深さ20cmを測る。**柱穴** 平成18年度調査で4基の支柱穴を検出した。**貯蔵穴** 不明。

平成18年度調査で検出されなかったことから本調査により、検出されることが予想されたが、調査区内で貯蔵穴を確認することができなかった。 炉 不明 埋没状況

自然埋没。平成18年度調査で炭化材が多く検出され、住居廃絶後の上屋の消失が想定された。本調査においても覆土の最下層上面付近で炭化材が出土した。 出土遺物

床面

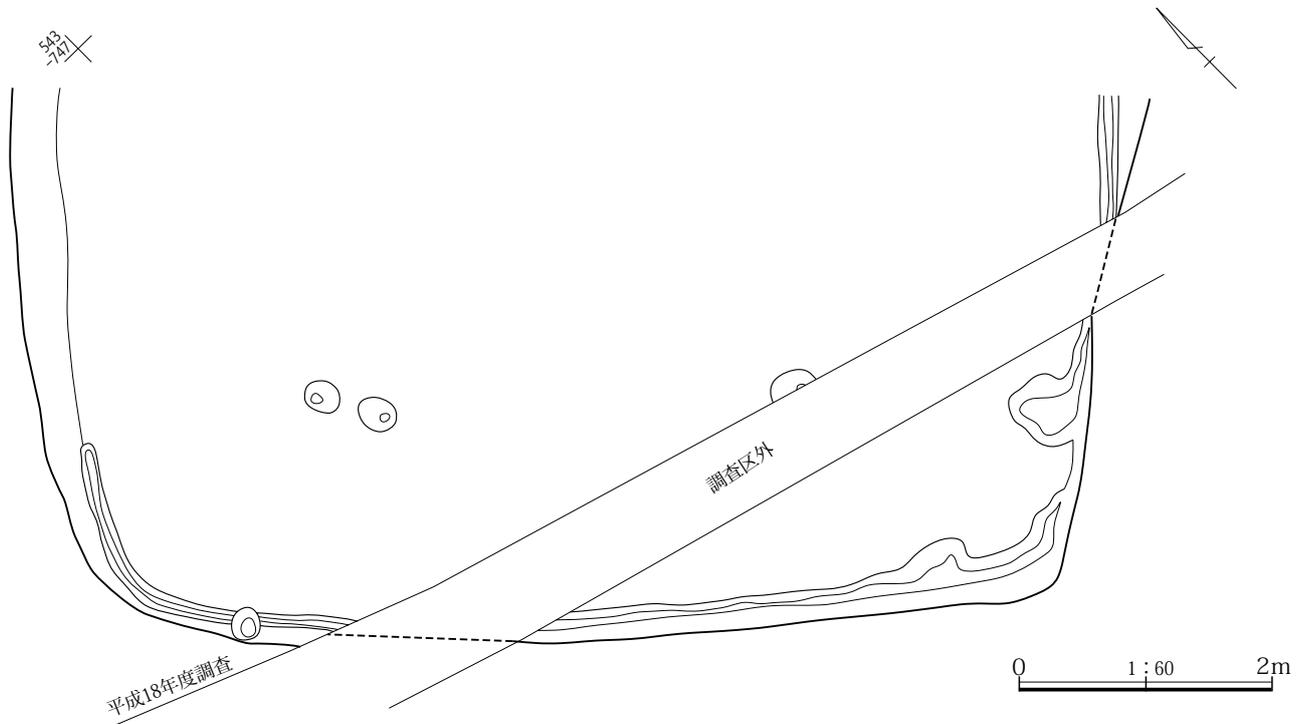


第65図 C区市16a号住居(1)

炭化材のみの出土で、土器・石器類は出土しなかった。
所見 調査面積が少ないこともあり、本調査では土器類は出土しなかったが、平成18年度調査で出土した土器は古墳時代前期・市Ⅱ期の様相を示す。また、平成18年度

調査において、自然科学分析を行った炭化材7点は、コナラ属クヌギ節6点、コナラ属コナラ節1点に同定されている。

掘方面

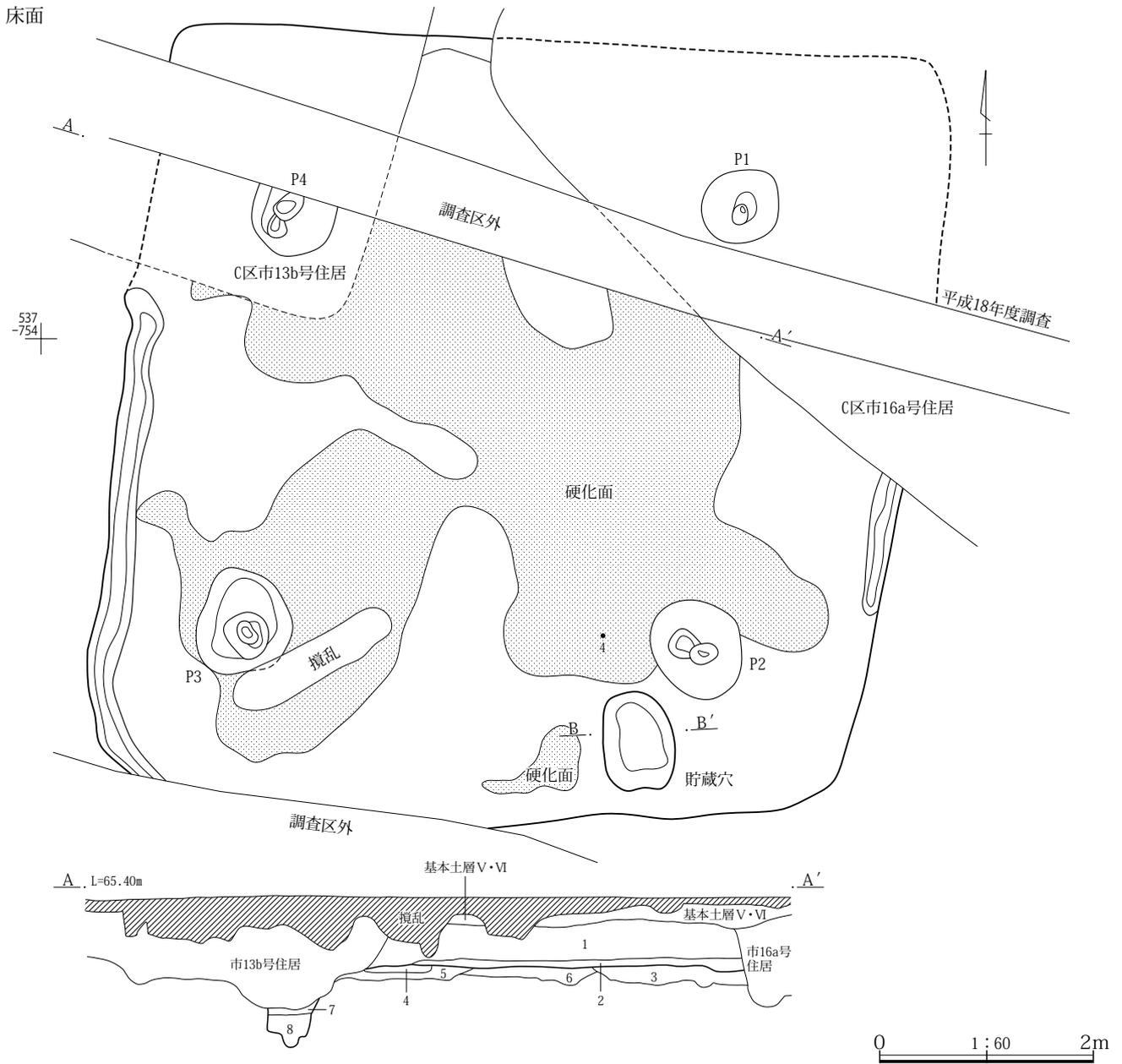


第66図 C区市16a号住居(2)

C区市16b号住居(第67・68図、PL.14・28)

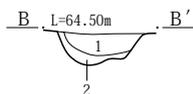
検出状況 本住居は、調査区やや北に中心があり、北壁周辺部は平成18年度の調査である。住居北東部は市16a号住居、北西隅は市13b号住居に破壊されている。また、床面下位からは8号住居を検出した。
位置 X=537-754 **形状** 長軸7.30m、短軸7.24mのほぼ正方形を呈する。主軸は南北軸より5°東に傾く。
面積 45.33㎡ **壁高** 41cm **覆土** 黒褐色～暗褐色土層が主体であり、すべての土層でAs-C軽石を含む。
床面 床面中央に明瞭な硬化面を検出した。掘方面から厚さ約9～21cmの埋め土を施して平坦な面を造る。掘方面で、東西壁に平行するように南壁から伸びる2条の溝状の窪みを検出した。
壁溝 東西の壁で壁溝を検出した。西壁際の壁溝の規模は、幅19～32cm・床面からの深さ22cmを測る。東壁際の壁溝の規模は、幅15～23cm・床面からの深さ

18cmを測る。
柱穴 平成18年度調査で柱穴1基(P1)を検出した。本調査では、3基の柱穴を検出し、P2～4と付した。P2は長軸96cm・短軸81cmの楕円形を呈し、床面からの深さは61cmを測る。P3は長軸98cm・短軸90cmの楕円形を呈し、床面からの深さは59cmを測る。P4は長軸105cmのほぼ円形を呈し、床面からの深さは70cmを測る。P4の覆土上層にシルト主体の灰白色土を検出した。
炉 不明 **埋没状況** 自然埋没。
出土遺物 本遺構から出土した遺物のうち、器形を復元できる5点を掲載した。掲載以外に、土師器甕・壺類460gがある。住居の床面から土師器器台(4)、覆土から土師器壺・鉢・台付甕・高杯が出土した(観察表131頁)。
所見 床面から出土した土師器器台(4)は、出土土器は古墳時代前期・Ⅲ古～中期に比定される。覆土から出土した遺物は小片が多いが、同時期の様相を示す。

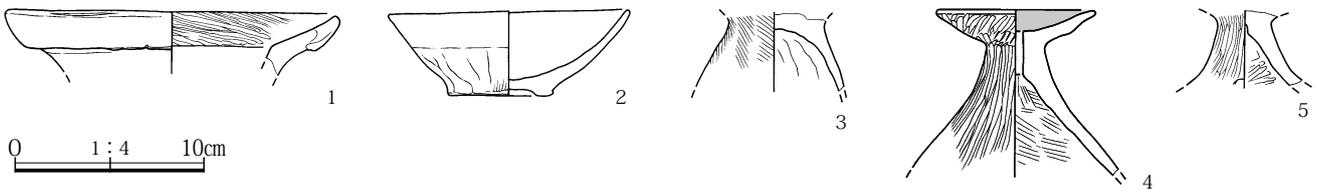


- | | | | |
|--------------|---------------------|--------|------------------|
| 1 暗褐色土 | As-Cと直径1～5mmの砂粒を含む。 | 5 褐色土 | 1層と同じ。 |
| 2 黒褐色土 | 1層と同じ。 | 6 暗褐色土 | 3層と同じ。 |
| 掘方 | | 7 灰白色土 | シルト主体。 |
| 3 黒褐色土 | しまり強い。介在物は1層と同じ。 | 8 黒色土 | しまり弱い。介在物は1層と同じ。 |
| 4 明褐色灰色～灰白色土 | 1層と同じ。 | | |

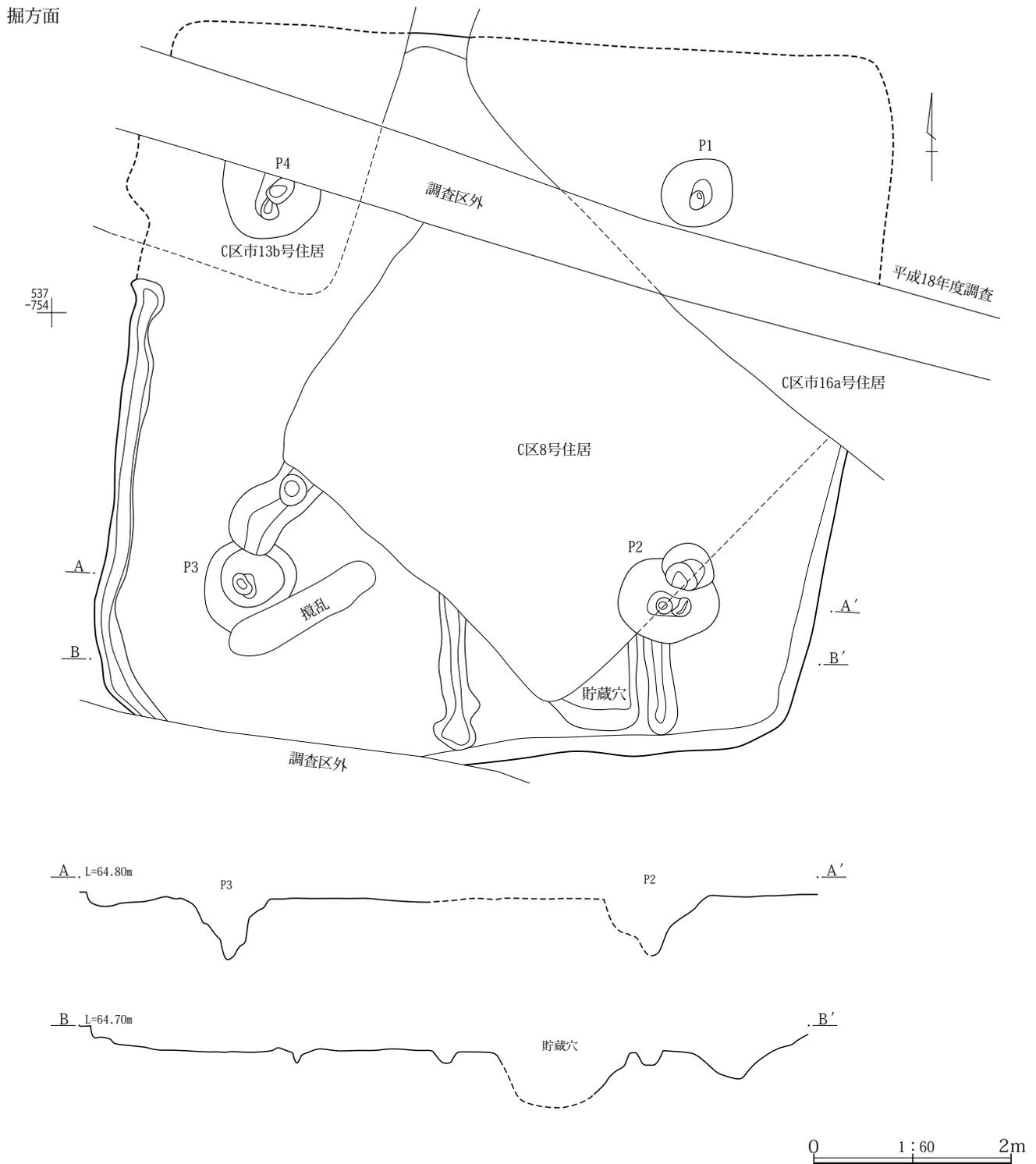
貯蔵穴



- | | |
|--------|---|
| 1 黒褐色土 | 直径1～3mm As-Cと直径5mm以下の砂粒含む。 |
| 2 暗褐色土 | 直径1～3mm As-Cと直径5mm以下の砂粒含む。黄褐色地山のブロック含む。 |



第67図 C区市16b号住居(1)と出土遺物

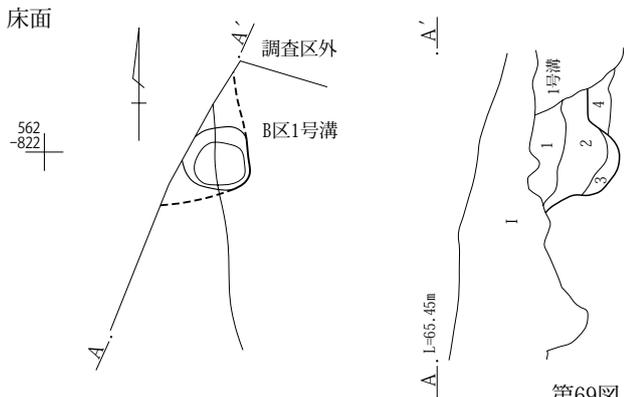


第68図 C区市16b号住居(2)

B区1号住居(第69図、PL.14)

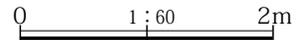
検出状況 本住居は、B区1号溝(近世)に大部分が切られ、南東の隅のみが検出された。土層断面1~3が住居覆土、4が貼床であるとの調査所見を得た。検出された住居隅には直径約50cm、深さ25程の平面形状不整円形

の土坑状の窪みがある。位置 X=563-821 形状 不明 炉 不明 貯蔵穴 不明。検出された土坑状の窪みが、貯蔵穴か。出土遺物 なし 所見 調査範囲が狭く、詳細不明。



第69図 B区1号住居

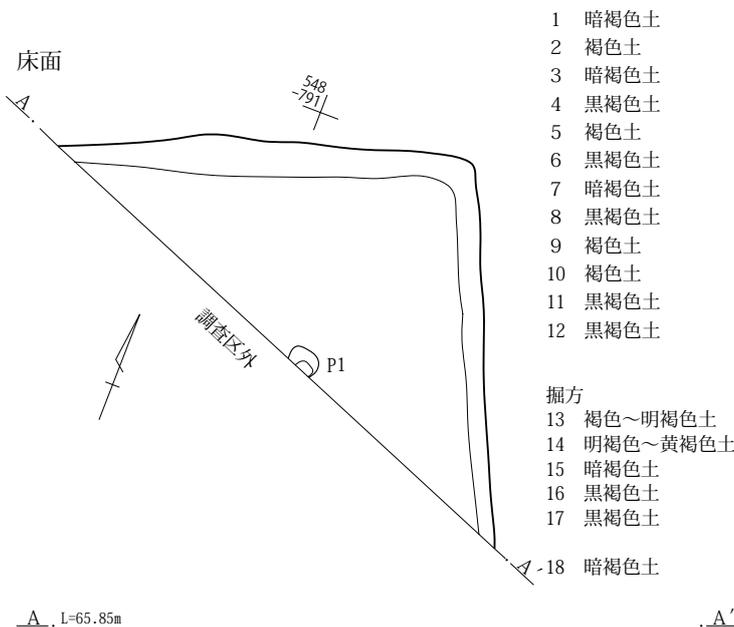
- | | |
|--------|--|
| 1 黒褐色土 | 直径1～3mm As-Cと直径10mm以下砂粒を多量に含む。 |
| 2 黒褐色土 | しまり強い。介在物は1層と同じ。 |
| 3 黒色土 | 直径1～3mm As-Cと直径10mm以下砂粒少量含む。 |
| 掘方 | |
| 4 暗褐色土 | 直径1～3mm As-Cと直径10mm以下砂粒を多量に含む。黄褐色地山の砂ブロック含む。 |



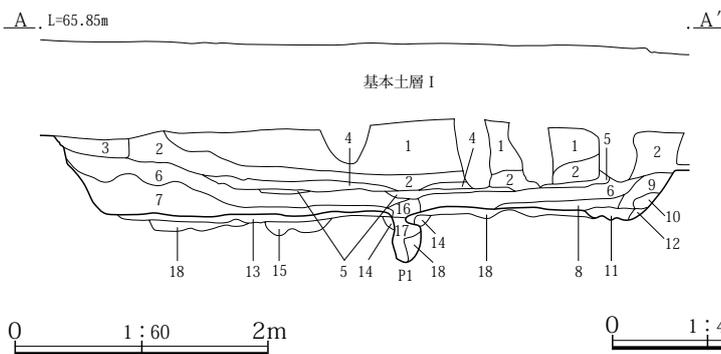
B区2号住居(第70・71図、PL.14・15・28)

検出状況 本住居は、調査区南よりで検出された。遺構の南西半分は調査区外である。
位置 X=548-791 **形状** 長方形または方形を呈する。長軸3.30m、短軸3.10mを測る。主軸は南北軸より24°西に傾く。
壁高 65cm
覆土 黒褐色～褐色土層が主体であり、すべての土層でAs-C軽石を含む。
床面 掘方面から厚さ約5～10cmの埋め土を施して平坦な面を造る。
柱穴 柱穴を1基

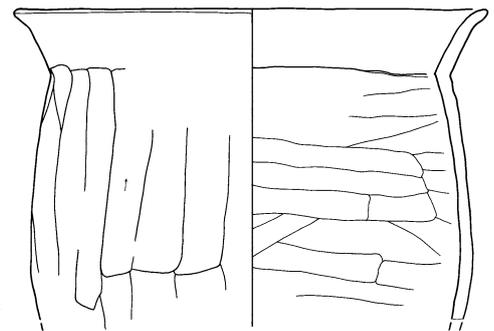
検出した。P1は長軸22cmのほぼ円形の形状を呈し、床面からの深さは52cmを測る。
貯蔵穴 不明。
埋没状況 自然埋没。
出土遺物 本遺構から出土した遺物のうち、器形を復元できる4点を掲載した。掲載以外に、土師器甕類100g、杯類50gがある。出土した土師器甕・台付甕・器台はすべて覆土からの出土である(観察表131頁)。
所見 床面からの遺物の出土はなく、覆土から出土した遺物は、古墳時代中期・Ⅳ期に比定される。

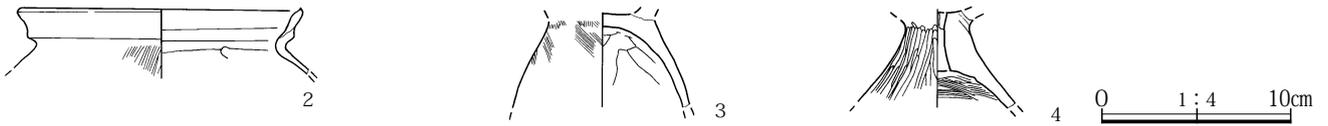


- | | |
|-------------|---|
| 1 暗褐色土 | しまりあり。直径3mm以下As-Cと直径10mm以下の砂粒含む。 |
| 2 褐色土 | 1層と同じ。 |
| 3 暗褐色土 | しまりやや弱い。介在物は1層と同じ。 |
| 4 黒褐色土 | 3層と同じ。 |
| 5 褐色土 | 締まり強い。介在物は1層と同じ。 |
| 6 黒褐色土 | 5層と同じ。 |
| 7 暗褐色土 | 5層と同じ。 |
| 8 黒褐色土 | 3層と同じ。 |
| 9 褐色土 | 直径3mm以下As-Cと直径10mm以下の砂粒を微量に含む。砂質。 |
| 10 褐色土 | 直径3mm以下As-Cと直径10mm以下の砂粒含む。地山ブロック含む。 |
| 11 黒褐色土 | 介在物は10層と同じ。 |
| 12 黒褐色土 | しまりあり。直径3mm以下As-Cと直径10mm以下の砂粒と地山ブロック含む。 |
| 掘方 | |
| 13 褐色～明褐色土 | 直径3mm以下As-Cと直径10mm以下の砂粒含む。地山のブロック含む。 |
| 14 明褐色～黄褐色土 | 地山のシルト質ブロック。 |
| 15 暗褐色土 | As-Cと砂粒含む。 |
| 16 黒褐色土 | 軟弱。直径3mm以下As-Cと直径5mm以下の砂粒を極微量含む。均質。 |
| 17 黒褐色土 | 軟弱。直径3mm以下As-Cと直径5mm以下の砂粒を極微量含む。斑状に地山のブロック。 |
| A-18 暗褐色土 | 17層と同じ。 |



第70図 B区2号住居と出土遺物(1)



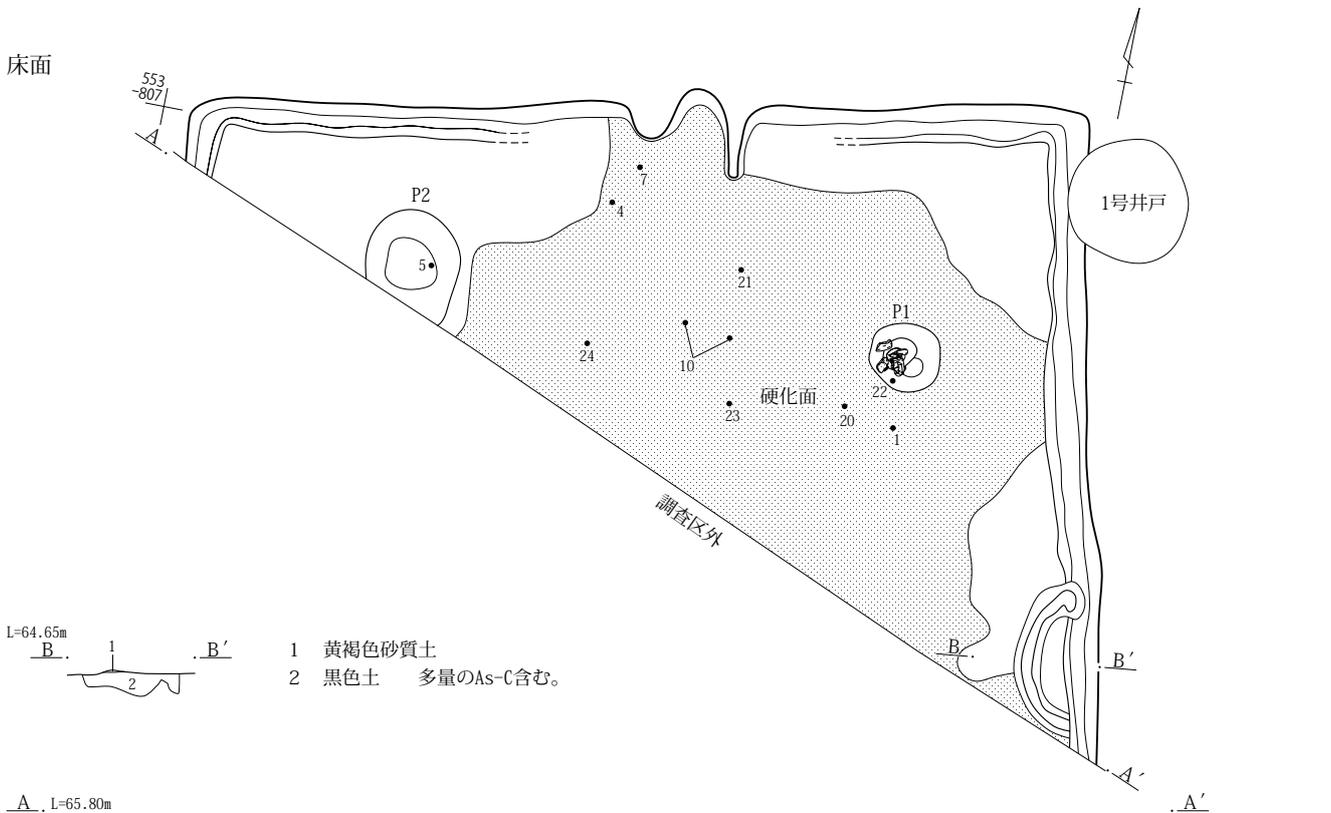


第71図 B区2号住居と出土遺物(2)

B区3号住居(第72～74図、PL.15・28)

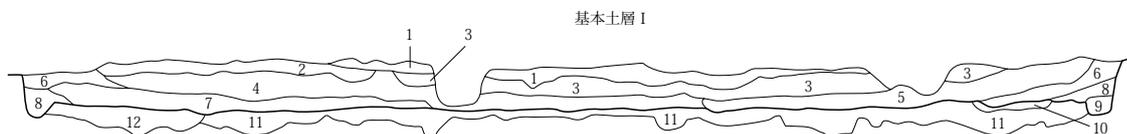
検出状況 本住居は、調査区の南よりで検出された。遺構の南西半分は調査区外である。
位置 X=553-807
形状 方形または長方形か。
壁高 35cm
覆土 黒褐色～明褐色土層が主体であり、As-C軽石を含む。

床面 掘方面から最大厚約22cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面に硬化面を広く検出した。また、東壁際に馬蹄形の高まりを検出した。
壁溝 幅22～38cm・床面か



L=64.65m
 B B' 1 黄褐色砂質土
 2 黒色土 多量のAs-C含む。

A A' L=65.80m



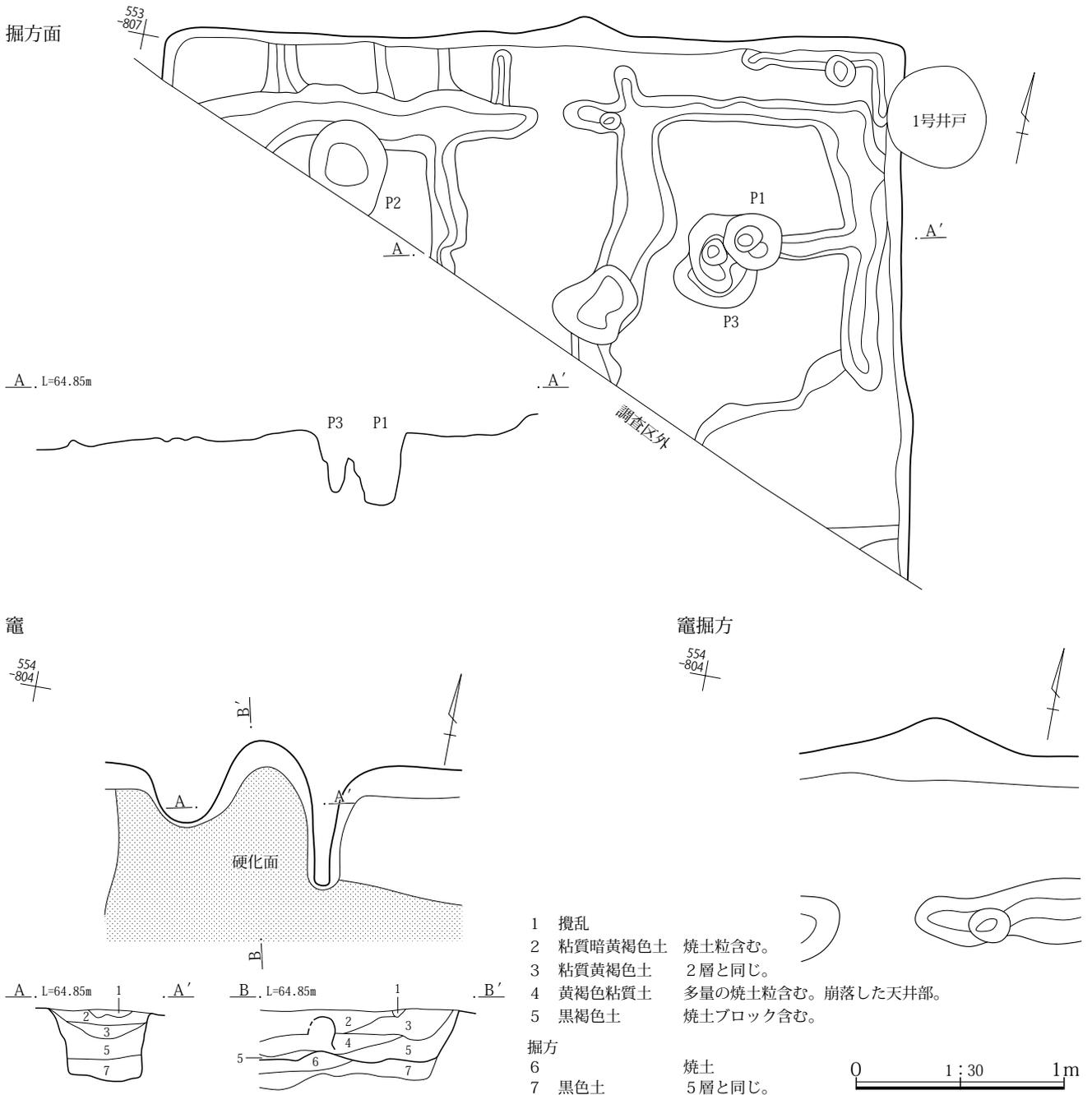
- | | | | |
|------------|--|---------|--|
| 1 暗褐色土 | 直径3mm以下As-Cと直径10mm以下の砂粒が多量。 | 8 黒褐色土 | 直径3mm以下As-Cと直径10mm以下の砂粒微量含む。 |
| 2 褐色土 | 1層と同じ。 | 9 黒褐色土 | 直径3mm以下As-Cと直径10mm以下の砂粒微量含む。砂質でさらさら。 |
| 3 明褐色～灰褐色土 | 粘性あり。直径3mm以下As-Cと直径10mm以下の粒を多量に含む。粘性の土が主体。 | 掘方 | |
| 4 黒褐色土 | しまり弱い。介在物は1層と同じ。 | 10 明褐色土 | 粘性あり。直径3mm以下As-Cと直径10mm以下の砂粒を多量に含む。地山のシルト質土と黒土の混合。 |
| 5 黒褐色土 | しまりあり。介在物は1層と同じ。 | 11 暗褐色土 | しまり非常に強い。介在物は1層と同じ。 |
| 6 褐色土 | 直径3mm以下As-Cと直径10mm以下の砂粒を多量に含む。ブロック含む。 | 12 黒褐色土 | 11層と同じ。 |
| 7 暗褐色土 | しまり強い。直径3mm以下As-Cと直径10mm以下の砂粒を多量に含む。 | | |

0 1:60 2m

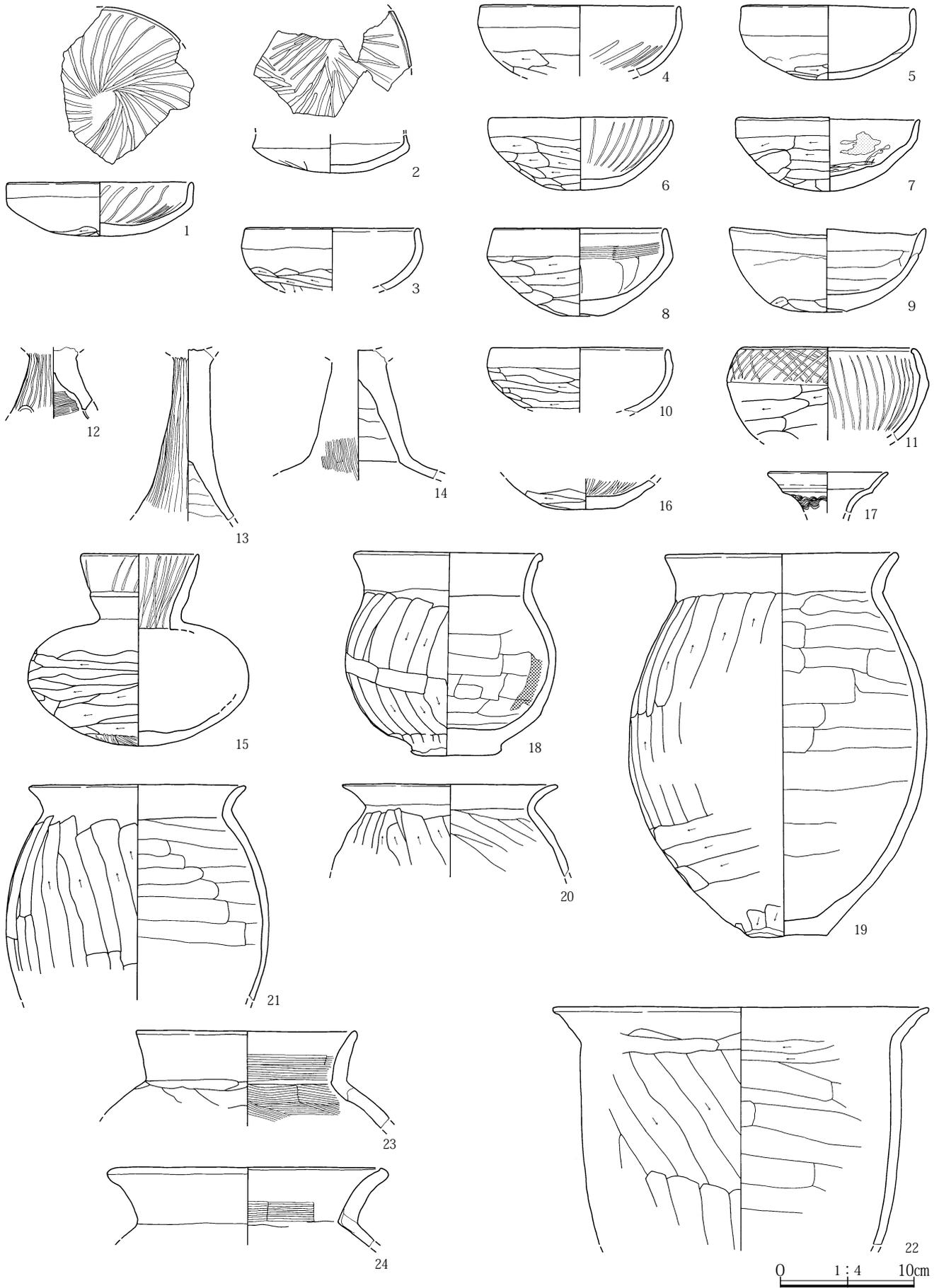
第72図 B区3号住居(1)

らの深さ約20cmで竈両脇まではほぼ全周する。柱穴 3か所の柱穴が確認された。検出面の支柱穴はP1、P2である。P3は硬化面の下層で検出されており、検出された貼床以前の柱穴であると推測される。P1は長軸60～61cmのほぼ円形を呈し、床面からの深さは75cmを測る。P2は長軸102cm・短軸71cmの楕円形を呈し、床面からの深さは79cmを測る。P3は長軸78cm・短軸52cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは62cmを測る。貯蔵穴 不明 炉 不明 埋没状況 自然埋没。出土遺物 本遺構から出土した遺物のうち、器形を復元できる24点

を掲載した。掲載以外に、土師器甕類4,600g、杯類100gがある。住居の床面から土師器杯（1・4・5・7・10）・甕（20～24）、覆土から土師器杯・椀・高杯・埴・甕、須恵器甕が出土した。床面から出土した土師器杯（1・4・5・7・10）・甕（20～24）は、古墳時代中期V期に比定される（観察表131・132頁）。所見 馬蹄形の高まりは梯子の設置痕か。床面から出土した土器は古墳時代中期・V期の様相を示しており、遺構は概期に比定されよう。



第73図 B区3号住居（2）



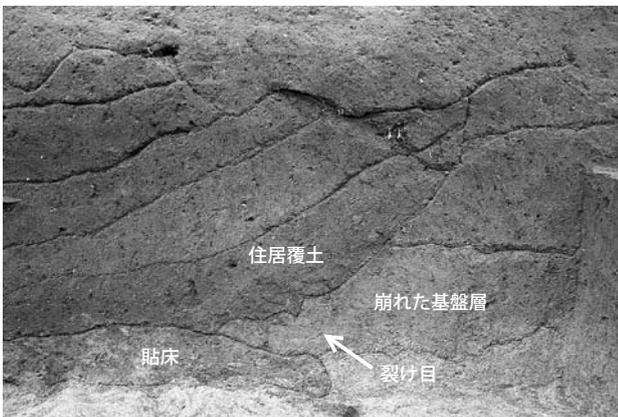
第74图 B区3号住居出土遺物

B区4号住居(第75・76図、PL.15・16・29)

検出状況 本住居は、調査区南寄りで検出された。南隅は調査区外である。北隅の一部はB区市2号住居(古墳時代中期・V期)に破壊されている。本遺構を切るように地震による地割れ痕(第75図 地震痕1・2)が検出された。本住居廃絶後の地震の痕跡である。また、土層断面A-A'には貼床と覆土の間に基本土層Ⅶが陥入している。これは、地震の揺れにより、しまりの弱い住居覆土がずれ、基本土層Ⅶが土圧によって、貼床と覆土の間に入り込んだ様子であると考えられる。住居の床面は歪んで地盤沈下しており、これも地震の影響であると推測される。



住居床面の傾斜



地震による土層の嵌入

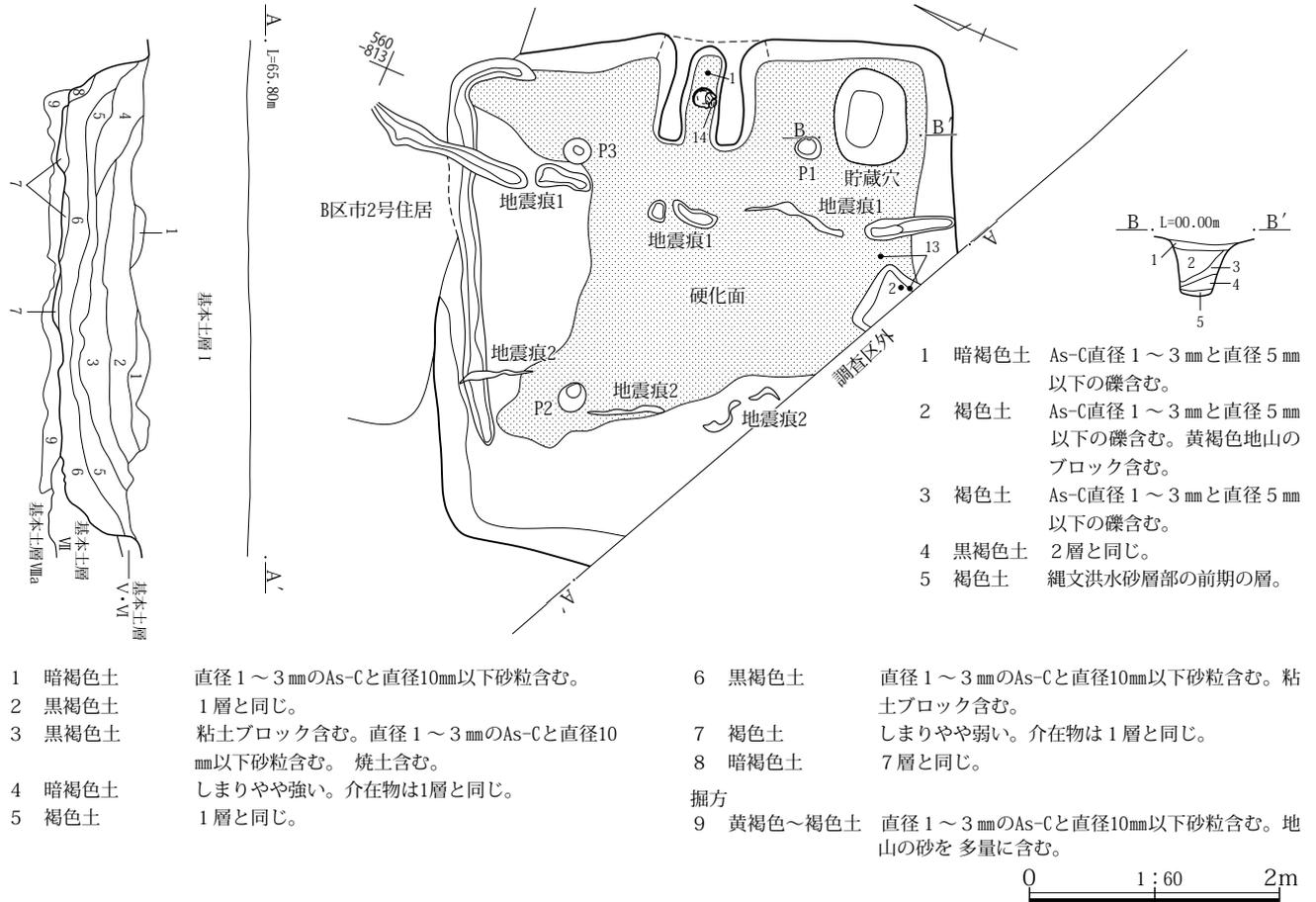
地震の痕跡 住居東壁から1.5mの位置に、東壁に平行して北西-南東の方向に幅20cm、深さ10cmの地割れ(第75図床面 地震痕1)がある。これにほぼ平行する同様な細かい地割れを、住居の中央やや西にも確認した(第75図床面 地震痕2)。本来水平であるはずの床面が地震痕1を境に傾斜し、西壁際は東壁際より約25cm低い(上写真 住居床面の傾斜にある地盤沈下)。一方、地震痕

1より東側の床面は、東壁に沿った幅1.5mの範囲が水平を保つ。また、SPA-A'の土層断面において、貼床と住居覆土の間に基盤層の砂層が三角形に入り込んでいる(左下写真 地震による土層の嵌入)。一方、地震痕1より東側に位置する東壁部は、通常自然埋没状況を示す。**位置** X=560-813 **形状** 長軸3.85m・短軸3.50mを測る。ほぼ方形を呈する。主軸は南北軸より63°東に傾く。**壁高** 65cm **覆土** 黒褐色~褐灰色土層が主体であり、全ての土層にAs-C軽石を含む。**床面** 掘方面から約10cmの埋め土を施して平坦な面を造る。住居北東半分の竈前の床面は特に硬化していた。掘方面は細かい凹凸があるが、全体的に底面は水平である。**壁溝** なし **柱穴** 3基の柱穴を検出した。P1は長軸21cm・短軸16cmの楕円形を呈し、床面からの深さは42cmを測る。P2は長軸25cm・短軸21cmの楕円形を呈し、床面からの深さは43cmを測る。P3は直径20cmのほぼ円形を呈し、床面からの深さは44cmを測る。**貯蔵穴** 住居東隅で確認された。平面形状は隅丸方形を呈し、長軸76cm、短軸55cmを測る。床面からの深さは46cmを測る。底面は平底の形状である。**竈** 北東壁の中央で検出された。竈の袖部は壁面から内側に80~90cm伸びている。袖は明赤褐色~明褐灰色の粘質土により構築されており、焼土粒子を含んでいる。袖部は幅35cm・高さ30cmを測る。竈の残存状況は良好で、竈の覆土で検出した最上層(1層)は下面が焼けており、天井部が崩落した痕跡であることが確認された。天井部の下位の竈内からは土師器杯(1)・甕片(14)などが出土した。**埋没状況** 自然埋没 **出土遺物** 本遺構から出土した遺物のうち、器形を復元できる土器17点と砥石・紡錘車を掲載した。掲載以外に、土師器甕類1,050g、杯類50gがある。住居の床面から土師器杯(1・2・6)・壺(13)・甕(14)、覆土から土師器杯・椀・鉢・小型甕・甕が出土した。床面から出土した土師器杯(1・2・6)・壺(13)・甕(14)は、古墳時代中期・V期に比定される(観察表132・133頁)。**所見** 床面から出土した土器から、遺構は古墳時代中期・V期に比定される。確認した地割れ(地震痕1・2)は、いずれも地震による作用と考えられ、この住居が立地する台地の縁辺部が幅約30mにわたり、ほぼ等高線に沿うような形で低地側の南西方向に沈み込んでいる。この沈み込んだ範囲の東限が地震痕1で、このため住居の

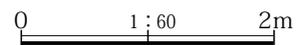
床面は地震痕1を境に西側が沈下し、それより東側の床面は水平を保ったものと推定した。また、SPA-A'の現象は、地震痕1より西側が沈下する過程で、貼床と住居覆土の間が垂直方向に裂け、この裂け目に基盤層の砂層が崩れ落ちたものと推定した。この垂直に裂けた長さは、床面が沈下した25cmと一致する。また、貼床と住居覆土

の間で裂けたのは、硬く踏み締められた貼床上面と自然埋没した住居覆土の間が、不整合で裂け易かったことに起因すると考えられる。赤城山南麓では広範囲に弘仁9年(818)の地震に伴う痕跡が確認されている。この地震痕がそれに起因するか否かについては、より広範囲な調査データとの照合が必要である。

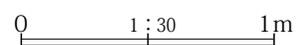
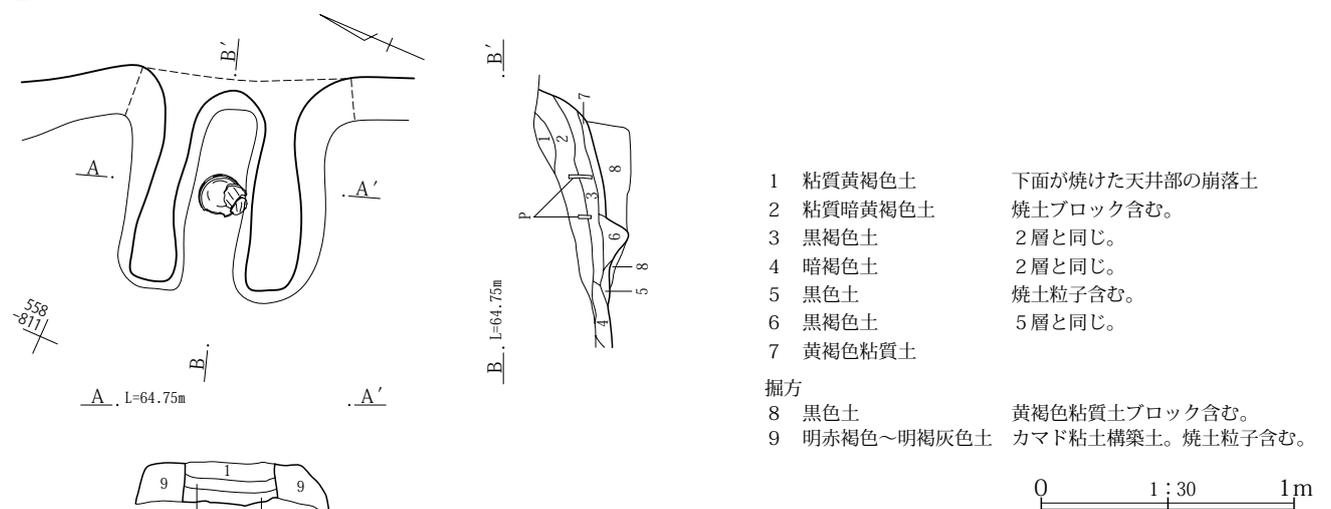
床面



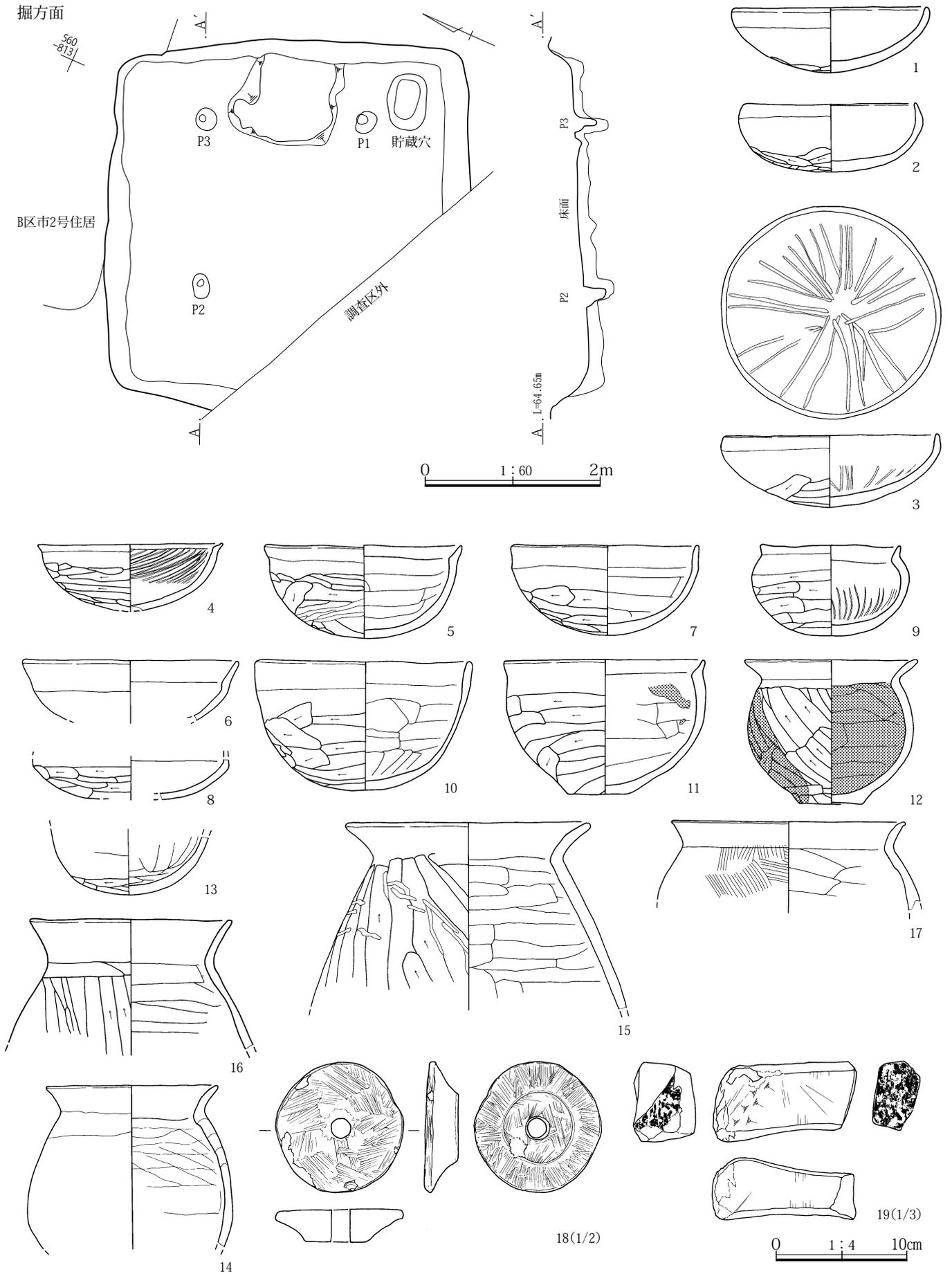
- | | | | |
|--------|--|-----------|---------------------------------------|
| 1 暗褐色土 | 直径1~3mmのAs-Cと直径10mm以下砂粒含む。 | 6 黒褐色土 | 直径1~3mmのAs-Cと直径10mm以下砂粒含む。粘土ブロック含む。 |
| 2 黒褐色土 | 1層と同じ。 | 7 褐色土 | しまりやや弱い。介在物は1層と同じ。 |
| 3 黒褐色土 | 粘土ブロック含む。直径1~3mmのAs-Cと直径10mm以下砂粒含む。焼土含む。 | 8 暗褐色土 | 7層と同じ。 |
| 4 暗褐色土 | しまりやや強い。介在物は1層と同じ。 | 掘方 | |
| 5 褐色土 | 1層と同じ。 | 9 黄褐色~褐色土 | 直径1~3mmのAs-Cと直径10mm以下砂粒含む。地山の砂を多量に含む。 |



竈



第75図 B区4号住居(1)

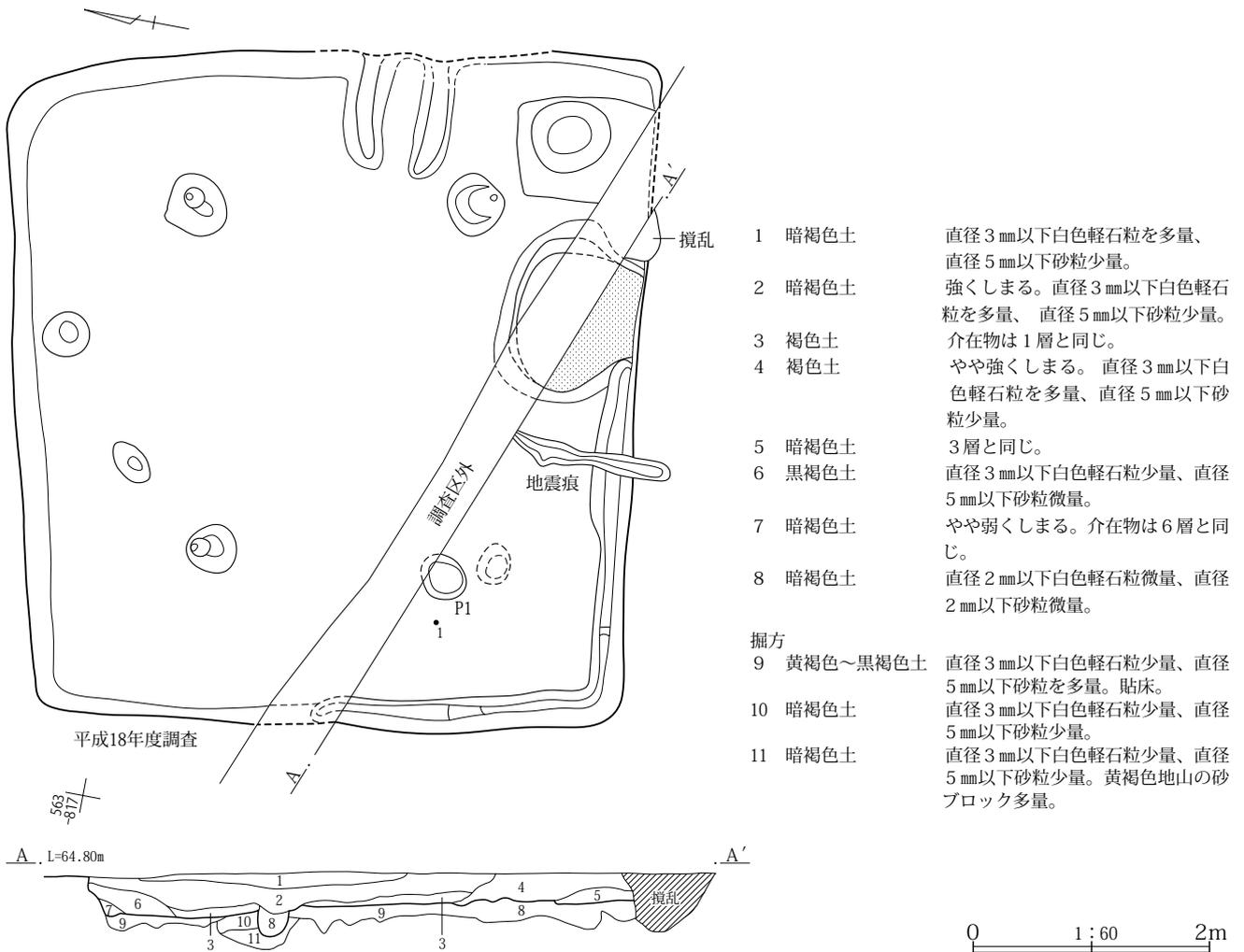


第76図 B区4号住居(2)と出土遺物

C区市2号住居(第77・78図、PL.16・29)

検出状況 本住居は、調査区北壁際で検出された。遺構を切るように地震による地割れ痕(平面図 地震痕)が検出された。本住居廃絶後の地震の痕跡である。遺構の大部分は平成18年度にすでに調査され、報告されている。ここでは主に本調査で検出された部分について記載する。**位置** X=563-817 **形状** 長軸5.35m、短軸4.98mの長方形を呈する。主軸は南北軸より78°東に傾く。**面積** 25.95㎡ **壁高** 31cm **覆土** 黒褐色～暗褐色土層が主体である。全ての土層に白色軽石を含む。**床面** 掘方面から厚さ約18～20cmの埋め土を施して平坦な面を造る。住居南壁東部に馬蹄形の高まりを検出した(160×120cm)。貼床が4～5cm高く盛られ、非常に硬い。入口の梯子等の施設の設置痕である可能性が高い。掘方面では西壁溝に直交する溝状の窪み(80×30cm・深さ10cm)、

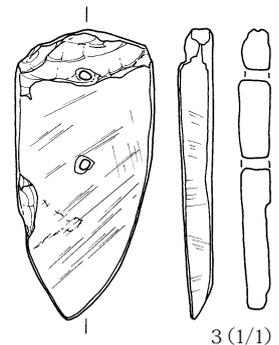
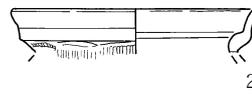
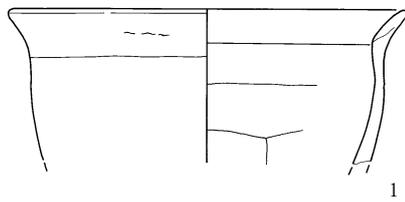
P1周辺のピット状の窪みを検出した。ピット状の窪みは貼床下層での検出であることから、柱の配置の更新の痕跡である可能性が高い。**壁溝** 南壁・西壁で壁溝を検出した。規模は幅18～35cm・床面からの深さ15cmを測る。**柱穴** 平成18年度調査で3基、本調査で1基の主柱穴を検出した。P1は長軸41cm・短軸36cmの楕円形を呈し、床面からの深さは52cmを測る。他の3基の主柱穴も床面からの深さは49～56cmを測る。**埋没状況** 自然埋没。**出土遺物** 本遺構から出土した遺物のうち、器形を復元できる2点の土器と剣型石製模造品1点を掲載した。掲載以外に、土師器甕類100g、杯類20gがある。住居の床面から土師器鉢(1)、覆土から土師器台付甕が出土した。床面から出土した土師器鉢(1)は、古墳時代中期・V期に比定される(観察表133頁)。**所見** 調査面積が少ないこともあり、本調査では遺物は僅かであるが、出土遺物は古墳時代中期・V期の様相を示す。



第77図 B区市2号住居

これは、平成18年度調査で出土した土器の型式と矛盾がない。また、平成18年度調査では、本遺構から管玉が出土しており、さらに本調査で、剣型の石製模造品が出土

したことは特出される。B区4号住居と同様の地震痕は、同じく赤城山南麓の広範囲に見られる弘仁9年(818)の地震に伴う地割れであると推測される。



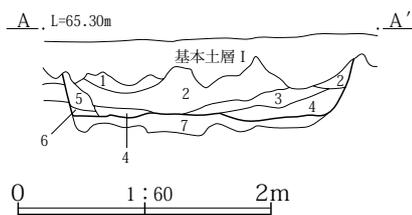
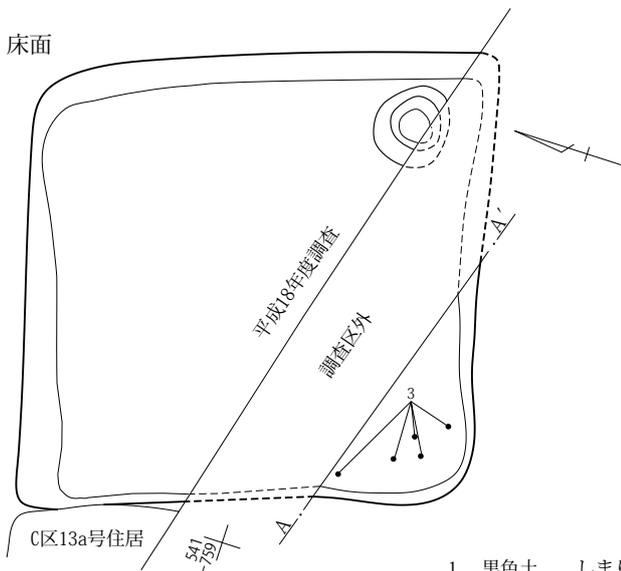
第78図 B区市2号住居出土遺物

C区市13c号住居(第79図、PL.13・29)

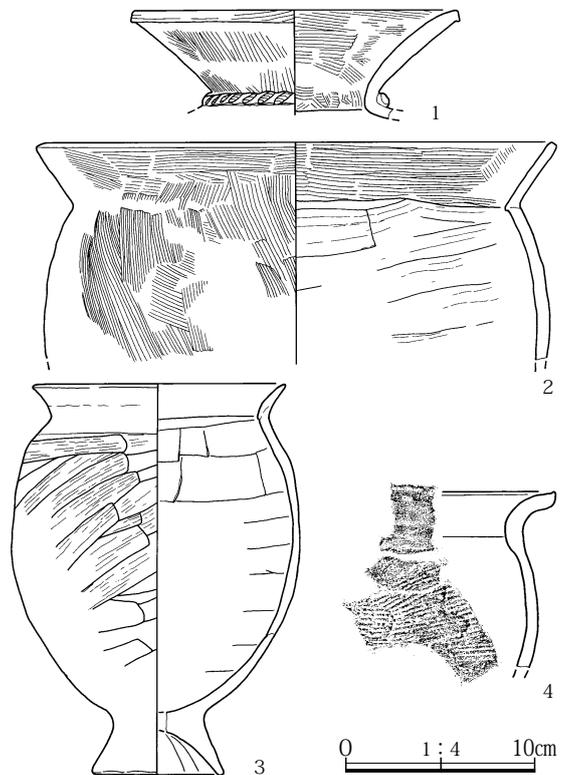
検出状況 本住居は、調査区北壁際で検出された。遺構の大部分は平成18年度にすでに調査され、報告されている。ここでは主に本調査で検出された範囲について記載する。**位置** X=541-759 **形状** 長軸3.23m、短軸3.18mの長方形を呈する。主軸は南北軸より71°東に傾く。**面積** 10.51㎡ **壁高** 32cm **覆土** 黒色～暗褐色土層が主体である。**床面** 掘方面から厚さ約10～20cmの埋め土を施して平坦な面を造る。**壁溝** なし **埋没状**

況 自然埋没。 **出土遺物** 本遺構から出土した遺物のうち、器形を復元できる4点の土器を掲載した。掲載以外に、土師器甕類80gがある。住居の床面から土師器台付甕(3)、覆土から土師器壺・甕が出土した。床面から出土した土師器鉢(3)は、古墳時代中期IV期に比定される(観察表133頁)。**所見** 調査面積が少ないこともあり、本調査では遺物は僅かであるが、平成18年度調査で出土した土器と合わせて、床面から出土した土器は古墳時代中期・IV期に比定される。

床面



- 1 黒色土 しまり弱い。
- 2 黒褐色土 しまり強い。
- 3 暗褐色土 2層と同じ。
- 4 黒色土 しまりやや弱い。
- 5 暗褐色土 しまり強い。
- 6 黒褐色土 1層と同じ。
- 掘方
- 7 褐色土 しまり強い。貼床。



第79図 C区市13c号住居と出土遺物

第2節 土坑

概要

本遺跡ではB区から1基、C区から1基の古墳時代の土坑が検出された。このうちC区5号土坑からは、古墳時代前期の土器が出土している。縄文時代の土製の錘が出土したB区1号土坑は、As-C軽石を含む覆土の特徴などから古墳時代の土坑とした。

B区1号土坑(第80図、PL.16)

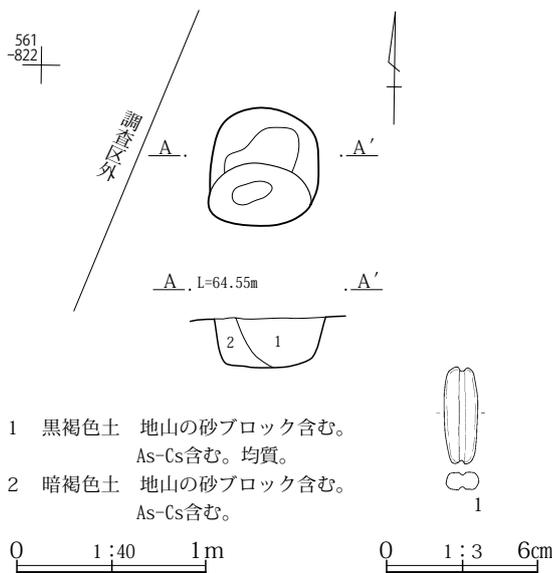
位置 X=561,Y=822 方位 長軸が南北軸 形状 長軸0.62m、短軸0.58mの隅丸方形。深さ0.26m。底面は南

側が約5cm円形に窪む形状。重複なし 覆土 黒褐色～暗褐色のブロック土。As-C軽石を含む。埋没状況 人為的である可能性あり。遺物 覆土から縄文時代の土製の錘が出土(観察表133頁)。所見 縄文時代に比定される土製の錘が出土したが、As-C軽石を含む土層などの覆土の特徴から古墳時代の遺構であると考えた。

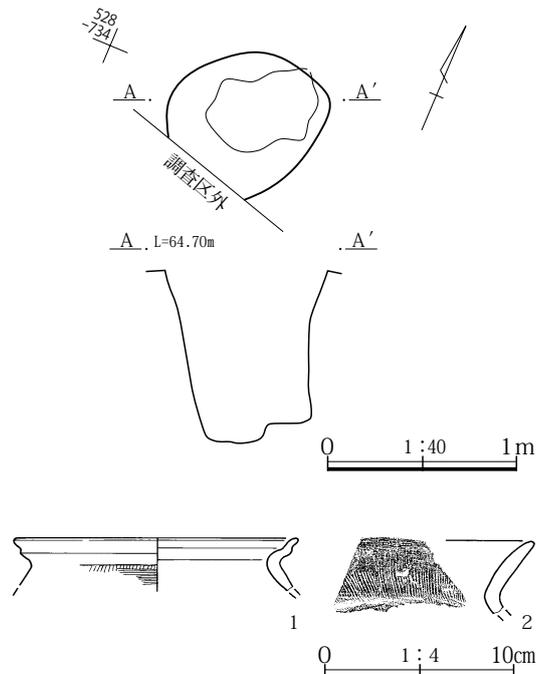
C区5号土坑(第80図、PL.16)

位置 X=528,Y=734 方位 — 形状 長軸0.87m、短軸0.78mのほぼ円形。深さ0.92m。重複なし 遺物 覆土から、土師器甕片が出土した(観察表133頁)。所見 出土した土師器甕片は古墳時代前期に比定される。

B区1号土坑



C区5号土坑



第80図 B区1号土坑と出土遺物、C区5号土坑と出土遺物

第3節 溝・谷(水田耕作土1・2)

概要

本遺跡ではA区から1条、C区から2条の古墳時代の溝が検出された。このうちA区1号溝、C区3号溝は、水田耕作に伴う水路の可能性が高いとの調査所見を得た。

A区1号溝は谷の縁部を走行し(第81図参照)、谷では水田遺構が検出されなかったものの、プラントオパール分析により、水田があった可能性が高いことが指摘されている(第8章 自然科学分析参照)。

同じく、C区3号溝、C区市3号溝は、水田の用水に関わる溝であることが考えられるとの調査所見を得た。

B区からC区にかけては、住居が密集し、切り合いが激しいが、C区3号溝、C区市3号溝周辺は、住居が途切れ、土器類が周辺に散乱している。調査区内で水田が営まれていたとは考えにくい。溝の走行する下流にあたる調査区南の地域で、C区3号溝、C区市3号溝を導水とする水田耕作が行われていた可能性がある。

本節では、検出された溝・谷が水田耕作と関連する可能性が高いと考え、各区ごとにまとめて扱う。

A区

A区では水田に関わる遺構として、A区1号溝・1号谷を検出した。古墳時代前期の確認面（調査第1面基本土層Ⅶ層下面）では、A区は西半分が谷になる地形である。古墳時代前期の遺構確認面で、東の台地部では標高約64mであるが、A区1号谷は、約1m低い63mを測る。

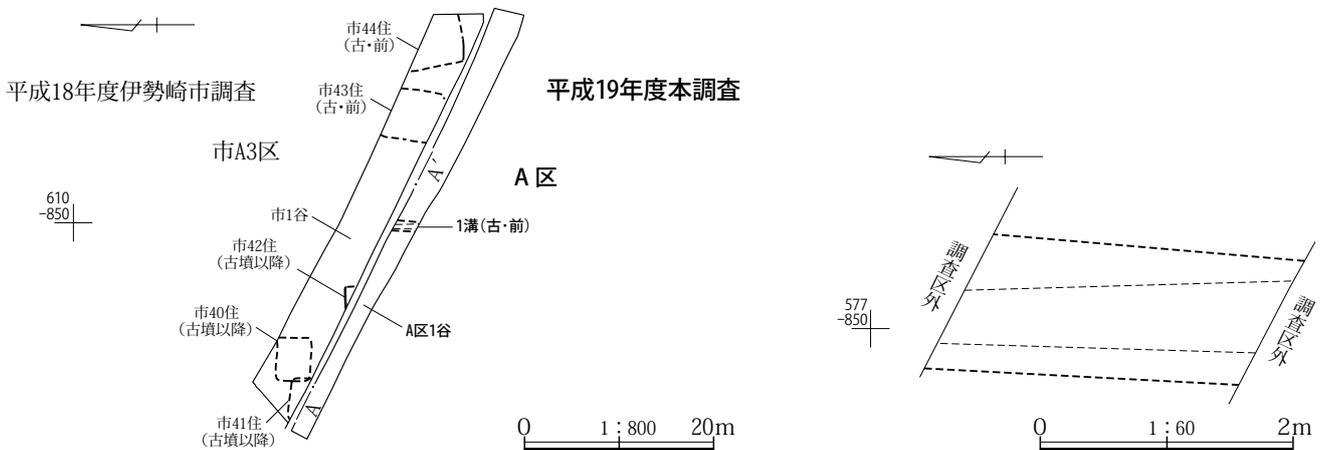
1号溝(第81・82図)

検出状況 台地上では、As-C混土下面（基本土層 第Ⅶ層下面）を基準に遺構を確認したために、谷地部もそれに合わせて遺構確認面を基本土層第Ⅶ面下面としたが、谷部の遺構の残存は良好で、第Ⅶ層上位の土層断面に古墳時代前期の本遺構を確認した。本遺構の平面プランは土層断面と地形から推測したものである。 **位置** X=577, Y=850 **走行** 南北 **形状** 長さ2.35m、上幅1.75m、深さ0.40mを測る。断面形状は丸底。 **重複** なし **覆土** 黒色～灰黒色土。As-C軽石を含む。 **埋没状況** 自然埋没。流水を示す土層は検出されなかった。 **遺物**

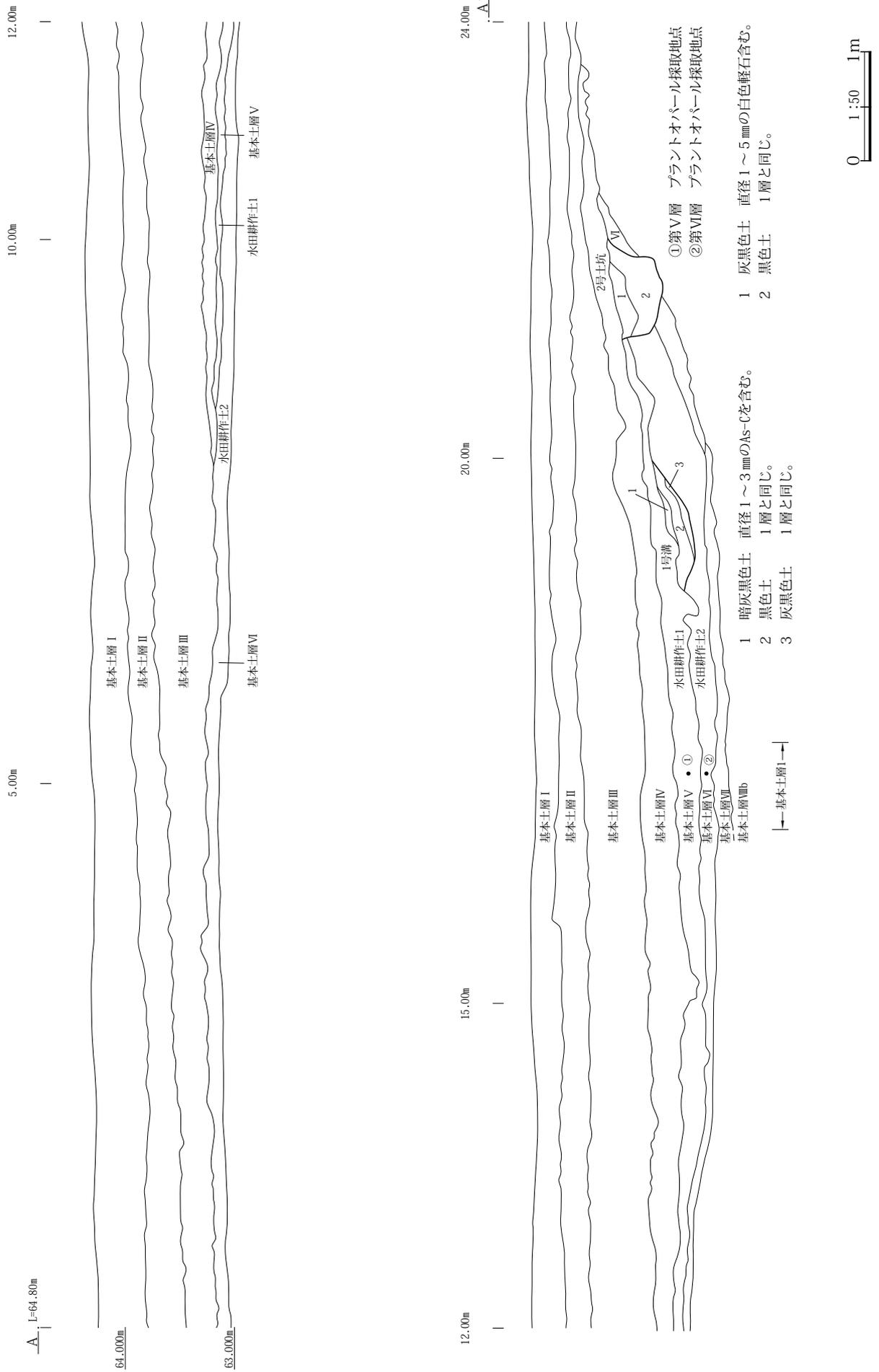
なし **所見** A区1号谷の落ち際の縁部を走行していると推測される。A区1号谷では、水田遺構が確認されなかったものの、自然科学分析により、Ⅴ層・Ⅵ層から水田耕作を推定する量のプラントオパールが検出される(第82図)、本遺構は谷部に推定される水田耕作土2（古墳時代前期）の時期の水田の用水である可能性が高い。

1号谷(水田耕作土1・2)(第81～83図、PL.1・3・29)

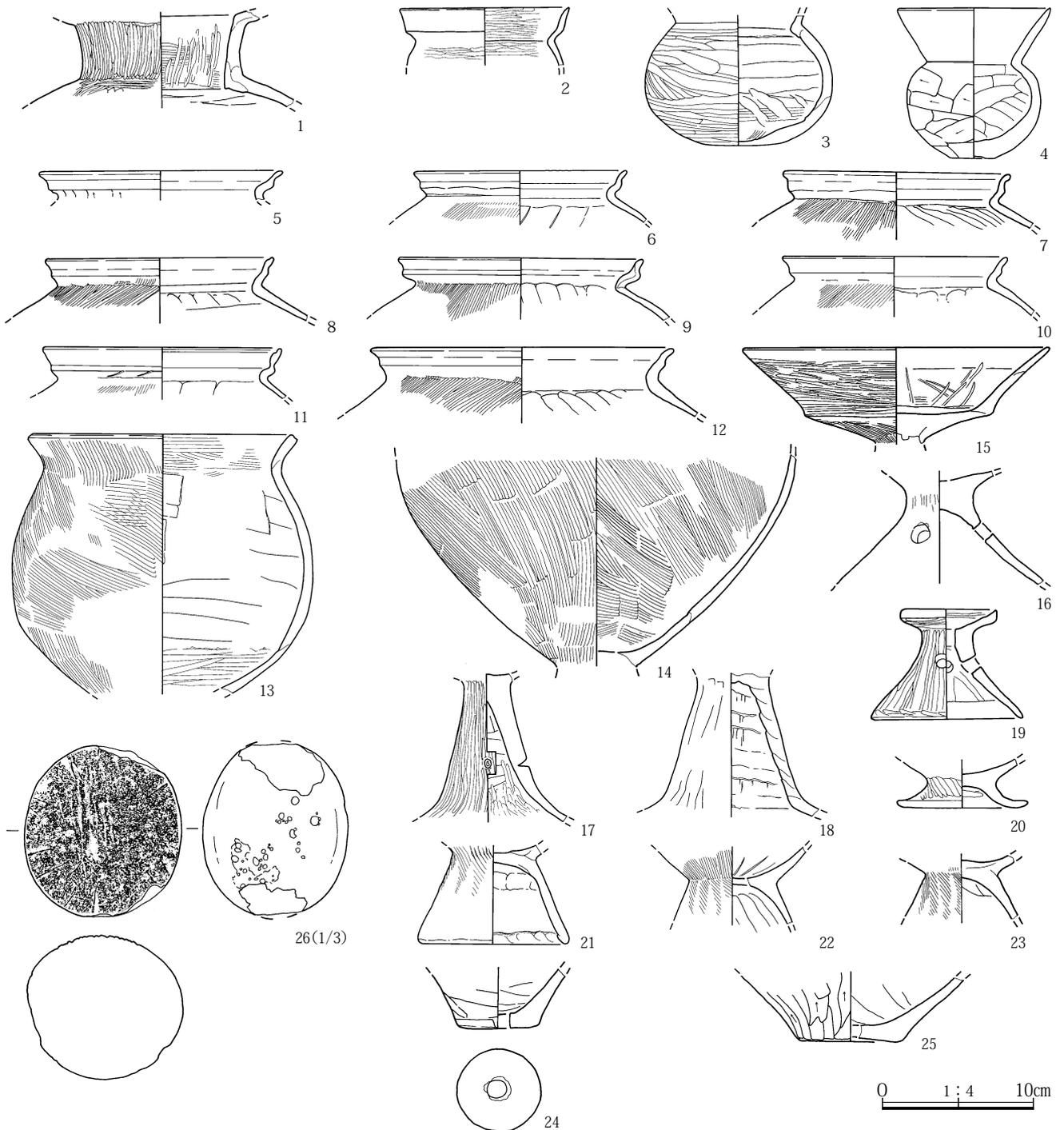
検出状況 本遺構も1号溝と同様に土層断面に本遺構を確認した。 **位置** X=577, Y=850 **水田耕作土** A区1号谷では、基本土層1地点（A区1号谷 第4章基本土層、次頁第82図参照）で、プラントオパール分析を行い、Ⅴ層（灰黒色土。直径1～5mmのAs-Cを多量に含む）・Ⅵ層（黒色土。直径1～3mmのAs-Cを含む。上半にはHr-FAを含む）から水田耕作を推定する量のプラントオパールが検出された。それぞれの土層を水田耕作土1、2とした。 **遺物** A区1号谷水田耕作土2の下層付近から古墳時代前期の遺物が出土した。出土した遺物のうち、器形を復元できる25点の土器と球形礫を利用した砥石1点を掲載した。掲載以外に、土師器類100gがある。（観察表133～135頁） **所見** 本遺構では、水田遺構が確認されなかったものの、自然科学分析により、Ⅴ層・Ⅵ層から水田耕作を推定する量のプラントオパールが検出された。水田耕作土1は、Hr-FAを含むことから古墳時代後期以降、水田耕作2は、出土遺物から、古墳時代前期の時期の水田耕作土であると考えた。A区1号溝は、水田耕作2の時期の用水路である可能性が高い。



第81図 A区1号溝・1号谷



第82図 A区1号溝・1号谷土層断面



第83図 A区1号谷出土遺物

C区

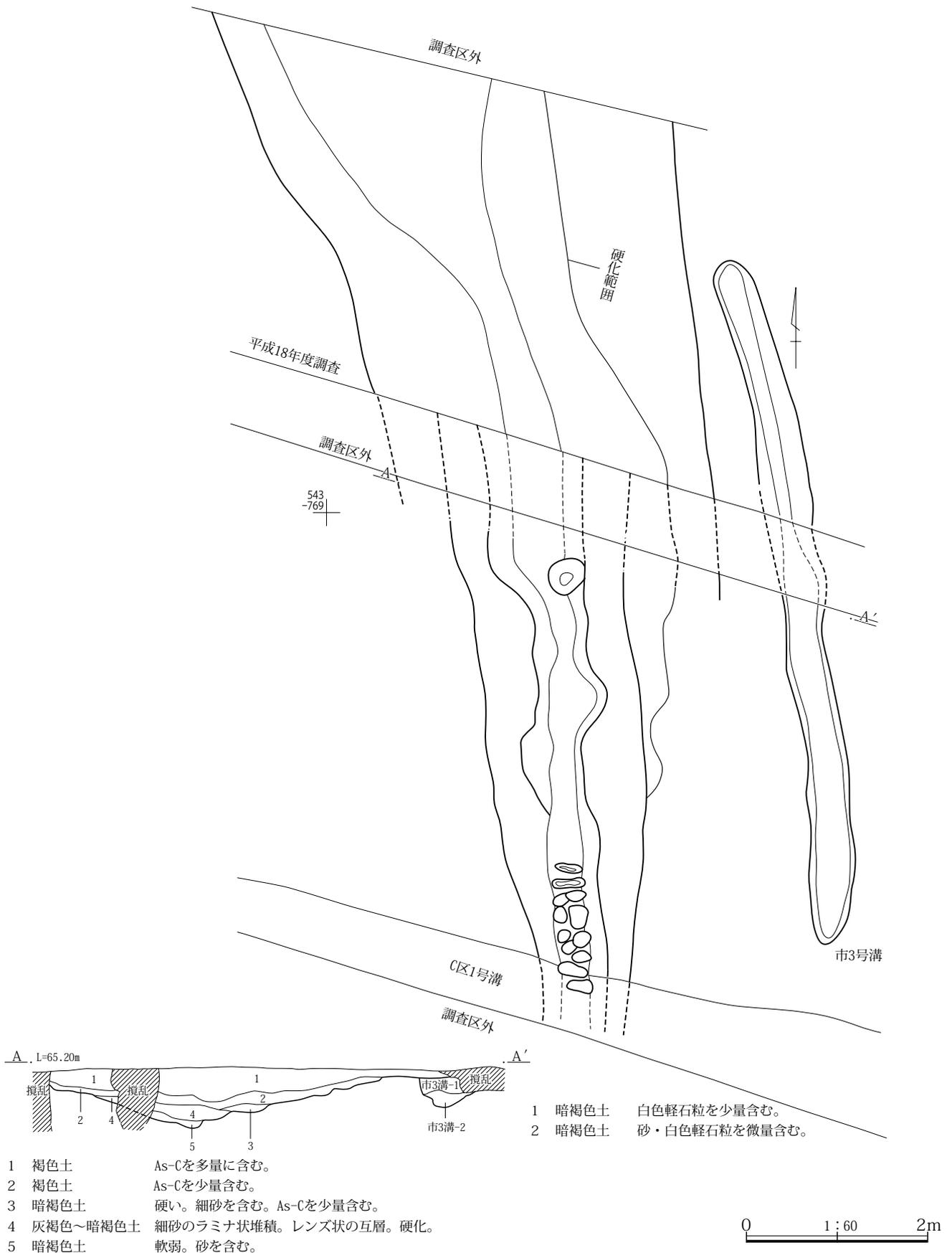
C区では水田に関わる遺構として、C区3号溝・市3号溝を検出した。前述したとおり、調査区内で水田が営まれていたとは考えにくい。溝の下流で、本遺構を導水とする水田耕作が行われていた可能性があるとの調査所見を得た。

C区3号溝(第84・85図、PL.17・30)

検出状況 平成18年度調査では硬化面として調査され、

道路状遺構が推測されたが、本調査では土層断面、遺構の形状から、本遺構を溝と判断した。位置 X=543,Y=769 走行 南北。比高差約10cmを測る。南が低い。形状 長さ5.25m、上幅1.95m、深さ0.62mを測る。断面形状は逆台形。重複 C区1号溝に切られる。覆土 暗褐色～灰褐色土。As-C軽石を含む。鉄分が錆化し、硬化した水成堆積土層(3、4層)がある。埋没状況 自然埋没。流水を示す3、4層がある。遺物 出土した遺物のうち、器形を復元できる13点の土器

を掲載した。 所見 出土遺物は、古墳時代前期に比定される。



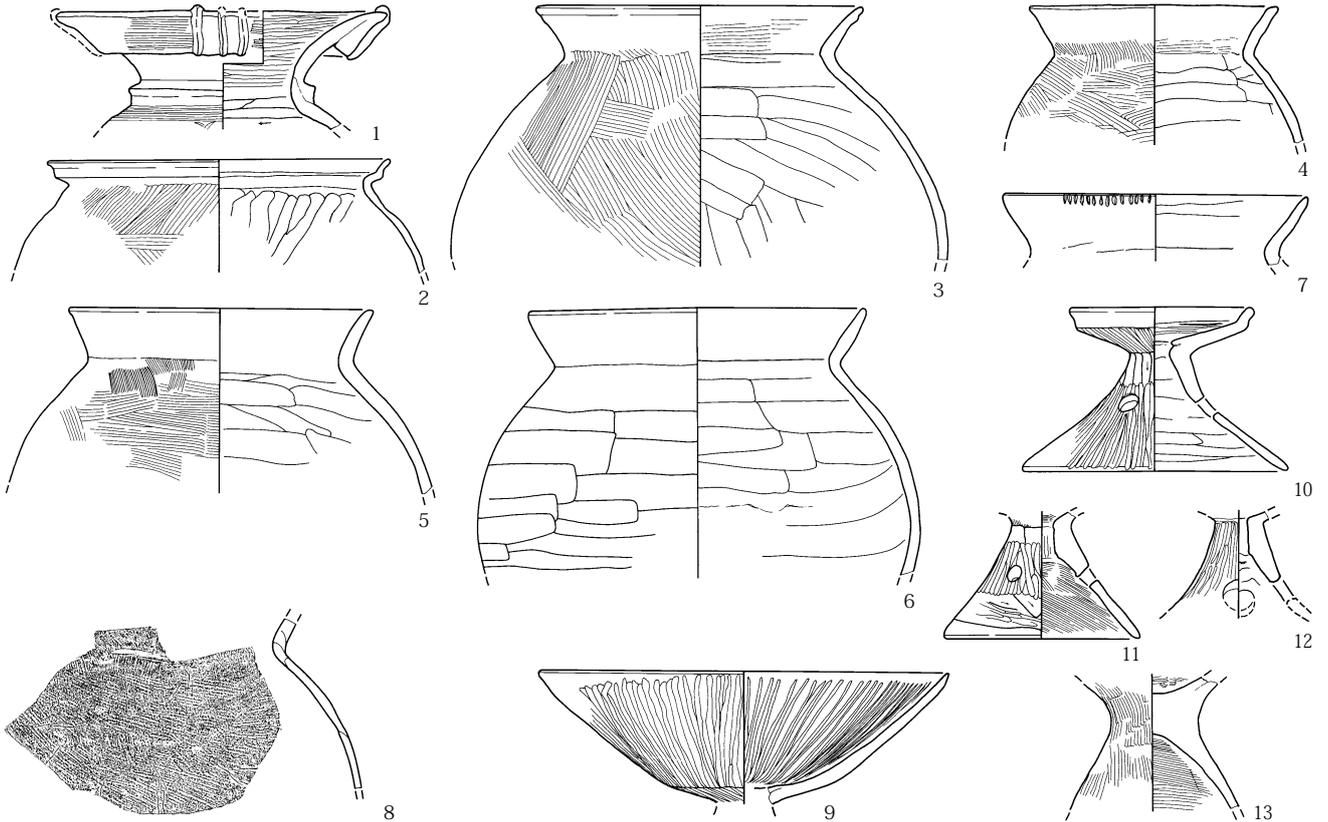
第84図 C区3号溝

C区市3号溝(第84・85図、PL.17・30)

検出状況 平成18年度調査で調査した溝の継続を調査したが、確認面から浅く、調査区内で立ち上がる。
位置 X=543, Y=769 **走行** 南北。比高差約10cmを測る。
形状 長さ3.81m、上幅0.42m、深さ0.28mを測る。断面形状は蒲鉾型。
覆土 暗褐色土主体。
埋没状況 自

然埋没。 **遺物** 遺構から出土した遺物のうち、器形を復元できる2点の土器を掲載した。掲載以外に土師器甕片が100gある。また、並行して走行するC区3号溝と本遺構の周辺で出土した土器をC区3号溝・市3号溝周辺出土土器として掲載した。器台・台付甕・高杯・壺などが出土した(観察表135・136頁)。
所見 出土遺物は、古墳時代前期に比定される。

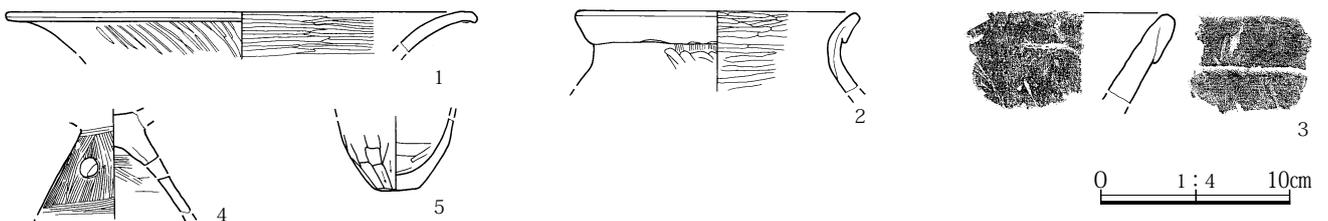
C区3号溝



C区市3号溝



C区3号溝・市3号溝周辺



第85図 C区3号、C区市3号溝とその周辺からの出土遺物

第4節 遺構外出土遺物 (第86・87図、PL.30)

本節ではA～C区の各区で出土した古墳時代の遺構外出土遺物について扱う。

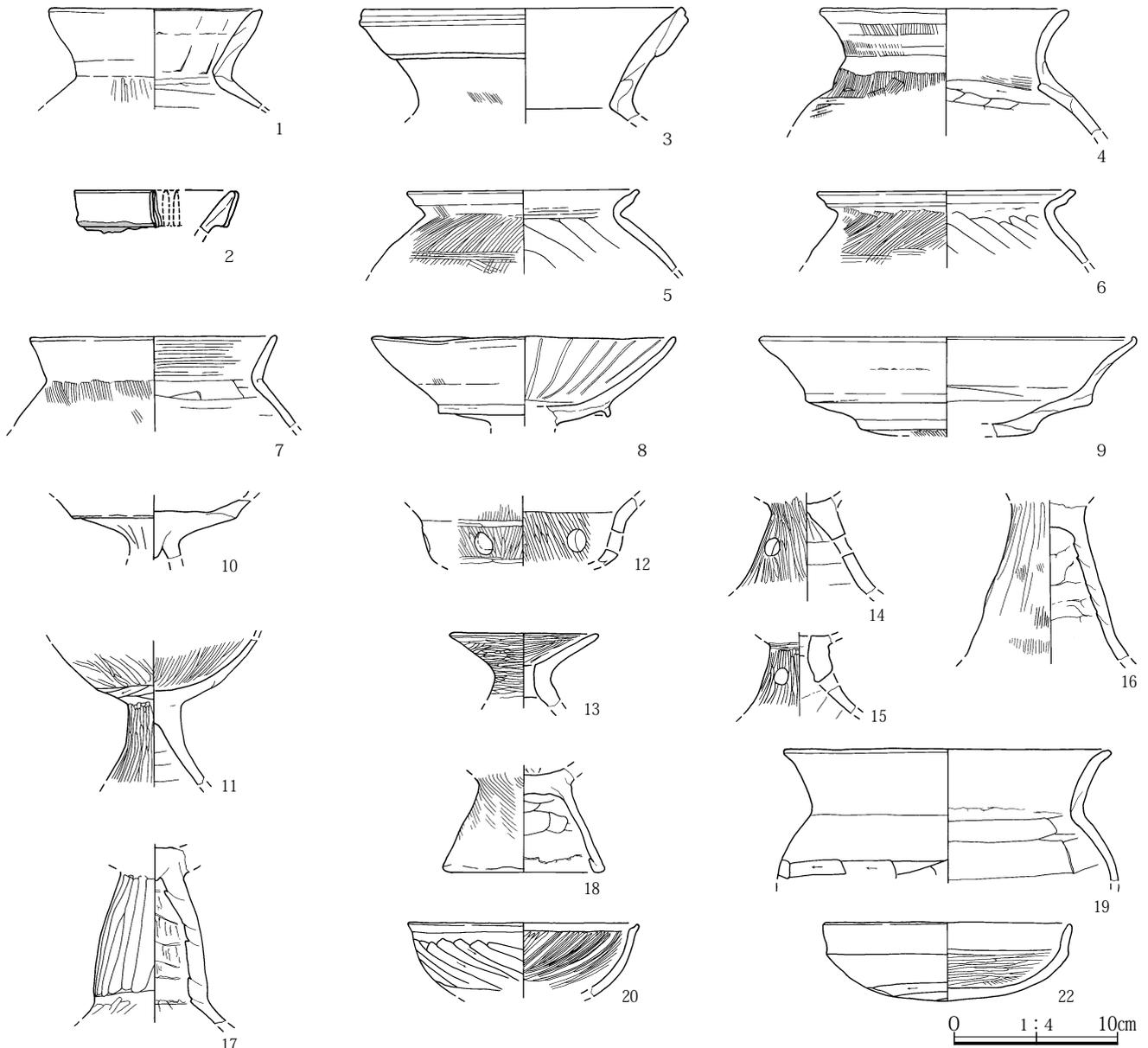
B～C区は平坦な台地状の地形であり、竪穴住居が多く検出され、集落が営まれていたことが明らかになった。A区は西側が谷地形で、自然科学分析から水田耕作が営まれていた可能性が高いことが明らかになった。ここで掲載したB～C区の遺構外出土遺物は、概期の集落の遺

物であると考えられる。また、A区は水田遺構が推定される地区でも遺物が出土したが、第3節 水田耕作土1・2に掲載した。

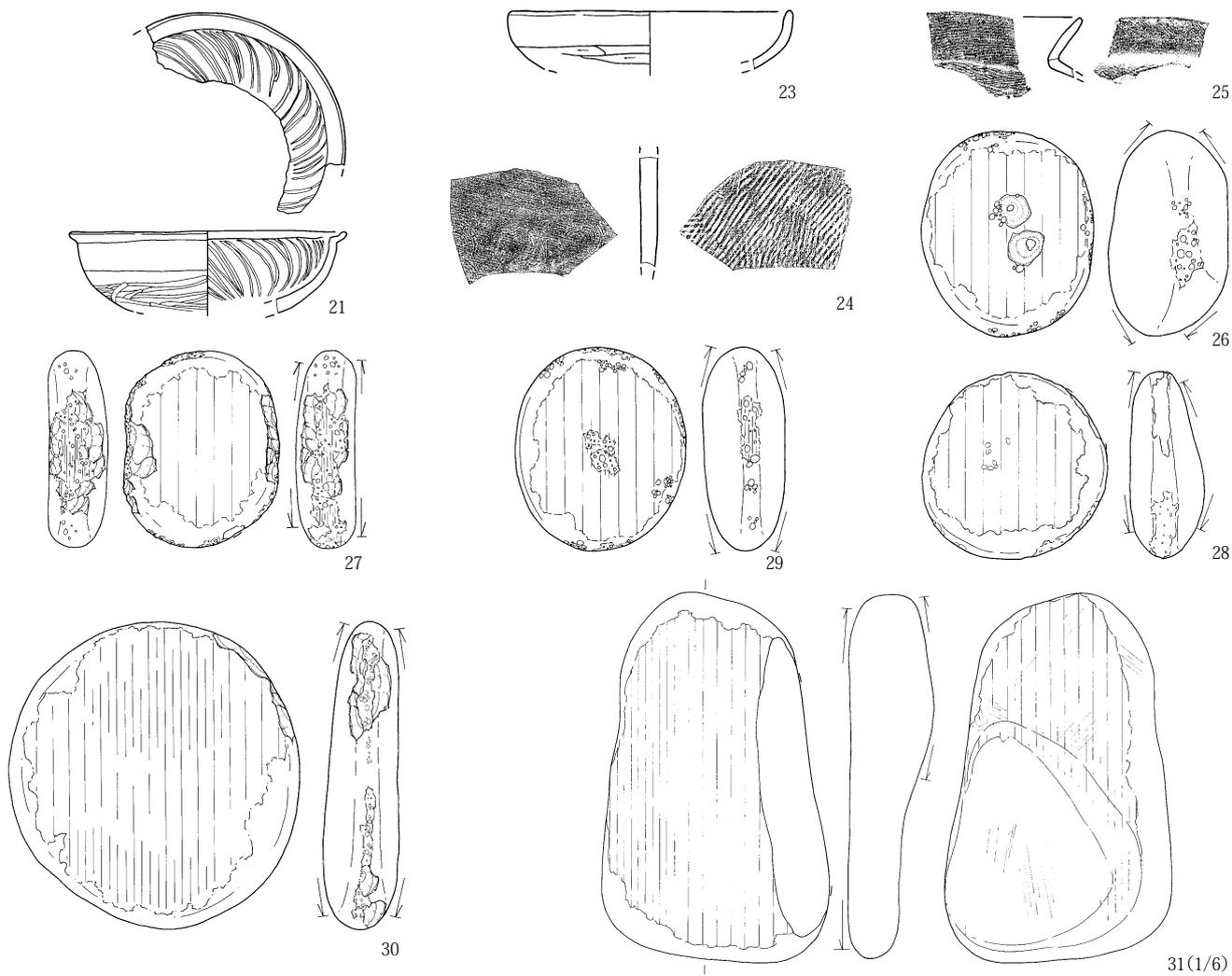
B区古墳時代の遺構外出土遺物は、掲載した土器類25点、石器類6点の他に、土師器杯片100g、埴片50g、高杯・器台類片250g、甕・壺類片2,060gがある（観察表136・137頁）。

C区古墳時代の遺構外出土遺物は、掲載した土器類10点の他に、土師器甕・壺類片3,840gがある（観察表137・138頁）。

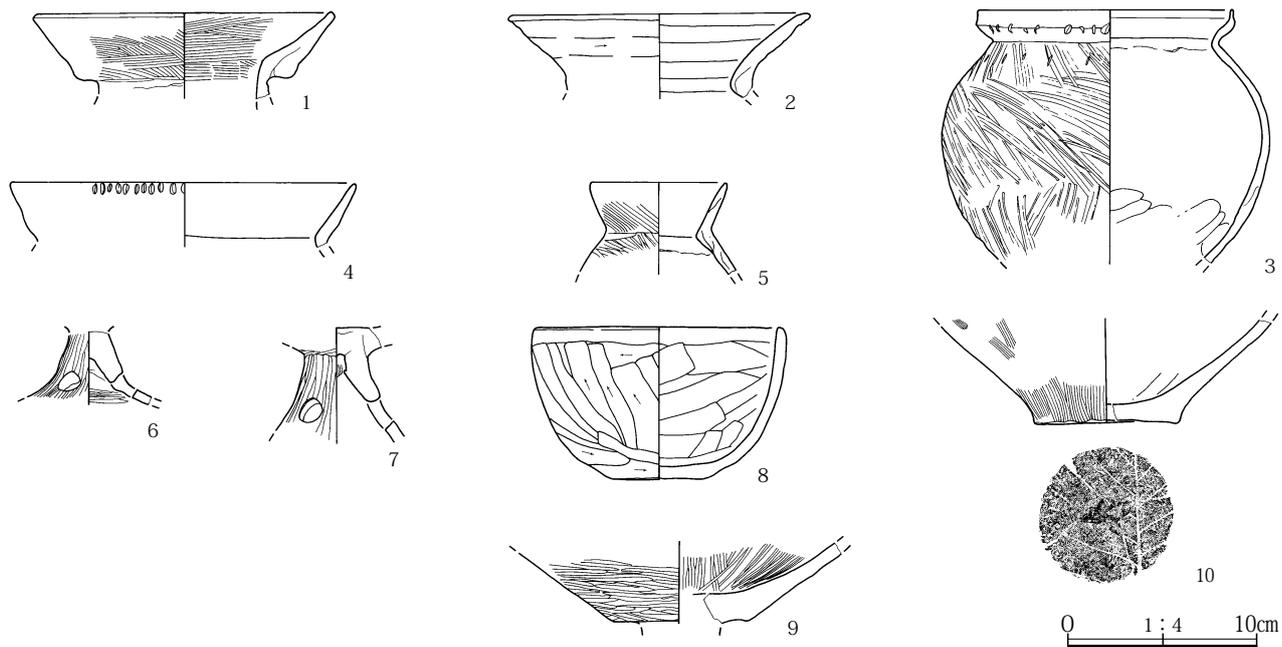
B区遺構外



第86図 B区遺構外出土遺物（1）



C区遺構外



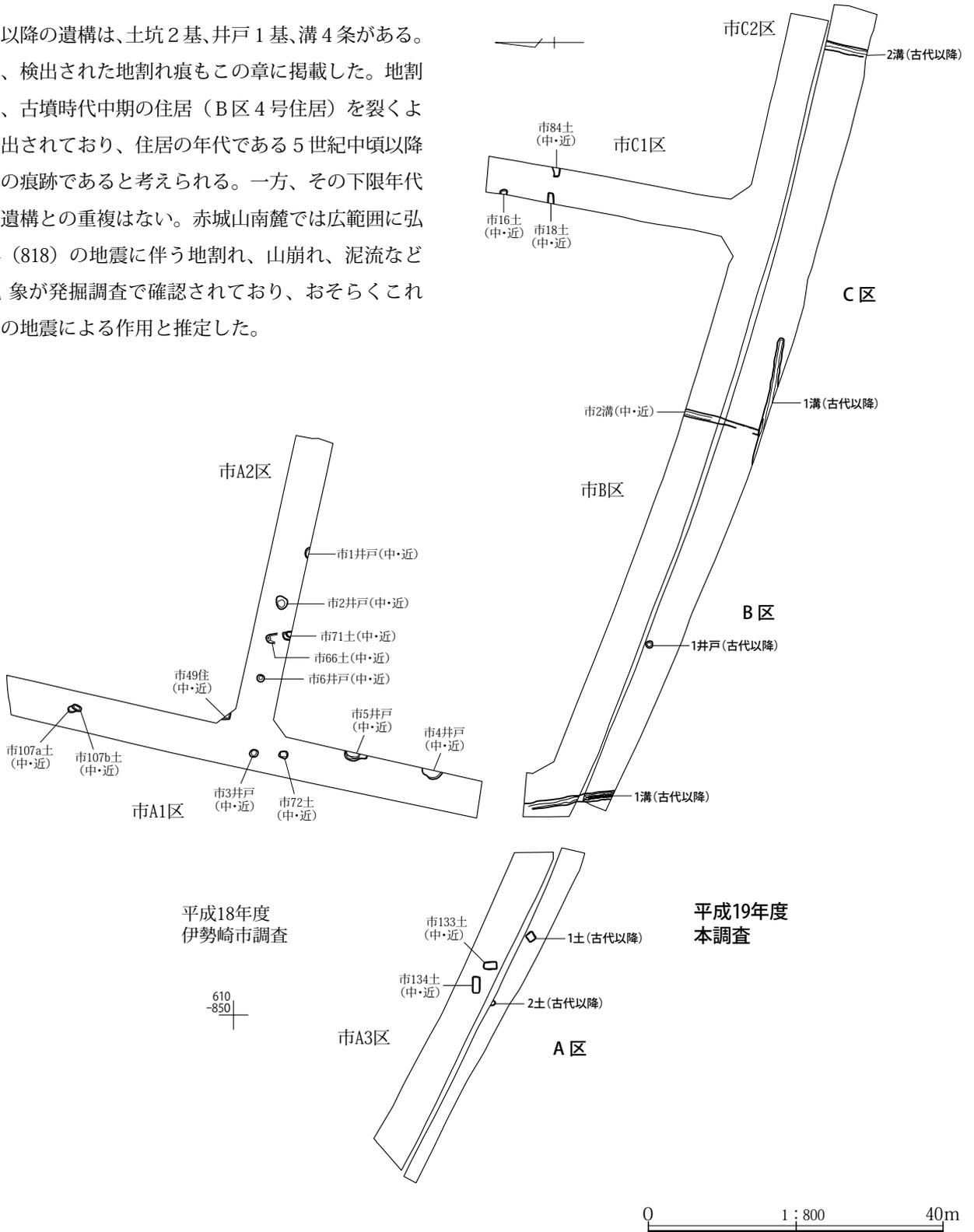
第87図 B区遺構外出土遺物(2)、C区遺構外出土遺物

第7章 古代以降の遺構と遺物

概要

古代以降の遺構は、土坑2基、井戸1基、溝4条がある。

また、検出された地割れ痕もこの章に掲載した。地割れ痕は、古墳時代中期の住居（B区4号住居）を裂くように検出されており、住居の年代である5世紀中頃以降の地震の痕跡であると考えられる。一方、その下限年代を示す遺構との重複はない。赤城山南麓では広範囲に弘仁9年（818）の地震に伴う地割れ、山崩れ、泥流などの諸現象が発掘調査で確認されており、おそらくこれと同一の地震による作用と推定した。



第88図 古代以降の遺構

第1節 土坑

概要

本遺跡ではA区から2基の古代以降の土坑が検出された。両遺構とも出土土器がなく、時期決定の決め手はないが、覆土の特徴などから古代以降の土坑とした。このうちA区1号土坑は人為的な埋没土の可能性があり、2号土坑は自然埋没である。遺構ごとの計測値などは16頁の表2に一覧表で示した。

A区1号土坑(第89図、PL.17)

位置 X=570,Y=840 **方位** 主軸は南北軸より34°西に傾く。**形状** 長軸1.79m、短軸1.54mの方形。深さ0.15m。**重複** なし **覆土** 黒褐色土ブロック土主体。基本土層第Ⅲ～Ⅷ層をブロック状に含む。**埋没状況** 人為的である可能性あり **遺物** なし **所見** 決め手となる遺物の出土はなかったが、覆土にしまりがなく、古墳時代以前の遺構の覆土と異なることから、古代以降に比定した。

A区2号土坑(第89図)

位置 X=576,Y=840 **方位** — **形状** 検出された長軸

は0.74m。平面形状は楕円形か。**重複** なし **覆土** 黒色土。**埋没状況** 自然埋没か **遺物** なし **所見** 決め手となる遺物の出土はなかったが、覆土にしまりがなく、古墳時代以前の遺構の覆土と異なることから、古代以降に比定した。

第2節 井戸

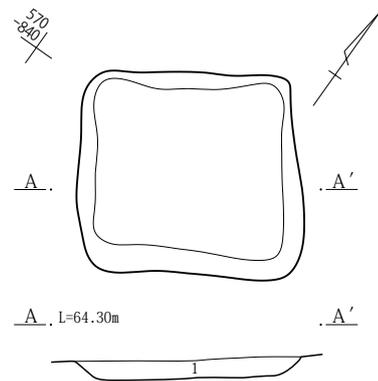
概要

本遺跡ではB区から1基の古代以降の井戸が検出された。出土土器がなく、時期決定の決め手はないが、覆土の特徴などから古代以降の井戸とした。人為的な埋没土の可能性はある。

B区1号井戸(第89図)

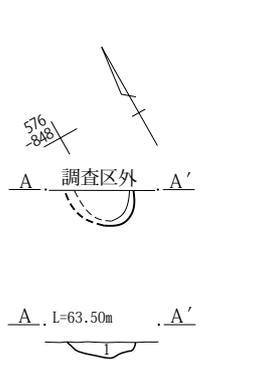
位置 X=555,Y=800 **方位** — **形状** 長軸1.44mのほぼ円形。**重複** なし **覆土** 黒褐色～褐色土。基本土層第Ⅲ～Ⅷ層を覆土に含む。**埋没状況** 人為的である可能性あり **遺物** なし **所見** 決め手となる遺物の出土はなかったが、覆土にしまりがなく、古墳時代以前の遺構の覆土と異なることから、古代以降に比定した。分層できないブロック土が覆土にあり、短期間で人為的に埋没したと考えられる。

A区1号土坑



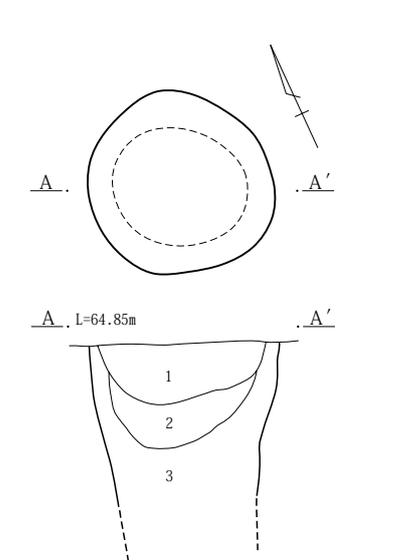
1 黒褐色土 地山の灰白色シルトブロック含む。

A区2号土坑



1 黒色土 直径1～5mmの白色軽石含む。

B区1号井戸



1 褐色土
2 暗褐色土 地山の黄褐色シルトブロック含む。
3 黒褐色土 地山の黄褐色シルトブロックを多量に含む。

0 1:40 1m

第89図 A区1号・A区2号土坑・B区1号井戸

第3節 溝

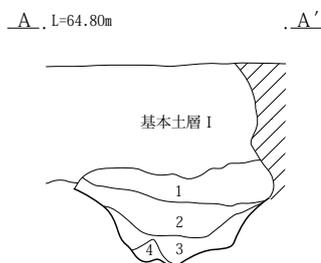
概要

本遺跡ではB区から1条、C区から3条の古代以降の溝が検出された。地形は南北を軸に北から南に傾斜しており、南北を軸とするB区市1号溝・C区2号溝が水路または区画溝、東西を軸にするC区1号溝は比高差もほとんどなく、区画溝の可能性が高い。

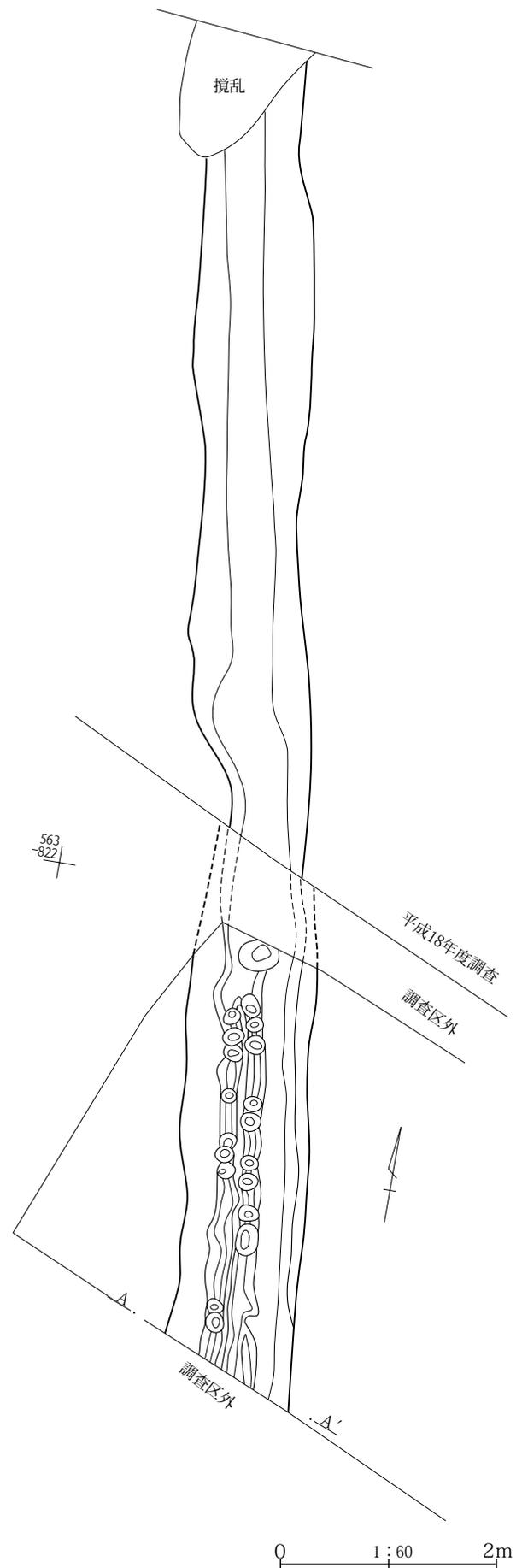
B区市1号溝(第90図、PL.17)

検出状況 平成18年度調査で調査した溝の継続を調査した。遺構確認面は基本土層第1層下位である。 **位置** X=560,Y=820 **走行** 主軸は南北軸より8°西に傾く。比高差約8cmを測る。 **形状** 長さ4.03m、上幅0.60m、深さ0.36mを測る。断面形状は丸底である。底面には掘削痕かと推測される互い違いに切り合う凹凸が検出された。 **覆土** 黒褐色～褐色土主体。 **埋没状況** 自然埋没。 **遺物** なし **所見** 決め手となる遺物の出土はなかったが、覆土にしまりがなく、古墳時代以前の遺構の覆土と異なることから、古代以降に比定した。近世の水路または区画溝の可能性が考えられる。

B区市1号溝

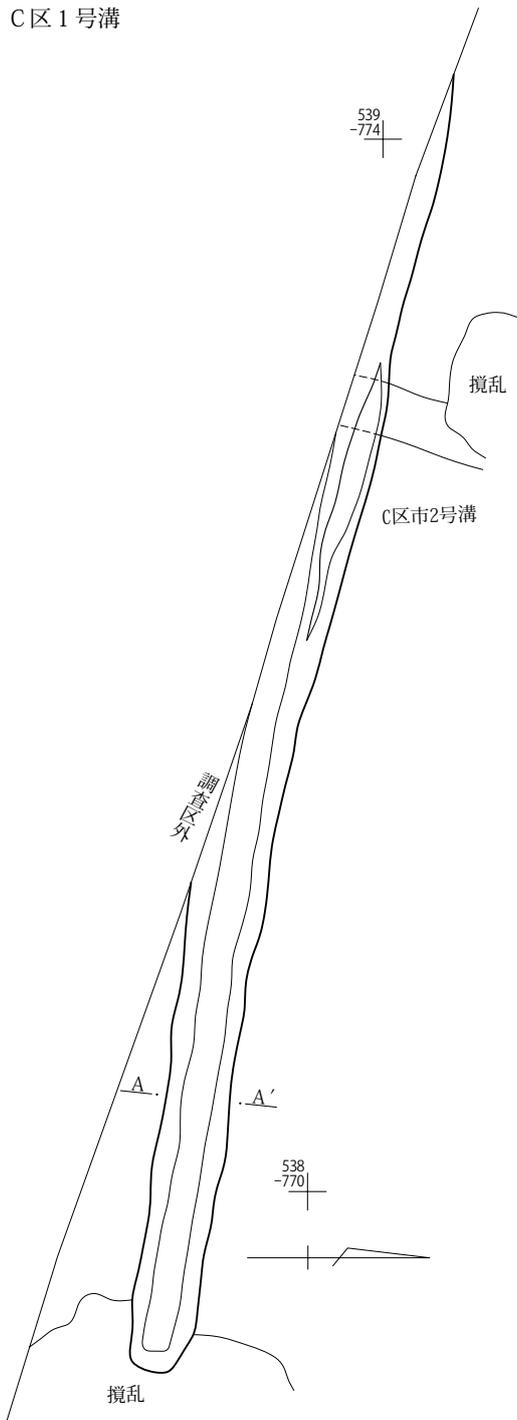


- 1 褐色土 軟弱。直径10mm以下砂粒含む。
- 2 暗褐色土 1層に同じ。
- 3 黒褐色土 軟弱。直径10mm以下砂粒含む。黄褐色地山の砂ブロック含む。
- 4 黒褐色土 軟弱。直径10mm以下砂粒含む。黄褐色地山の砂ブロックを多量斑状に含む。

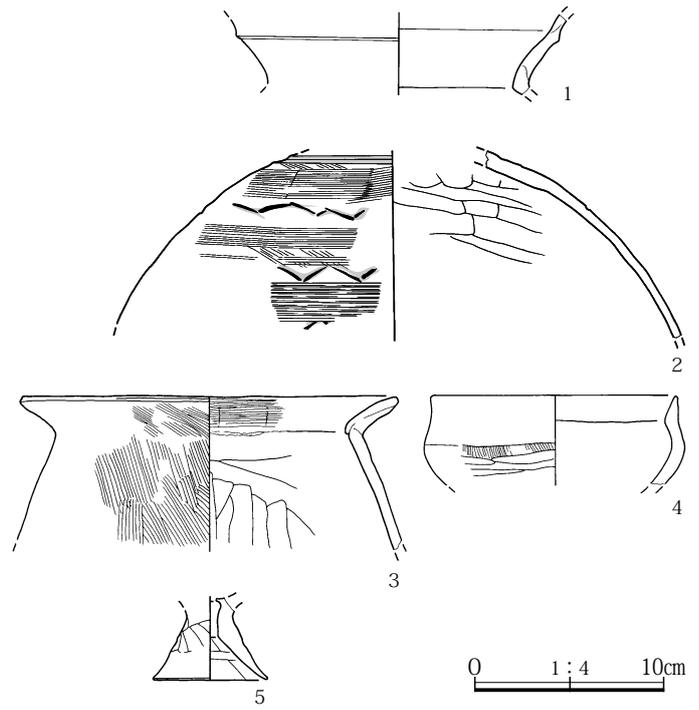


第90図 B区市1号溝

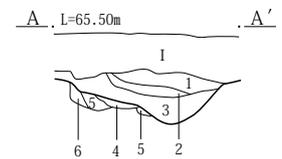
C区1号溝



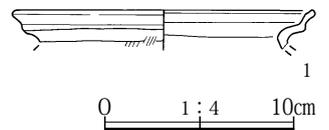
- 1 褐色土 軟弱。直径5mm以下砂粒含む。
- 2 暗褐色土 1層に同じ。



C区2号溝



- 1 茶褐色土 直径1~3mmの白色軽石含む。
 - 2 黒褐色土 1層に同じ。
 - 3 茶褐色土 直径1~10mmの白色軽石含む。
- 掘方
- 4 黄褐色土 Hr-FA一次堆積。直径1~2mmの白色軽石含む。踏み固められて堅い。
 - 5 黒色土 直径1~3mmの白色軽石含む。自然堆積土。
 - 6 灰褐色土 自然堆積土。



第91図 C区1号溝と出土遺物、C区2号溝と出土遺物

C区1号溝(第91図、PL.18)

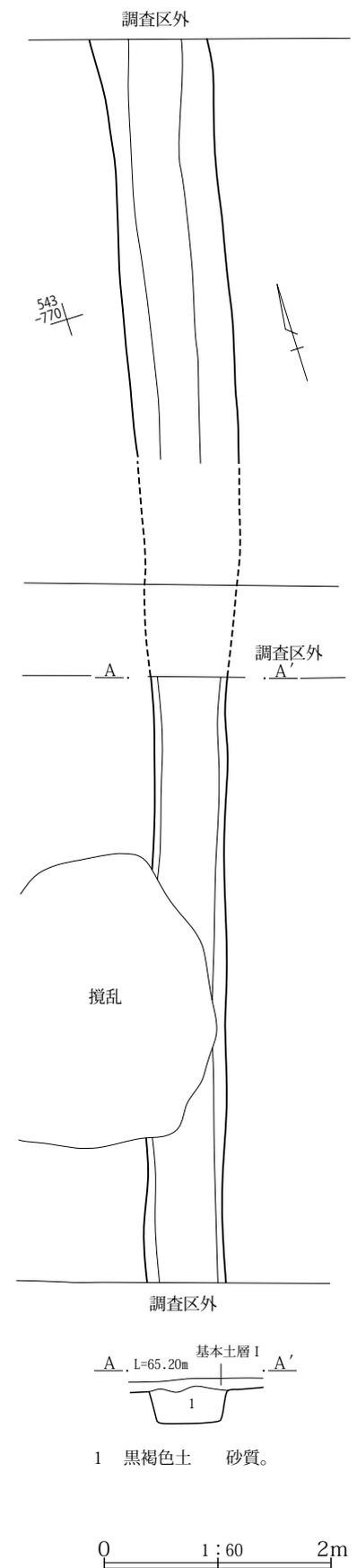
検出状況 C区西端で検出された。遺構確認面は基本土層第I層下位である。**位置** X=540,Y=770 **走行** 主軸は東西軸より7°南に傾く。比高差はほとんどない。**形状** 長さ17.93m、上幅0.84m、深さ0.38mを測る。断面形状は丸底である。**覆土** 暗褐色～褐色土主体。**埋没状況** 自然埋没。**遺物** 古墳時代前期の土師器甕・壺・鉢・ミニチュア土器片が出土した(観察表138頁)。**所見** 出土土器は古墳時代前期の様相を示すが、覆土にしまりがなく、古墳時代以前の遺構の覆土と異なることから、古代以降に比定した。上幅が平行する直線状の形状、比高差がほとんどない等高線に平行する走行方向であることから、近世の区画溝の可能性が考えられる。

C区2号溝(第91図、PL.18)

検出状況 C区東端で検出された。遺構確認面は基本土層第I層下位である。**位置** X=529,Y=719 **走行** 主軸は南北軸より14°東に傾く。比高差は約10cmを測る。**形状** 長さ5.81m、上幅1.09m、深さ0.40mを測る。断面形状は丸底である。**覆土** 黒色～褐色土主体。**埋没状況** 自然埋没。**遺物** 古墳時代前期の土師器甕が出土した(観察表138頁)。**所見** 出土土器は古墳時代前期であるが、覆土にしまりがなく、古墳時代以前の遺構の覆土と異なることから、古代以降に比定した。近世の水路または区画溝の可能性が考えられる。

C区市2号溝(第92図、PL.18)

検出状況 C区西端で検出された。遺構確認面は基本土層第I層下位である。遺構の中央付近が攪乱によって破壊されている。**位置** X=540,Y=770 **走行** 主軸は南北軸より17°東に傾く。比高差は約5cmを測る。**形状** 長さ5.25m、上幅0.71m、深さ0.25mを測る。断面形状は平底である。**覆土** 黒褐色土主体。**埋没状況** 自然埋没。**遺物** なし **所見** 覆土にしまりがなく、古墳時代以前の遺構の覆土と異なることから、古代以降に比定した。近世の水路または区画溝の可能性が考えられる。平成18年度調査範囲では、本遺構が古墳時代前期の遺構を破壊している。



第92図 C区市2号溝

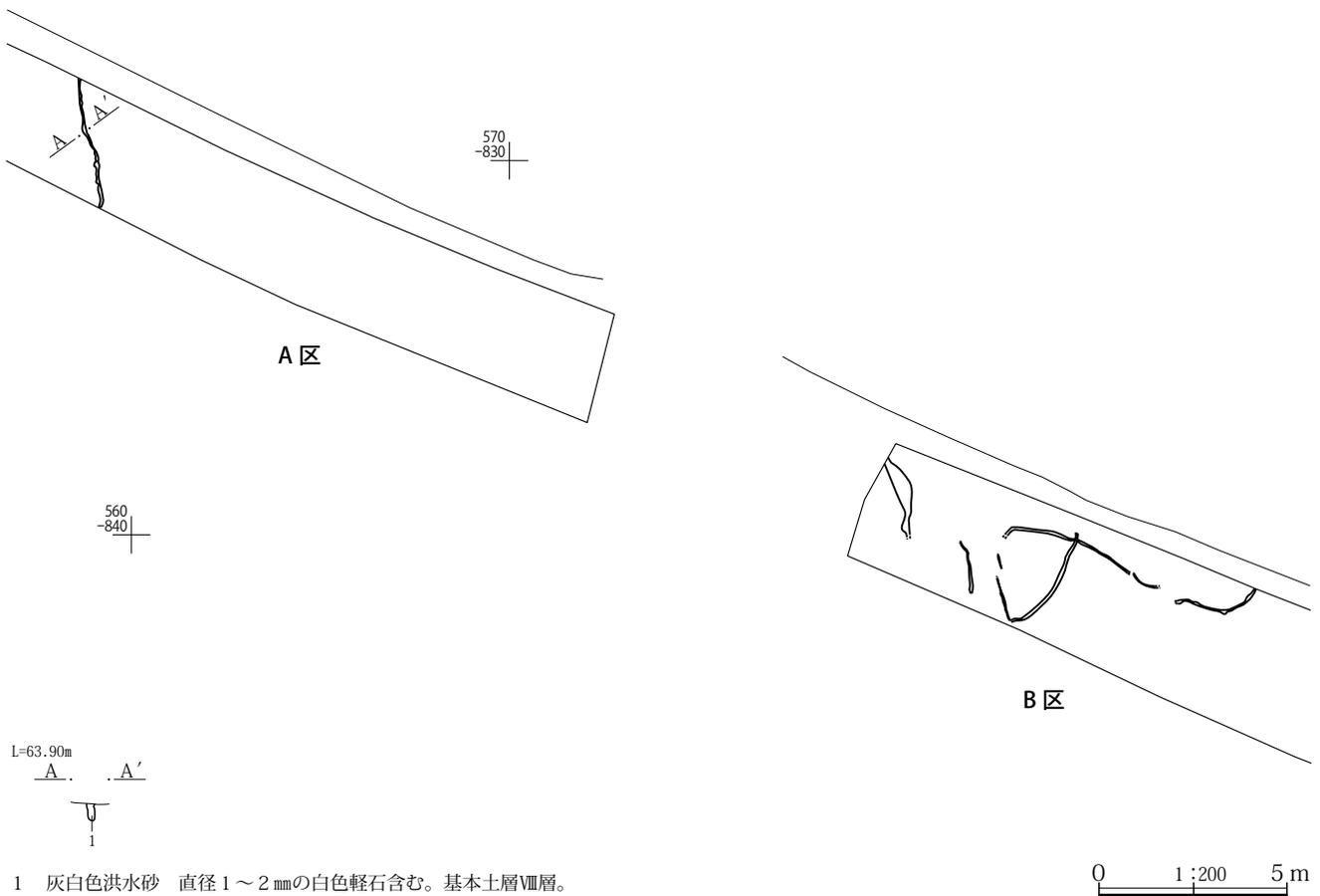
第4節 地震痕

概要

喜多町遺跡では、調査1面・2面(第29図)で地震による地割れ痕(地震痕)が検出された。ここでは、第2面で検出された地震痕を2カ所(A・B区地震痕)報告する。第1面では遺構と重複しているB区4号住居(古墳時代中期・V期)、C区市2号住居(古墳時代中期・V期)を切る地震痕が検出されている。地震痕は、これら住居を切っており、住居廃絶後の古墳時代中期以降の所産であることが明らかとなった。このうち、B区4号住居は、地震の揺れにより、基本土層Ⅶが貼床と覆土の間に入り込んでいる様子や、床面が歪んで地盤沈下していることが観察できる。

A・B区地震痕(第93図、PL.16)

検出状況 第2面調査時に、A区中央東及びB区西で地震痕を検出した。平面図は第2面調査時のものである。地震痕は基本土層第Ⅸ層(縄文洪水層下面・褐色粘質土)に、その上位の灰白色洪水層(基本土層Ⅷ層)が、陥入して検出されている。地割れの幅は、3～18cmを測る。地震痕と遺構の重複はない。 **位置** X=570,Y=840、X=560,Y=815 **走行** A区中央東ではほぼ南北軸、B区西では東西方向と南北方向がX=560,Y=810付近で交差する地震痕が検出された。 **形状** 上幅6cm、深さ15cmを測る。断面形状は角の取れたV字形である。 **所見** 地震の際に地割れし、上位の土層が下位の土層に陥入した現象であると推定される。赤城山南麓では広範囲に弘仁9年(818)の地震に伴う地割れ、山崩れ、泥石流などの諸現象が発掘調査で確認されており、喜多町遺跡で検出された地震痕は、これと同一の地震による作用である可能性も考えられる。この地震痕がそれに起因するか否かについては、より広範囲な調査データとの照合が必要である。



1 灰白色洪水砂 直径1～2mmの白色軽石含む。基本土層Ⅷ層。

第93図 A区・B区の地割れ・地震痕

第8章 自然科学分析

概要

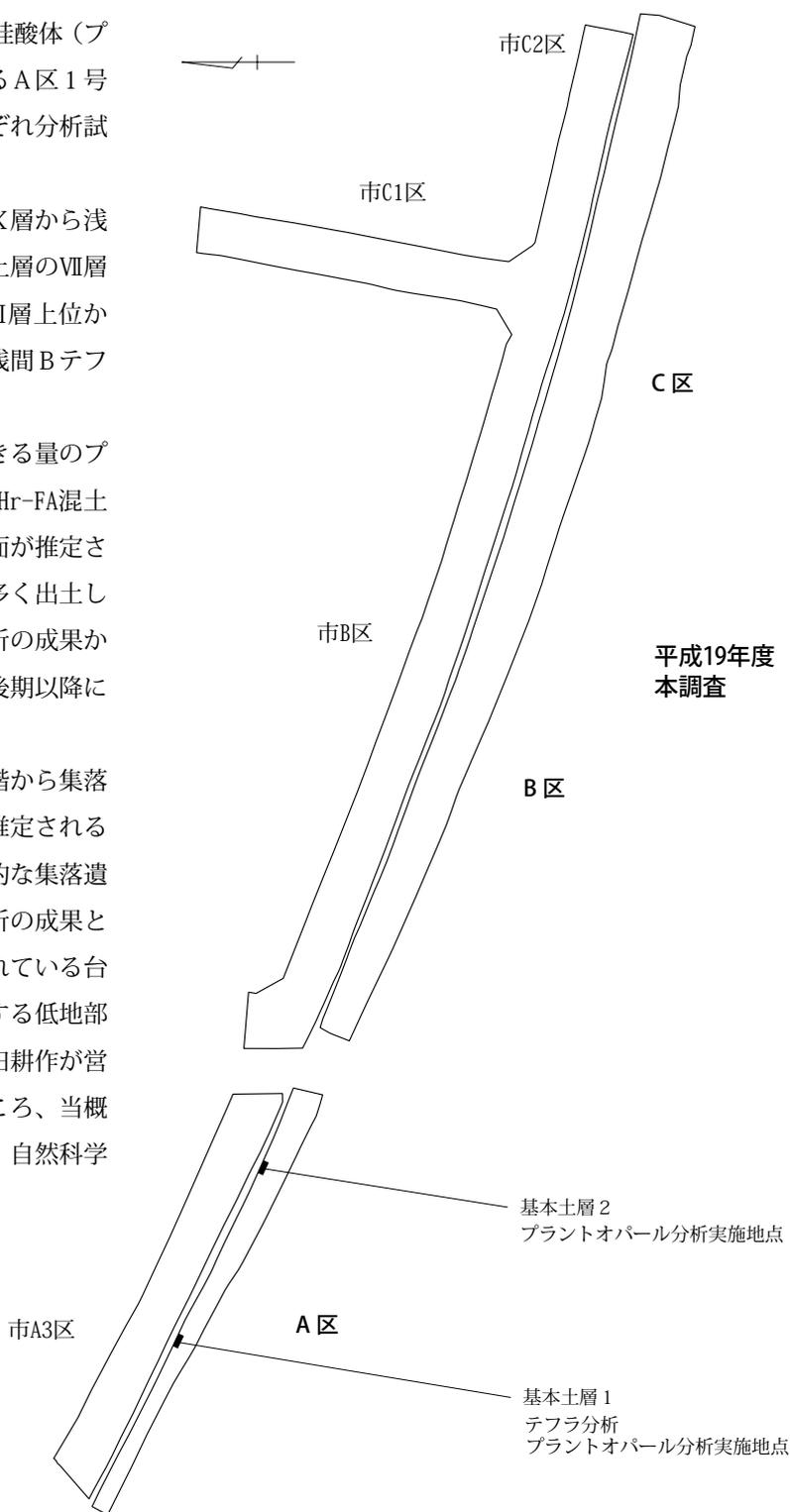
本遺跡では基本土層のテフラの同定を基本土層1（A区谷地形）・基本土層2（A区台地上）で、植物珪酸体（プラントオパール）分析を水田遺構が推定されるA区1号谷（採取地点は基本土層1）で行った。それぞれ分析試料を採取した地点は、第94～97図に示した。

基本土層1では縄文洪水層（Ⅷ層）下層のⅩ層から浅間板鼻黄色軽石、基本土層2では縄文洪水層上層のⅦ層上部から浅間C軽石（As-C）、さらに上層のⅥ層上位から榛名ニッ岳洪川テフラ（Hr-FA）、Ⅳ層から浅間Bテフラ（As-B）が検出された。

また、Ⅴ層及びⅥ層から水田稲作を推定できる量のプラントオパールが検出され、As-C混土層及びHr-FA混土層が水田耕作土層であると推定された。水田面が推定されるA区1号谷では、古墳時代前期の土器が多く出土しており（81～84頁）、出土土器と自然科学分析の成果から、A区西部の谷地形では古墳時代前期から後期以降に水田耕作が行われていたと推定できる。

本遺跡は、古墳時代前期でも比較的古い段階から集落が営まれており、規模も大規模であることが推定されることから、古墳時代前期の伊勢崎地域の中核的な集落遺跡であると考えられることができる。自然科学分析の成果と検出された遺構を検討すると、集落が形成されている台地と、水田耕作が営まれている赤坂川が形成する低地部の境に用水路（A区1号用水路）を引き、水田耕作が営まれていた景観が推測される。これまでのところ、当概地域に古墳時代前期の生産遺跡の検出はなく、自然科学分析により、貴重な資料を得ることができた。

610
-850



第94図 自然科学分析位置図

第1節 喜多町遺跡の土層とテフラ

1. はじめに

関東平野北西部に位置する伊勢崎市とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山碎屑物（さいせつぶつ）、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、層位や年代が不明な土層や遺構が検出された伊勢崎市喜多町遺跡においても、地質調査を行い土層層序を記載するとともに、採取した試料を対象にテフラ検出分析と火山ガラスの屈折率測定を行って指標テフラの層位を把握し、土層や遺構の層位や年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、基本土層1および基本土層2の2地点である。

2. 土層層序

(1) 基本土層1 基本土層1では、下位より白色粗粒火山灰を多く含む灰色泥層（層厚7cm以上、VIII層）、黒泥層（層厚11cm）、灰白色軽石混じり暗灰色泥層（層厚6cm、軽石の最大径3mm、以上VII層）、黄灰色細粒火山灰ブロック混じり暗灰色土（層厚12cm、VI層）、灰白色軽石や白色軽石混じりで若干色調が暗い灰色土（層厚21cm、軽石の最大径3mm、V層）、白色軽石混じりで若干色調が暗い灰褐色砂質土（層厚24cm、軽石の最大径7mm、IV層）、炭化物を含み若干色調が暗い砂混じり灰褐色土（層厚58cm、III層）、砂混じり暗灰褐色土（層厚20cm、II層）、盛土（層厚22cm、I層）が認められる（第99図）。

これらのうち、VI層中にブロック状に含まれる黄灰色細粒火山灰層については、層相から、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA、新井、1979、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992）と考えられる。またIV層より上位の土層中に含まれる砂については、その層位などから、1108（天仁元）年に浅間

火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B、荒牧、1968、新井、1979）に由来すると考えられる。なお、VII層上部にわずかに含まれている灰白色軽石については、その層位などから、4世紀初頭に浅間火山から噴出したと推定されている浅間C軽石（As-C、荒牧、1968、新井、1979、友廣、1988、若狭、2000）に由来するのかもしれない。

発掘調査では、VII層から縄文時代中～後期の遺物が検出されている。

(2) 基本土層2 基本土層2では、下位より淘汰の良い灰色砂層（層厚16cm以上、XI層）、白色軽石や礫を含む黄灰色砂層（層厚35cm、軽石の最大径37mm、礫の最大径48mm）、黄灰色砂質土（層厚23cm、以上X層）、鉄分をやや多く含む暗灰褐色土（層厚14cm）、暗灰褐色土（層厚15cm、以上IX層）、灰色砂質シルト層（層厚22cm、VIIIg層）、灰色シルト質砂層（層厚13cm、VIIId層）、灰色砂層（層厚11cm、VIIIb層）、砂混じり灰褐色土（層厚8cm）、炭化物混じり暗灰色土（層厚16cm、II層）、盛土（層厚11cm、I層）が認められる（第100図）。

ここでは、IX層から縄文時代前期の遺物が検出されている。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法 基本土層1および基本土層2において採取されたテフラ試料のうち6試料を対象に、テフラ検出分析を実施した。分析の手順は次のとおりである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

(2) 分析結果 テフラ検出分析の結果を表1に示す。基本土層の試料3では軽石は認められないものの、スポンジ状に比較的良く発泡した灰白色の軽石型ガラスが比較的多く含まれている。この試料には、火山ガラスが付着した斜方輝石や単斜輝石が認められる。試料2のテフラ層には、発泡のあまり良くない白色軽石（最大径4.8mm）が比較的多く含まれている。軽石の斑晶には、角閃石や斜方輝石が認められる。また火山ガラスとしては、この軽石の細粒物である白色の軽石型ガラスが多く含まれている。

試料1には、比較的良く発泡した淡褐色の軽石（最大径2.6mm）が少量含まれており、その細粒物である淡褐

色の軽石型ガラスが多く含まれている。前者の斑晶としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

火山ガラスとしてはこれらの軽石の細粒物である軽石型ガラスが多く含まれている。

基本土層2では、試料5にスポンジ状に良く発泡した白色軽石（最大径4.3mm）が少量含まれている。また、この軽石の細粒物である白色の軽石型ガラスが比較的多く含まれている。このような火山ガラスは、試料4や試料2でも少量認められる。

4. 屈折率測定（火山ガラス）

(1) 測定方法 基本土層2のX層下部の砂層中に含まれる軽石の起源に関する資料を得るために、軽石（試料4'）を構成する火山ガラスについて屈折率（ n ）の測定を実施した。測定には、温度変化型屈折率測定装置（京都フィッション・トラック社製RIMS2000）を使用した。

(2) 測定結果 屈折率測定の結果を表1に示す。基本土層2の試料4'の火山ガラス（17粒子）の屈折率（ n ）は、1.499-1.503である。

5. 考察

基本土層1の試料3（VII層上部）に含まれる灰白色軽石型ガラスは、その特徴から、4世紀初頭に浅間火山から噴出したと推定されている浅間C軽石（As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 友廣, 1988, 若狭, 2000）に由来すると考えられる。試料2（VI層）のテフラ層は、層相や含まれる軽石や火山ガラスの岩相などから、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992）と考えられる。さらに、試料1（IV層）に多く含まれる淡褐色の軽石や軽石型ガラスは、その層位や特徴などから、1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B, 荒牧, 1968, 新井, 1979）に由来すると考えられる。

また、基本土層2のX層下部の砂層中に含まれる軽石（試料4'）は、火山ガラスの屈折率にやや低い値も含まれているものの、浅間火山から約1.5～1.65万年前に噴出した浅間板鼻黄色軽石（As-YP, n :1.501-1.505, 新井, 1962, 町田・新井, 1992, 2003）や、それに関係して発生した火砕流堆積物中の火山ガラスの値（ n :1.501-

1.503, 町田・新井, 1992, 2003）に良く似ている。もし後者に由来するとすれば、伊勢崎市南東部で検出されている火砕流に関係した火山泥流堆積物（早田, 未公表資料）に由来するのかも知れない。今後、XI層中のテフラ粒子も含め、さらに火山ガラス鉱物の屈折率測定、さらに火山ガラスの主成分化学組成分析などを実施して、その起源が明らかにされると良い。

6. まとめ

喜多町遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、火山ガラスの屈折率測定を行った。その結果、浅間板鼻黄色軽石（As-YP, 約1.5～1.65万年前）に由来する可能性のある軽石を含む砂礫層の上位の土層において、下位より浅間C軽石（As-C, 4世紀初頭）に由来するテフラ粒子、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA, 6世紀初頭）、浅間Bテフラ（As-B, 1108年）に由来するテフラ粒子などを検出することができた。

文献

- 新井房夫 1962 「関東地方北西部の第四紀編年」『群馬大学紀要』自然科学編 10 p.1-79
 新井房夫 1979 「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」『考古学ジャーナル』no.157 p.41-52
 荒牧重雄 1968 「浅間火山の地質」『地団研専報』no.45 p.65
 町田 洋・新井房夫 1992 「火山灰アトラス」『東京大学出版会』p.276
 町田 洋・新井房夫 2003 「新編火山灰アトラス」『東京大学出版会』p.336
 坂口 一 1986 「榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器」群馬県教育委員会編『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』p.103-119
 早田 勉 1989 「6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害」『第四紀研究』27 p.297-312
 友廣哲也 1988 「古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石」群馬県埋蔵文化財調査事業団編『群馬の考古学』p.325-336
 若狭 徹 2000 「群馬の弥生土器が終わるとき」かみつけの里博物館編『人が動く・土器も動く—古墳が成立する頃の土器の交流』p.41-43

表5 テフラ検出分析結果

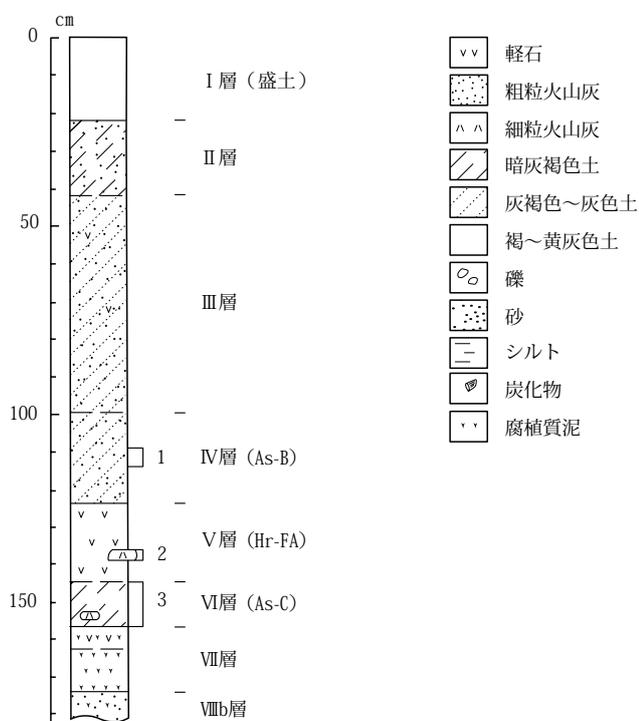
地点	試料	軽石			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
基本土層No. 1地点	1	+	淡褐	2.6	+++	pm	淡褐
	2	++	白	4.8	+++	pm	白
	3	-	-	-	++	pm	灰白
基本土層No. 2地点	2	-	-	-	+	pm	白
	4	-	-	-	+	pm	白
	5	+	白	4.3	++	pm	白

++++：とくに多い，+++：多い，++：中程度，+：少ない，-：認められない．最大径の単位は，mm.

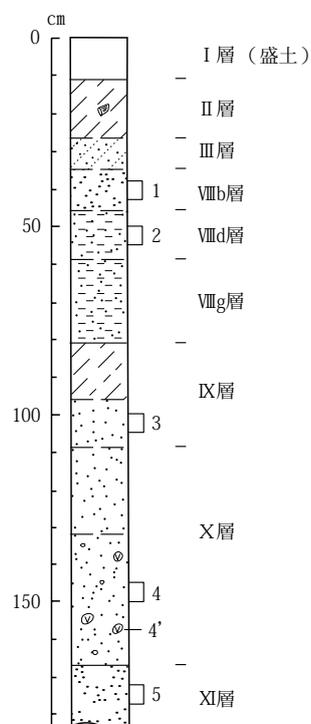
表6 屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス (n)	斜方輝石 (γ)	測定粒子数
基本土層No. 2地点	4'	1.499-1.503	-	17

測定は，温度変化型屈折率測定装置 (RIMS2000) による．



第95図 基本土層1の土層柱状図



第96図 基本土層2の土層柱状図

第2節 喜多町遺跡における植物珪酸体（プラント・オパール）分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO₂）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。

2. 試料

分析試料は、基本土層1から採取された2点である。試料採取層位を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原, 1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10⁻⁵g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（スス

キ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、ミヤコザサ節は0.30である（杉山, 2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表7および第101図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕 イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）

〔イネ科—タケ亜科〕 メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科—その他〕 表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔樹木〕 多角形板状（ブナ科コナラ属など）、その他

5. 考察

（1）稲作跡の検討 水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山, 2000）。なお、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

基本土層1では、V層（試料1）とVI層（試料2）の2試料について分析を行った。その結果、両試料からイネが検出された。このうち、V層（試料1）では密度が7,100個/gと高い値であり、VI層（試料2）でも4,100個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

（2）イネ科栽培植物の検討 植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ

属型などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

(3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群では、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも比較的少量である。また、コナラ属などの樹木起源も少量検出された。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある（杉山, 1999）。なお、すべての樹種で植物珪酸体が形成されるわけではなく、落葉樹では形成されないものも多い（近藤・佐瀬, 1986）。おもな分類群の推定生産量によると、イネ以外ではヨシ属が優勢である。

以上の結果から、各層の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはススキ属やチガヤ属、メダケ属（メダケ節やネザサ節）などが生育しており、遺跡

周辺にはコナラ属などの樹木が分布していたと推定される。

6. まとめ

植物珪酸体（プラント・オパール）分析の結果、V層およびVI層ではイネが多量に検出され、それぞれ稲作が行われていた可能性が高いと判断された。各層の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して水田稲作が行われていたと推定される。

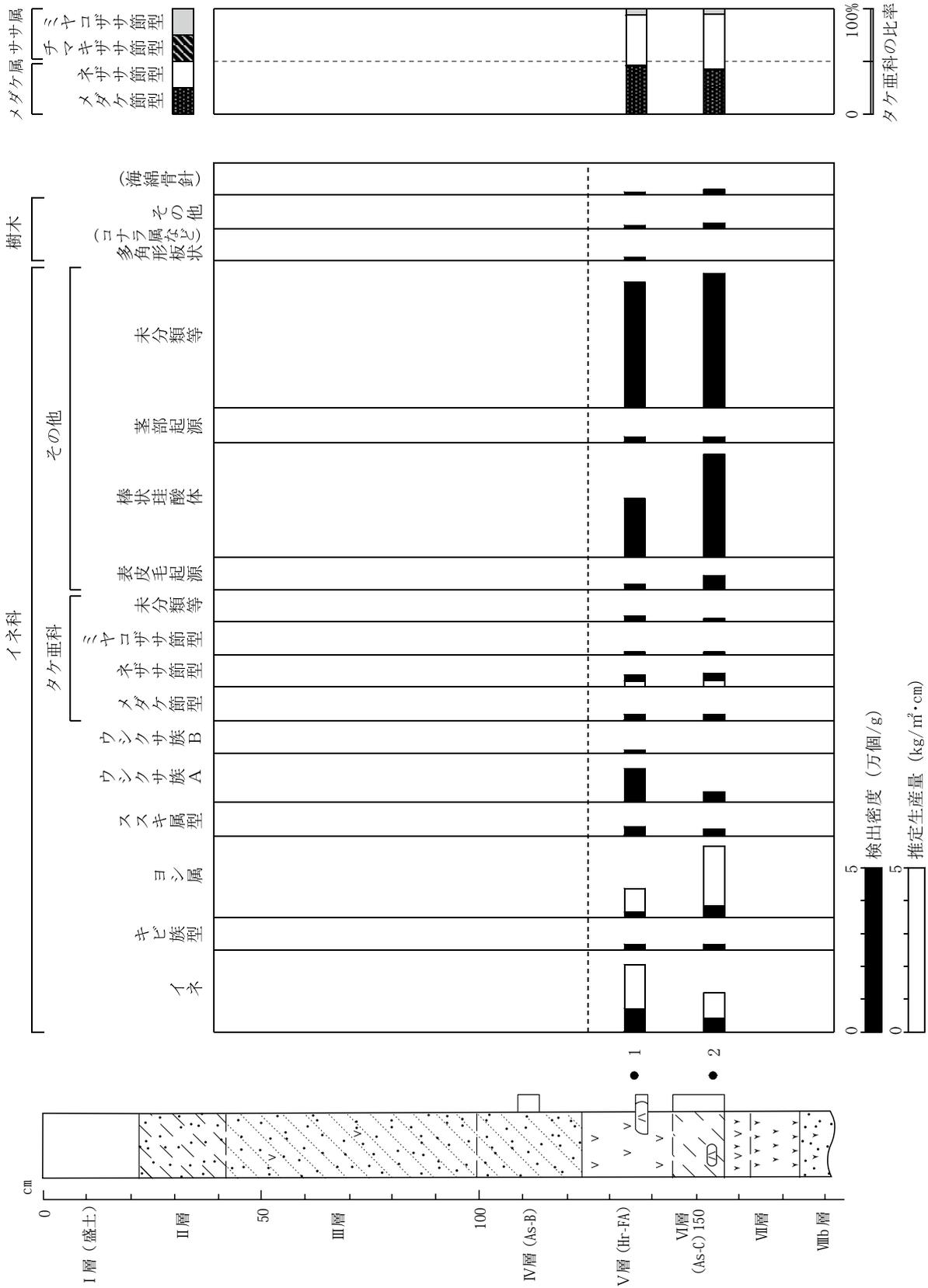
文献

近藤錬三・佐瀬隆 1986「植物珪酸体、その特性と応用」『第四紀研究』25 p.31-63.
 杉山真二 1999「植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史」『第四紀研究』38 (2) p.109-123
 杉山真二 2000「植物珪酸体（プラント・オパール）」『考古学と植物学』同成社 p.189-213
 藤原宏志 1976「プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—」『考古学と自然科学』9 p.15-29
 藤原宏志・杉山真二 1984「プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）—プラント・オパール分析による水田址の探査—」『考古学と自然科学』17 p.73-85

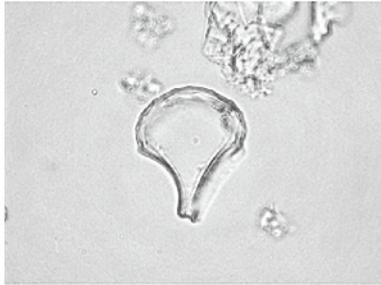
表7 喜多町遺跡における植物珪酸体分析結果
 検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	基本土層No.1	
		1	2
イネ科	Gramineae		
イネ	Oryza sativa	71	41
キビ族型	Paniceae type	14	14
ヨシ属	Phragmites	14	35
ススキ属型	Miscanthus type	21	14
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	99	28
ウシクサ族B	Andropogoneae B type	7	
タケ亜科	Bambusoideae		
メダケ節型	PL.eioblastus sect. Nipponocalamus	14	14
ネザサ節型	PL.eioblastus sect. Nezasa	35	41
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	7	7
未分類等	Others	14	7
その他のイネ科	Others		
表皮毛起源	Husk hair origin	14	41
棒状珪酸体	Rodshaped	177	311
茎部起源	Stem origin	14	14
未分類等	Others	382	408
樹木起源	Arboreal		
多角形板状（コナラ属など）	Polygonal PL.ate shaped (Quercus etc.)	7	
その他	Others	7	14
(海綿骨針)	Sponge	7	14
植物珪酸体総数	Total	899	988
おもな分類群の推定生産量（単位：kg/n ² ・cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出			
イネ	Oryza sativa	2.08	1.22
ヨシ属	Phragmites	0.89	2.18
ススキ属型	Miscanthus type	0.26	0.17
メダケ節型	PL.eioblastus sect. Nipponocalamus	0.16	0.16
ネザサ節型	PL.eioblastus sect. Nezasa	0.17	0.20
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	0.02	0.02
タケ亜科の比率（%）			
メダケ節型	PL.eioblastus sect. Nipponocalamus	46	42
ネザサ節型	PL.eioblastus sect. Nezasa	48	52
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	6	5

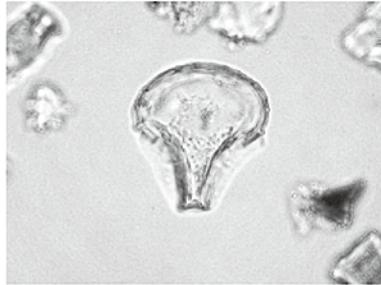
第2節 喜多町遺跡における植物珪酸体（プラント・オパール）分析



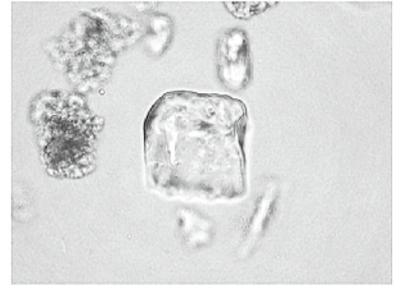
第97図 喜多町遺跡 基本土層1における植物珪酸体分析結果



イネ
試料 1



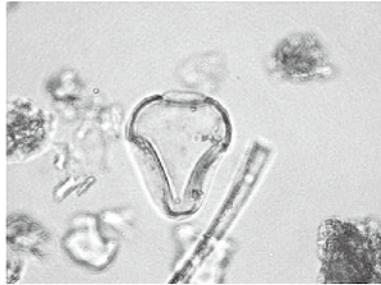
イネ
試料 2



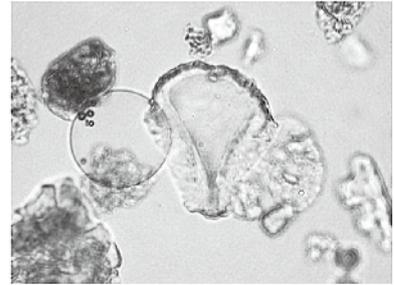
イネ (側面)
試料 2



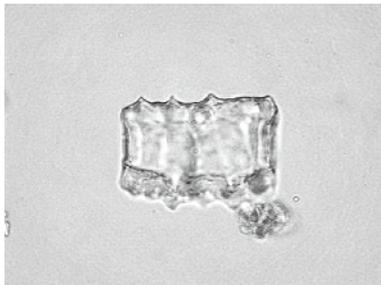
ヨシ属
試料 1



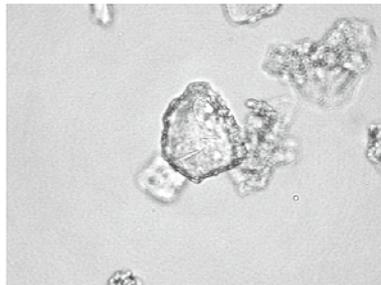
ススキ属型
試料 2



メダケ節型
試料 1



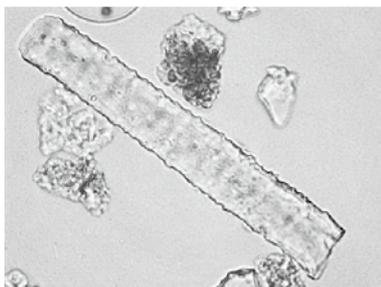
ネザサ節型
試料 2



ミヤコザサ節型
試料 2



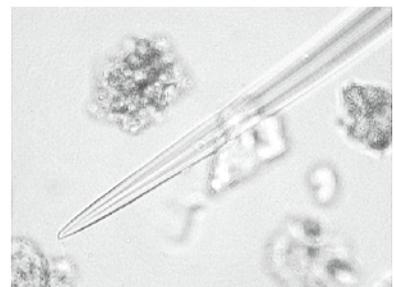
表皮毛起源
試料 2



棒状珪酸体
試料 1



イネ科の茎部起源
試料 1



海綿骨針
試料 1

50 μm

喜多町遺跡の植物珪酸体 (プラント・オパール)

第9章 まとめ

第1節 縄文期洪水層と遺跡分布

本遺跡は、広瀬川左岸に広がる低平な台地上にある。この台地は「伊勢崎台地」と呼ばれ、北西-南東方向に延び、これが旧利根川（現広瀬川）による微高地であることを示している。伊勢崎台地の形成年代についての詳細は明らかでないが、As-YP降下後の堆積とされ、厚い河川性の洪水堆積物で覆われている。

群馬県史・通史編の地質区分によれば、広瀬川左岸の台地は「伊勢崎台地上の微高地」とされている。それによると、伊勢崎台地上の微高地は神沢川-粕川間の標高80m以下にも広がり、必ずしも旧利根川の形成した微高地を指しているわけではないようである。むしろ、それは旧利根川（現広瀬川）に流れ込む河川性の氾濫性堆積物に起源する微高地、すなわち、扇状地地形が複合しているというべきであり、それが「伊勢崎台地上の微高地」とされるものの実態とすべきであることが分かる。

上述した現象は、これまでの発掘調査でも部分的に確認されているところであり、ここではこうした現象を総括したうえで、市域北部の縄文期集落の分布について述べていきたい。

1. 遺跡周辺の地形発達

旧伊勢崎市域の地形は、市街地中心部を流れる広瀬川より北の更新世の地形と、それより南の完新世の地形に大別することができる。市域北部の波志江地区には赤城山の山麓末端が延びている。華蔵寺や県立伊勢崎青少年育成センター（旧伊勢崎商業高校跡地）の丘陵は赤城山に点在する「流れ山」のひとつである。粕川を挟んだ東側の殖蓮地区には大間々扇状地Ⅰ面（桐原面）が広がり、こうした洪積台地には、下触牛伏遺跡・波志江西宿遺跡・三和工業団地Ⅰ遺跡・書上遺跡・大上遺跡・前道下遺跡など、旧石器遺跡の密集分布することが明らかにされている。

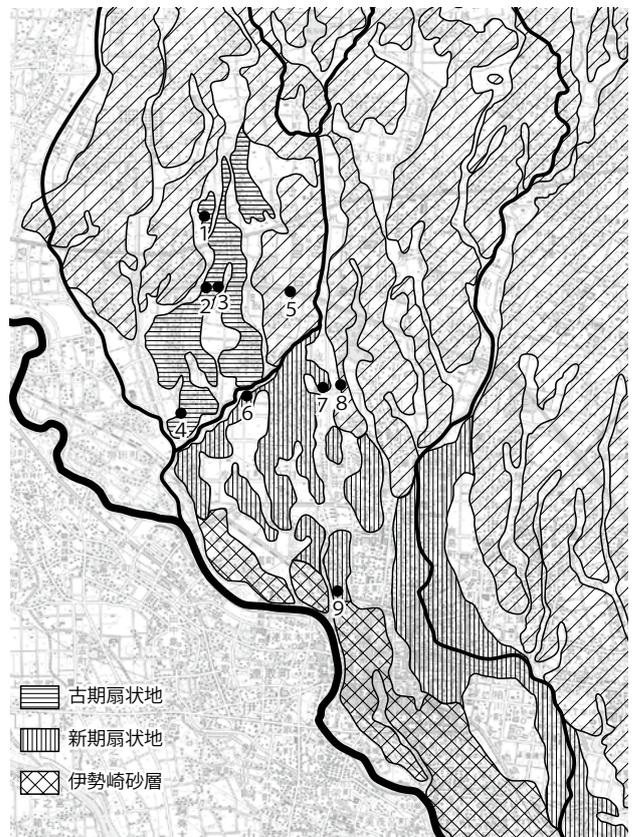
市域北部（神沢川-粕川間）標高80m以下の「伊勢崎台地上の微高地」には完新世に形成されたであろう扇状地が広がるのであるが、これまで得た考古学的所見から、

それぞれの扇状地（宮川-神沢川間の古期扇状地を含む）についてその形成年代を明らかにしておきたい。

a-1. 古期扇状地

前橋市荒子町付近を扇頂部、同新井町付近を扇端部とする扇状地である。扇状地堆積物については記載されていない遺跡が多く、地質学的所見から扇状地の形成年代を明らかにすることができない。このためその形成時期については考古学的手法で考えざるを得ない状況である。下記の遺跡では洪水層下は未調査で、出土遺物は洪水層堆積後に帰属することが明らかである。

<荒砥上ノ坊遺跡> 前橋市二之宮町に所在する縄文期から中・近世に及ぶ複合遺跡。縄文期遺構は前期後葉（諸磯b式期）の住居3がある。報告では、中央台地が砂壤土性の微高地、これを挟んでローム台地があるとされる。包含層出土の土器類については記載されていないが、同地区所在周辺遺跡の状況からみて、全域を完新世起源の台地とすべきであろう。



1 荒砥上ノ坊 2 宮下西 3 宮東 4 萩原 5 飯土井二本松
6 荒砥二之堰 7 波志江中屋敷 8 波志江中屋敷東 9 喜多町

第98図 市域北部の地形区分図

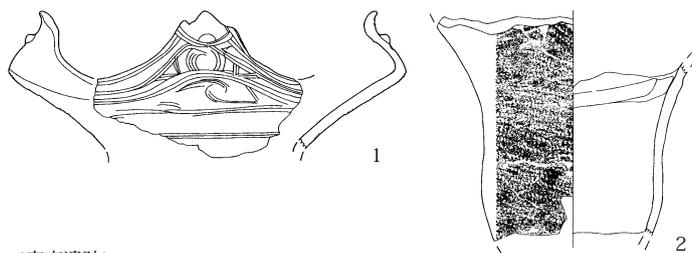
<二之宮宮東遺跡> 包含層出土遺物として、早期から後期の土器が報告されている。早期土器片は条痕文系の土器群とされており、他に前期諸磯b式期・中期加曾利E式期・後期称名寺式期の土器片が出土している。

<二之宮宮下東遺跡> 包含層出土遺物として早期から中期の土器片が報告されている。早期土器片は口唇部に絡状体圧痕様の文様を羽状構成するもので、茅山上層式とされている。

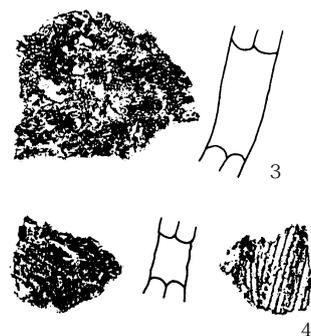
<萩原遺跡> 萩原遺跡では、暗褐色砂質土が赤城山の山体崩壊に起源することが記述されている。微高地（C区）では2m以上を掘削してなおローム層（未報告）は確認されていないようである。縄文期の遺構は土坑2基が検出されたのみであり、台地西端のA区において包含層から草創期から晩期の土器片類が出土している。草創期のそれは爪形文・押圧縄文であり、台地の形成年代がそれ以前に遡る可能性を示唆している。

萩原遺跡では最終段階で河道の調査が行われており、流木等が出土している。これについて報告されていないが、おそらく旧河道として機能、この低地が後に水田化されたというべきだろう。これより西側のA区に草創期の土器片が出土したこと、遺跡が神沢川―荒砥川の合流点にあり、これが旧利根川の攻撃面に位置することからその形成年代は古く草創期以前に遡る可能性も否定できないであろう。これに似た立地条件にある前橋市小島田八日市遺跡でも草創期石斧類が出土しており、遺跡付近

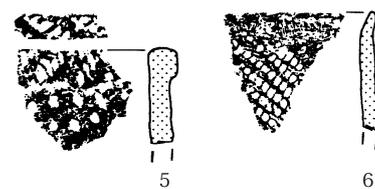
<荒砥上ノ坊遺跡>



<宮東遺跡>



<宮下東遺跡>



では古期扇状地堆積物が、旧利根川起源の形成した古い微高地と重複関係にあることも考慮すべきであろう。

a-2. 形成年代

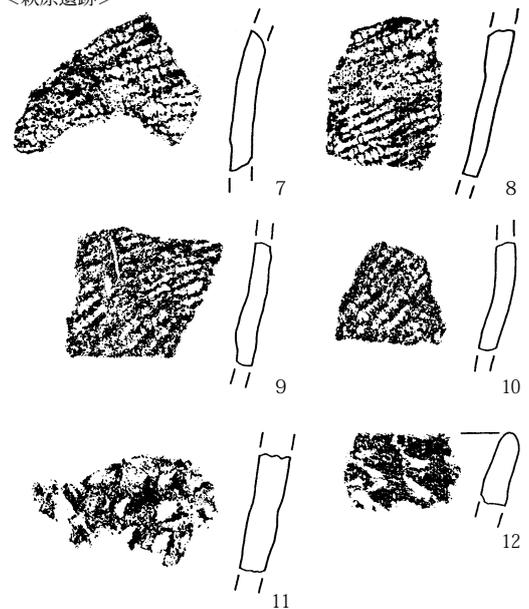
この扇状地（以下、荒砥扇状地と仮称）の形成年代については、上記遺跡内容から少なくとも早期段階には遺跡が存在することから、早期以前には離水していることが確実である。萩原遺跡の爪形文土器は、それより以前の台地化を示唆しており、年代的には旧利根川の左岸に広がる微高地とすべきかもしれない。荒砥扇状地と微高地の関係は明らかでなく、両者の関係については不明とせざるを得ない。

b-1. 新期扇状地

前橋市飯土井町付近を扇頂部として伊勢崎市波志江町付近に広がる扇状地で、その扇端部は本遺跡の周辺域にあるものと考えている。扇状地西端は現神沢川の流路に沿う台地ということになるであろうが、東端については粕川起源の微高地（扇状地）と重なり、詳細は明らかでない。

<飯土井二本松遺跡> 前橋市飯土井町に所在する縄文期から平安期に及ぶ遺跡であり、縄文期洪水層が間層を挟んで確認されている。調査区はA～D区までであり、各区で帰属時期の明らかな遺構が発見されている。洪水層は発掘初期からその存在が認識されており、神沢川右岸のD区において表土下3mの洪水層下黒色土から早期・撚糸文期後半の土器が発見されている。この洪水層は

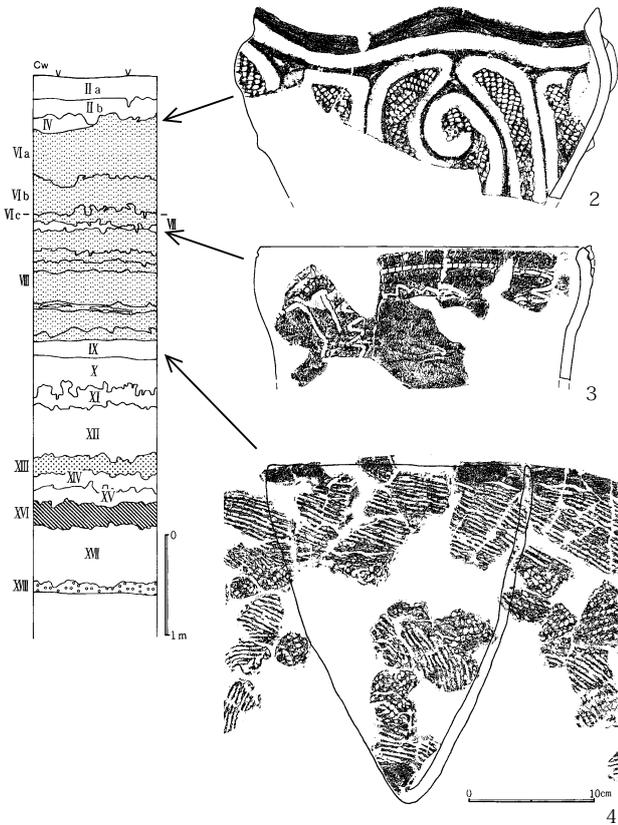
<萩原遺跡>



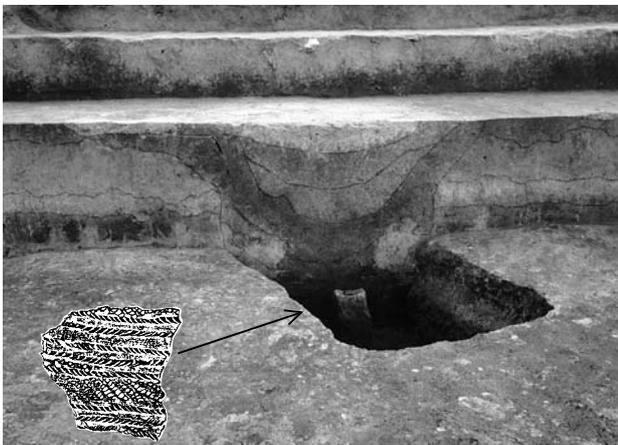
第99図 洪水層上面出土土器（古期扇状地）



飯土井二本松遺跡の旧河道と洪水層



第100図 洪水層と出土土器（飯土井二本松遺跡）



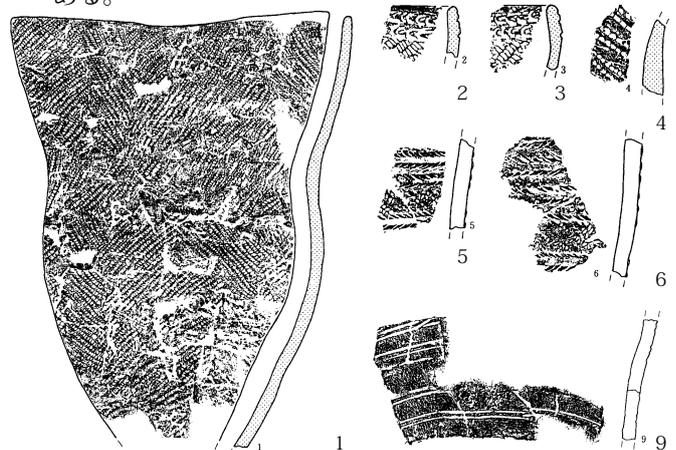
土坑出土土器

徐々に層厚を減じて、B区では完全に当該層が確認されなくなり、A区では再び洪水層が見られるようになる。A区の洪水層上面では中期後半（加曾利E 3式期）の住居が確認されたほか、洪水層下の包含層から中期前半（阿玉台式期）の土器片や、前期後葉（諸磯式期）・中期前半（阿玉台式期）の「陥穴」が発見されている。

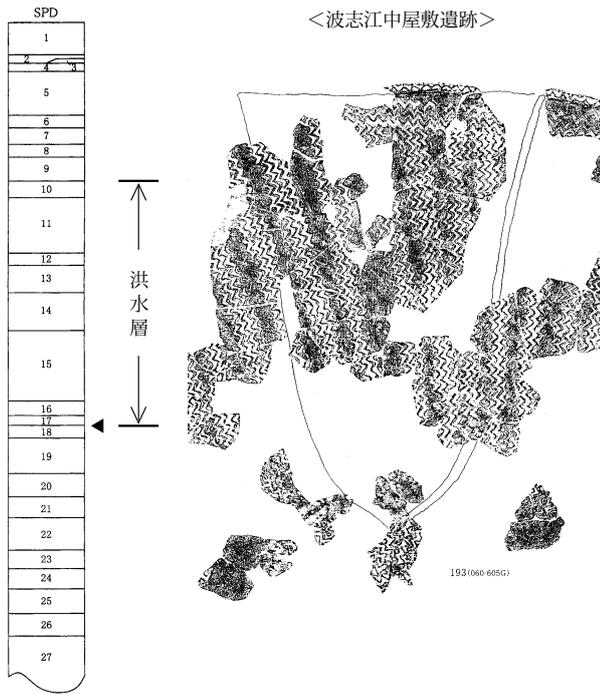
洪水層の堆積時期を考えるには、旧河道東の陥穴群と包含層出土の土器片が重要である。左下写真は旧河道東の陥穴群のひとつ（63号土坑）であるが、土坑と洪水層の関係を明確に示している。土坑は下層洪水層を掘り込み、上層洪水層により完全に埋没したことが明らかであり、覆土中から浮線文を有する土器片（諸磯b式土器、報告書 第43図7）が出土している。土坑確認面は洪水層下の黒色土上面だが、この黒色土は遺物包含層でもあり、前期・黒浜式土器や浮線文を添付した諸磯b式土器（報告書 第43図5・6）が出土、これにより下層洪水層の堆積時期が確定した。

以上、洪水層は間層を挟み上下二層に堆積すること、下層洪水層は前期後葉（諸磯b式期）に堆積したこと、上層洪水層は中期前半（阿玉台I b式期）から中期後半・加曾利E式期に間に堆積したことが明らかとなった。

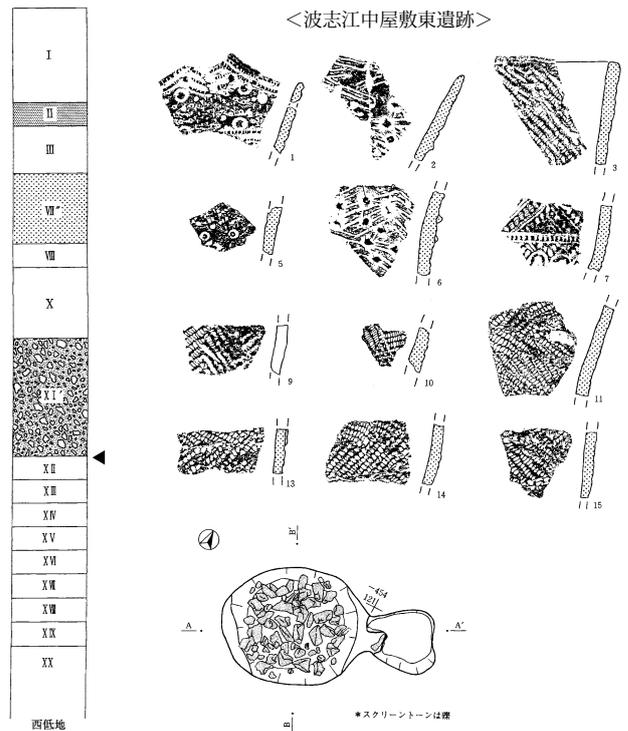
<波志江中屋敷遺跡> 伊勢崎市波志江町に所在する遺跡で、洪水層関連の遺物は北東側の斜面部で検出されている。基本土層9～17層が洪水層と見られ、洪水層下の黒色土から撚糸文期後半の土器が出土したほか、集石土坑2を確認している。包含層出土土器片類は撚糸文系土器群を主体に中・後期土器片が出土している。中・後期の土器片については出土層位は記載されていないが、出土位置からみて洪水層の上面でも出土しているようである。



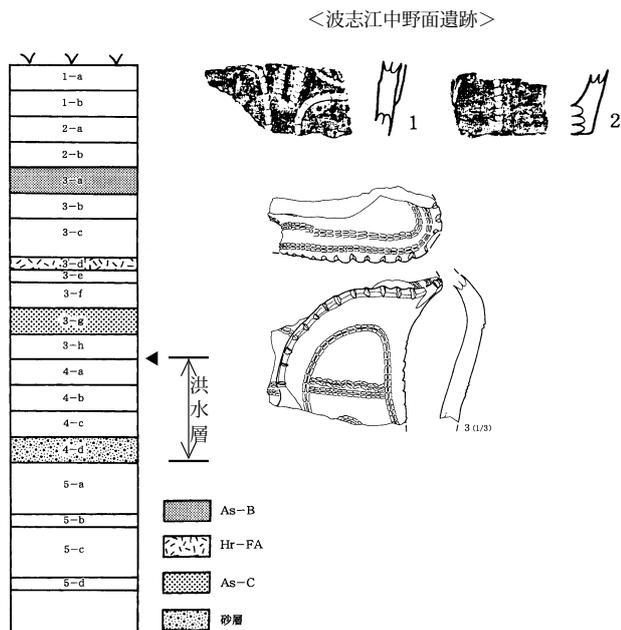
第101図 下層洪水層下の包含層



第102図 洪水層下出土土器 (1)



第103図 洪水層下出土土器 (2)

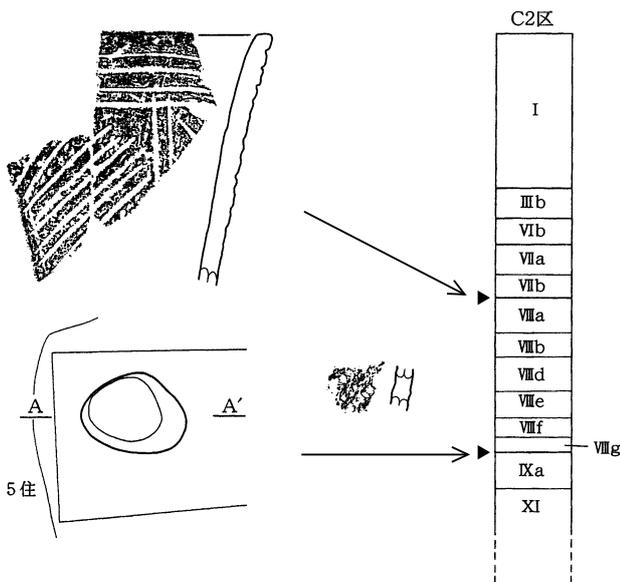
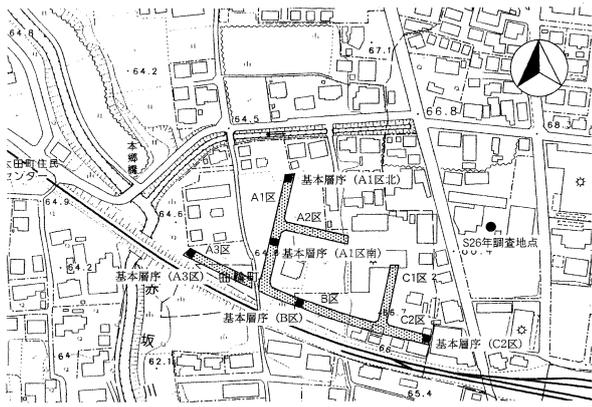


第104図 洪水層下出土土器 (3)

<波志江中屋敷東遺跡> 波志江中屋敷遺跡の東に隣接して立地する。調査区中央のローム台地を挟んで東西に低地部があり、縄文期洪水層は西側の低地で確認されている。洪水層は厚さ1mを超え、河道本体は確認されていないが、状況的に旧神沢川により形成された低地部と考えておきたい。全域で洪水層を除去しているわけでは

ないが、中央台地縁辺部の洪水層下で集石土坑1（下層に集石、上層に炭化物が充填）が確認されている。土器片類は伴出せずその帰属時期については明らかでないが、台地では前期前半の土器片類のみ出土しており、洪水層下から出土した炭化材の年代測定結果もそれに整合している。洪水層堆積の上限を絞り込む際の有力なデータになるだろう。

この遺跡では、縄文期洪水層の他、4世紀代の氾濫層も確認されている。この氾濫層は台地中央の住居・溝、東側低地部で堆積しており、相当規模の氾濫が想定されよう。氾濫層は、2号住（伊勢崎市教育委員会「大沼下遺跡、西稲岡遺跡」1977を再録）や1号溝の覆土中に見られ、これが溝を伝い、東側低地部の水田に流れ込んでいた。溝は東側低地の水田に続いていることから、台地の西側から引水していることが確実である。問題は水の供給源だが、それが河川であるならば神沢川ということになるだろう。台地縁辺の湧水や溜井から導水している可能性もあるだろうが、湧水では水量が問題となり、溜井ならその出現期が問題となるだろう。神沢川クラスの河川から取水することが可能か、そうした事例のデータは確認されていないが、これについては農業発達史的な観点から検討されるべきだろう。



第105図 洪水層と出土土器（喜多町遺跡）

＜波志江中野面遺跡＞ 神沢川左岸に所在する縄文中期から平安期に及ぶ遺跡で、対岸に新井大田関遺跡がある。縄文期氾濫層の詳細は不明だが、4a～d層がこれに相当する。縄文期住居の確認面は記載されていないが、4b層を住居覆土とするとされ、住居は4a層を掘り込んでいる可能性が高い。縄文期遺構は中期後半（加曾利E式期）から後期前半期が主体で、包含層出土土器類も中期から晩期のそれであるが、少量の阿玉台式期の土器片（報告書 第86図1～3）が含まれており注意しておきたい。すなわち、飯土井二本松遺跡の所見では同時期のそれは上位氾濫層直下の黒色土から出土しており、洪水というイベント性を考えるならば、中野面の中期前半期土器が上層洪水層の堆積時期を考えるうえで有力な資料となるためである。小片2点（86図1・2）は小片であり断定できないが、角押し文2列を刻む扇状把手（86図3）は阿玉台Ib式期とされるものであり、洪水層の下限を示す資料として捉えることができよう。

＜喜多町遺跡＞ 伊勢崎市教育委員会調査分の報告では、縄文中・後期包含層下に1m弱の氾濫層があり、下層黒色土上面で前期前半期の土坑が検出されたということである。包含層出土の土器片類には、草創期（隆線文土器）や早期（条痕文土器）土器片が少量出土しているが、これはこの地点の氾濫層が薄く、本来的には下層黒色土に包含したものとされた。洪水層上層から出土した土器片では前期後半（諸磯a式期）の土器片が最古であることから、洪水層の堆積を前期前半期から後半期に堆積したものであろうことが指摘されている。

この調査所見に従えば、喜多町遺跡には飯土井二本松の下層洪水層より古い洪水層が確認されたことになり、また、上層洪水層が堆積していないことになる。洪水層は厳密な対比が難しく、遺跡が扇状地末端にあり、上層洪水層が堆積していないということも可能性としては否定できないが、洪水層の下限（堆積時期）については1型式以上ずれており、検討の余地を残している。喜多町遺跡で最古の土器片とされたものは竪穴状遺構（C1区）から中・後期の土器片に混在して出土した諸磯a式期の土器片で、この地点の洪水層が厚く、下層黒色土から混入した可能性が極めて低いことを重視した想定を根拠としたものである。しかしながら、喜多町の洪水層はA1区南では2mを掘り下げてなお、下層黒色土が確認できていないが、この地点から10mほど北の地点（A1・A2区の交点）では、古代住居の柱穴が同層を掘り込んでいるとされているように、旧地形は複雑であるというべきである。また、前期後半の土器片が出土した土坑や竪穴状遺構は近々の柱状図作成地点（C2区）から直線距離で約30m離れており、旧地形が複雑であることを踏まえれば、即断は避けるべきである。洪水層は東側より西側、南側より北側に厚く堆積したとされるように上記遺構は洪水層が層厚を減じる遺跡の東側に位置しており、報告書の記載から想像を逞しくして言えば、前期後半の土器片も下層から混入した可能性も否定できないであろう。喜多町遺跡は、As-YP後に形成されたという旧利根川左岸の微高地と、神沢川起源の新期扇状地が重なる地点でもあり、同報告によるX層以下の砂質シルト層は旧利根川左岸の微高地か後背低湿地の堆積物であり、新規扇状地と伊勢崎砂層（台地）の重複する地域と理解されよう。

<南久保遺跡> 粕川左岸に立地する遺跡だが、同流域にも縄文期洪水層が堆積していることが判明した。発掘調査の結果、三軒屋遺跡（佐位郡衛正倉）に続く古代の道路遺構が発見され、注目を浴びた遺跡である。縄文期遺物は中期土器片が出土した。この遺跡で注目しておきたいのは、調査最終段階で確認した洪水層（下写真を参照）の存在である。土層の堆積状態は、上層遺構確認面下20cmに黒色土の間層があり、これを挟んで上下二層の洪水層が堆積していた。以下は黒色土・ローム層の順で堆積、ローム層の上位（地表面下約3m）でAs-YPが確認されている。上層洪水層下には、下層洪水層を掘り込んだ土坑があり、堆積状況は飯土井二本松遺跡の洪水層に酷似している。同様な洪水堆積物は粕川左岸にも広く堆積、三軒屋遺跡西の低地にも堆積しているようである。

b-2. 形成年代



南久保遺跡の洪水層

新期扇状地（以下、波志江扇状地と仮称）は途中間層を挟み新旧二期の氾濫層からなることが、飯土井二本松遺跡の調査で判明した。このことは前述した南久保遺跡でも確認されており、ほぼ確実視できる事実である。他遺跡では間層を挟んだ洪水層の堆積は確認されていないが、薄層であることも多く、見逃している可能性も否定できない。現状で洪水層の堆積年代について言えば、下記のとおりとなる。

扇状地の形成が中期後半（加曾利E式期）以前であることは明らかであり、また、間層を挟み上下二層があることも明らかである。飯土井二本松遺跡を例にとれば、下層洪水層が前期後葉・諸磯b式期に限定、上層洪水層が中期前半から中期後半の間に堆積したことが明らかである。洪水というイベントとしての性格上、ほぼ瞬間的

に堆積が完了したはずであり、仮に波志江中野面の土器が阿玉台Ib式ということになれば、上層洪水層の堆積時期が確定することになる。

c. 総括

以上の調査成果を踏まえ周辺域の地形発達について述べるなら、標高80m以下の地域には複数の扇状地が形成されていることが明らかである。一つは神沢川右岸に広がる縄文前期より古い扇状地（荒砥扇状地）で、一つは神沢川左岸に広がる新期扇状地（縄文早期から中期に形成、仮称波志江扇状地）、これとほぼ同時期に粕川左岸に扇状地（仮称殖蓮扇状地）が形成されたことになる。

旧利根川の形成した微高地については全貌が明らかでないが、遺跡地周辺域で神沢川起源の新期扇状地と重複するはずである。洪水層下の旧地形は複雑であろうことが明らかであるが、喜多町遺跡の報告（2008）に従えば、遺跡地の北側で厚く南側で薄く堆積していることから、遺跡地周辺域で洪水層が台地に乗上げたということになる。同聚院（旧赤石城）北西側に微弱な地形変換点があり注目しておきたい。

2. 遺跡分布

本遺跡に堆積した洪水層と飯土井二本松遺跡の洪水層の対応関係については必ずしも明らかではないが、それが縄文中期以前に堆積したものであることに異論はないものと考えている。これに加えて、市域北部の縄文中期以前の遺跡については洪水層が厚く堆積し、その存在については把握できていないということも明らかで、これについても異論はないであろう。旧利根川（現広瀬川）北の地域は市街地化が著しく、遺跡の認定を難しくしているが、洪水層の堆積年代が明らかになりつつあるいま遺跡の分布論なり集落論は、これを踏まえて展開されるべきであろう。

県内の縄文期集落は前期集落が丘陵部に、中期集落が広い低台地に占地する。このような傾向は以前から指摘されていたが、表層的現象の指摘に止まり、研究は停滞していた。こうした中で、集落の構造分析を踏まえ文化的な脈絡で事象を解釈する研究（石坂 2002）が示され、集落分析の視点が定まりつつある。それによると、中期後半期の大規模環状列石の出現を気候寒冷化に伴う文化的対応と捉え、その背景に集団の統合原理の再編があるという。そして、これに後出する柄鏡形敷石住居の前面

に大きく列石が延びる「核家屋」の構築も、環境悪化に伴い表出した社会的矛盾を解消するためのものであり、これを各領域の拠点集落であるとした。

中期末の環状集落の崩壊・大規模環状列石の出現、核家屋・配石墓の出現と続く文化要素は、気候変動に伴う資源の悪化（植生の変化、食糧資源の減少）を前に混乱した集団を統合するための文化装置のひとつである。環境悪化に対する通常の対処法は人口圧を小さくすることであり、まず分散居住することでそれは達成されるのであるが、それでもなお適応できない場合、よりよい環境を求めて移動することになるだろう。長期的には人口減として表出する。県内縄文遺跡は中期末を境に明らかに減少傾向にあり、特に晩期遺跡は数えるほどになるのもそうしたことの反映というべきだろう。市域の縄文遺跡の分布も、基本的に上記した解釈枠で理解することが可能である。

a. 市域縄文期遺跡の分布

<中期以前の遺跡分布>

伊勢崎市域の縄文期遺跡は北東側に濃く、北西側に薄い。これは縄文時代全般を通じ変わらない傾向であろうが、市域北西域でも幹線道路関連の調査で洪水層下から燃糸文期後半の遺跡（飯土井二本松・波志江中屋敷遺跡）や前期中葉の遺跡（波志江中屋敷東遺跡、関山期の土坑

確認）が発見されており、相当数の縄文遺跡が分布するとすべきだろう。

市域北西部の遺跡分布（群馬県文化財情報システムを参照）は、古い村落（旧波志江村・旧安堀村・旧太田村）を載せる台地に分布しており、水田を除く大部分が遺跡地とされている（明治18年の陸軍省測量図）。当地の旧地形は洪水層で厚く覆われその復元は困難だが、県道74号線（大胡県道）より東の波志江地区には飯土井二本松遺跡から続くローム台地があり、また、粕川左岸に所在する南久保遺跡では洪水層下にローム層が確認されており、独立丘陵（波志江権現山・華蔵寺）から続く旧太田村や粕川右岸の台地下にもローム層が堆積している可能性が高い。総括的に言えば、遺跡は洪水層により台地化した部分にあるということになるが、独立丘陵の延長上にはローム台地が埋没、早期（燃糸文期）や前期初頭（花積下層式期）の遺跡増加期とされるような段階の遺跡が埋没している可能性が指摘されよう。

<中期以後の遺跡分布>

中期以降の遺跡は早川流域や「天ヶ池」周辺域、神沢川・赤坂川流域に分布している。各河川流域には大規模遺跡も多く、早川右岸の曲沢遺跡では加曾利E式期の大規模「環状集落」が形成されており、これに似た大規模遺跡が「天ヶ池」周辺にある。三和工業団地Ⅱ遺跡や天

表8 流域別に見た集落規模と継続期間
<神沢川流域>

遺跡名	型式名									
	阿玉台	加曾利E 1・2	加曾利 E 3	加曾利 E 4	称名寺 1	称名寺 2	堀之内 1	堀之内 2	加曾利 B	安行
飯土井二本松			●							
荒砥二之堰			●	●	●	●	●			
波志江中野面				●						
波志江中屋敷										
波志江中屋敷東										
喜多町				●	●					

<早川流域>

遺跡名	型式名									
	阿玉台	加曾利E 1・2	加曾利 E 3	加曾利 E 4	称名寺 1	称名寺 2	堀之内 1	堀之内 2	加曾利 B	安行
曲沢			●			●			○	
下元屋敷（調節池）				●		●		●		
根性坊				●		●				
下田		●	●	●		●		●		

<天ヶ池>

遺跡名	型式名									
	阿玉台	加曾利E 1・2	加曾利 E 3	加曾利 E 4	称名寺 1	称名寺 2	堀之内 1	堀之内 2	加曾利 B	安行
三和工業団地Ⅱ	●	●	●	●			●			
天ヶ堤	●	●	●	●	●		●			
鯉沼東		●								

住居軒数 ● ~5 ● 6~10 ● 11~15 ● 16~20 ● 21~30 ● 31~

ヶ堤遺跡がそれで、中期後半の環状集落と見なす見解もある。この見解に従えば、径300mにも及ぶ大規模な環状集落が形成されていたことになるが、両遺跡の報告では三和工業団地は加曾利E 1 式期、天ヶ堤遺跡は加曾利E 3 式期にピークがあり、加曾利E 式期の集落配置は企画性があるようである。

曲沢遺跡や三和工業団地Ⅱ遺跡・天ヶ堤遺跡は拠点的集落とされているが、約3kmと近距離にある。常識的なテリトリー論から言えば、両集落は独立的に理解されるのであろうが、曲沢遺跡の全貌・詳細が不明であり現状では結論を導き得ない。

こうした大規模な環状集落とは別に、それぞれの流域には小規模で継続性の乏しい集落遺跡が点在する。早川流域の下元屋敷・根性坊・天神沼遺跡、神沢川・赤坂川流域の荒砥二之堰・飯土井二本松・波志江中野面・喜多町遺跡がそれである。時期的には中期後半（加曾利E 3・4 式期）から後期初頭（称名寺式期）の集落であり、概して小規模で継続性に乏しいが、荒砥二之堰遺跡のみ加曾利E 3 式期住居から堀之内式期まで集落が継続する。荒砥二之堰遺跡の最新のデータでは中期後半期に最大7棟の住居が想定されているが、ここでも後期以降の住居の減少傾向は明らかである。

b. 遺跡増減の背景

縄文期遺跡の増減については、人口増加と気候の寒冷化に求める見解が大勢を占めている。本県でも後期以降の遺跡減は明らかであり、これは包含層出土土器片類の出土量に明らかに相関している。具体的に言えば、後期中葉以後の土器片類が遺構に伴わず包含層から少量出土するあり方である。地域的に見た際それが一般的であるならば、土器片類のみ残す縄文人の資源利用の在り方が示されているというべきで、縄文人が地域資源を放射状開発していたという前提に立てば、ある意味で土器片類の出土量が地域の生産力（資源量）を示しているということができよう。このような想定に立てば、土器片類の型式別出土量も重要データとなるだろう。

市域を含む東毛域は利根川中流域や西毛域と異なり、環状列石の受容されない地域とされている。環状列石が環境悪化に伴う文化的対応ということであるなら、それが受容されない理由が東毛域にはあるとすべきで、その具体的解明が今後の課題というべきであろう。環状列石

を受容した地域においては前代の集落とは立地を違えて環状列石を伴う大規模集落が立地するということであるが、考古学的には当該地域における時期別集落の立地やその継続性が問われることになるだろう。具体的には、環状列石出現期の当該地域において同時期の集落が突然出現するようなケースがあるかどうかだが、市域の縄文遺跡の報告を見る限り、前代から継続する集落が主体であり、これが地域的特性ともいべきものとなるだろう。これに対して、住居内の敷石行為の受容は上述した環境悪化に伴う文化的対応のひとつとして理解されることになるが、個別住居内で完結する敷石行為を集団協業による環状列石構築と同等に評価することはできない。これについては、すでに集落間の階層差として言及されている。

縄文期の気候変動については以前から指摘されており、近年のデータ類も後期以後の寒冷化を支持しているが、発掘データとしては二之宮千束遺跡（群埋文 第111集）や三和工業団地Ⅰ遺跡の低地部のデータが示されているのにすぎない。三和工業団地Ⅰ遺跡のデータは低地部の浸食（縄文晩期、2760±60年 暦年代BC900）だが、市域北部を覆う洪水層も気候変動を反映したイベントとして理解されるものであろうが、地質学的・古気候学データと対比することなしには検証できないため、土器型式毎の絶対年代整備が急務となるだろう。

本稿では、市域北部に広がる洪水堆積物の堆積時期について検討、併せて当該地域の縄文期遺跡分布について述べた。洪水層という性格上、堆積状況は地点毎に異なるなど複雑だが、今後は洪水層の遺跡間対比が焦点となるものと考えている。市域北部の縄文期遺跡分布については、洪水層下の調査が少ないことを積極的に捉え洪水層堆積後（縄文中期以降）の遺跡分布については検討が可能であるという立場で見解を述べた。本遺跡上流域の発掘で明らかにされたように、洪水層下にはそれ以前の縄文遺跡が埋没しているはずであり、旧石器遺跡が存在する可能性さえある。今後、当該地域の発掘は洪水層堆積域という地域特殊性を踏まえるべきであろう。

参考文献

石坂 茂 2002 「縄文時代中期末葉の環状集落の崩壊と環状列石の出現」『研究紀要』20（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

第2節 喜多町遺跡出土の古墳時代前期の土器

はじめに

伊勢崎市にある喜多町遺跡は昭和27年に小規模な発掘調査が行われ、古墳時代前期の東海系土器を主とする土器群が発見されたことでよく知られている（第4図、松島1986）。特にパレススタイル壺の存在は、同年に発掘調査が行われた石田川遺跡でのS字状口縁台付き甕とともに、古墳時代初頭の群馬県と東海地方西部が密接な関連を持っていることを予期させるのに充分であった。また同時に出土した東海西部系および北陸系の器台は、古墳時代初期における外来系土器のなかでも古段階の稀少例であるにも関わらず、遺構に伴わないとの一括性の保証を欠くために、これまで議論の対象となることはほとんどなかったといつてよい（註1）。ほぼ同時期の土器群の存在が判明したこの度の喜多町遺跡の調査成果とあわせて、古墳時代前期における時系列上の位置づけ、および他遺跡出土土器群との対比を試みることで、あらためて当該地域における外来系土器群の様相に焦点を当ててみることにしたい。

1. 器種組成にみる外来系土器群

ここでいう「外来系土器」とは、北関東北西部の後期弥生土器として定着していた「在来系土器」に対位するもので、具体的には樽式土器や吉ヶ谷・赤井戸式土器の系譜とは別系統の出自と理解される土器様式群を指す。

器種組成は、壺・甕・高坏・鉢・埴・器台・有孔鉢・ミニアチュア・手焙形土器で、県北～西部に広く分布していた樽式に比べて片口鉢と短頸壺が欠落しており、有孔鉢が相対的に少ない。一方、いわゆる小型器台が主要な構成器種の座を占めていることが樽式と大きく異なる点である。

樽式にも壺や甕の口頸部のみを転用した土器台の例が見られるが、土師器に転換する時期まで直接地床における安定した平底形態を発達させていることから、壺などを台に載せて床より高く据える用法そのものが一般的でなかったと考えられる。また小型器台に載せて使用すると想定される埴は、機能的には樽式の最新段階で見られ

る小壺や小型鉢と同じと考えられ、器種組成上の新規参入ではなく形式の交替であると理解したい。

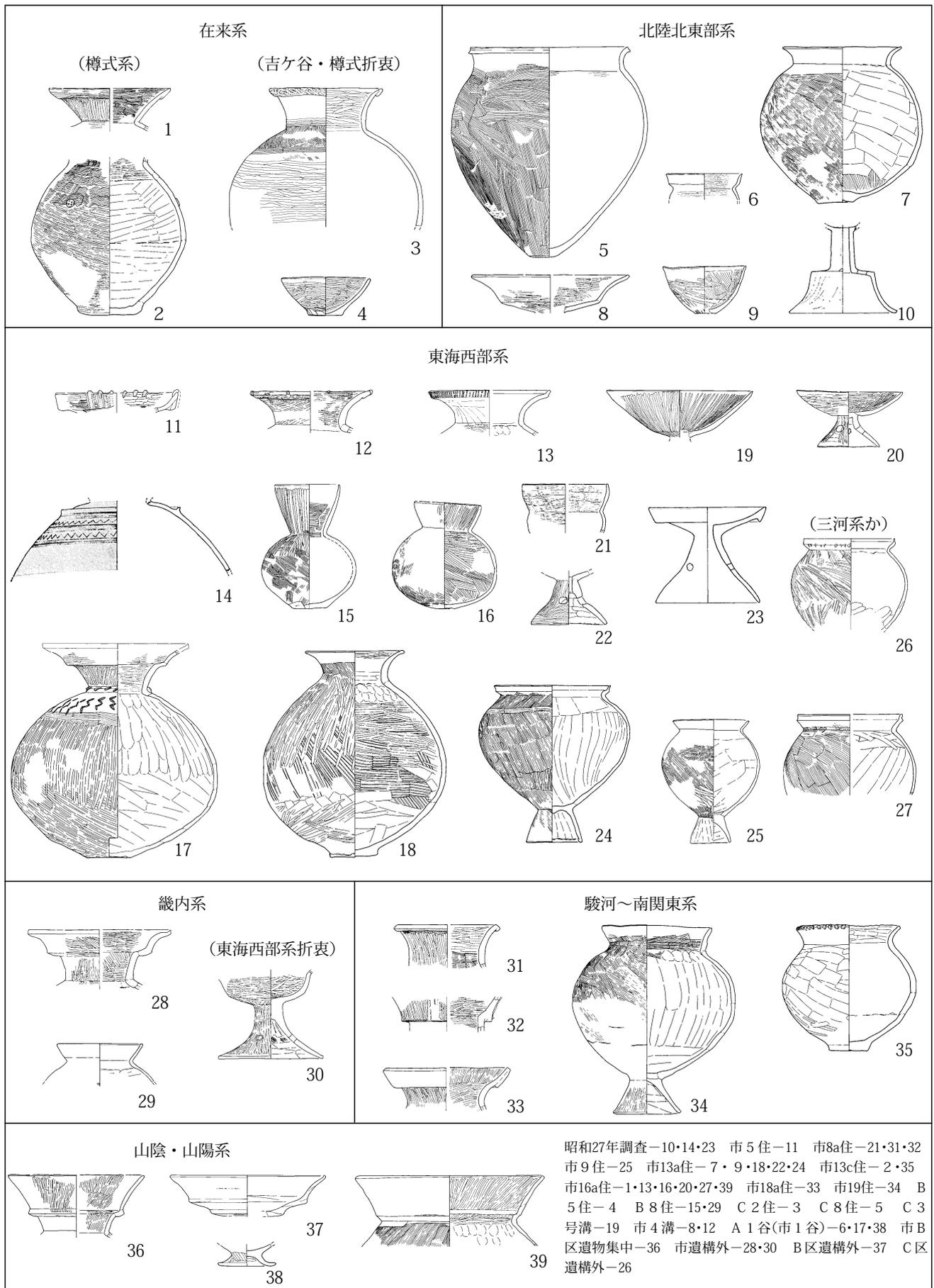
各器種を構成する形式をみると、壺では二重口縁壺・直口壺、甕では台付甕・平底甕、高坏では有稜の大型品と小型品、器台は受け部形態に多様な変化のある小型品が主体を占める。

壺のなかで粘土帯を付加する折り返し口縁壺と単口縁壺、甕では平底甕の一部に樽式ないし吉ヶ谷・赤井戸式の系譜上で理解可能なものも見られるが、本報告で掲載したなかで明らかにそれといえるのは、口縁に縄文、肩に樽式の櫛描文を施した壺（第106図3）1点のみである。伊勢崎市教委調査でも壺2点がみられるのみである。壺以外では浅く逆円錐形で横位磨きを施す例（第106図4）が樽式の範疇でとらえられる。

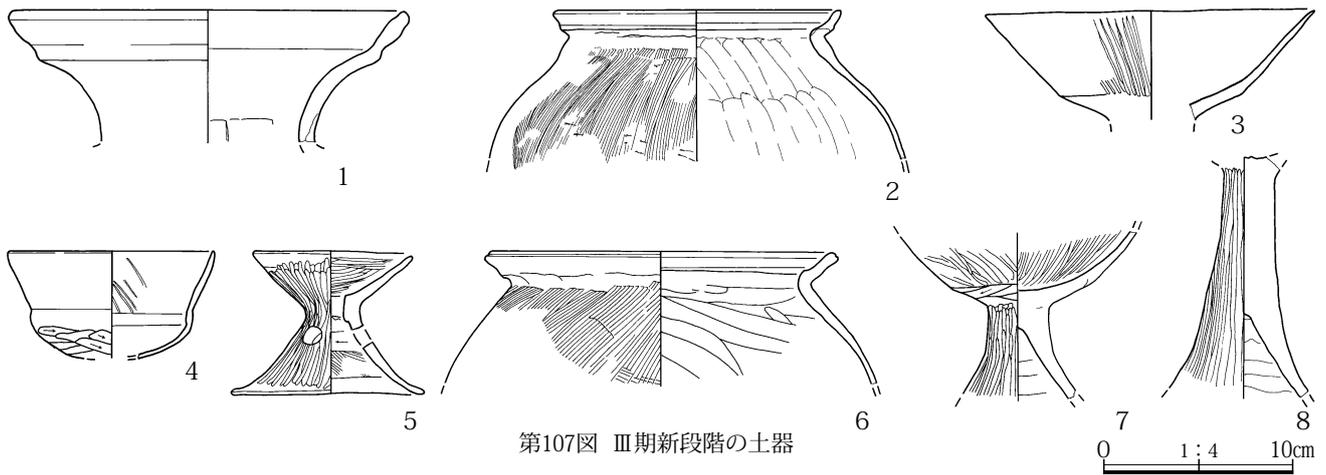
2. 外来系土器の分類

本遺跡では外来系土器群が主体を占めており、東海西部系・北陸北東部系・駿河～南関東系・畿内系のほか、少数ながら山陽系や山陰系も加わる。これらの地域における各様式との関連で想定できる代表例を第106図に掲げた。搬入品の是非はともかくとして、伝播経由地や在地での融合と変容を想定した上で、敢えて各様式のもつ個性的な特徴と結びつけて分類したものである。

東海西部系では、欠山から元屋敷様式に相当するパレススタイル壺（第106図14）・口唇部に加飾した広口壺（同図12・13）・単口縁壺（同図18）・伊勢型二重口縁壺（同図17）・内彎直口壺（同図15）・内彎短頸壺（同図16）の壺類、S字状口縁台付甕（以下「S字甕」と呼ぶ。同図24）・くの字口縁台付甕（同図25）・受け口状口縁甕（同図26・27）の甕類、中型器台（同図23）・小型器台（同図22）、および有稜高坏（同図19・20）、手焙形土器（第52図7）があげられる。口縁の擬凹線と肩部の櫛描横線文を「松葉束」を想定させる施文具で描く例（第52図3）、頸部形状が北陸系の折衷例（市調査10b住1）はパレス壺の模倣として捉えられよう。無文単口縁壺（第106図18）は口唇部の外傾する面取りや「柳ヶ坪型壺」に類似する下膨れの胴部形状から東海西部系に含めた。くの字口縁台付甕（同図25）は、肩付近が張る倒卵形の体部にやや高さが低く内彎ぎみに開く脚台を付ける形態で、南関東～駿河湾系のものと分離した。受け口状口縁甕（同



第106図 外来系土器分類図(縮尺1/8)



第107図 III期新段階の土器

図26・27)は上方に薄く立ち上がる口唇形態から三河ないし伊勢系統と想定している(比田井 2000)。ただし、26は二条単位とも見られる太い櫛目状具で横～斜位にきわめて粗い印象の刷毛目を施す点を近江系の要素として捉えることも不可能ではない。昭和27年調査時に出土した器台(同図23)は、折り返し口縁の形状と内彎して開く脚形状から東海西部系とされてきた(松島 1986)が、口縁外面に擬凹線が認められず、伊勢湾地域よりむしろ北陸で類例が多いことを理由に、北陸地方からの影響や在地で変容した可能性も指摘されている(原田 1998)。

手焙形土器(第52図7)は口縁断面がS字形となるもので、伊勢を主分布域とする「S字系手焙形土器」(川崎2006)として分類されるが、ナデ整形の丸底品であることから従来知られている例より形式的に新しい段階か、在地で変容したとの見方が可能だろう。ここでは、胎土や焼成の特徴が他の在産品とは明らかに異なることから、前者に属する搬入品と想定しておきたい。

北陸系では、北東部に分布する単口縁の千種甕(第106図5・7)、小型壺(同図6)、高坏(同図8)、器台(同図10)が見られる。なお半球形の有孔鉢(同図9)と内彎ぎみに大きく開く蓋(市調査34住2)は、在来系弥生土器の系譜では理解しにくい形状であり、古墳前期でのもっとも近似する候補として北陸北東部を想定しておきたい。昭和27年調査で出土した器台(同図10)は、筒形脚柱部と水平に大きく張り出し強い稜をもって外反する裾部をもつ形態で、最も新しく見積もっても月影式の範疇、千種甕との関連から北東部の編年(滝沢 2005)でみても4期を下るものではないだろう。すなわち濃尾平野の廻間I式期に相当することになり、本遺跡出土土器

のなかでは最古段階に遡らせ得る例であることを指摘しておく。

駿河～南関東系としては、断面方形の折り返し(肥厚)口縁の壺(同図31)・幅広い折り返し口縁の壺(同図33)、球胴の単口縁台付甕(同図34)、平底甕(同図35)などがあげられる。壺は東駿河系の影響と考えられる折り返し口縁断面下部形状が方形になる32や、網目状撚糸文を施した東京湾岸から古利根川下流域からの搬入品と考えられるものもみられる(註2)。刷毛目整形の単口縁台付甕は中遠江から東京湾岸までを含めた広い分布域のなかで地域を特定する根拠に乏しい。平底甕は器高の低い球胴形で、上総地域との関連を想定しておきたい(註3)。

畿内系では、筒状頸部の二重口縁壺(同図28)、布留型甕(同図29)、有段高坏(同図30)、布留式系の長脚高坏があげられるが、搬入品の可能性が高い布留型甕以外は、中継地ないしは在地で変容を遂げたものと理解される。なお、畿内型二重口縁の小型壺(第37図8)は、短いながらも筒状の頸部に大きく開く口縁形状を呈するが、胴部形態が下膨れであることから東海西部で融合変容した形態と考えておきたい。

山陰・山陽系として、低脚坏(第106図38)、有段高坏(同図37)が見られる。これ以外にS字甕に山陰系甕の口縁形状を融合させた大型台付甕(同図39)が出土していることも付記しておく。山陰系については直接的というより北陸地方を介して流入ないし影響を受けたものであろう。なお、第106図36は口縁下段が外方に膨らみやや突出ぎみになる形状から、山陽系の可能性を考えておきたい。群馬県における吉備系土器の出土例はほとんど知ら

れていないが、北陸や畿内を介した流通ネットワークの細肢で結ばれていた可能性にも留意すれば、これまで見過ごされてきた資料も再確認できるのではないかと期待している。

以上に掲げた外来系土器のなかで、器種、形式、数量とも最も豊富で本遺跡の主体を占めるのが東海西部系であり、次に千種甕を主とする北陸北東部系が続く。単口縁刷毛目整形甕は甕類全体の中でS字甕に次ぐ量を占めるが、全形の不明な資料が多く東海～南関東地方のいずれかに限定することは困難である。これら東海道沿辺地域での弥生的伝統を残す特徴的な壺類が少ないのは、時期的に斉一化した二重口縁壺や単口縁壺などの諸形式がすでに広く普及していたためであろう。そのことは逆に、在来弥生色を色濃く残す段階での交流がけっして多くはなかったことを意味するのだろう。このことは、在地の後期弥生土器である樽式との関連性を検討する上できわめて重要である。先述したように、本遺跡からは樽式の壺が出土しているが、あくまで客的存在でしかなく、無文となった後継型式も非常に少ない。伊勢崎市教委調査分の13c号住居跡出土の樽式壺(第106図2)は、刻み口縁をもつ南関東系平底甕、千種甕、くの字口縁と想定される台付甕と共伴しており、本報告に掲げたC2号住居跡では、樽式の系譜を引く壺がパレス壺模倣品やくの字状口縁甕、S字系手焙形土器と共伴する(第52図)。これらは、群馬県における古墳時代初期様相と解釈されてきた樽式土器器制のなかに小型器台などの外来系土器が加わるという組成とは異なり、外来系土器群のなかに樽式土器の一部が持ち込まれた様相を示す。この様相差を樽式から外来系土器に次第に転換していくといった時間的に連続する先後関係で理解することは、本遺跡にはそもそも樽式土器を使用する集団の痕跡が認められないことや、樽式土器が破片を含めてもきわめて少なく、しかも器種が壺と鉢のわずかな数量のみに限られているという不自然さから否定的といわざるを得ない。

3. 編年上の位置づけ

前項で明示した外来系土器群について、編年上の位置づけを検討しておく。主体的位置を占める東海西部系のうち、最古段階は昭和27年調査時に出土したパレス壺(第106図14)や器台(同図10)があげられ、廻間編年のⅡ

式期古段階に相当すると考えられる。C区1号住のパレス壺(第50図1・2)、S字甕(B類相当、同図4)、C区市13a号住居跡の小型器台(第106図22)なども同時期と考えてよいだろう。また遺構外出土の受け口状口縁甕(同図26)についても同時期と理解しておきたい。東海西部系で最新段階といえるのは、B区8号住居跡のS字甕D類(第37図25・26)である。伊勢型二重口縁壺から派生した型式と考えられる口縁上段が縮小する二重口縁壺(第107図1)や布留式系の屈折長脚高坏(第107図3・8)もほぼこの時期の所産と捉えておく。柳ヶ坪型壺は認められないが、濃尾平野編年での松河戸Ⅰ式期に相当すると考えられよう。

以上の東海西部系土器の編年的位置づけから、赤塚氏による暦年代対比(赤塚 2006)に基づく3世紀前半～4世紀前半のほぼ100年間に相当する時間幅をもつことになる。この間に、東海西部系土器群は当地に広く定着し、在地化が進んだということになる。本遺跡で見られるS字甕や伊勢型二重口縁壺の大部分はこの在地化したものと理解されるが、S字甕D類や山陰系との融合で生まれた大型台付甕の存在から推測されるように、故地である伊勢湾岸地域との交流は限定的ながらも継続していたのだろう。北陸北東部系の土器群では、先述したように有段脚をもつ器台が最古段階に位置づけられる。千種甕については、2005年のシンポジウム『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』での編年(滝沢 2005)より5～7期の範疇で捉えられ、この時期が廻間Ⅱ式期～Ⅲ式前半にほぼ並行するとの編年観と本遺跡でのあり方は矛盾しない。下限については不明確だが、ラグビーボール形に長胴化した丸底状の単口縁甕(市調査6住5)が千種甕の後継型式と捉えることが許されるならば、廻間Ⅲ式新段階や松河戸式期まで下る可能性もあり、群馬県において北陸系が東海西部系にやや先行して流入したのは事実としても、入れ替わるのではなくしばらくは共存していたと想定しておくべきだろう。群馬県において、古墳時代の初期に波及した北陸北東部系土器群は、一過性の存在であり、古墳前期中段階には払拭されるとの理解(若狭・深澤 2005)がある。しかし、器形や成整形技法の斉一化が進む古墳時代前期の土器様相において、地域様式の特徴が濃厚で比較的判別しやすい段階が古墳時代初頭と考えれば、それ以後に消滅してし

まうのではなく、現代の研究者が識別していないだけだともいえる。群馬県出土の北陸北東部系千種甕をみても、型式差やバラエティーが大きく、在地変容を想定したとしてもある程度の時間幅を認めざるを得ないと考えるがどうであろうか。本遺跡例を見てもS字甕が主体となる段階まで存続していたのは間違いないように思える。これについてはあらためて良好な共伴事例を元に言及するつもりである。南関東や東海東部系、畿内系については、器形の判明するものが少なく明確な編年の時間幅を示せないが、いずれも東海西部系で検討した時間幅の中に収まるものである。

本遺跡出土の古墳前期土器についての時期区分については、伊勢崎市報告でのⅠ・Ⅱ・Ⅲ（古）・Ⅲ（新）期の4段階区分（宮本 2008）を基本的に踏襲したい。ただし、同時期区分はS字甕の型式変遷を基準にしているために、「肩部外面からヨコハケがなくなり、タテ～ナメハケのみのS字甕と共伴する土器群」としたⅢ期について新旧二細分するにとどまっている。本論では、口縁上段の短縮した二重口縁壺（第107図1）・布留式系屈折長脚高坏（同図3・7・8）・体部が浅く小さな埴（同図4）、口縁屈曲が弱く口縁上段が肥厚するS字甕（おそらく体部は長胴化し足の長いハケ目を施す型式、同図6）、及び畿内系のX字形器台の模倣と思われる小型器台（同図5）で構成される一群を新たに「Ⅲ期新段階」とし、市報告の「Ⅲ期（新）」をさらに二細分した新しい段階にあてたい。これにより、市報告で古墳時代中期の「Ⅳ期」との間にあるとするヒアタス（宮本 2008）を埋めることができよう。市報告の時期区分との対応関係については以下のとおりである。

市報告	本報告
Ⅰ期	Ⅰ期
Ⅱ期	Ⅱ期
Ⅲ期（古）	Ⅲ期古段階
Ⅲ期（新）	Ⅲ期中段階・Ⅲ期新段階

なお昭和27年調査出土土器のうち、東海西部系とした器台（第106図23）とB類に相当するS字甕はⅠ期、本報告のB区市10a号住居跡出土土器（第48図）をⅢ期新段階の例として位置づけておく。B区8号住居跡でS字甕D類（第37図25・26）がⅡ期段階まで遡る土器と混在しているが、出土層位から一定期間後の流入か廃棄と考

えられ、Ⅲ期新段階に位置づけるのがふさわしいと考えられる。ここに設定したⅢ期新段階は、全体を研磨仕上げ（縦位主体）にした布留式系の精製高杯をそのメルクマールと考えており、明らかに一段階として設定することが可能である。ただし、時間差の表徴とも考えられている高杯脚内部の中実と中空の差は、本遺跡例では不明であり、どの程度の時間幅を持つのかについてはここでは検討できなかった。また、その組成について、小型器台や薄手の精製埴が伴うと想定したが、他遺跡例における良好な共伴事例の検証によって修正される可能性も想定しておくつもりである。

本遺跡の最古段階については、昭和27年調査出土の北陸系器台（第106図10）が検討対象となる。これを月影式の範疇で理解すれば、他に相当する時期の他型式が見あたらないためにとりあえずⅠ期に位置づけるが、未調査地区での未発見例の可能性を考慮すれば先Ⅰ期の設定も想定すべきかもしれない。

4. 遺跡間の様相差について

喜多町遺跡の土器群は、東海西部系土器を主体として、これに北陸系・東海東部～南関東系・畿内系が加わって構成される。在来系の樽式壺は残留ではなく外部から持ち込まれた客体と考えた。本遺跡のⅠ～Ⅱ期とほぼ同時期に、約5km以北の赤城山南麓には在来系土器を主体とする集落群や北陸系の主要器種がそろった荒砥上ノ坊遺跡、北北西3km地点には喜多町遺跡と同様な土器様相を示す波志江中野面遺跡、北東4km地点には東海東部系と南関東系が卓越する三和工業団地遺跡・舞台遺跡、西方2km地点には西太田遺跡ほか十王台式の散布地が存在する。当地域に分布するこれらの遺跡単位あるいは小地域毎に異なる土器様相について、これまで在来系→南関東系・北陸系→東海西部系との時系列で理解する考え方が強かったが、本遺跡でⅠ期とした土器の存在は、東海西部系土器が井野川流域だけでなく県南東部にも早い段階で進出していたことを物語る。その時期は、東海西部の廻間Ⅱ式古段階、近年の暦年代観で3世紀前半に相当すると考えられ、先に掲げた異なる土器様相をもつ周辺遺跡との間に時間的先後関係を確認することはできない。強いていえば、北方の赤城山南麓地域の樽式を主体とする遺跡のなかでより古くから定着していた集団の存在を

見いだす可能性があるといった程度だろう。本遺跡で見られる在来系・北陸系・南関東～東海東部系の土器は、故地との直接的な交流関係よりも周辺地域に存在した別集団との頻繁な交流によって入手したとの考え方が自然ではないか。もちろん本遺跡の主体を占める東海西部系土器についても同じ土器様相をもつ拠点的集団とのネットワークを通じて遠隔地である伊勢湾地域との密接な交流を保ち続けた賜物であろう。また本遺跡から周辺の他遺跡へともたらされた東海西部系も少なくなかったと考える。赤城山南麓に分布する遺跡に見る在来系土器群に伴うS字甕、一方の喜多町遺跡で外来系土器群に伴った樽式壺は、このような双方向の土器移動の結果として理解される。ならば、古墳時代初期の様相として認識されてきた「弥生後期の在来土器群に小型器台や外来系高坏が組成に加わるあり方」というのは、その頃に近辺地域に進出してきた外来系土器集団との交流あってこそのもではなかったか。こう考えれば、古墳時代初期の外来系土器が、遠隔地からの搬入品そのものより在地の土を用いた搬入品そっくりの土器が圧倒的に多いことも容易に理解できる。東海系土器の第1次拡散と評される現象は、結果として東日本各地に東海系文物や技術情報などを広めるサテライト的役割を担うことになった集団の移動を示すものであろうと改めて再認識する。喜多町遺跡で形成された最初のムラは、群馬県東南部の低地域に進出した東海勢力の情報発信基地であり、流通ネットワークを形成することになる初期の一拠点として出発したと理解できよう。

当地域に見るような複数様式の土器群が同一地域内で独自に存在し、小地域単位や遺跡単位で、さらに微細に見れば住居跡単位にまで、他と異なる土器様相を示す理由として、まず、土器の生産需要のあり方が基本的には各々の単位内で完結するシステムであったろうことを仮説の前提条件として考えておきたい。そして個々の土器様式を主体として堅持しつづけた遺跡の一定期間の共存は、各々が異なる出自集団のムラとして開始し、同族意識を維持し続ける必要があったためではないか。とはいえ、先に述べたように他集団の土器を交流によって入手したとの解釈からすれば、必ずしも排他的なのではなく、客体的存在ならば許容する程度だったと理解してよい(註4)。東海地方西部系土器は、4世紀前半代には

群馬県の南半部から埼玉県北西部にまで広く普及し、これと相対するように在来系や東海地方西部以外の外来系土器が消滅していく様相がうかがわれる。この変化こそが、群馬県の地域社会を再構成したと評価される古墳時代社会の成立を表す一側面だということができよう。すなわち、従来の土器生産需要システムの崩壊と、これにかわる東海西部系土器様式への広範囲で一時的な転換であり、その背景には新たな土器規制に従属せざるを得ない強制力が働いていたと考えるべきだろう。ここでは、大規模な水田開発や古墳築造などの土木事業を可能にするための労働力の再編成、またこれと関連した専門化の進展による日常労働からの土器製作の分離が、結果として土器の斉一化に結びつくことになったとの仮説を提示しておきたい。

註

- 1 群馬県の古墳時代前期土器編年を行った橋本氏は、小型器台を含む外来系出現期の第1段階(橋本 1993)に、深澤氏は第2段階(深澤 1998)に位置づけている。
- 2 伊勢崎市教育委員会調査の33号住居跡から壺肩部片が出土している(伊勢崎市教委 2008)。
- 3 渡良瀬川を隔てた栃木県側では、くの字口縁平底甕が主体をなすことが知られており、南関東からの波及を想定している(今平 2000)。隣接する群馬県南東部での波及もこれと一連の現象ととらえてよいだろう。
- 4 喜多町遺跡から西方2kmと至近距離であるにも関わらず、伊勢崎市西太田遺跡で出土する十王台式土器が喜多町遺跡のみならず波志江中野面遺跡や荒砥上之坊遺跡のような外来系主体ないし積極的に受容した遺跡で見られない。その要因として、十王台式土器の流入が時空的に限定されたものであったこと、一部を除き他集団との交流を受容しなかったことなどが考えられる。

参考文献

- 伊勢崎市教育委員会 2008『喜多町遺跡』
 今平利幸 2000「下野における古墳時代前期外来系土器の波及と定着」『栃木県考古学会誌』第21集
 比田井克仁 2000「受け口状口縁甕考」『西相模考古』9
 松島栄治 1986「喜多町遺跡」『群馬県史 資料編2 原始古代2 弥生・土師』
 原田 幹 1998「伊勢湾地域における土器群の画期と交流」『庄内式土器研究』XVI
 川崎志乃 2006「S字系手焙形土器の行方」『古代学研究』175
 滝沢規朗 2005「土器の分類と変遷」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第1分冊 新潟県考古学会
 赤塚次郎 2006「東海系土器と東日本の墳丘墓」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター
 宮本久子 2008「第IX章3節 古墳時代の土器」『喜多町遺跡』伊勢崎市教育委員会
 若狭徹・深澤敦仁 2005「北関東西部における古墳出現期の社会」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第1分冊 新潟県考古学会

遺物観察表

B区 12号住居

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	胎土/色調/焼成	成・整形の特徴 他	備考	
1	第15図 PL-19	深鉢	敷石直上 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/灰黄/ふつ う	横位2条の隆帯をめぐらせ、隆帯間にRLを横位充填 施文する。	加曾利E4式	
2	第15図 PL-19	深鉢	床直(埋糞) 胴~底部2/5	粗砂、細礫/にぶい黄橙/ふつ う	底径7.5cm。LRを縦位充填施文する。	加曾利E4式	
3	第15図 PL-19	深鉢	ビット覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/黄灰/ふつ う	横位隆帯をめぐらせて口縁部無文帯を区画、隆帯下 にRLを縦位充填施文する。	加曾利E4式	
4	第15図 PL-19	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒、石英/に ぶい黄橙/ふつう	帯状沈線により曲線モチーフを描く。	称名寺Ⅱ式	
No.	挿図NO. 図版NO.	器種 形態・素材	出土位置	長さ重量 幅 cm・g	石材	特徴	備考
5	第15図 PL-19	石核? 楕円偏平礫	覆土	10.2 419.6 8.3	黒色頁岩	表裏面・小口部で幅広剥片1を剥離。小口部のエッ ジに打点があり、敲石として捉えるべきか?	
6	第15図 PL-19	磨石 楕円偏平礫	敷石 床直	16.4 1496.7 12.9	アプライト	背面側平坦面が摩耗するほか、側縁・小口部に打痕。	
7	第15図 PL-19	多孔石 楕円偏平礫	敷石 床直	26.0 3615.1 8.9	珪質頁岩	表裏面にロート状の凹穴。背面側摩耗。	

C区 6a号住居

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	胎土/色調/焼成	成・整形の特徴 他	備考	
1	第17図 PL-19	深鉢	床直(埋糞炉) 口縁~胴下位3/4	粗砂、細礫、片岩/にぶい黄橙/ふ つう	横位隆帯をめぐらせて口縁部無文帯を区画、隆帯下 は沈線による三角形モチーフを描き、LRを充填施 文する。口縁に2単位の橋状突起を付した痕跡あり。 横断面が楕円形を呈し、橋状突起を付す軸が長軸で 径36.0cm、短径は29.0cmを測る。	後期 加曾利E系	
2	第17図 PL-19	深鉢	床直(埋糞炉) 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/橙/ふつ う	隆帯による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E4式	
3	第17図 PL-19	深鉢	床直(埋糞炉) 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/石英/橙/ ふつう	LRを斜位充填施文する。	加曾利E4式	
4	第17図 PL-19	深鉢	床直(埋糞炉) 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/浅黄橙/ふ つう	横位隆帯、懸垂文を施し、LRを縦位充填施文する。	加曾利E4式	
5	第17図 PL-19	深鉢	床直(埋糞炉) 胴部破片	粗砂、細礫/にぶい黄橙/ふつ う	RLを縦位充填施文する。	加曾利E4式	
6	第18図 PL-19	深鉢	床直(埋糞炉) 口縁部破片	粗砂、白色粒/黄灰/ふつ う	口径13.0cm。キャリパー状の器形で、橋状突起を付 した痕跡あり。口縁下に無文帯を区画、帯状沈線に よりJ字状など曲線モチーフを描き、RLを充填施文 する。	後期 加曾利E4系	
7	第17図 PL-20	深鉢	ビット11覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、白色粒/にぶい黄 橙/ふつう	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E3式	
8	第18図 PL-20	深鉢	ビット10覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒、石英/灰 黄褐/ふつう	隆帯をめぐらせて口縁部無文帯を区画。	加曾利E4式	
9	第18図 PL-20	深鉢	ビット9、10覆土 口縁部破片	粗砂、砂礫、白色粒、黒色粒/に ぶい黄橙/ふつう	隆帯により楕円状モチーフを描き、RLを充填施文す る。	加曾利E3式	
10	第18図 PL-20	深鉢	覆土 胴部破片		92と同一個体。	加曾利E3式	
11	第18図 PL-20	深鉢	ビット9、11覆土 胴部破片	粗砂/にぶい黄橙/ふつ う	隆帯による懸垂文を施し、RLを充填施文する。	加曾利E4式	
12	第18図 PL-20	深鉢	ビット11覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/橙/良好	擦糸文Rを地文とし、横位2条の沈線をめぐらせて 沈線間を磨り消す。	加曾利E2式	
13	第18図 PL-20	深鉢	ビット11覆土 胴部破片	粗砂/橙/ふつ う	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、列点を充填 施文する。	称名寺Ⅱ式	
No.	挿図NO. 図版NO.	器種 形態・素材	出土位置	長さ重量 幅 cm・g	石材	特徴	備考
14	第18図 PL-20	石核 偏平礫	床直	7.3 262.5 8.7	黒色頁岩	表裏面で小型剥片を剥離。下端部に打痕・小剥離痕 があり、敲石としての使用も考えておきたい。	
15	第18図 PL-20	石製品 長形状	床直	6.1 23.6 4.4	軽石	軟質で整形痕等は不明だが、形態的には面取り整形 は明らか。時期的には大胡火砕流起源の軽石。	
16	第18図 PL-20	打製石斧 分銅型	床直	15.2 196.5 9.8	頁岩	完成状態。全体に摩耗しており、ローリングしたよ うにも見えるが、装着部相当部の摩耗は堅調で、摩 耗度が異なり、捲縛痕・使用痕として理解すること ができる。	
17	第18図 PL-20	凹石 楕円礫	埋糞炉	12.7 851.3 4.7	粗粒輝石安山岩	背面側にロート状の凹穴を穿つ。表裏面とも著しく 摩耗。	

遺物観察表

18	第18図 PL-20	凹石 楕円偏平礫	覆土	12.5 500.1 8.3	粗粒輝石安山岩	背面側中央付近に集合打痕、側縁打痕。表裏面とも摩耗。被熱。
19	第18図 PL-20	多孔石 楕円偏平礫	埋ガメ炉 炉石	(20.8) 1886.9 (15.1)	粗粒輝石安山岩	背面側にロート状の凹穴を穿つ。
20	第18図 PL-20	敲石 棒状礫	覆土	(10.8) 641.6 7.4	ひん岩	小口に近い背面に打痕が集中するほか、側縁にも打痕がある。
21	第18図 PL-20	石製研磨具 棒状礫	ビット9	8.1 77.5 2.5	ひん岩	線条痕は微弱だが、摩耗状況から上下両端の小口部・右辺側縁が主たる機能部として想定可能。

C区 6b号住居

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	胎土/色調/焼成	成・整形の特徴 他	備考	
22	第19図 PL-20	深鉢	床直(埋喪)、1号 土坑覆土 胴~底部4/5	粗砂、白色粒、黒色粒/にぶい黄 橙/ふつう	底径6.8cm。横位隆帯をめぐらせて口縁部無文帯を区 画、隆帯下はLRを充填施文する。2単位の橋状把手 を付す。	加曾利E4式	
23	第19図 PL-20	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒/浅黄/ふつう	沈線により楕円状モチーフを描き、RLを充填施文す る。	加曾利E4式	
24	第19図 PL-20	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒/灰黄褐/ふつう	波状口縁。隆帯貼付により口縁部無文帯を区画。沈 線により楕円状モチーフを描き、LRを充填施文する。	加曾利E4式	
25	第19図 PL-20	深鉢	ビット2覆土 口縁部破片	粗砂/にぶい赤褐/良好	沈線をめぐらせて口縁部無文帯を区画。	加曾利E4式	
26	第19図 PL-20	深鉢	床直(埋喪) 胴部破片	粗砂、白色粒/黄灰/ふつう	沈線により楕円状モチーフを描き、RLを充填施文す る。	加曾利E4式	
27	第19図 PL-20	深鉢	覆土 胴部破片		31と同一個体。	加曾利E3式	
28	第19図 PL-21	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/にぶい黄 褐/良好	隆帯による横位楕円状モチーフ、沈線による懸垂文 を施してLRを充填施文する。	加曾利E3式	
29	第19図 PL-21	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/浅黄/ふつ う	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E3式	
30	第19図 PL-21	深鉢	覆土 胴部破片		29と同一個体。	加曾利E3式	
31	第19図 PL-21	深鉢	床直(埋喪) 胴部破片	粗砂、細礫、白色粒、黒色粒/に ぶい黄橙/ふつう	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E3式	
32	第19図 PL-21	深鉢	覆土 胴部破片		29と同一個体。	加曾利E3式	
33	第19図 PL-21	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、黒色粒、石英/浅黄/ふつう	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、列点を充填 施文する。	称名寺Ⅱ式	
34	第19図 PL-21	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、黒色粒/灰黄褐/ふつう	波状口縁。沈線により楕円状モチーフを描き、列点 を充填施文する。	称名寺Ⅱ式	
35	第19図 PL-21	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、黒色粒、石英/橙/ふつう	斜格子目沈線を施す。	堀之内Ⅰ式	
36	第19図 PL-21	深鉢	ビット4覆土 口縁部破片	粗砂、黒色粒/にぶい黄橙/ふつう	口縁外面肥厚。横位、斜位の沈線を施す。地文にLR 施文。	堀之内Ⅰ式	
37	第19図 PL-21	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、細礫/浅黄/ふつう	口縁が短く内折。LRを地文とし、横位帯状沈線を施す。	堀之内Ⅱ式	
38	第19図 PL-21	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、石英/灰黄褐/良好	口縁下に隆線をめぐらせ、帯状沈線により幾何学モ チーフを描き、LRを充填施文する。補修孔あり。	堀之内Ⅱ式	
39	第19図 PL-23	深鉢	覆土 胴部破片		38と同一個体。	堀之内Ⅱ式	
40	第19図 PL-21	深鉢	覆土 胴部破片	細砂/黒褐/良好	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施 文する。	堀之内Ⅱ式	
41	第19図 PL-21	深鉢	ビット3覆土 口縁部破片	細砂、白色粒/浅黄/ふつう	口縁が短く内折。口縁下に刻みを付した隆線を1条 めぐらせ、沈線による幾何学モチーフを描く。	堀之内Ⅱ式	
42	第19図 PL-21	深鉢	ビット3覆土 口縁部破片	細砂/浅灰/ふつう	口縁が短く内折。刻みを付した隆線を2条めぐらせ、 縦位隆線で連結。交点に円形刺突を施す。	堀之内Ⅱ式	
No.	挿図NO. 図版NO.	器種 形態・素材	出土位置	長さ重量 幅 cm・g	石材	特徴	備考
43	第19図 PL-21	石核 柱状河床礫	敷石材	16.5 2025.8 10.7	変質玄武岩	分割面周辺に小剥離痕。剥離は試し割り様だが、そ れは分割時に確認できることで、その目的は明らか でない。	
44	第20図 PL-21	石皿 無縁	敷石材	(17.4) 1135.3 (12.5)	粗粒輝石安山岩	背面・中央下部が顕著に摩耗するほか、裏面側縁側 の摩耗も著しく、稜が形成されている。	
45	第20図 PL-21	石棒 無頭・円柱形	埋喪	(19.6) 4156.7 12.0	デイサイト	ルーベ等で線条痕は確認できないほど体部研磨は丁 寧だが、やや斜行する上面の研磨は部分的。体部研 磨が入念であることからみて、再生品としての理解 が可能?	
46	第20図 PL-21	凹石 楕円偏平礫	敷石材	(11.5) 757.0 11.1	粗粒輝石安山岩	破損面付近に顕著な集合打痕。表裏面とも摩耗して いるが、背面側摩耗が著しい。	

47	第20図 PL-21	凹石 楕円偏平礫	1号埋ガメ上面	11.2 329.6 6.4	石英閃緑岩	表裏面とも集合打痕・摩耗が顕著。集合打痕は摩耗。両側縁の使用が顕著で、稜が生じている。
----	---------------	-------------	---------	-------------------	-------	---

B区 1号埋裏

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	胎土/色調/焼成	成・整形の特徴 他	備考
1	第21図 PL-21	深鉢	床直(埋裏) 胴~底部2/3	粗砂、白色粒、黒色粒、石英/に ぶい黄橙/ふつう	底径8.8cm。帯状沈線により8の字状モチーフを描き、LRを縦充充填施文する。	後期 加曾利E系

B区 3号土坑

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	胎土/色調/焼成	成・整形の特徴 他	備考
1	第22図 PL-21	器台	床直(埋裏) 完形	粗砂、細礫、白色粒/橙/ふつう	上径12.5cm、下径16.2cm。器高7.2cm。2単位で2個 一対の円孔を穿つ。上面は緩く凹む。	加曾利E4式

C区 1号土坑

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	胎土/色調/焼成	成・整形の特徴 他	備考
1	第22図 PL-21	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/にぶい黄 橙/ふつう	沈線による懸垂文を施し、RLを縦充充填施文する。	加曾利E4式

C区 6号土坑

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	胎土/色調/焼成	成・整形の特徴 他	備考
1	第22図 PL-21	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/浅黄橙/良 好	隆帯により縦充楕円状モチーフを描き、LRを充充填施文する。	後期 加曾利E系

C区 2号土坑

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	胎土/色調/焼成	成・整形の特徴 他	備考	
1	第22図 PL-22	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒、石英/灰 黄/ふつう	口唇内面肥厚。帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充充填施文する。	称名寺I式	
2	第22図 PL-22	深鉢	覆土 胴部破片	細砂、白色粒/褐灰/ふつう	沈線により楕円状モチーフを描き、LRを充充填施文する。	称名寺I式	
3	第22図 PL-22	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒、石英/に ぶい黄橙/ふつう	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充充填施文する。	称名寺I式	
4	第22図 PL-22	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒、石英/に ぶい黄橙/ふつう	帯状沈線により幾何学モチーフを描く。	称名寺II式	
5	第22図 PL-22	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/にぶい黄 橙/ふつう	細沈線により楕円状など幾何学モチーフを描く。	堀之内I式	
6	第23図 PL-22	深鉢	覆土 口縁~底部4/5	粗砂、白色粒、黒色粒/灰黄褐/ふ つう	口径28.5cm、底径8.5cm、器高35.7cm。横位隆帯をめぐらせて口縁部無文帯を区画、隆帯下にRLを縦充充填施文する。口縁に2単位の橋状突起を付す。	加曾利E4式	
7	第23図 PL-22	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒、石英/黄 灰/ふつう	隆帯により弧状モチーフを描き、LRを充充填施文する。	加曾利E4式	
8	第23図 PL-22	深鉢	覆土 口縁部破片	細砂/灰白/ふつう	波状口縁で口縁が緩く内湾。沈線をめぐらせて幅狭な口縁部無文帯を区画、沈線下にRLを充充填施文する。	加曾利E4式	
9	第23図 PL-22	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、細礫、白色粒、黒色粒/浅 黄橙/ふつう	隆帯による懸垂文を施し、LRを縦充充填施文する。	加曾利E4式	
10	第23図 PL-22	深鉢	覆土 胴部破片		7と同一個体。	加曾利E4式	
11	第23図 PL-22	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、細礫、白色粒、黒色粒/黄 橙/ふつう	沈線により弧状モチーフを描き、LRを充充填施文する。	加曾利E4式	
12	第23図 PL-22	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、細礫、黒色粒/にぶい黄橙/ ふつう	隆帯による懸垂文を施し、LRを充充填施文する。	加曾利E4式	
No.	挿図NO. 図版NO.	器種 形態・素材	出土位置	長さ 重量 幅 cm・g	石材	特徴	備考
13	第23図 PL-22	加工痕ある剥片 幅広剥片	覆土	6.9 44.0 4.7	黒色頁岩	尖頭削器様だが、加工は裏面側打面部の側縁側加工を意識しており、側削器として理解すべきものである。	
14	第23図 PL-22	石錐(ドリル) 石錐	覆土	6.7 20.7 4.9	黒色頁岩	機能部先端は著しい回転摩耗痕。摘み部の右辺の摩耗は手ズレによるものか?	

C区 3号土坑

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	胎土/色調/焼成	成・整形の特徴 他	備考
1	第23図 PL-22	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/にぶい黄 橙/ふつう	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充充填施文する。	称名寺I式
2	第23図 PL-22	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂石英/にぶい黄橙/ふつう	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充充填施文する。	称名寺I式

遺物観察表

3	第23図 PL-22	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒/橙/良好	横位隆帯をめぐらせて口縁部無文帯を区画、隆帯下にRLを充填施文する。	加曾利E4式		
4	第23図 PL-22	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/橙/良好	LRを縦位充填施文する。	加曾利E4式		
5	第23図 PL-22	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒/にぶい黄橙/ふつう	隆帯による懸垂文を施し、LRを充填施文する。	加曾利E4式		
6	第23図 PL-22	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/にぶい黄橙/良好	隆帯による懸垂文を施し、無節LRを縦位充填施文する。	加曾利E4式		
7	第23図 PL-22	深鉢	覆土 口縁部破片	細砂、白色粒、石英/にぶい黄橙/ふつう	横位隆帯をめぐらせて口縁部無文帯を区画、隆帯下にRLを充填施文する。	加曾利E4式		
No.	挿図NO. 図版NO.	器種 形態・素材	出土位置	長さ 幅 cm・g	重量	石材	特徴	備考
8	第23図 PL-22	削器? 幅広剥片	覆土	5.5 3.5	14.5	黒色頁岩	両側縁を粗く加工、尖頭削器様を呈する。	
9	第23図 PL-22	凹石 球形礫	覆土	9.5 8.3	500.8	粗粒輝石安山岩	表裏面居ロート状の凹部、両側縁に著しい集合打痕。	

C区 4号土坑

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	胎土/色調/焼成	成・整形の特徴 他	備考
1	第24図 PL-22	深鉢	覆土 胴部破片	細砂、白色粒/にぶい黄橙/ふつう	带状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。	称名寺I式
2	第24図 PL-22	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/灰褐/ふつう	口縁が短く内折。屈曲部に刻みを付した隆帯をめぐらす。带状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。	堀之内2式
3	第24図 PL-22	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒/褐灰/良好	横位隆帯をめぐらせて口縁部無文帯を区画。	加曾利E4式
4	第24図 PL-22	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、細礫、/浅黄橙/良好	隆帯を斜行させ、RLを充填施文する。	加曾利E4式
5	第24図 PL-22	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/にぶい黄橙/ふつう	沈線により楕円状モチーフを描き、LRを縦位充填施文する。	加曾利E4式

A区 遺構外

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	胎土/色調/焼成	成・整形の特徴 他	備考
1	第25図 PL-23	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒/にぶい橙/良好	隆帯により横位楕円状モチーフを施し、RLを充填施文する。	加曾利E3式
2	第25図 PL-23	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/灰黄褐/ふつう	隆帯による懸垂文を施し、LRを縦位充填施文する。	加曾利E4式
3	第25図 PL-23	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/にぶい黄橙/ふつう	隆帯による懸垂文を施し、LRを縦位充填施文する。	加曾利E4式
4	第25図 PL-23	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、細礫、片岩/橙/ふつう	波頂部の環状突起。円孔、円形刺突を施す。	称名寺式
5	第25図 PL-23	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/灰黄/ふつう	波状口縁。波頂部にの字状の隆帯を貼付し、波頂部下に円孔を穿つ。	称名寺式
6	第25図 PL-23	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/黒灰/ふつう	带状沈線により菱形モチーフを描き、LRを充填施文する。	堀之内2式
7	第25図 PL-23	深鉢	覆土 底部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/灰褐/ふつう	推定底径6.0cm。底面に葉脈痕。	後期前葉

B区 遺構外

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	胎土/色調/焼成	成・整形の特徴 他	備考
1	第25図 PL-25	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒、石英/橙/ふつう	横位隆帯をめぐらせて口縁部無文帯を区画、隆帯下にLRを充填施文する。	加曾利E4式
2	第25図 PL-23	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/灰黄褐/ふつう	口縁が緩く内湾。横位沈線をめぐらせて口縁部無文帯を区画、沈線下は分岐懸垂文を施し、LRを充填施文する。	加曾利E4式
3	第25図 PL-23	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/浅黄橙/良好	横位隆帯をめぐらせて口縁部無文帯を区画、隆帯下にLRを充填施文する。	加曾利E4式
4	第25図 PL-23	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/にぶい黄橙/ふつう	口縁が緩く内湾。RLを充填施文し、楕円状沈線を施す。	加曾利E4式
5	第25図 PL-23	深鉢	覆土 口縁部破片	細砂、黒色粒/にぶい黄橙/ふつう	口縁が内折。幅狭な口縁部無文帯、刺突列帯を施し、LRを充填施文する。	加曾利E4式
6	第25図 PL-23	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/浅黄/ふつう	くの字状に外屈する器形。屈曲部に横位隆帯をめぐらせて口縁部無文帯を区画、隆帯下にLRを充填施文する。	加曾利E4式
7	第25図 PL-23	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/橙/ふつう	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E3式

8	第25図 PL-23	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒、石英/ ぶい赤褐/良好	沈線による懸垂文を施し、RLを縦位充填施文する。	加曾利E3式
9	第25図 PL-23	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/ ぶい黄橙/ふつう	隆帯を垂下させ、RLを充填施文する。	加曾利E4式
10	第25図 PL-23	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂/灰黄/良好	横位隆帯をめぐらせ、隆帯下にLRを縦位充填施文する。	加曾利E4式
11	第25図 PL-23	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/ 橙/ふつう	沈線により楕円状モチーフを描き、RLを充填施文する。	加曾利E4式
12	第25図 PL-23	深鉢	覆土 把手	粗砂、白色粒、黒色粒/ 灰黄/ふつう	LRを縦位充填施文する。	加曾利E4式
13	第25図 PL-23	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/ 灰黄褐/ふつう	隆帯をめぐらせて口縁部無文帯を区画、隆帯下にLRを充填施文する。橋状把手がついていた痕跡あり。	加曾利E4式
14	第25図 PL-23	深鉢	覆土 胴部破片	細砂、石英/明褐色/良好	口縁が内湾。隆帯により曲線モチーフを施す。筒状の把手を貼付。内外面研磨。赤色塗彩の痕跡あり。	加曾利E4式
15	第25図 PL-23	器台?	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/ ぶい赤褐/ふつう	底部破片を再加工したものと思われ、欠け口である上面、底面、右側面を研磨して整えている。	加曾利E式
16	第25図 PL-23	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、石英/ ぶい黄橙/ふつう	波頂部の突起。8の字状の隆帯、沈線、円形刺突を施す。	称名寺式
17	第25図 PL-23	深鉢	覆土 口縁部破片		16と同一個体。	称名寺式
18	第25図 PL-23	深鉢	覆土 口縁部破片	細砂/灰白/ふつう	環状把手。RLを充填施文し、対弧状沈線を施す。	称名寺I式
19	第25図 PL-23	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/ ぶい黄橙/ふつう	口縁部の突起。頂部に円形隆線、沈線、8の字貼付文を施す。	称名寺式
20	第25図 PL-23	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、黒色粒/ ぶい黄橙/良好	波状口縁で口縁が内折。帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。口唇部に貼付を付す。	称名寺I式
21	第25図 PL-23	深鉢	覆土 胴部破片	細砂、白色粒/浅黄橙/ ふつう	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。	称名寺I式
22	第25図 PL-23	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/ 浅黄/ふつう	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。	称名寺I式
23	第25図 PL-23	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/ 灰黄褐/ふつう	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。	称名寺I式
24	第25図 PL-23	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、細礫、白色粒、黒色粒、 石英/橙/ふつう	刻みを付した隆帯を垂下、帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。	称名寺I式
25	第25図 PL-23	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、細礫、白色粒、石英/ ぶい赤褐/良好	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。	称名寺I式
26	第25図 PL-23	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、細礫、白色粒、黒色粒/ ぶい黄橙/ふつう	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、列点を充填施文する。	称名寺II式
27	第25図 PL-23	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒/橙/良好	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LR、列点を充填施文する。	称名寺II式
28	第25図 PL-23	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/ ぶい黄橙/ふつう	外屈する器形。屈曲部下に弧状の集合沈線を施す。	堀之内I式
29	第26図 PL-23	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、細礫、/ ぶい黄橙/ふつう	隆線を垂下させ、弧状、斜位の集合沈線を施す。	堀之内I式
30	第26図 PL-23	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、細礫、黒色粒、石英/ ぶい黄橙/ふつう	3条の沈線によりワラビ手状モチーフを施す。	堀之内I式
31	第26図 PL-23	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/ 灰黄褐/ふつう	横位沈線をめぐらせて区画、左右に斜行する集合沈線を施してLRを充填施文する。交点に円形刺突を付す。	堀之内I式
32	第26図 PL-23	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、石英/ ぶい黄橙/ふつう	口縁下に1条の沈線をめぐらせ、沈線による懸垂文を施す。余白にRL縦位充填施文。	堀之内I式
33	第26図 PL-23	深鉢	覆土 口縁部破片	細砂、黒色粒/ ぶい黄橙/ふつう	口縁内面を肥厚させ、肥厚部に8の字貼付文を付す。	堀之内I式
34	第26図 PL-23	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/ ぶい黄橙/ふつう	沈線による懸垂文を施す。地文にLR施文。	堀之内I式
35	第26図 PL-23	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、黒色粒/ ぶい褐/ふつう	波状口縁。口縁を内折させ、1条の沈線をめぐらす。斜位、弧状の集合沈線で器面を充填し、円形刺突を施す。	堀之内I式
36	第26図 PL-23	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒/ ぶい黄橙/ふつう	口縁部に1条の沈線をめぐらせ、以下、斜位に帯状沈線を垂下させる。地文にRL横位施文。	堀之内I式
37	第26図 PL-23	深鉢	住カマド30 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/ ぶい黄橙/ふつう	口縁が内折、肥厚。肥厚部に2条の沈線をめぐらせ、貼付文を付す。	堀之内I式
38	第26図 PL-23	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、黒色粒、石英/ ぶい黄橙/ふつう	緩い波状口縁で波頂部下に沈線による円文、対称弧状文を施す。口縁内面に1条の沈線をめぐらす。	堀之内I式
39	第26図 PL-23	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、細礫、白色粒、黒色粒/ ぶい黄褐/良好	口縁が短く内折。刻みを付した隆線を2条めぐらす。	堀之内2式

遺物観察表

40	第26図 PL-24	深鉢	覆土 底部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/にぶい黄 褐/ふつう	推定底径10.2cm。底面に網代痕。	堀之内2式
41	第26図 PL-24	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/にぶい黄 橙/ふつう	帯状沈線により三角形モチーフを描き、LRを充填 施文する。	堀之内2式
42	第26図 PL-24	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒、石英/に ぶい黄橙/ふつう	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施 文する。	堀之内2式
43	第26図 PL-24	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂/橙/良好	刻みを付した隆線をめぐらせ、集合沈線により菱形 状、三角形モチーフを描く。	堀之内2式
44	第26図 PL-24	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、石英/にぶい黄橙/ふつう	口縁が短く内折。口縁下に円形貼付、隆線を1条め ぐらせ、帯状沈線により幾何学モチーフを描く。	堀之内2式
45	第26図 PL-24	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、黒色粒/にぶい黄橙/ふつう	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施 文する。	堀之内2式
46	第26図 PL-24	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒、石英/に ぶい黄橙/ふつう	帯状沈線により幾何学モチーフを描く。	堀之内2式
47	第26図 PL-24	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/にぶい赤 褐/良好	LRを横位施文する。口縁内面に1条の沈線をめぐら す。	堀之内2式
48	第26図 PL-24	注口土器	覆土 口縁部破片	粗砂/にぶい黄橙/ふつう	口唇部やや肥厚させ、平坦面を作出。沈線による円 文を起点に横位、楕円状沈線、刻みを付した隆線を めぐらす。	堀之内2式
49	第26図 PL-24	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/にぶい褐/ 良好	口縁が短く内折。刻みを付した隆線をめぐらせ、縦 位隆線と連結。交点に円形刺突を施す。	堀之内2式
50	第26図 PL-24	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/灰黄褐/ふ つう	横位、縦位、斜位の沈線を施す。口縁内面に1条の 沈線をめぐらす。	堀之内2式
51	第26図 PL-24	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/黒褐/ふつ う	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施 文する。	堀之内2式
52	第26図 PL-24	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/灰黄褐/良 好	集合沈線により菱形モチーフを描く。外縁にLRを 充填施文。	堀之内2式
53	第26図 PL-24	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒/にぶい黄橙/ふつう	帯状沈線により三角形モチーフを描く。	堀之内2式
54	第26図 PL-24	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/灰黄/ふつ う	口縁が短く内折。横位沈線をめぐらす。口縁下に刺 突を施した円形貼付文を付す。	堀之内2式
55	第26図 PL-24	深鉢	覆土 底部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/にぶい黄 橙/ふつう	推定底径8.9cm。底面に網代痕。	堀之内2式
56	第26図 PL-24	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂/にぶい赤褐/良好	刻みを付した隆線をめぐらせ、帯状沈線により幾何 学モチーフを描き、LRを充填施文する。	堀之内2式
57	第26図 PL-24	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/にぶい赤 褐/ふつう	地文にLRを横位施文し、帯状沈線により三角形モ チーフを描く。	堀之内2式
58	第26図 PL-24	注口土器	覆土 口縁部破片	細砂/黒褐/ふつう	把手の部位。刺突を付した円形貼付文、楕円状沈線 を施す。	堀之内2式
59	第26図 PL-24	注口土器	覆土 口縁部破片	細砂、黒色粒/にぶい赤褐/良好	把手の部位。沈線による横位楕円状モチーフを多段 に描き、細かな刺突を充填施文する。内外面研磨。	堀之内2式
60	第26図 PL-24	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒、石英/赤 褐/ふつう	帯縄文を施す。	加曾利B1式
61	第26図 PL-24	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、黒色粒/黒褐/良好	口縁内折。帯縄文を施す。	加曾利B1式
62	第26図 PL-24	深鉢	覆土 底部破片	粗砂、白色粒、石英/にぶい黄橙/ ふつう	推定底径6.0cm。底面に網代痕。	後期前葉
63	第26図 PL-24	注口土器	覆土 把手	細砂、白色粒、黒色粒/にぶい黄 橙/ふつう	断面正円状の把手。	後期前葉
64	第26図 PL-24	深鉢	覆土 底部破片	粗砂、白色粒/にぶい褐/ふつう	底面に葉脈痕。	後期前葉
65	第26図 PL-24	注口土器	覆土 注口部	粗砂、白色粒/灰黄褐/ふつう	先端径1.6cm。外面研磨。	後期前葉
66	第26図 PL-24	深鉢	覆土 把手	粗砂/灰黄褐/ふつう	赤色塗彩の痕跡あり。	後期前葉
67	第26図 PL-24	深鉢	覆土 把手	粗砂、白色粒、黒色粒、石英/明 褐色/良好	渦巻状の沈線を施す。	後期前葉
68	第26図 PL-24	注口土器	覆土 把手	粗砂、白色粒/灰黄褐/ふつう	粘土貼り付けによる突起を付し、横位3条の沈線を 施す。	後期前葉
69	第26図 PL-24	注口土器	覆土 把手	細砂/橙/良好	くの字状の把手。沈線により渦巻文を描く。	後期前葉
70	第26図 PL-24	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、細礫、石英/にぶい褐/ふつ う	横位3条の隆帯をめぐらせ、連結するように3条の 隆帯を垂下させる。横位隆帯間にRL、縦位隆帯間に 斜位の刻みを片側のみ充填施文。横位隆帯の上下に は沈線による鋸歯状文が描かれる。鋸歯状文下は条 痕状の横位調整痕が認められる。刻みを付さない隆 帯間には赤色塗彩の痕跡あり。	後期前葉

遺物観察表

71	第26図 PL-24	深鉢	覆土 胴部破片			No.14と同一個体。	中期東海系か？	
No.	挿図NO. 図版NO.	器種 形態・素材	出土位置	長さ 幅	重量 cm・g	石材	特徴	備考
72	第27図 PL-24	石核 剥片	As-C混土層	2.5 1.5	3.5	黒曜石	柱状剥片の一端で小型剥片を剥離。	
73	第27図 PL-24	打製石斧 短冊型	As-C混土層	(6.7) 4.3	41.6	黒色頁岩	完成状態？刃部側を大きく破損する。剥離面は新鮮で、未使用の可能性ある。	
74	第27図 PL-24	打製石斧 分銅型	C混土層	(7.8) (6.2)	102.6	灰色安山岩	完成状態。捲縛痕あり。再生時の剥離が装着部付近に及んでおり、再生前の石器サイズ等は不明。	
75	第27図 PL-24	打製石斧 分銅型	C混土層	(5.4) 6.0	49.9	黒色頁岩	完成状態。両側縁は著しい摩耗。装着部と刃部側縁の摩耗は連続、区別できない。刃部は再生され、新鮮。	
76	第27図 PL-24	石錘 切目石錘	As-C混土層	6.4 3.7	37.4	雲母石英片岩	扁平礫の小口部を打撃、切れ目を入れたのち、紐掛け部を部分研磨。	
77	第27図 PL-24	敲石 磨製石斧転用？	C混土層	11.7 7.6	501.8	ホルンフェルス	上下両端の小口部・側縁に打痕。表表面は磨製石斧に似た研磨状況にあり、石斧破損品を転用した可能性も否定できない。	

C区 遺構外

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	胎土/色調/焼成	成・整形の特徴 他	備考
1	第27図 PL-24	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/にぶい黄橙/ふつつ	隆帯による横位楕円状モチーフ、沈線による懸垂文を施してRLを充填施文する。	加曾利E3式
2	第27図 PL-24	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒、石英/にぶい橙/ふつつ	隆帯による横位楕円状モチーフを施し、RLを充填施文する。	加曾利E3式
3	第27図 PL-24	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒、石英/橙/良好	沈線による懸垂文を施し、LRを縦位充填施文する。	加曾利E3式
4	第27図 PL-24	深鉢	市16b住埋土覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/にぶい黄橙/ふつつ	沈線による懸垂文を施し、LRを縦位充填施文する。	加曾利E3式
5	第27図 PL-24	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/にぶい黄橙/ふつつ	横位隆帯をめぐらせて口縁部無文帯を区画、隆帯下にLRを充填施文する。橋状把手を付す。	加曾利E4式
6	第27図 PL-24	深鉢	市16b住掘方覆土 口縁部破片	粗砂、細礫、白色粒、黒色粒/にぶい黄橙/ふつつ	横位隆帯をめぐらせて口縁部無文帯を区画。隆帯による懸垂文を施し、LRを縦位充填施文する。	加曾利E4式
7	第27図 PL-25	深鉢	市16b住掘方覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/灰黄褐/ふつつ	横位沈線をめぐらせて口縁部無文帯を区画、沈線下にLRを充填施文する。	加曾利E4式
8	第27図 PL-25	深鉢	市16a住掘方覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒、石英/灰黄/ふつつ	縦位、斜位の条線を施す。	加曾利E4式
9	第27図 PL-25	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/灰黄褐/ふつつ	口縁が内湾。横位隆帯をめぐらせて口縁部無文帯を区画、隆帯下は沈線による懸垂文を施し、LRを縦位充填施文する。	加曾利E4式
10	第27図 PL-25	深鉢	市16b住掘方覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/褐灰/ふつつ	口縁が緩く内湾。沈線により曲線モチーフを描き、RLを充填施文する。余白に円形刺突を施す。赤色塗彩の痕跡あり。	加曾利E4式
11	第27図 PL-25	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒、石英/にぶい黄橙/ふつつ	小波状口縁。横位隆帯をめぐらせ、波頂部からも垂下させて連結、隆帯上に刺突を施す。口縁部にも刺突を充填施文する。	後期前葉
12	第27図 PL-25	深鉢	3溝1覆土 底部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/橙/ふつつ	推定底径11.3cm。底面に網代痕。	後期前葉
13	第27図 PL-25	深鉢	覆土 胴部破片	細砂、白色粒、黒色粒/にぶい橙/ふつつ	縦位の带状沈線を施し、LRを充填施文する。	称名寺I式
14	第27図 PL-25	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒、石英/にぶい橙/ふつつ	带状沈線により曲線モチーフを描き、無節LRを充填施文する。	称名寺I式
15	第27図 PL-25	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/橙/良好	口唇内面肥厚。带状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。口唇部に貼付を付し、沈線、円形刺突を施す。	称名寺I式
16	第27図 PL-25	深鉢	市16住覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒/灰黄褐/ふつつ	波状口縁の波頂部。带状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。	称名寺I式
17	第27図 PL-25	深鉢	市16住埋土覆土 胴部破片	細砂、白色粒、黒色粒/にぶい黄橙/ふつつ	带状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。	称名寺I式
18	第27図 PL-25	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/にぶい黄橙/ふつつ	波状口縁で口縁内面肥厚。带状沈線により曲線モチーフを描き、LRを充填施文する。	称名寺I式
19	第27図 PL-25	深鉢	市16b住掘方覆土 胴部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/灰黄褐/ふつつ	带状沈線により曲線モチーフを描き、LRを充填施文する。	称名寺I式
20	第27図 PL-25	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、細礫、白色粒、石英/黒褐/ふつつ	沈線により弧状モチーフを描き、RLを充填施文する。	称名寺I式
21	第27図 PL-25	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒/暗灰黄/ふつつ	口唇内面肥厚。沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。	称名寺I式

遺物観察表

22	第28図 PL-25	深鉢	市16b住掘方覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒、石英/ ぶい褐/ふつう	波状口縁で波頂部下に捻転状の突起を付す。口縁に 沿って沈線、円形刺突を施す。	称名寺Ⅰ式	
23	第28図 PL-25	鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、黒色粒/灰黄/ふつう	波状口縁で口縁が内折。内折部に沈線、円形刺突を 施す。	称名寺Ⅱ式	
24	第28図 PL-25	深鉢	市13a住掘方覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/灰黄/ふつ う	波状口縁。波頂部にのの字状の隆帯を貼付。	称名寺Ⅱ式	
25	第28図 PL-25	深鉢	覆土 胴部破片	細砂、白色粒/にぶい黄橙/ふつう	帯状沈線によりJ字状モチーフを描く。	称名寺Ⅱ式	
26	第28図 PL-25	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒/灰黄/ふつう	口唇内面肥厚。帯状沈線により幾何学モチーフを描 き、LRを充填施文する。	称名寺Ⅱ式	
27	第28図 PL-25	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、細礫、白色粒、黒色粒/ ぶい黄橙/ふつう	斜位の帯状沈線を2条連ね、列点を充填施文する。	称名寺Ⅱ式	
28	第28図 PL-25	深鉢	覆土 胴部破片	粗砂、細礫、白色粒/灰黄/良好	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、列点を充填 施文する。	称名寺Ⅱ式	
29	第28図 PL-25	深鉢	市16b住掘方覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/にぶい黄 橙/ふつう	波状口縁で口縁内面肥厚。沈線、円形刺突を施す。	称名寺Ⅱ式	
30	第28図 PL-25	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/橙/ふつう	横位、斜位の帯状沈線を施し、列点を充填施文する。	称名寺Ⅱ式	
31	第28図 PL-25	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/明赤褐/ふ つう	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、列点を充填 施文する。	称名寺Ⅱ式	
32	第28図 PL-25	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒/にぶい黄橙/ふつう	帯状沈線により曲線モチーフを描く。	称名寺Ⅱ式	
33	第28図 PL-25	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒/にぶい黄橙/ふつう	口縁外面を肥厚させ、肥厚部に円形刺突をめぐらす。	堀之内Ⅰ式	
34	第28図 PL-25	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、石英/明赤褐/良好	口縁内折。内折部に横位沈線、円形貼付を付す。	堀之内Ⅰ式	
35	第28図 PL-25	深鉢	1用水覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/にぶい褐/ ふつう	口縁が短く内折。環状突起を付し、両脇に刺突を施 した円形貼付文を付す。内折部に沈線をめぐらす。	堀之内Ⅰ式	
36	第28図 PL-25	深鉢	市13b住掘方覆土 胴部破片	細砂、白色粒、黒色粒/橙/ふつう	集合沈線により曲線モチーフを描く。	堀之内Ⅰ式	
37	第28図 PL-25	深鉢	市16b住埋土覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/にぶい黄 橙/ふつう	口縁外面肥厚。肥厚部に円形刺突をめぐらす。	堀之内Ⅰ式	
38	第28図 PL-25	深鉢	市16b住覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒/にぶい黄橙/ふつう	口縁外面肥厚。肥厚部に横位2条の沈線をめぐらす。	堀之内Ⅰ式	
39	第28図 PL-25	深鉢	覆土	細砂、白色粒、黒色粒、石英/灰 黄褐/ふつう	口縁がくの字状に外屈。集合沈線による懸垂文を施 す。	堀之内Ⅰ式	
40	第28図 PL-25	深鉢	覆土 口縁部破片	細砂、白色粒、黒色粒/にぶい黄 橙/ふつう	帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施 文する。	堀之内Ⅱ式	
41	第28図 PL-25	深鉢	覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、黒色粒/にぶい橙/ ふつう	刻みを付した隆線を2条めぐらせ、帯状沈線を横位 に施し、LRを充填施文する。	堀之内Ⅱ式	
42	第28図 PL-25	深鉢	5住掘方覆土	細砂、白色粒/灰黄褐/ふつう	口縁の環状突起。沈線、円形刺突を施す。	堀之内Ⅰ式	
43	第28図 PL-25	深鉢	1住ピット2覆土 口縁部破片	細砂、白色粒/黄灰/ふつう	口縁内折。帯縄文を施す。	加曾利B1式	
44	第28図 PL-25	深鉢	市2住1覆土 口縁部破片	粗砂、白色粒、石英/灰黄橙/ふつ う	折り返し状の肥厚口縁で口唇内削ぎ。肥厚部に横位 の条線を施す。	晩期	
No.	挿図NO. 図版NO.	器種 形態・素材	出土位置	長さ 重量 幅 cm・g	石材	特徴	備考
45	第28図 PL-25	石鉢 平基無茎鉢	砂層	1.6 0.6 1.4	チャート	完成状態。加工は丁寧で、完成度は高い。	
46	第28図 PL-25	石鉢 凹基無茎鉢	覆土 伊勢崎市	2.3 1.6 1.9	黒色頁岩	未成品? 返し部は非対称で、最終的に形状を整える 剥離が省略されているように見える。	
47	第28図 PL-25	石鉢 凹基無茎鉢	砂層	(1.8) 0.9 1.6	チャート	未成品? 粗く周辺加工を施す。先端部を破損。	
48	第28図 PL-25	石鉢 凹基無茎鉢	掘方・覆土	(1.5) 0.8 1.6	黒曜石	未成品。裏面側には未加工の平坦面が大きく残され ている。左右の挟り部は非対称で、製作途上の破損。	
49	第28図 PL-25	打製石斧 短冊型	掘方	(7.7) 57.0 4.7	黒色頁岩	完成状態。微弱な刃部摩耗がある。頭部側破損。	
50	第28図 PL-25	石核 剥片	pit 2	5.7 138.2 7.6	黒色安山岩	上下両端から幅広剥片を剥離。裏面側は平滑化した 礫面に浅い爪条痕が残る。	
51	第28図 PL-25	石錘 切目石錘	C混土層 覆土	6.8 60.0 4.0	緑色片岩	扁平礫の小口部を打撃、切れ目を入れたのち紐掛け 部を部分研磨。研磨範囲はB区・遺構外出土例より 広い。	
52	第28図 PL-25	凹石 棒状礫	As-C混土層 覆土	13.9 537.2 6.3	粗粒輝石安山岩	表裏面とも集合打痕、摩耗痕。小口部打痕。	
53	第28図 PL-25	凹石 楕円扁平礫	覆土	(10.9) 408.1 11.3	粗粒輝石安山岩	表裏面ともロート状の凹穴2があるほか、著しい研 磨痕・幅1mm弱の略直線様の条痕がある。研磨痕は ロート状の凹穴に切られているように見える。	

B区5号住居

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第32図	土師器 埴	覆土 口縁部片	口 11.3	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は内外面ともハケ目のち磨き。頸部 はヘラナデ。	
2	第32図 PL-26	土師器 壺	床直 口縁部片	口 14.0	細砂粒/良好/褐灰	外面はヘラナデ後縦位のヘラ磨き、内面は 放射状ヘラ磨き。	
3	第32図 PL-26	弥生系 壺	覆土 口縁部片	口 15.6	細砂粒/良好/橙	口縁部は折り返し、口縁外面と口唇部には 縄文(R)を施文、頸部は縦位のヘラ磨き。 内面は細かい放射状ヘラ磨き。	
4	第32図	土師器 台付甕	覆土 口縁部～胴部上位片	口 15.6	細砂粒・金雲母/良 好/褐灰	口縁部横ナデ、胴部は頸部からハケ目。内 面胴部はヘラナデ。	S字状口縁甕
5	第32図	土師器 鉢	覆土 口縁部～胴部上半片	口 11.4	細砂粒・粗砂粒/良 好/にぶい黄褐	口縁部は横ナデ、胴部上半はナデ、中位は 横位のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
6	第32図	土師器 壺	覆土 底部～胴部下位	底 6.4	細砂粒/良好/灰黄 褐	底部はヘラ磨き、胴部は縦位のハケ目、内 面はハケ目後ヘラ磨き。	
7	第32図 PL-26	土師器 鉢	覆土 底部～胴部下位	底 3.6	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	底部はヘラ削り、体部はハケ目後ナデ。内 面はハケ目。	
8	第32図 PL-26	土師器 高杯	覆土 杯身部	口 12.7 底 5.8	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	脚部は貼付。口縁部は縦位のヘラ磨き。内 面は底部から口縁部に放射状ヘラ磨き。	
9	第32図 PL-26	弥生系 鉢	床直 1/5	口 12.9 高 5.7 底 5.0	細砂粒/良好/赤	口唇部横ナデ、口縁部から体部はヘラ磨き、 体部最下位にヘラ削りが残る、底部ヘラ削 り。内面は全面ヘラ磨き。	底面のぞき全面赤 彩、外面口縁部に粉 圧痕。

B区6号住居

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第33図	土師器 壺	覆土 頸部～口縁部下半片		細砂粒/良好/橙	口縁部は縦位のヘラ磨き、頸部はハケ目後、 凸帯側面に板状具小口による刻み。内面は ナデ後横位ヘラ磨き。胴内面はナデ。	茶白山型二重口縁壺
2	第33図	土師器 壺	覆土 底部	底 6.8	細砂粒・粗砂粒/良 好/暗赤褐	底部は中央凹み、周縁ヘラ削り、胴部は縦 位のハケ目、内面はハケ目。	

B区7号住居

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第35図	土師器 甕	床直 底部～胴部下半片	底 6.6	細砂粒・角閃/良好 /赤褐	底部ヘラ削り、胴部はハケ目後雑なヘラ削 りとナデ。内面はヘラ磨き。	
2	第35図	土師器 甕	床直 底部～胴部下位片	底 6.9	細砂粒/良好/明赤 褐	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
3	第35図	土師器 甕	覆土 肩部片		細砂粒/良好/赤褐	上位から櫛横線文、板状具小口刺突による 鋸歯文、横線文、棒状具先端による刺突 列点文を廻らす。胴部は縦位ハケ目。内面 は指頭圧痕を残し、ナデ。横線文とハケ目 工具は目の浅い板材と思われる。	東海西部系加飾壺
4	第35図	赤井戸・ 吉ヶ谷系 壺	覆土 肩部片		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	肩部は2帯の横位斜縄文帯(RL)を施文後、 無文部に横位のヘラ磨き。内面はヘラナデ。	

B区8号住居

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第37図	土師器 器台	覆土 1/3	口 8.8	細砂粒/良好/赤褐	受け部は口唇部が横ナデ、口縁部は縦位の ヘラ磨き、脚部下位は縦位、脚部上位は横 位のヘラ磨き、内面は受け部が横位のヘラ 磨き、脚部はヘラナデ。	脚部に透孔3か所。
2	第37図 PL-26	土師器 器台	床直 脚部端3/4欠損	口 8.7 高 7.6 脚 10.2	細砂粒/良好/橙	口縁と脚裾部は横ナデ、外面は全体に縦位 ヘラ磨き、器受け部内面は横位ヘラ磨き。 脚内面の上位はヘラ削り、中位にハケ目を 残し下位は横ナデ。	脚部上位に透孔3カ 所。
3	第37図 PL-26	土師器 器台	床直 受け部口縁部と脚部 3/4欠損		細砂粒・褐色粒/良 好/明赤褐	受け部口縁部は横ナデ、底内面はヘラ磨き で剥離が著しい。脚部は縦位の丁寧なヘラ 磨き。脚部内面は全体にヘラ削り。	脚部上位に透孔3カ 所。搬入品か。 底面穿孔径1.3cm。
4	第37図 PL-26	土師器 高杯	床直 脚部、上位を欠損	脚 13.3	細砂粒/良好/赤褐	内面脚部上位に輪積み痕が残る。外面は縦 位～斜位のヘラ磨き。内面はハケ目(7)、 裾部横ナデ。	脚部に上下2段の透 孔3カ所。底面穿孔 径1.4cm。
5	第37図 PL-26	土師器 高杯	床直 脚部、裾部を欠損		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面は縦位のヘラ磨き、内面はヘラナデ。	脚部中位に上下2段 互い違いに3カ所の 透孔。

遺物観察表

6	第37図	土師器 器台	覆土 脚部上位		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	脚部は縦位のヘラ磨き。内面は受け部がヘ ラナデ、脚部はナデ。	脚部に透孔3か所。
7	第37図	土師器 高坏	覆土 杯身底部～脚部上位		粗砂粒/良好/明赤 褐	杯身口縁部は輪積み痕で欠損。底部と脚部 はヘラ削り。	
8	第37図 PL-26	土師器 小型壺	床直 口縁部2/3欠損	口 10.5 高 10.5 底 3.0	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部から頸部は縦位、胴部上位と下位は 斜め、中位は横位のヘラ磨き。内面は口縁 部から頸部にヘラ磨き。胴内面不明。底は 浅く凹む。	胴部下位に下向きの 径2.5mmの小孔穿つ。
9	第37図 PL-26	土師器 壺	覆土 口縁部～頸部片	口 16.2	細砂粒/良好/明赤 褐	外面段下にわずかにナデ部分がある他は全 面横位のヘラ磨き。胴内面は指押さえ。	畿内型二重口縁壺。
10	第37図	土師器 壺	床直 口縁部下半～胴部上 位片		細・粗砂粒/良好/ 赤褐	内面胴部に輪積み痕が残る。頸部に板状具 小口による刻みを施した凸帯を貼付、頸部 はハケ目後縦位のヘラ磨き、胴部は横位の ヘラ磨き。内面口縁部は横位のヘラ磨き。	
11	第37図 PL-26	土師器 直口壺	覆土 口縁部1/2欠損	口 9.5 高 18.6 底 4.8	細砂粒/良好/橙	口唇部横ナデ、口縁部は縦位のヘラ磨き。 胴部はハケ目後上位に縦位のヘラ磨き。胴 下端～底面はヘラ削り。内面は口縁部上半 は横ナデ、下半はハケ目(7)。	
12	第37図	土師器 埴	覆土 底部～胴部下半片	底 3.8	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	胴部は縦位のヘラ磨き。内面は底部から下 位がハケ目後ナデ、中位がヘラナデ。	
13	第37図	土師器 壺	床直 底部～胴部下位片	底 5.8	細砂粒・石英/良好/ 赤	底部はヘラ削りか、胴部はハケ目、器面磨 減のため詳細不明。内面はハケ目後ヘラナ デ。	
14	第37図 PL-26	土師器 台付壺	覆土 口縁部と脚部端部の 大部分を欠損	頸 7.3 脚 8.4	細砂粒・雲母/良好/ 橙	口縁部横ナデ、胴部から脚部は縦位のヘラ 磨き。内面は胴部はヘラナデ、脚部は上半 がナデ、下半はハケ目か。	脚部に透孔3カ所。 口縁短い埴形になる だろう。
15	第37図 PL-26	土師器 甕	床直 口縁部～胴部上半片	口 15.1	細砂粒/良好/明赤 褐	口唇部は外方に反って小さな平坦面を作る。 口縁～体部は内外面とも斜位ハケ目。	
16	第37図 PL-26	土師器 壺	覆土 底部～胴部下位片	底 9.0	細・粗砂粒・角閃/ 良好/にぶい赤褐	胴部は縦位のヘラ磨き。内面は斜位のヘラ ナデ、部分的にヘラ磨き。	
17	第37図	土師器 甕	覆土 口縁部～胴部上位片	口 12.4	細砂粒・金雲母/良 好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はナデ、内面胴部は 頸部下はナデ、その下位は強いヘラ削り。	布留式甕
18	第37図	土師器 甕	床直 口縁部～胴部上位片	口 14.7	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部から胴部は縦位のハケ目(9)、口縁 部中位に横位のハケ目。内面は横位のハケ 目。	
19	第37図 PL-26	土師器 甕	覆土 口縁部～胴部上半片	口 19.0	細砂粒・粗砂粒/良 好/橙	口唇は丸く上方に肥厚する。口縁部内外面 とも板小口による横ナデ、胴部は不定方向 のハケ目後部分的にナデ。内面は胴部ヘラ ナデ。	
20	第37図 PL-26	土師器 壺	覆土 底部～胴部下位片	底 8.8	細砂粒・粗砂粒/良 好/赤褐	底部は木葉痕を残し、やや上げ底で周縁は 摩滅する。外面はヘラケズリのち縦位ヘラ 磨き。内面胴部は中位がヘラナデ、下位は ハケ目。	
21	第37図 PL-26	土師器 台付甕	床直 口縁部～胴部上半片	口 14.7	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁は強く屈曲し内面下段に明瞭な平坦面 を作る。口唇部は外傾する弱い面取り。頸 部外面はヘラナデ、肩部に左下方、胴中位 は左上方へハケ目。ハケ目工具は約2.5ミリ スパンと粗い。ハケ目前整形のヘラケズリ 痕は認められない。胴内面は縦位の指ナデ 上げ。	S字状口縁甕
22	第37図	土師器 台付甕	床直 口縁部～胴部上位片	口 15.0	細砂粒・粗砂粒/良 好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ。頸部は上方、肩は左上方 へのヘラ削り、後に胴部と肩へのハケ目。 胴部内面は縦位の指ナデ、頸部にヘラ状具 によるナデを廻らす。	S字状口縁甕
23	第37図	土師器 台付甕	床直 口縁部～胴部上位片	口 14.4	細砂粒/良好/黒葛	口縁部横ナデ、胴部は縦位のハケ目(5)、 肩に横位のハケ目。内面胴部はヘラナデ。	S字状口縁甕
24	第37図 PL-26	土師器 台付甕	覆土 口縁部～胴部上位片	口 16.2	細砂粒/良好/灰黄 褐	口縁部横ナデ、肩部は斜位のハケ目(巾3 cm以上)。頸部にヘラ先沈線を廻らす。内面 胴部はナデ。	S字状口縁甕
25	第37図	土師器 台付甕	覆土 口縁部～胴部上位片	口 18.0	細砂粒/良好/にぶ い黄橙		
26	第37図	土師器 台付甕	覆土 口縁部～胴部上位片	口 18.0	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部横ナデ胴上半部は横位削りのち斜位 左下方への粗いハケ目。胴中位は左上方 向へのハケ目。内面胴部はヘラナデ。	S字甕D類。同一個 体と思われる。胎土 は伊勢湾沿岸の甕に 近い。
27	第37図 PL-26	土師器 甕	床直 口縁部～胴部下位片	口 13.2	細砂粒・粗砂粒/良 好/赤褐	外面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部から 頸部は横ナデ、胴部は長い縦位ヘラ削り。 内面胴部は横位ヘラナデ。	

遺物観察表

28	第 37 図	土師器 台付甗	覆土 底部～胴部上位片		細砂粒/良好/にぶ い橙	内面胴部に輪積み痕が残る。胴部から脚部はハケ目。内面はヘラナデ。	S 字状口縁甗。 23・25と同一個体と思われる。
29	第 37 図	土師器 台付甗	床直 脚～体部下半片		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	胴部から脚部はハケ目。内面は胴部がヘラナデ、脚部はナデ。底部に砂目粘土の付加。	S 字状口縁甗
30	第 37 図	土師器 台付甗	覆土 脚部片	脚 8.4	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面は上位にハケ目が残る。内面は端部折り返し、脚部はナデ。	S 字状口縁甗
31	第 37 図	土師器 台付甗	覆土 胴脚～部部下位片	脚 8.5	細砂粒/良好/にぶ い橙	胴部から脚部上位はハケ目(7)、内面は端部折り返し、胴部はナデ、脚部上半がナデ。	S 字状口縁甗
32	第 37 図	土師器 小型甗	覆土 底部～胴部中位片	底 4.0	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	底部から胴部下位は手持ちヘラ削り、中位はヘラナデか。内面はヘラナデ。	
33	第 37 図 PL-26	手づくね 碗形	覆土 完形	口 4.6 高 3.3 底 4.0	微砂粒/良好/明赤 褐	口縁部から体部はナデ、底部はヘラナデ。内面はナデ。	

B 区 9 号住居

No.	挿図NO. 図版NO.	種 類 器 種	出 土 位 置 残 存 率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要
1	第 38 図	土師器 鉢	覆土 口縁部～体部片	口 12.7	細砂粒/良好/赤褐	口縁部は横ナデ、体部は手持ちヘラ削り。	
2	第 38 図 PL-26	土師器 埴	覆土 ほぼ完形	口 11.0 高 11.0	細・粗砂粒・角閃/ 良好/赤褐	口唇部横ナデ、口縁部から頸部は縦位と斜位のヘラ先ナデ、胴部は上位がナデ、中位から底部はヘラ削り後ヘラナデ。口縁内面横ナデ、頸部ヘラナデ。胴部は指ナデか。	
3	第 38 図	土師器 甗	覆土 底部片	底 5.4	細砂粒/良好/明赤 褐	底部はヘラ削り、胴部は残存部上位がヘラ削り、下位はナデ。内面はヘラナデ。	外面は被熱による色 変

B 区 11 号住居

No.	挿図NO. 図版NO.	種 類 器 種	出 土 位 置 残 存 率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要
1	第 40 図	土師器 台付甗	覆土 貯蔵穴底～脚部		細砂粒/良好/にぶ い赤褐	底面と脚天井部に砂目粘土貼付。胴部から脚外面は縦位ヘラ削り後ハケ目、脚内面は指ナデ。	S 字状口縁甗

B 区 市 3a 号住居

No.	挿図NO. 図版NO.	種 類 器 種	出 土 位 置 残 存 率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要
1	第 42 図	土師器 壺	覆土 口縁部上半片	口 14.8	細砂粒・長石/良好/ 橙	口縁部折り返し、折り返し下にハケ目が残る。内面は横位のヘラ磨き。	
2	第 42 図	土師器 壺	覆土 口縁部上半片		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部折り返し、折り返し下はハケ目。内面は横位のハケ目のち磨き。	
3	第 42 図	土師器 台付甗	覆土 口縁部～胴部上位片	口 13.8	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部横ナデ、胴部縦位のハケ目。内面胴部はヘラナデ。	S 字状口縁甗
4	第 42 図	土師器 甗	覆土 口縁部～胴部上位片	口 13.8	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、胴部縦位のハケ目。内面胴部はヘラナデ。	
5	第 42 図	土師器 台付甗	覆土 脚部1/3片	脚 6.6	細砂粒・粗砂粒/良 好/にぶい橙	脚部は胴部に貼付。外面はハケ目後ナデ。内面は端部折り返し。底部内外面に明瞭な砂目粘土の付加。	S 字状口縁甗
6	第 42 図	土師器 高杯か器 台	覆土 脚部裾部片	脚 22.4	細砂粒/良好/黄灰	内外面とも赤色塗彩。内外面とも縦位(放射状)のヘラ磨き。	上下二段に透孔、各 8カ所、上位の透か しは交互に多少の違 いあり。
7	第 42 図	土師器 台付甗	覆土 脚部	脚 5.0	細砂粒/良好/灰黄 褐	脚部は端部折り返し、胴部に貼付。胴部は縦位のハケ目、脚部はナデ。	S 字状口縁甗ミニア チュア品

B 区 市 3b 号住居

No.	挿図NO. 図版NO.	種 類 器 種	出 土 位 置 残 存 率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要
1	第 44 図	土師器 壺	床直		チャート粗砂/良好/ 暗褐色	大きく開く二重口縁で、外面稜部に櫛状具による刻み。内外面とも丁寧な横位ヘラ磨き。	畿内型二重口縁壺
2	第 44 図	土師器 台付甗	床直 口縁部小片	口 13.7	細砂粒/良好/灰黄 褐	口縁部横ナデ、頸部にハケ目。	S 字状口縁甗
3	第 44 図	土師器 台付甗	床直 脚部片		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	脚部は貼付。外面は器面剥落で整形不鮮明。内面は上半がナデ、下半はハケ目。	東海～南関東系台付 き甗

B 区 市 8a 号住居

No.	挿図NO. 図版NO.	種 類 器 種	出 土 位 置 残 存 率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要
1	第 46 図 PL-26	土師器 台付甗	覆土 口縁部～胴部上位片	口 18.8	細砂粒/良好/黄灰	口縁部横ナデ、胴部は縦位のハケ目。内面は胴部がナデ。	S 字状口縁甗

遺物観察表

2	第46図	土師器 甕	覆土 口縁部～胴部上位片	口 16.6	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部横ナデ、頸部から胴部にハケ目。内 面は口縁部上半が横ナデ、下半がハケ目、 胴部はヘラナデ。	
3	第46図 PL-26	土師器 高坏	覆土 杯身底部～口縁部片	稜 10.4	細砂粒/良好/赤褐	外面はハケ目後部分的なヘラ削り。内面は ヘラ磨き。	S字状口縁甕
No.	挿図NO. 図版NO.	器 種 形態・素材	出土位置	長さ 重量 幅 cm・g	石 材	特 徴	備 考
4	第46図 PL-26	砥石 手持ち砥石	掘方	11.1 205.3 4.2	流文岩	4面とも使用。背面側に刃ならし痕。破損後 も使用。	

B区市10a号住居

No.	挿図NO. 図版NO.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要
1	第48図 PL-26	土師器 壺	覆土 口縁部～胴部片	口 20.4	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	内外面とも横ナデ。	
2	第48図	土師器 埴	覆土 口縁部片	口 15.6	細砂粒/良好/橙	外面はハケ目後放射状ヘラ磨き。内面は放 射状ヘラ磨き。	底面穿孔径上1.0、 下1.5cm。
3	第48図 PL-26	土師器 高坏	覆土 杯身口縁部片	口 15.9	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部横ナデ、底部(稜下)はヘラ削り。 内面は横ナデ、下半にハケ目痕が残る。	
4	第48図	土師器 高坏	覆土 杯身部片	口 14.9 稜 6.2	細砂粒/良好/にぶ い橙	杯身口縁部は放射状ヘラ磨き、胴部はヘ ラ磨きか、器面磨滅のため不鮮明。	
5	第48図 PL-26	土師器 埴	覆土 口縁部～胴部片	口 10.9	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、胴部上位はナデ、中位か ら底部はヘラ削り。	
6	第48図	土師器 埴	覆土 口縁部～胴部片	口 11.6	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、胴部上位ナデ、中位ヘラ削り。 内面は口縁部下半から胴部にヘラナデ。	
7	第48図	土師器 埴	覆土 口縁部片	口 15.8	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	内外面とも放射状ヘラ磨き。	
8	第48図 PL-26	土師器 台付甕	覆土 口縁部～胴部上位片	口 16.8	細砂粒・粗砂粒/良 好/灰黄褐	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目。内 面は頸部がヘラナデ、胴部はナデ。	
9	第48図 PL-26	土師器 高坏	覆土 杯身下半～脚部片	底 8.2 脚 13.2	細砂粒/良好/橙	全体をハケ目後脚部・裾部をナデ。内面は 杯身口縁部にハケ目、脚部裾部はヘラナデ、 端部は横ナデ。	
10	第48図	土師器 甕	覆土 胴部片		細砂粒・角閃/良好 /橙	残存片上位に刺突文、刺突文の下位は横位 のハケ目。	
11	第48図	土師器 甕	覆土 底部	底 5.8	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	底部は木夜痕が残る。内面はヘラナデ。	

C区1号住居

No.	挿図NO. 図版NO.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要
1	第50図	東海西部 系 壺	覆土 肩～胴部上位片		粗砂粒/良好/にぶ い黄橙、内面灰	外面はヘラ描鋸歯文と櫛描横線文の交互施 文。鋸歯文に赤彩。内面はヘラナデ。	パレススタイル壺、 搬入品の可能性あり。
2	第50図	東海西部 系 壺	覆土 胴部片		細砂粒・長石/良好 /にぶい橙、内面灰	櫛描横線文の下位に櫛状具先端による刺突 列点文を廻らして文様帯を画す。胴部は横 位ヘラ磨き後赤彩。	パレススタイル壺、 搬入品の可能性あり。 1と同一個体だ ろう。
3	第50図	土師器 直口壺	覆土 口縁部～頸部片	口 14.0	細砂粒/良好/暗赤 褐	口縁部は横ナデ後放射状ヘラ磨き。内面は 横ハケ目のち横ヘラナデ及び磨き。	
4	第50図	土師器 台付甕	覆土 口縁部～胴部上位片	口 14.0	細砂粒、金雲母/良 好/黄褐	口縁部横ナデ、胴部は縦位のハケ目(7)後、 肩部に横位のハケ目。内面は頸部にハケ目、 胴部はナデ。	
5	第50図	土師器 甕	覆土 口縁部～胴部上位片	口 17.2	細砂粒・褐色粒/良 好/明赤褐	口縁部横ナデ、胴部は器面剥離のため不明。 内面胴部はヘラナデ。	外面の被熱剥離著し い。
6	第50図	土師器 甕	覆土 口縁部～胴部上位片	口 17.2	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、胴部はナデか。内面は頸 部から胴部にヘラナデ。	
7	第50図	土師器 甕	覆土 口縁部～胴部上位片	口 13.2	細砂粒・粗砂粒/良 好/赤褐	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸 部下まで横ナデ、胴部はハケ目。内面胴部 はヘラナデ。	
8	第50図	土師器 甕	覆土 口縁部～胴部上位片	口 16.0	細砂粒/良好/暗褐	口縁部から頸部下まで横ナデ、胴部はヘラ 削り、横ナデと削りの間にナデ部分が残る。 内面胴部はヘラナデ。	
9	第50図	土師器 高坏	覆土 口縁部片	口 25.6	細砂粒/良好/暗赤 褐	口唇部横ナデ、口縁部から体部はヘラ磨き、 内面も同様。	

C区2号住居

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第52図 PL-27	樽式土器 壺	床直 口縁部～胴部上半片	口 16.5	安山岩片・輝石/良好/橙～黄褐	折り返し口縁外面に斜縄文（LR 1条は撚りが乱れる）。頸部に櫛描横線文（不等間隔3カ所に止めがあり描き継ぎなし）、肩部に2～3段の斜位櫛描単線文で構成される乱れた羽状文を描く（「>」字状羽状文は一部で見られる）。肩部文様帯の下端は櫛描横線文で画す（描き継ぎなし）。施文は全て時計回り方向で、頸部→文様帯下端の順。胴部外面はヘラ削り後横ヘラ磨き、頸部と口頸部内面は横位ヘラ磨き。胴部内面はヘラナデ。	2と同一個体の可能性高い。胎土、焼成、色調の類似、及び器形の連続性より。
2	第52図 PL-27	樽式土器 壺	床直 底部～胴部下半片	底 10.0	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい赤褐	底部はヘラ削り、胴部はヘラ磨き。内面はヘラナデ、器面剥離のため単位不明。	1と同一個体の可能性高い。
3	第52図 PL-27	弥生土器 壺	床直 口縁部片	口 16.4	細砂粒/良好/橙	口縁部は折り返し、5カ所に3条一組の棒状浮文貼付。口縁部は櫛描文、頸部は横位のヘラ磨き。内面は斜位のヘラ磨き。	外面頸部は赤色塗彩。
4	第52図 PL-27	土師器 壺	床直 口縁部～頸部	口 13.6	細砂粒/良好/橙	内面頸部に胴部との接合痕が残る。口縁外面は横ナデ後斜位ヘラ磨き、下位から頸部は縦位のハケ目（5）で上位をナデ消す。内面は横ナデ後斜位ヘラ磨き。	
5	第52図 PL-27	土師器 罎	覆土 胴部上半片		粗砂粒/良好/オリーブ黒	内外面黒色処理。頸部は横ナデ、胴部は縦位のヘラ磨き。内面胴部はヘラナデ。	
6	第52図	土師器 甕	床直 口縁部～胴部上半片	口 11.9	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部横ナデ、胴部はヘラ削り。口縁内面にハケ目と横ナデ、胴部内面は板状具小口のナデ。	
7	第52図 PL-27	土師器 手焙形土器	床直 1/3	口 18.0 高 7.6	角閃石、輝石/堅緻/暗褐	覆部は受け口部内面から立ち上がるが、欠損。口縁は強い屈曲による受け口。外面ナデか、摩滅のため不鮮明。内面は体部から底部にヘラナデ。	底内面に煤付着。胎土、色調、焼成から搬入品の可能性あり。
8	第52図	東海系 壺	覆土 胴部片		細砂粒/良好/明赤褐	残存片上位は櫛描横線文後矢羽根状刺突文を廻らせて文様帯下限を画す。胴部は斜位ヘラ磨き。内面はヘラナデ。	
9	第52図 PL-27	土師器 台付甕	覆土 脚部片	脚 7.2	細砂粒/良好/にぶい黄褐	胴部は脚部にホゾ状の差し込みで接合。脚部は縦位ハケ目のちナデ消す。端部は横ナデ。内面はハケ目後ナデ消し。底内面はヘラ削り。	東海系単口縁台付甕か
10	第52図 PL-27	土師器 高坏	床直 脚部片		細砂粒・チャート/良好/灰黄褐	杯身は脚部にホゾ上の差し込みで接合。脚部は縦位のヘラ磨き、内面はヘラナデ。	脚部には中位に透孔3カ所。
11	第52図	土師器 高坏	覆土 脚部片		細砂粒/良好/にぶい橙	杯身はホゾ状の差し込みで脚部と接合。脚部外面は縦位のヘラ磨き、内面上位はヘラ先のナデで中位以下は横ナデ。	脚部に透孔3カ所。

C区3a号住居

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第55図 PL-27	土師器 台付甕	床直 口縁部～胴部中位片	口 16.2	細砂粒/良好/にぶい黄橙	内面肩部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はハケ目。内面は頸部と胴部にヘラナデ。	S字状口縁甕
2	第55図 PL-27	土師器 台付甕	覆土 口縁部～胴部中位片	口 15.2	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目。内面は胴部が縦位のナデ。外面にハケ目整形前の横位ヘラ削り痕を残す。	S字状口縁甕
3	第55図 PL-27	土師器 台付甕	覆土 1/2	口 13.6 高 17.2 脚 9.4	細砂粒/良好/暗赤褐	胴部はホゾ状差し込みで脚部と接合。口縁部横ナデ、胴部から脚部はハケ目、胴部と脚部の接合部はナデ、脚部は横ナデ。内面は胴部がハケ目、脚部はヘラナデ。	
4	第55図	土師器 壺	覆土 頸部～胴部上位片		細砂粒/良好/灰黄褐	胴部内面位輪積み痕が残る。胴部は外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ。	
5	第55図	土師器 壺	覆土 底部～胴部下位	底 5.6	細砂粒/良好/暗褐	底部ヘラ削り、胴部はヘラナデ、底部周囲に指頭痕が残る。内面はハケ目。	
6	第55図 PL-27	土師器 台付甕	覆土 脚部片	脚 7.8	細砂粒/良好/にぶい赤褐	胴部はホゾ状差し込みで脚部と接合。胴部から脚部はハケ目、接合部はナデ。脚部は横ナデ。内面脚部はヘラナデ。	
7	第55図 PL-27	土師器 椀	覆土 1/3	口 13.2 高 4.5 底 4.8	細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部から体部は密な縦位のヘラ磨き、底部はヘラ削り。内面は密な放射状ヘラ磨き。	

遺物観察表

8	第55図 PL-27	土師器 高杯	覆土 脚部上半片		細砂粒/良好/橙	杯身部はホゾ状差し込みで脚部と接合。脚部はヘラナデ、内面はハケ目。	脚部に透孔3カ所か。
9	第55図 PL-27	土師器 器台	覆土 1/2	口 10.4	細砂粒/良好/にぶ い橙	受け部はホゾ状の差し込みで脚部と接合。受け部は口縁部が横ナデ、底部がナデ、脚部は縦位のヘラ磨きで、内面はハケ目。	脚部で上下2段の透孔を互い違いに4カ所穿つ。

C区3b号住居

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第56図 PL-27	土師器 台付甕	口縁部～胴部上位片	口 18.2	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(7)。内面は頸部がヘラナデ、胴部はナデ。	S字状口縁甕

C区4号住居

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第58図	土師器 高杯	覆土 口縁部片	口 19.6	細砂粒/良好/赤褐	内外面とも縦位のヘラ磨き。		
2	第58図	土師器 高杯	覆土 口縁部片	口 20.0	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面は縦位のヘラ磨き、内面も同様であるが単位不鮮明。		
3	第58図	土師器 壺	床直 底部～胴部下位	底 3.2	細砂粒多・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。		
4	第58図 PL-27	土師器 高杯か器 台	床直 脚部	脚 18.6	細砂粒/良好/にぶ い橙	外面は縦位の丁寧なヘラ磨き、内面もヘラ磨きであるが単位不明。	脚部上～中位に2段の透孔3カ所。	
5	第58図 PL-27	土師器 高杯	覆土 脚部片		細砂粒/良好/灰黄 褐	杯身部と脚部の接合状態不明。脚部は外面が縦位のヘラ磨き、内面はハケ目。	脚部中位に透孔3カ所。	
No.	挿図NO. 図版NO.	器種 形態・素材	出土位置	長さ 幅	重量 cm・g	石材	特徴	備考
6	第58図 PL-27	砥石 礫砥石	掘方	9.3 5.7	73.1	砂岩	背面側中央付近が著しく摩耗。板状の自然礫を用いる。	

C区8号住居

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第61図 PL-27	土師器 甕	覆土 ほぼ完形	口 23.2 高 31.5 底 3.8	円磨された細・粗 砂粒/良好/明赤褐	口縁部横ナデ、胴部ヘラケズリ後ハケ目(7)、底部はヘラ削り。内面の頸部にハケ目を残し胴部はヘラナデ。	北陸系「千種甕」。胴中位全周に煤付着

C区市13a号住居

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第63図 PL-28	土師器 壺	覆土 口縁部片	口 12.7	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部折り返し、折り返し口縁部上に棒状浮文貼付、折り返し口縁部下はヘラ磨き。	小片のため文様配置不鮮明。
2	第63図 PL-28	土師器 高杯	床直 杯身部	口 12.6 底 5.2	細砂粒/良好/橙	口唇部横ナデ、口縁部から杯部外面はハケ目のち下半ヘラ削り、上半横ナデ。内面は横位磨き。底面はヘラ削り。	
3	第63図	土師器 甕	覆土 口縁部～胴部下位片	口 10.6	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ、頸部は縦位、胴部は横位と斜めのハケ目。内面は口縁部ハケ目のち上半ナデ、胴部はヘラナデ。	
4	第63図 PL-28	土師器 椀	床直 ほぼ完形	口 9.4 高 5.3 底 3.0	細砂粒・石英/良好/ 橙	口縁部は横位、体部は縦位、下位に横位のヘラ磨き、底部はヘラ削り。内面は密な放射状ヘラ磨き。	
5	第63図	土師器 高杯	覆土 脚部上半片		細砂粒/良好/明赤 褐	杯身部内面黒色処理。杯身部は脚部に巻き上げ。脚部は外面ヘラ磨き、内面ナデ。	脚部に透孔3カ所。
6	第63図 PL-28	土師器 甕	覆土 口縁部～胴部下位片	口 14.8	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部上半は横ナデ、下半から胴部はハケ目、部分的に使用時の擦れで不鮮明。内面は口縁部から頸部がハケ目、胴部はヘラナデ。	胴外面中位以下に煤付着。
7	第63図	土師器 台付甕	覆土 口縁部～胴部上位片	口 15.6	細砂粒/良好/にぶ い黄褐	口縁部横ナデ、胴部ハケ目。内面は頸部から胴部がヘラナデ。	S字状口縁甕
8	第63図	土師器 甕	覆土 底部～胴部下半片	底 5.6	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	胴部はハケ目であるが使用時の擦れでほとんど磨滅、底部は木葉痕が残る。内面はヘラナデ。	
9	第63図	土師器 台付甕	覆土 脚部片	脚 7.0	細砂粒/良好/にぶ い黄褐	脚部は貼付。端部は内側に折り返し。胴部から脚部にハケ目。内面はナデ。	S字状口縁甕
10	第63図 PL-28	土師器 器台	床直 脚部	脚 10.8	細砂粒/良好/明黄 褐	中位で屈曲し裾部へ内彎して開く形状。脚部は縦位から斜め、裾部は横位のヘラ磨き。内面はヘラナデ。	脚部中位に透孔3カ所。東海西部系。底面穿孔径1.4cm。

11	第63図	土師器 器台	覆土 脚部片			細砂粒/良好/にぶ い黄褐	外面は縦位のへら磨き、内面はへらナデ。	脚部上位に透孔3カ所。底面穿孔径1.4cm。
12	第63図 PL-28	手づくね 椀形	覆土 ほぼ完形	口 4.0 高 2.4 底 2.3		微砂粒/良好/にぶ い黄褐	口縁部横ナデ、体部・底部はナデ。内面はナデ。	

C区市13b号住居

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第64図 PL-28	土師器 高杯	覆土 脚部片	脚 19.2		細砂粒/良好/橙	外面は縦位のへら磨き、内面は上半がへらケズリ、下半はハケ目が残る。	脚部に上下2段の透孔3カ所ずつ。
2	第64図 PL-28	土師器 器台	床直 脚部片	脚 17.5		細砂粒/良好/橙	外面は縦位のへら磨き、内面もへら磨きであるが、上半は単位不鮮明。	脚中に3カ所の透かし円孔

C区市16b号住居

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第67図	土師器 壺	覆土 口縁部片	口 16.6		粗砂粒/良好/明赤 褐	口縁部折り返し、内面で外折する。口縁外面はナデ、内面は斜位のへら磨き。	系統不明
2	第67図 PL-28	土師器 鉢	覆土 2/3	口 12.5 高 4.6 底 5.8		細砂粒・粗砂粒、 赤酸化鉄粒多い/良 好/橙	口縁部に幅広い横ナデ、体部下半はハケ目後ナデ上げ、内面横ナデ、底部は輪台成形による凹み底。	北陸系と思われる。
3	第67図	土師器 台付甕	覆土 脚部上半片			白色細砂粒多/良好 /にぶい橙	脚部は貼付。砂目粘土が剥離し菊花状接合痕を残す。脚部外面はハケ目、内面は指ナデ。	S字甕
4	第67図 PL-28	土師器 器台	床直 口縁部の一部と脚部 下半欠損	口 8.0 孔 0.9		細砂粒/良好/にぶ い橙	器受け部は弱く屈曲して開く。受け部から脚部までへら磨きであるが受け部と脚部の境にハケ目が残る。受け部内面は赤色塗彩とへら磨き、脚部はハケ目後へらナデ。	脚部への円孔透かしはみられない
5	第67図	土師器 高杯	覆土 脚部上位片			細砂粒/良好/明赤 褐	脚部外面は縦位のへら磨き、内面はへらナデ。	

B区2号住居

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第70図 PL-28	土師器 甕	覆土 口縁部～胴部上半片	口 24.6		細砂粒・褐色粒/良 好/明赤褐	口縁部横ナデ、胴部は縦位のハケ目、大部分ナデ消されている。内面胴部はへらナデ。	
2	第71図	土師器 台付甕	覆土 口縁部片	口 14.6		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部横ナデ、胴部は縦位のハケ目、内面胴部はへらナデ。	S字状口縁甕
3	第71図	土師器 台付甕	覆土 脚部片			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	脚部は上位にハケ目が残る。内面はナデ。底部内外面付近に砂粒の多い粘土を貼付。	S字状口縁甕
4	第71図	土師器 器台	覆土 脚部上半片			細砂粒/良好/橙	脚部に受け部を接合。外面は縦位のへら磨き。内面は横位のハケ目、一部ナデ消されている。	

B区3号住居

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要	
1	第74図	土師器 杯	床直 1/3	口 13.6 高 4.2		細砂粒・白色粒/良 好/明赤褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。内面は斜放射状へら磨き。	
2	第74図	土師器 杯	覆土 底部片	稜 11.6		細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。内面底部はやや雑な放射状へら磨き。	
3	第74図	土師器 杯	覆土 口縁部～体部片	口 12.8		細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちへら削り。	
4	第74図	土師器 杯	床直 口縁部～体部小片	口 14.6		細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちへら削り。内面体部にやや雑な斜放射状へら磨き。	
5	第74図 PL-28	土師器 杯	床直 1/3	口 12.6 高 5.6 底 4.2		細砂粒/良好/橙	外面体部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。	
6	第74図 PL-28	土師器 杯	覆土 5/6	口 13.3 高 5.4		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。内面は放射状へら磨き。	
7	第74図 PL-28	土師器 杯	床直 1/2	口 13.4 高 5.5		細砂粒・粗砂粒/良 好/赤褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。	内面に油煙または漆が部分的に付着。
8	第74図	土師器 椀	覆土 1/4	口 12.6 高 6.6 底 3.0 稜 8.0		細砂粒・粗砂粒/良 好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。内面は口縁部上半が横ナデ、下半はハケ目、底部から体部はへらナデ。	
9	第74図 PL-28	土師器 杯	覆土 ほぼ完形	口 14.4 高 6.3 底 5.0		細砂粒・粗砂粒/良 好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。内面は底部から体部にへらナデ。	
10	第74図	土師器 杯	床直 口縁部～体部片	口 13.0		細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。	

遺物観察表

11	第74図 PL-28	土師器 椀	覆土 口縁部～体部片	口 12.5	細砂粒/良好/赤褐	口縁部は横ナデ後斜格子状へら磨き、体部はへら削り。内面は放射状へら磨き。	
12	第74図	土師器 高坏	覆土 脚部上半片		細砂粒/良好/にぶい黄橙	脚部は縦位のへら磨き。内面は上位がへらナデ、中位はハケ目。	脚部中位に透孔3カ所。
13	第74図	土師器 高坏	覆土 脚部、裾部欠損		細砂粒/良好/橙	脚部上半は棒状の成形。外面は縦位のへら磨き、内面はへらナデ。	
14	第74図 PL-28	土師器 高坏	覆土 脚部片		細砂粒/良好/にぶい赤褐	脚部はナデ、下位から裾部にかけてハケ目が残る。内面はへらナデ。	
15	第74図 PL-28	土師器 罎	覆土 完形	口 8.5 高 14.5 胴 16.4	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部横ナデ、上半に斜放射状へら磨き、胴部上位はナデ、中位から底部はへら削り、底部にへら磨き。内面口縁部は放射状へら磨き。	
16	第74図	土師器 杯	覆土 底部片	底 4.4	細砂粒/良好/にぶい赤褐	底部から体部下位は手持ちへら削り、中位はナデ。内面は放射状へら磨き。	
17	第74図 PL-28	須恵器 甗	覆土 口縁部～頸部片	口 8.8	微砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回りか。頸部に三重に重なった波状文が巡る。内面降灰が厚く付着。	
18	第74図 PL-28	土師器 甗	覆土 ほぼ完形	口 13.6 高 15.3 底 6.6	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら縦位のへら削り、底部もへら削り。内面胴部はへらナデ。	内面胴部に煤が部分的に付着。
19	第74図 PL-28	土師器 甗	覆土 2/3	口 17.0 高 28.8 底 5.8	粗砂粒・角閃/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り、一部ナデ、底部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
20	第74図	土師器 甗	床直 口縁部～胴部上位片	口 15.6	細砂粒・粗砂粒・石英/良好/赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
21	第74図 PL-28	土師器 甗	床直 口縁部～胴部上半片	口 15.7	細砂粒・褐色粒/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り、頸部にへら痕が残る。内面胴部はへらナデ。	
22	第74図	土師器 甗or甗	床直 口縁部～胴部上半片	口 27.6	細砂粒/良好/灰黄褐	口縁部は横ナデ、頸部は横位、胴部は縦位のへら削り。内面は頸部がへら削り、胴部はへらナデ。	
23	第74図	土師器 甗	床直 口縁部～胴部上位片	口 16.1	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、胴部はへら削り。内面は口縁部上半が横ナデ、下半から胴部はハケ目。	
24	第74図	土師器 甗	床直 口縁部片	口 19.7	細砂粒/良好/明赤褐	頸部で胴部と口縁部を接合。口縁部横ナデ、内面頸部はハケ目がかすかに残る。	

B区4号住居

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第76図	土師器 杯	床直 1/4	口 14.6 高 5.0	細砂粒/良好/赤褐	口縁部は横ナデ、体部は丁寧なナデ、底部は手持ちへら削り。内面底部はへらナデ。	
2	第76図 PL-29	土師器 杯	床直 2/5	口 13.0 高 5.2	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。	
3	第76図 PL-29	土師器 杯	覆土 完形	口 16.2 高 5.5	細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。内面は雑な放射状へら磨き。	
4	第76図 PL-29	土師器 杯	覆土 1/2	口 14.0 高 5.1	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。内面は体部から口縁部に放射状へら磨き。	
5	第76図 PL-29	土師器 椀	覆土 ほぼ完形	口 14.9 高 7.1	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り、体部の一部にへら磨き。内面は底部から口唇部下にへらナデ。	
6	第76図	土師器 杯	床直 口縁部～体部1/2	口 16.2	細砂粒/良好/赤褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り、稜下は器面剥落で単位不鮮明。	
7	第76図 PL-29	土師器 椀	覆土 完形	口 14.0 高 7.0	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちへら削り。内面は底部から体部がへらナデ。	
8	第76図	土師器 杯	覆土 底部片	稜 15.0	細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。	
9	第76図 PL-29	土師器 椀	覆土 1/4	口 10.6 高 7.0	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。内面は底部から体部に放射状へら磨き。	
10	第76図 PL-29	土師器 鉢	覆土 5/6	口 16.1 高 10.1	細砂粒・粗砂粒/良好/明赤褐	口縁部横ナデ、体部上位ナデ、中位から底部は手持ちへら削り。内面は底部から体部にへらナデ。	
11	第76図 PL-29	土師器 鉢	覆土 5/6	口 14.8 高 10.4 底 4.3	細砂粒/良好/赤褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。内面は底部から体部にへらナデ。	内面体部の一部に煤が付着。
12	第76図 PL-29	土師器 小型甗	覆土 5/6	口 12.8 高 11.1 底 4.8	細砂粒・粗砂粒/良好/赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	内面胴部には煤が付着。

13	第76図	土師器 壺	床直 底部～胴部下半		細砂粒/良好/橙	胴部はナデ、底部は手持ちへら削り。内面はへらナデ。		
14	第76図 PL-29	土師器 甕	床直 口縁部～胴部中位	口 12.6	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部下まで横ナデ、胴部はへら削り器面磨滅のため詳細不鮮明。内面胴部はへらナデ。		
15	第76図 PL-29	土師器 甕	覆土 口縁部～胴部上半片	口 18.1	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り、一部にへら磨き。内面胴部はへらナデ。		
16	第76図	土師器 甕	覆土 口縁部～胴部上位片	口 15.0	細砂粒/良好/赤褐	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り後ナデか。内面胴部はへらナデ。		
17	第76図	土師器 甕	覆土 口縁部～胴部上位片	口 17.4	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部横ナデ、胴部はハケ目。内面胴部は強いへらナデ。	胴部は輪積み痕で欠損。	
No.	挿図NO. 図版NO.	器 種 形態・素材	出土位置	長さ 幅	重量 cm・g	石 材	特 徴	備 考
18	第76図 PL-29	紡錘車 薄型		5.0 4.9	39.1	蛇文岩	表裏面とも整形時の工具痕が顕著。上面側軸穴周辺は使用時のスレが著しい。	
19	第76図 PL-29	砥石 手持ち砥石	覆土	8.1 4.4	147.9	流文岩	4面とも使用。下端破損部・上端に刃ならし痕あり。	

B区市2号住居

No.	挿図NO. 図版NO.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要	
1	第78図	土師器 鉢	床直 口縁部～体部上半片	口 20.7	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部横ナデ、体部はへら削り後ナデ。内面体部はへらナデ。	5世紀代の混入品か	
2	第78図	土師器 台付甕	覆土 口縁部片	口 12.8	細砂粒/良好/暗褐	口縁部横ナデ、頸部は縦位のハケ目。	S字甕	
No.	挿図NO. 図版NO.	器 種 形態・素材	出土位置	長さ 幅	重量 cm・g	石 材	特 徴	備 考
3	第78図 PL-29	石製模造品 剣型	覆土	3.8 1.9	5.0	滑石	上下2ヶ所に孔がある。孔は片側穿孔。	

C区市13c号住居

No.	挿図NO. 図版NO.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要
1	第79図 PL-29	土師器 壺	覆土 口縁部片	口 17.0	細砂粒/良好/にぶ い橙	口唇部は外面に面取り、横位ハケ目を残す。口縁外面は縦位ハケ目のち横ナデ、内面は横位ハケ目のちまばらな磨き。頸部に凸帯を巻き、ハケ目と同一工具による刻みを廻らす。	
2	第79図 PL-29	土師器 甕	覆土 口縁部～体部上半片	口 26.5	細砂粒・粗砂粒/良 好/にぶい赤褐	口唇部はナデによる小さな面取り。口縁内外面に横位ハケ目。体外面は縦～斜位ハケ目、体内面は板小口による幅広いナデ。	東海東部系大型台付甕の可能性あり。
3	第79図 PL-29	土師器 台付甕	床直 3/4	口 13.2 高 21.4 脚 7.2	細砂粒・粗砂粒/良 好/明赤灰	口縁部から頸部は横ナデ、体部外面はへら削りと板小口によるナデ、脚部は横ナデ。体内面は巾広のへらナデ。	東海西部系単口縁台付甕と思われる。越えん外面に吹きこぼれ痕あり。
4	第79図	土師器 甕	覆土 口縁部～体部上位片		円磨された片岩・ 赤鉄粒多い/やや軟 質/にぶい黄褐	口唇部つまみ上げ、外面に平坦面をつくる。口縁部横ナデ、体部外面は短い単位のハケ目を重ねる。体部内面はへらケズリ。	北陸系「千種」甕

B区1号土坑

No.	挿図NO. 図版NO.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要
1	第80図	土師器 甕	覆土 完形	長 3.8 幅 1.3 厚 0.7	細砂/ふつう/にぶ い黄褐	長軸方向中央に切れ目を入れる。	

C区5号土坑

No.	挿図NO. 図版NO.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要
1	第80図	土師器 台付甕	覆土 口縁部片	口 14.8	細砂粒/良好/黄灰	口縁部横ナデ、胴部は縦位のハケ目。内面胴部はナデ。	
2	第80図	土師器 甕	覆土 口縁部～頸部片		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面は縦位ハケ目後、口縁部上半を横ナデ。内面は口縁部が横位ハケ目、頸部ナデ。	

A区1号谷

No.	挿図NO. 図版NO.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要
1	第83図	土師器 壺	覆土 頸部～肩部片		細砂粒・粗砂粒/良 好/明赤褐	頸部直立の二重口縁。外面頸部は縦位、肩部は横位へら磨き。内面は頸部がハケ目後縦へら磨き、胴部はへらナデ。	畿内型二重口縁壺。

遺物観察表

2	第83図 PL-29	土師器 小型鉢	覆土 As-C混土層中 口縁部～胴部上位片	口 11.0	細砂粒/良好/赤褐	口縁～頸部外面は横ナデ、体部外面と内面全体に横位ヘラ磨き。	北陸系精製品、ただし胎土は在地に近い。
3	第83図 PL-29	土師器 直口壺	覆土 胴部	頸 8.3 胴 12.1	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	頸部から底部はヘラ削り後ヘラ磨き。内面はヘラナデ、底部付近にハケ目が残る。	
4	第83図 PL-29	土師器 埴	覆土 口縁部2/3欠損	口 9.8 高 10.0 底 3.0	細砂粒・粗砂粒・ 角閃/良好/橙	口縁部内外面は横ナデ、頸部にヘラ先沈線を廻らし、胴部上位ナデ、中位から底部までヘラ削り。胴部内面はナデ。	
5	第83図	土師器 台付甗	覆土 As-C混土層中 口縁部片	口 15.6	細砂粒/良好/にぶ い黄灰	口縁上段は強く外反し端部はやや肥厚、口縁内面の団は弱い。口縁部は横ナデ、頸部外面は上方へのヘラケズリ。	S字状口縁甗
6	第83図	土師器 台付甗	覆土 As-C混土層中 口縁部～肩部片	口 13.6	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁上段はやや長く外反、下段内面は狭く内傾平坦面を作る。口縁部横ナデ、頸部にはヘラ先による沈線を廻らす。頸部下から斜位のハケ目。内面は幅広のヘラナデ。	S字状口縁甗
7	第83図 PL-29	土師器 台付甗	覆土 As-C混土層中 口縁部～胴部上位片	口 14.8	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁上段長く上位で外折。頸部にヘラ先沈線を廻らす。口縁部横ナデ、胴部はハケ目。内面胴部は斜めのナデ。	S字状口縁甗
8	第83図 PL-29	土師器 台付甗	覆土 As-C混土層中 口縁部～胴部上位片	口 14.6	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁端部内面にナデによるわずかな凹線。胴部はハケ目(7)。内面胴部はヘラナデ。	S字状口縁甗
9	第83図	土師器 台付甗	覆土 As-C混土層中 口縁部～肩部片	口 15.8	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁上段は短く外反、下段内面は内傾平坦面をつくる。口縁部横ナデ、肩外面はヘラケズリ後頸部から斜位のハケ目。内面はナデ。	S字状口縁甗
10	第83図	土師器 台付甗	覆土 As-C混土層中 口縁部～肩部片	口 13.9	細砂粒/良好/浅黄 橙	口縁内面の屈曲弱く外反する。口縁部横ナデ、胴部は頸部下から斜位のハケ目。内面は胴部がナデ。	S字状口縁甗
11	第83図	土師器 台付甗	覆土 As-C混土層中 口縁部～頸部片	口 14.7	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁上段が長く上方に伸び口唇部内面に沈線状凹線が廻る。口縁部横ナデ、頸部下から斜位のハケ目。内面はナデ。	S字状口縁甗
12	第83図 PL-29	土師器 台付甗	覆土 As-C混土層中 口縁部～胴部上位片	口 19.6	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁内面の段弱く外反する。口縁部横ナデ、胴部はハケ目(7)。内面胴部は斜めのナデ。	S字状口縁甗
13	第83図	土師器 甗	覆土 口縁部～胴部下位片	口 17.0	細砂粒・褐色粒/良 好/にぶい橙	口唇部は面取り、口縁外面は上方、内面は横位のハケ目。胴部外面は左上方への斜位ハケ目、内面上位はヘラナデ、底面付近はヘラ磨き。	東海東部系台付甗
14	第83図	土師器 台付甗	覆土 As-C混土層中 胴部下半片		細砂粒/良好/浅黄 橙	胴部は内外面とも斜位のハケ目。	S字状口縁甗
15	第83図 PL-29	土師器 高坏	覆土 杯身部3/2	口 20.5 底 12.6	細砂粒/良好/橙	脚部はほぞで接合。口縁部は横ナデ、杯部外面は横ハケ目後横位ヘラ磨き、内面は横ナデ後暗文状のまばらなヘラ磨き、底面にハケ目を残す。脚外面はハケ目。	
16	第83図 PL-29	土師器 高杯	覆土 As-C混土層中 杯底～脚部片		細砂粒・粗砂粒/良 好/にぶい橙	外面ヘラ磨きと思われるが器面磨滅。内面はナデ。	脚部上位に透孔3カ所。
17	第83図 PL-29	土師器 高坏	覆土 脚部片		細砂粒/良好/明赤 褐	脚部は丁寧な縦位のヘラ磨き、内面はヘラナデ後下位に縦ヘラ磨き。	外面中位に貫通しない1孔を穿つ。
18	第83図 PL-29	土師器 高坏	覆土 脚部片		細砂粒・粗砂粒/良 好/橙	脚部内面に左巻き上げ痕を残し、締め付け成形時の縦しわが残る。外面はヘラ削り後ナデ。	
19	第83図 PL-29	土師器 器台	覆土 As-C混土層中 底部～胴部下位片	口 6.4 高 7.2 脚 9.6 孔 0.8	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	受け部口縁部は受口状に上方へつまみ上げて横ナデ、受け部内外面と外面全体にヘラ磨き、脚部内面はナデ。	脚部に透孔4カ所。
20	第83図 PL-29	土師器 台付鉢	覆土 As-C混土層中 脚部～底部	脚 7.4	細砂粒/良好/赤褐	脚部は水平に外反する。体部、脚部とも内外面ヘラ磨き。	北陸系精製品。脚接地面は摩滅。
21	第83図 PL-29	土師器 台付甗	覆土 脚部	脚 9.6	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	脚部と胴部は輝石の目立つ砂目粘土で接合補強。脚裾部内面は折り返し後内面全体に指ナデ。脚部上位に斜ハケ目。	S字状口縁甗
22	第83図	土師器 台付甗	覆土 As-C混土層中 胴部下～脚部上位片		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	脚部は砂目粘土で補強し底面はヘラナデ、脚天井部は指ナデ。体部、脚部とも斜位ハケ目。	S字状口縁甗

23	第 83 図 PL-29	土師器 台付甕	覆土 As-C混土層中 脚部片		細砂粒/良好/灰褐	胴部は縦位、脚部は斜めのハケ目。内面脚部はナデ。体脚接合部に砂目粘土の貼り付け。	S 字状口縁甕
24	第 83 図 PL-29	土師器 有孔鉢	覆土 As-C混土層中 底部～胴部下位片	底 5.4 孔 1.3	細砂粒/良好/黄灰	底部から胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	黒斑あるが、被熱痕はみられない。 底面穿孔径0.8cm。
25	第 83 図	土師器 甕	覆土 As-C混土層中 底部～体部下位片	底 6.8	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	体部外面と底面はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
No.	挿図NO. 図版NO.	器 種 形態・素材	出土位置	長さ 重量 幅 cm・g	石 材	特 徴	備 考
26	第 83 図 PL-29	砥石 球形礫	覆土	8.4 576.4 7.2	粗粒輝石安山岩	背面側に刃ならし痕がある。縄文期磨石の転用?	

C区3号溝

No.	挿図NO. 図版NO.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要
1	第 85 図 PL-30	土師器 壺	覆土 口縁部～胴部上位片	口 17.0	細砂粒・褐色粒/良 好/橙	口縁部は断面三角形の幅広い粘土帯付加による折り返しで、3条一組の棒状貼付文をおそらく4カ所に配す。頸部には断面矩形の凸帯を廻らす。口縁外面と頸部直下に松葉束と思われる工具による櫛描横線文を廻らし、さらに肩部にはヘラ描き鋸歯文らしき痕跡がみられる。口縁内面は横位ヘラ磨きで肩内面はヘラケズリ。	パレススタイル壺をモデルに在地化の進んだ模倣形態と思われる。C区2住例(3)と同一個体の可能性有り。
2	第 85 図	土師器 台付甕	覆土 口縁部～胴部上半片	口 17.8	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁屈曲は強く、下段内面に明瞭な平坦面を作る。口唇部は小さく外反し丸みをもつ。頸部～肩部に左下方への斜位ハケ目。胴中位は左上方へのハケ目、肩部に横位ハケ目。頸部内面ヘラナデ、肩部内面は指ナデ上げ。	S 字状口縁甕
3	第 85 図 PL-30	土師器 甕	覆土 口縁部～胴部上半片	口 17.0	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部横ナデ、頸部から胴部はハケ目。口縁内面に横ハケ目、胴部内面は板小口によるナデ。	
4	第 85 図 PL-30	土師器 甕	覆土 口縁部～胴部上半片	口 12.8	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は外面が縦位、内面が横位ハケ目ののち横ナデ。頸部から胴上半部は横及び斜位ハケ目。内面はヘラナデ。	
5	第 85 図	土師器 甕	覆土 口縁部～胴部上位片	口 15.6	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、頸部は細かいハケ目、胴部はやや粗いハケ目。内面胴部はヘラナデ。	
6	第 85 図 PL-30	土師器 甕	覆土 口縁部～胴部上半片	口 17.5	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口唇部は上方へつまみ上げナデ。口縁部は横ナデ、頸部下はナデ、胴部はヘラナデ。内面胴部はヘラナデ。	
7	第 85 図	土師器 甕	覆土 口縁部片	口 15.7	細砂粒/良好/黒褐	口縁部は横ヘラナデ、口唇部外面にヘラ先による刻み目。	
8	第 85 図	土師器 甕	覆土 頸部～胴部片		細砂粒/良好/赤褐	頸部から胴部はハケ目。内面は頸部が横位のハケ目、胴部はヘラナデ。	
9	第 85 図 PL-30	土師器 高坏	覆土 杯部3/4	口 21.3 底 7.6	細砂粒/良好/明赤 褐	外底の稜は弱い、内底は円板状の平坦面を作出する。脚部はほぞ差し込みによる接合。内外面とも丁寧な放射状ヘラ磨き。	
10	第 85 図 PL-30	土師器 器台	覆土 1/2	口 9.4 高 8.7 孔 1.3 脚 13.8	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁はS字状に屈曲外反し横ナデ、受け部内面はヘラ磨き。受け部外面から脚部外面はヘラ削り後中位からヘラ磨き。脚内面はヘラナデ。	脚部中位に透孔3カ所。
11	第 85 図 PL-30	土師器 器台	覆土 脚部片	脚 10.0 孔 1.0	細砂粒/良好/橙	わずかに残存する受け部は内外ともハケ目、脚部はヘラ削り後上半をヘラ磨き。内面は斜位ハケ目。	脚部中位に透孔3カ所。
12	第 85 図	土師器 器台	覆土 脚部上半片	孔 1.2	細砂粒/良好/赤褐	外面は縦位ヘラ磨き。内面はヘラナデ。	脚部中位に透孔4カ所。
13	第 85 図	土師器 台付甕	覆土 胴部下位～脚部上半		白石英、岩石片多/ 良好/にぶい黄橙	外面の胴部から脚部に単位の短い縦位ハケ目を重ねる。内面は底面、脚部とも横位ハケ目。	東海東部～南関東系

C区市3号溝

No.	挿図NO. 図版NO.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要
1	第 85 図 PL-30	土師器 台付甕	覆土 脚部片	脚 7.4	細砂粒/良好/明赤 褐	脚部と胴部は砂目粘土で接合補強。脚裾部内面は折り返し。脚部上半は斜位ハケ目。内面は上半がヘラナデ、下半は指横ナデ。	S 字甕

遺物観察表

2	第 85 図 PL-30	土師器 台付甗	覆土 脚部片	脚 10.0	細砂粒多/良好/に ぶい橙	脚部は縦位ハケ目。体部との接合部に粘土 付加なでつけ。底面はケズリ、脚内面はへ ら先によるナデ。	東海東部～南関東系
---	-----------------	------------	-----------	--------	------------------	--	-----------

C区3号溝周辺

No.	挿図NO. 図版NO.	種 類 器 種	出 土 位 置 残 存 率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要
1	第 85 図	土師器 壺	覆土 口縁部片	口 24.4	細砂粒・褐色粒/良 好/にぶい黄橙	口縁部外面は放射状へら磨き、内面は全面 横位のへら磨き。	畿内系二重口縁壺と 思われる。
2	第 85 図	土師器 甗	覆土 口縁部片	口 14.0	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部断面矩形の折り返し。口縁部は横ナ デ、折り返し下にハケ目がわずかに残る、 頸部はナデ。内面は横位のへら磨き。	広口短頸壺への分類 も可能。
3	第 85 図	土師器 甗	覆土 口縁部片		細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部折り返し。口縁部は横ナデ、折り返 し下にハケ目が残る。内面は縦位のへら磨 き。	
4	第 85 図	土師器 高坏	覆土 脚部片		細砂粒・褐色粒/良 好/褐灰	脚部は縦位のハケ目、裾部は横位のハケ目。 内面はへらナデ、最上位にハケ目が残る。	脚部中位に透孔3か 所。
5	第 85 図	土師器 ミア チュア	覆土 底部～胴部下半片	底 2.0	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	底部と胴部はへら削り。内面はへらナデ。	体外面下部に3カ 所、器壁に1カ所4 ×2ミリ大の穴が残 る。種子抜け痕か

B区遺構外

No.	挿図NO. 図版NO.	種 類 器 種	出 土 位 置 残 存 率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要
1	第 86 図	土師器 壺	覆土 As-C混土層 口縁部～肩部片	口 12.8	細砂粒・角閃/良好 /にぶい黄褐	口唇はつまみナデで上縁に沈線状の凹み線 が廻る。口縁部から頸部下は幅広へら横ナ デ、肩部外面は縦へら磨き、内面はへらナデ。	
2	第 86 図	土師器 壺	覆土 As-C混土層 口縁部片		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁外面に断面三角形の粘土帯付加によ る折り返し、さらに複数の棒状貼付文を付 す。頸部外面に赤彩。口縁内外面とも横ナ デ。	パレススタイル壺 か。
3	第 86 図	土師器 壺	覆土 As-C混土層 口縁部～頸部片	口 19.0	細砂粒・角閃/良好 /にぶい橙	折り返し口縁で口唇部は面取りに沈線を廻 らす。頸部外面にハケ目のち内外面に横ナ デ。 内面頸部はへらナデ。	
4	第 86 図	土師器 甗	覆土 As-C混土層 口縁部～胴部上位片	口 15.0	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部はハケ目後横ナデ、頸部の上下は縦 位のハケ目、胴部はへら削り。内面は頸部 にハケ目、胴部はへらナデ。	
5	第 86 図	土師器 台付甗	覆土 As-C混土層 口縁部～胴部上位片	口 13.8	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁屈曲弱く、上段も短く外反。頸部～肩 に左下方への斜位ハケ目のち肩部に横ハケ 目。ハケ目前整形のケズリ痕が確認される。 頸部内面に横ハケ目のちナデ、肩内面は指 ナデ上げ。	S字状口縁甗
6	第 86 図	土師器 台付甗	覆土 As-C混土層 口縁部～胴部上位片	口 15.6	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁上段は横に開き上端部に凹線状平坦面、 下段内面にも平坦面をつくる。頸部～肩部 に左下方への斜位ハケ目後、肩に横位のハ ケ目。内面は頸部がへらナデ、胴部は指ナ デ上げ。	S字状口縁甗
7	第 86 図	土師器 甗	覆土 As-C混土層 口縁部～胴部上位片	口 14.8	粗砂多い/良好/明 赤褐	口縁外面は横ナデ、内面は板小口の横ナデ。 肩外面はナデ様の縦ハケ目、内面は横へら ナデ。	
8	第 86 図 PL-30	土師器 高坏	覆土 As-C混土層 杯身部1/2	口 18.4 底 10.2	細砂粒・粗砂粒/良 好/埋赤褐	外底部周縁に小凸帯貼付。口縁～杯部の内 外面とも幅広野へらナデのち、内面に暗文 状のまばらな縦へら磨き。	
9	第 86 図	土師器 高杯	覆土 As-C混土層 杯部片	口 22.6	細砂粒・角閃/良好 /にぶい黄橙	口唇部つまみ上げナデ、口縁～杯部は二重 口縁状に屈曲外反。内外面とも幅広のへら ナデ。底外面はへら磨き。	
10	第 86 図	土師器 高杯	覆土 As-C混土層 杯身～脚上部片	底 10.0	細砂粒・角閃/良好 /赤褐	杯身部と脚部はほぞによる接合。杯部外面 は板小口の横ナデで稜の整形は粗い。底面 はへら磨き、脚部はへら削り。	
11	第 86 図	土師器 高坏	覆土 杯身部～脚部片		細砂粒/良好/橙	杯部内外面とも縦位へら磨き、杯底外面は へらケズリ。脚内面は横へらナデ。	布留型高杯の模倣品 と考えられる。
12	第 86 図	土師器 特殊器台	覆土 器受け部片		微砂粒/良好/にぶ い赤褐	中位で屈曲外反する。内外面とも縦位へら 磨き。	受け部下半に円形透 孔6カ所。胎土きめ 細かく在地と異なる。

13	第 86 図	土師器 器台	覆土 口縁部～脚部上半	口 8.8 孔 1.0	細砂粒・白色粒/良好/にぶい赤褐	内外面とも横位の丁寧なヘラ磨き。	
14	第 86 図 PL-30	土師器 高杯	覆土 As-C混土層 脚部片		細砂粒/良好/にぶい黄橙	脚部は縦位のヘラ磨き。内面は上半がナデ、下半はヘラナデ。天井部に軸芯孔を残す。	脚部に透孔3カ所
15	第 86 図	土師器 器台	覆土 脚部片	孔 0.8	細砂粒・角閃/良好/にぶい黄橙	脚部は縦位、受け部下位に横位のヘラ磨き。内面はヘラナデ。	脚部に透孔3カ所
16	第 86 図	土師器 高杯	覆土 As-C混土層 脚部片		細砂粒/良好/にぶい赤褐	内面に時計回り巻き上げ痕を残す。外面はハケ目のち縦磨き。	
17	第 86 図	土師器 高杯	覆土 As-C混土層 脚部片		細砂粒/良好/明赤褐	内面に成形時の巻き上げ痕と絞り目を残す。外面はヘラナデ。	杯部底面の剥離著しいのは支脚転用の為か。
18	第 86 図 PL-30	土師器 台付甕	覆土 As-C混土層 脚部1/2	脚 9.8	細砂粒/良好/にぶい黄橙	砂目粘土付加で胴部と脚部の接合補強。脚裾部内面は折り返し。脚部上半に斜位ハケ目。内面ナデ。	S字襷
19	第 86 図	土師器 甕	覆土 As-C混土層 口縁部～胴部上位片	口 19.7	細砂粒・粗砂粒少/良好/明赤褐	口縁部横ナデ、胴部は上位がナデ、中位はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
20	第 86 図	土師器 杯	覆土 As-C混土層 口縁部～体部片	口 13.8	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部横ナデ、体部は手持ちヘラ削り。内面は底部から体部に放射状ヘラ磨き。	内斜口縁杯
21	第 87 図 PL-30	土師器 杯	覆土 As-C混土層 口縁部～体部片	口 15.4	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部から体部上半は横ナデ、下半から底部はヘラ削り後雑なヘラ磨き。内面は底部から口縁部に弧を描く放射状ヘラ磨き。	内斜口縁杯
22	第 87 図 PL-30	土師器 杯	覆土 As-C混土層 2/3	口 14.9 高 4.7 稜 14.6	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)ナデ、底部は手持ちヘラ削り。内面は体部から底部にヘラ磨き。	
23	第 87 図	土師器 杯	覆土 As-C混土層 口縁部～体部小片	口 15.7	細砂粒/良好/赤褐	口縁部横ナデ、体部は手持ちヘラ削り。	
24	第 87 図	須恵器 甕	覆土 As-C混土層 胴部小片		微砂粒/還元焰/灰	外面は平行叩き、内面はナデ、同心円状あて具がかすかに残る。	内面は擦り磨かれており砥石等に転用か。
25	第 87 図	土師器 甕	覆土 As-C混土層 口縁部～胴部上位片		細砂粒/良好/黒葛	口縁部は縦位のハケ目後横ナデ、内面は口縁部胴部とも横位のハケ目。	
No.	挿図NO. 図版NO.	器 種 形態・素材	出土位置	長さ 重量 幅 cm・g	石 材	特 徴	備 考
26	第 87 図 PL-30	凹石 楕円磔	As-C混土層	11.6 955.7 9.7	粗粒輝石安山岩	背面側にロート状の凹穴2、裏面側に集合打痕2。表裏面とも摩耗。	
27	第 87 図 PL-30	磨石 楕円偏平磔	As-C混土層	11.1 536.1 8.6	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗。側縁は顕著な打痕。被熱。	
28	第 87 図 PL-30	磨石 円形偏平磔	As-C混土層	10.5 629.4 10.3	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗。エッジに打痕あり。	
29	第 87 図 PL-30	凹石 楕円偏平磔	As-C混土層	11.5 756.6 9.5	粗粒輝石安山岩	背面側中央付近に集合打痕。表裏面とも摩耗。小口部側縁は、打痕・摩耗痕。	
30	第 87 図 PL-30	磨石 切目石錘	As-C混土層	17.3 1900.9 16.3	石英閃緑岩	表裏面とも顕著な摩耗。被熱してひび割れている。	
31	第 87 図 PL-30	砥石? 楕円磔	As-C混土層	31.4 5735.6 (19.2)	粗粒輝石安山岩	表裏面とも摩耗して、磔面が光沢を帯びる。特に、平坦面を有する背面側左辺の摩耗が顕著。	

C区遺構外

No.	挿図NO. 図版NO.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計 測 値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘 要
1	第 87 図	土師器 壺	覆土 As-C混土層 口縁部～頸部片	口 15.5	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は折り返しで、口唇は小さな面取り、下端が肥厚する。口縁内外面ともハケ目のち外面上位は横ナデ。	器形は駿河湾「大廓式」系の影響か。
2	第 87 図	弥生土器 壺	覆土 As-C混土層 口縁部片	口 16.0	細砂粒多/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、中位にヘラ削りが残る。内面は口唇部横ナデ、口縁部ヘラナデ。	
3	第 87 図 PL-30	土師器 甕	覆土 As-C混土層 口縁部～胴部片	口 12.8	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい黄橙	つまみナデによる受口口縁。口縁下端の稜線部にはヘラ先による刻みを加え肩部にも痕跡を残す。胴部外面は2条単位とも思える櫛歯具で斜位のハケ目整形を施す。内面は胴部上半がヘラナデ、下半がナデ。	近江系受口状口縁甕

遺物観察表

4	第 87 図	土師器 甗	覆土 As-C混土層 口縁部片	口 18.0	細砂粒/良好/黒葛	口縁部は内外とも横ナデ、外面口唇部にヘラ刻み。	
5	第 87 図	土師器 小型壺	覆土 As-C混土層 口縁部～胴部上位片	口 6.8	細砂粒多/良好/赤褐	口縁外面にハケ目、体部は磨き、内面はナデ。	
6	第 87 図	土師器 小型高杯	覆土 As-C混土層 脚部上半		細砂粒/良好/明赤褐	中位で外折する。外面は縦位のヘラ磨き、内面は上半がヘラナデ、下半はヘラ磨き。	脚部中位に透孔が3カ所。
7	第 87 図	土師器 高坏	覆土 As-C混土層 脚部上半		細砂粒/良好/にぶい黄橙	脚部は杯底部に差し込み接合。外面は縦位のヘラ磨き、内面はヘラナデか。脚天井部に軸芯孔を残す。	脚部中位に透孔が3カ所。
8	第 87 図 PL-30	土師器 鉢	覆土 As-C混土層 1/3	口 12.4 高 8.1 底 5.0	細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい黄	口唇部横ナデ、口縁部から体部と底部は手持ちヘラ削り。内面は口唇部横ナデ、口縁部から底部はヘラナデ。	
9	第 87 図	土師器 高坏	覆土 As-C混土層 杯部下半～底部		細砂粒/良好/明赤褐	脚部はぼぞ差し込み接合。外面は横位、内面は縦位のヘラ磨き。	内底面の剥離著しく、器台に転用の可能性。
10	第 87 図	土師器 壺	覆土 As-C混土層 底部～胴部下位片	底 7.4	細砂粒/良好/明赤褐	底部は木葉痕が残る、胴部はハケ目、器面磨滅のため不鮮明。内面は板小口によるヘラナデ。	

C区1号溝

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第 91 図	土師器 壺	覆土 頸部片		細砂粒/良好/にぶい黄橙、頸部赤	口縁部は内外とも横ナデ、内面頸部はヘラナデ。	伊勢湾型二重口縁壺
2	第 91 図	土師器 壺	覆土 胴部上位片		細砂粒/良好/にぶい黄橙	肩部上位に低い凸帯を廻らし頸部までを赤彩。胴上半部を櫛描横線文とヘラ描き鋸歯文の3段以上の交互施文（時計回り）。櫛描施文具は幅31ミリ前後。鋸歯文には赤彩を追加する。内面はヘラナデ。	砂粒少なくきめ細かい胎土と灰白色の焼成色調、文様の丁寧さから搬入されたパレススタイル壺と考えられる。
3	第 91 図	土師器 甗	覆土 口縁部～体部上位片	口 19.6	細砂粒/良好/にぶい赤褐	口唇は沈線状にくぼみ、内面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から胴部はハケ目（8）後口縁部に横ナデ。内面は口縁部に横ハケ目、胴部ナデ。	
4	第 91 図	土師器 鉢	覆土 口縁部～体部片	口 12.8	微砂粒/良好/	体部は縦位のハケ目後下位はヘラ磨き、口縁～頸部外面は板小口による幅広い横ナデ。内面体部はヘラナデ。	
5	第 91 図	土師器 ミニア チュア	覆土 脚部片	脚 6.0	細砂粒/良好/にぶい黄橙	中央に成形時の軸芯孔を残し天井部を閉塞する。脚部上半はヘラ削り、下半は横ナデ。内面はヘラナデ。	高杯がモデルか。

C区2号溝

No.	挿図NO. 図版NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	第 91 図	土師器 台付甗	覆土 口縁部片	口 15.7	細砂粒・チャート/良好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、頸部にハケ目。内面胴部はナデ。	

写 真 图 版



喜多町遺跡全景（東から前橋方面を望む）



A区全景（東から）



A区2面調査区全景（東から）



A区1号谷（東から）



A区2面粉砂（南から）



B区1面全景（東から）



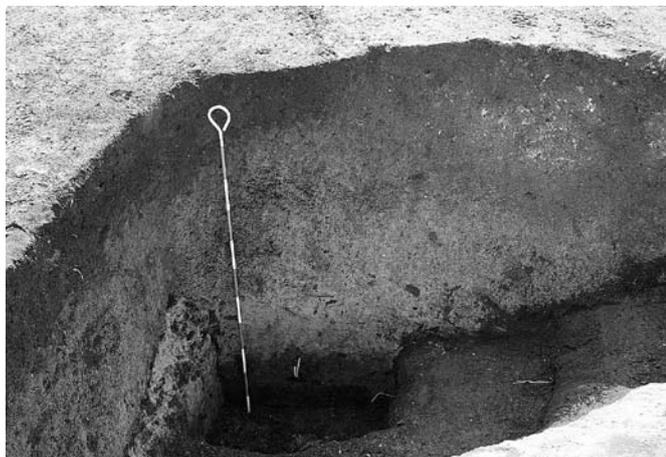
B区2面全景（西から）



B区1号谷2面全景（南から）



B区1号谷2面土層断面（南から）



B区土層断面（中央下の灰白色が縄文洪水層）



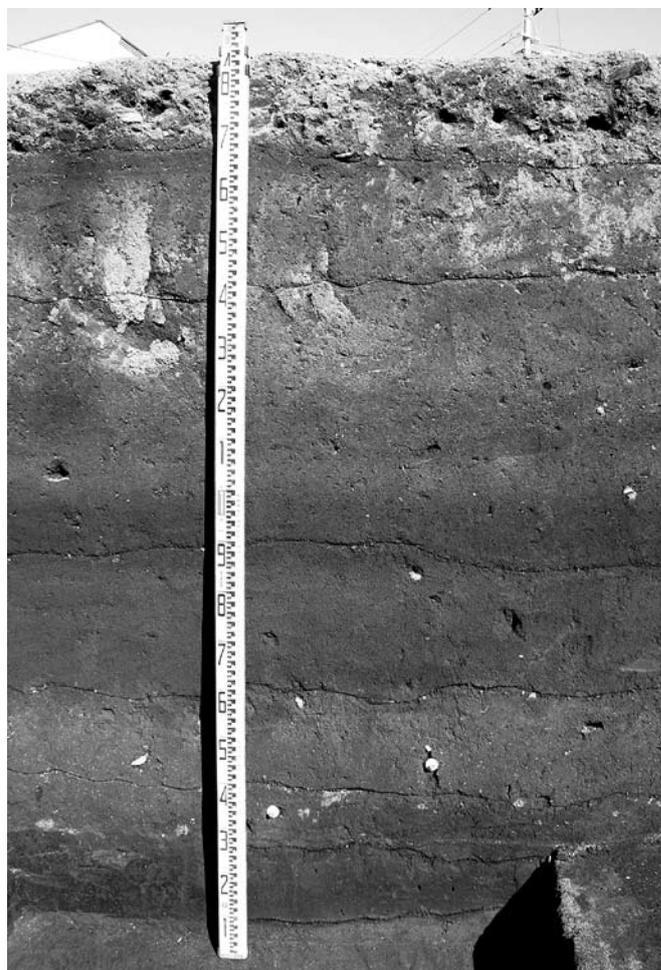
C区全景（東から）



C区2面調査区全景（西から）

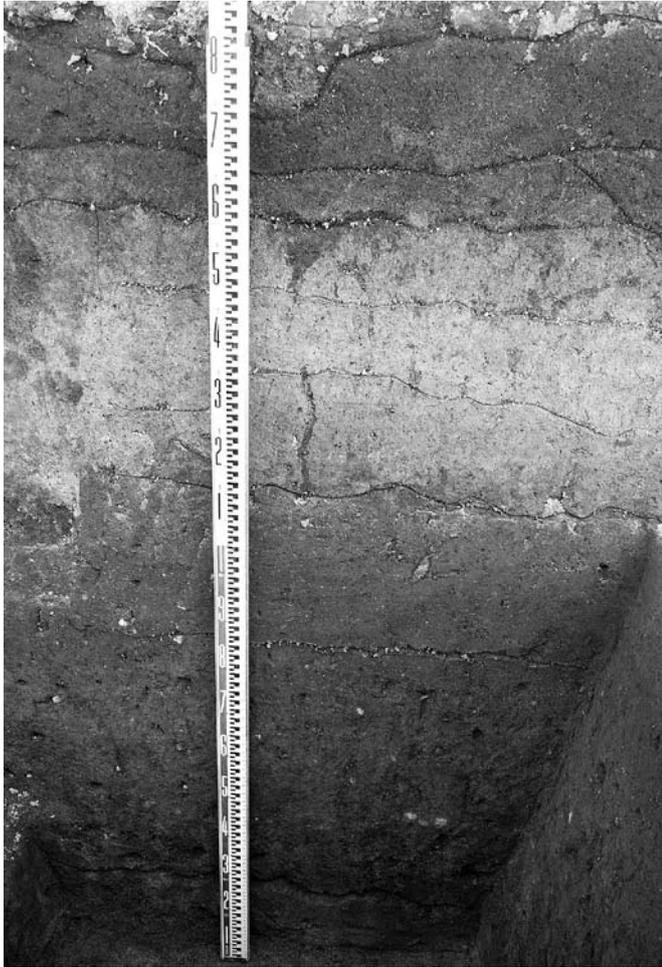


C区2面調査区全景（東から）

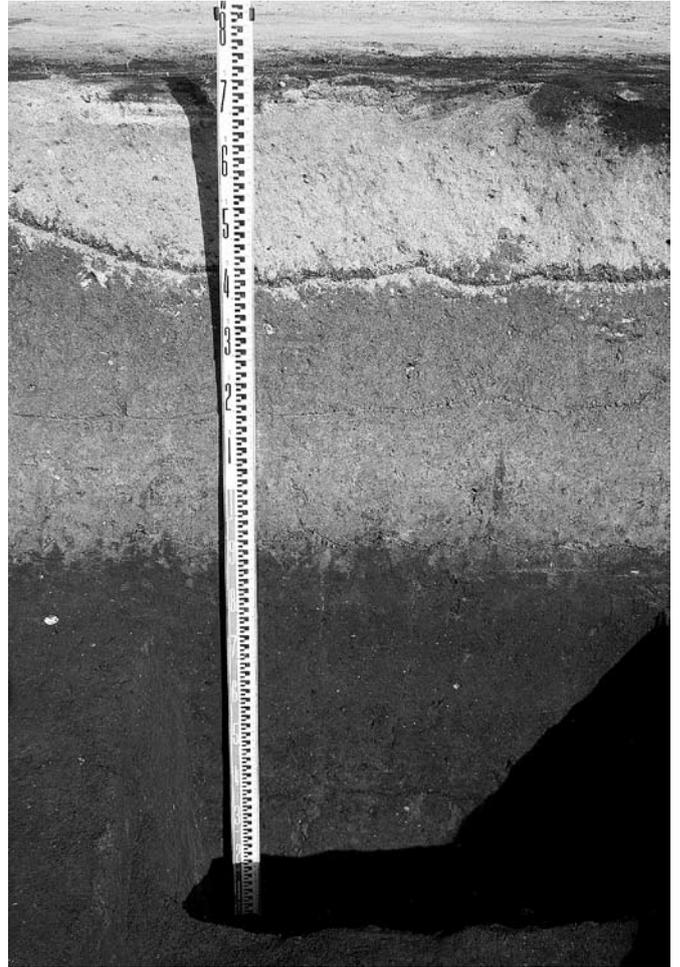


A区1号谷基本土層（南から）

PL.4



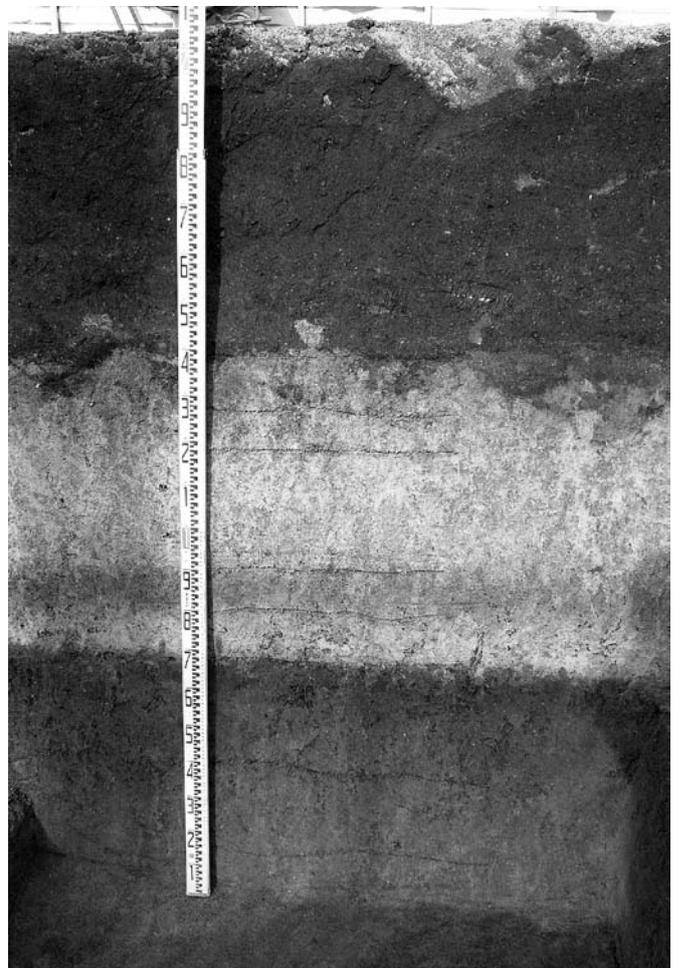
A区台地部基本土層（南から）



B区台地部基本土層（南から）



B区2面1号谷基本土層（南から）



C区1地点基本土層（南から中央の灰白色が縄文洪水層）



B区12号住居全景（南から）



B区12号住居埋葬・炉（西から）



B区12号住居炉（南から）



B区12号住居埋葬（南から）



B区12号住居対ピット全景（東から）



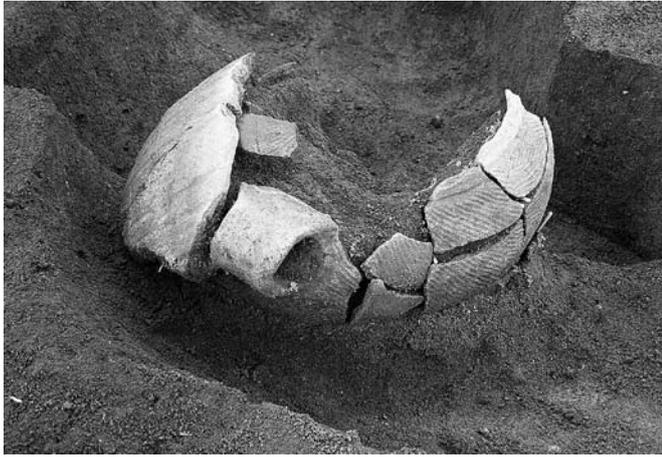
B区12号住居掘方全景（西から）



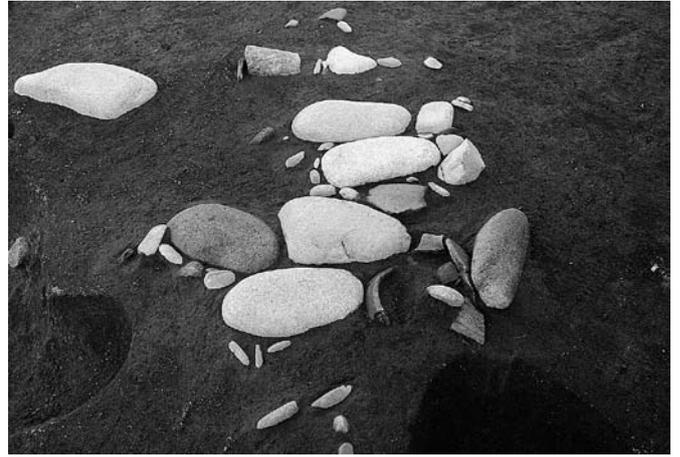
C区6号住居全景（南西から）



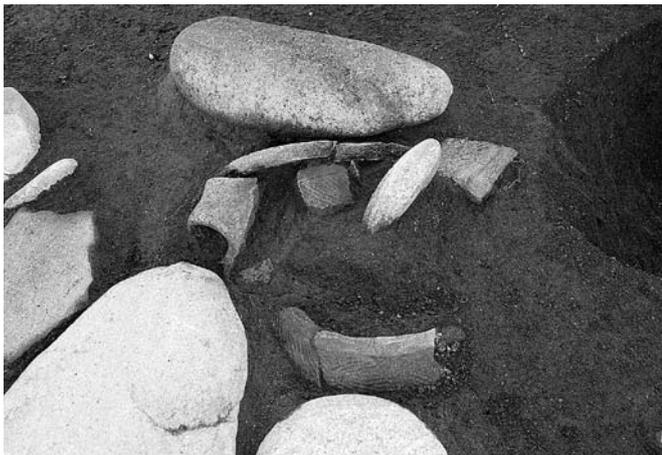
C区6a号住居土器炉（南西から）



C区6a号住居2号埋甕全景



C区6b号住居1号埋甕周辺(南西から)



C区6b号住居1号埋甕(南西から)



C区6号住居掘方全景(南西から)



B区1号埋甕土層断面(南から)



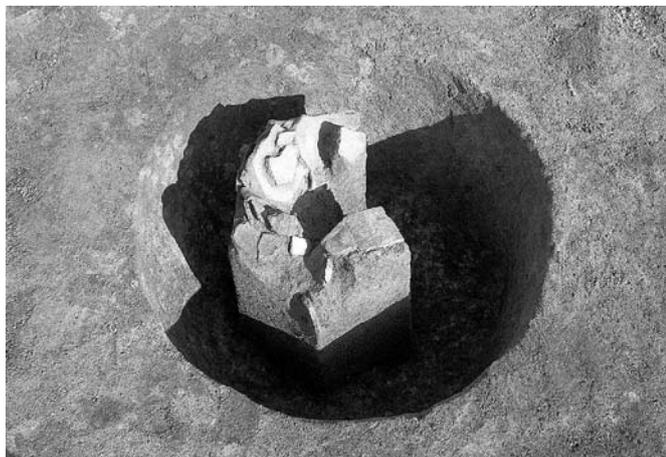
B区3号土坑土層断面(南から)



B区2号土坑全景(南から)



C区1号土坑全景(南から)



C区2号土坑全景 (南から)



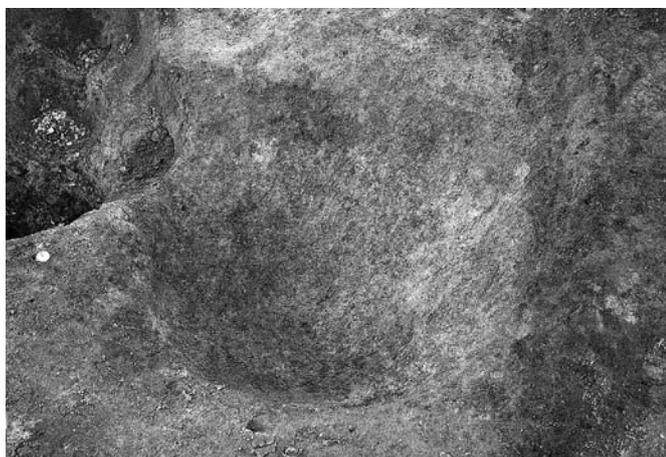
C区3号土坑全景 (南から)



C区4号土坑全景 (南から)



C区6号土坑全景 (南から)



C区7号土坑全景 (南から)



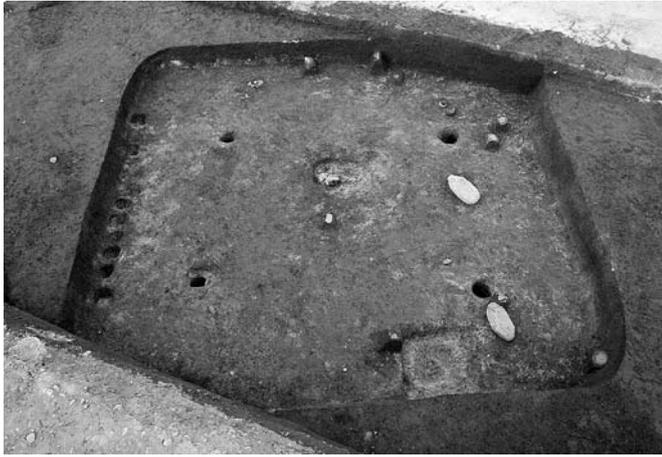
C区8号土坑全景 (南から)



C区9号土坑全景 (南から)



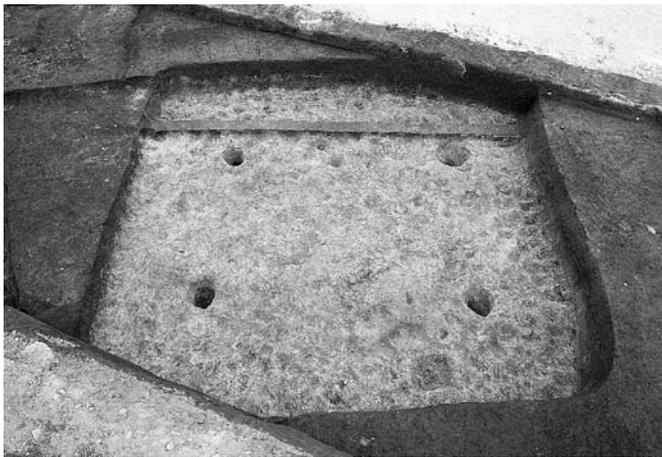
C区市94号土坑土層断面 (南から)



B区5号住居全景（南から）



B区5号住居遺物出土状態



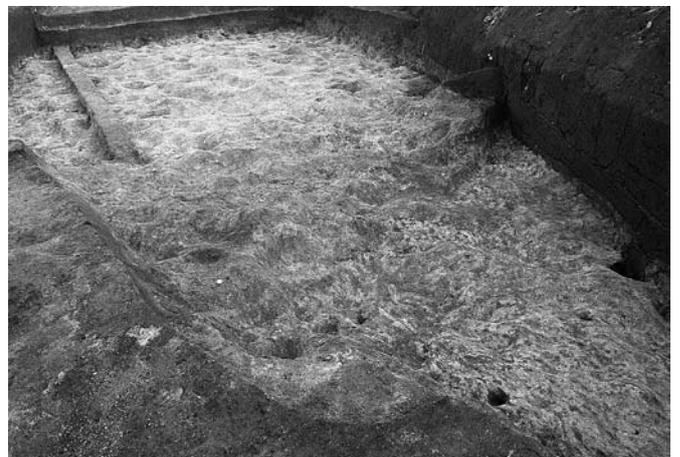
B区5号住居掘方全景（南東から）



B区5号住居貯蔵穴（北から）



B区6号住居全景（南西から）



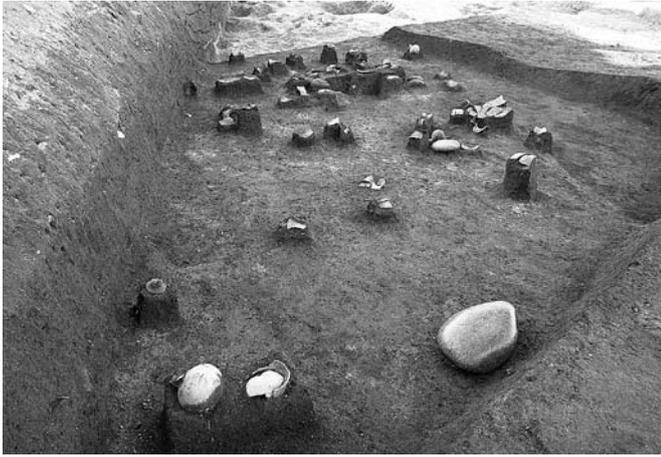
B区6号住居掘方全景（南西から）



B区7号住居全景（南西から）



B区7号住居遺物出土状態



B区8号住居全景



B区8号住居遺物出土状態



B区8号住居遺物出土状態



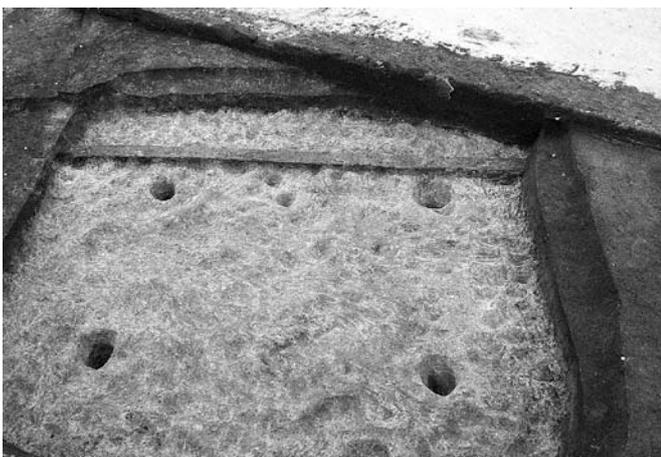
B区8号住居掘方全景（南西から）



B区9号住居土層断面（南から）



B区9号住居掘方全景（南西から）



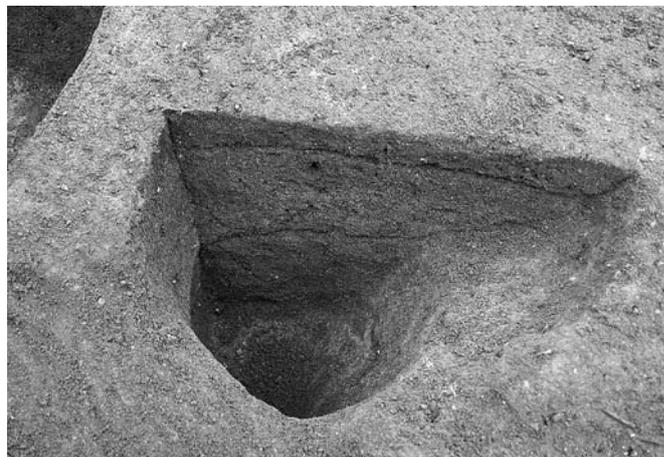
B区10号住居全景（南から）



B区11号住居柱穴土層断面（南東から）



B区11号住居全景（南西から）



B区11号住居柱穴（南東から）



B区市3a号住居全景（南から）



B区市3b号住居全景（南西から）



B区市8a号住居全景（南から）



B区市8b号住居全景（南西から）



B区市10a号住居全景（南西から）



C区1号住居掘方全景（南西から）



C区2号住居全景（南西から）



C区2号住居遺物出土状態（南西から）



C区2号住居遺物出土状態（南西から）



C区2号住居遺物出土状態（南西から）



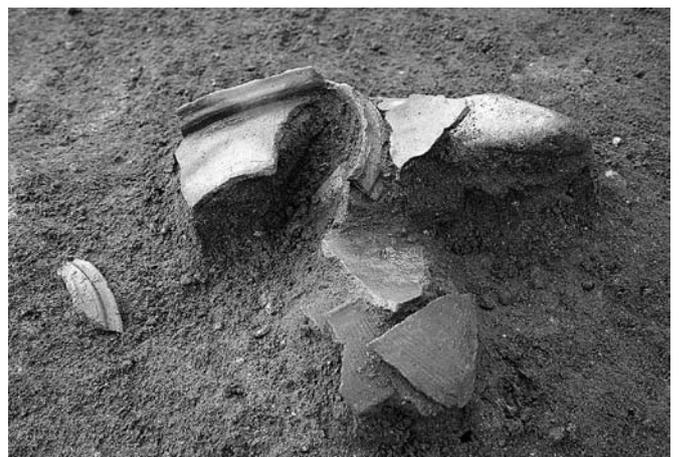
C区2号住居遺物出土状態



C区2号住居炉（南東から）



C区3a号住居全景（南西から）



C区3a号住居遺物出土状態



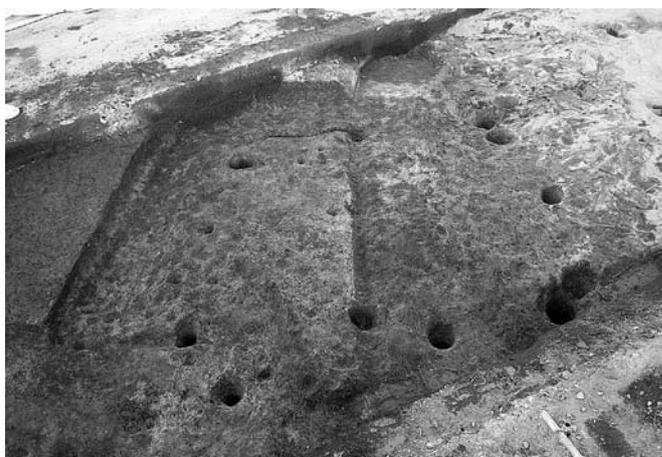
C区3a号住居遺物出土状態



C区3a号住居掘方全景（南西から）



C区4号住居全景（南西から）



C区4号住居掘方全景（南西から）



C区5号住居全景（北東から）



C区5号住居掘方全景（北東から）



C区市13a号住居全景（南から）



C区市13a号住居掘方全景（南から）



C区市13b号住居全景（南から）



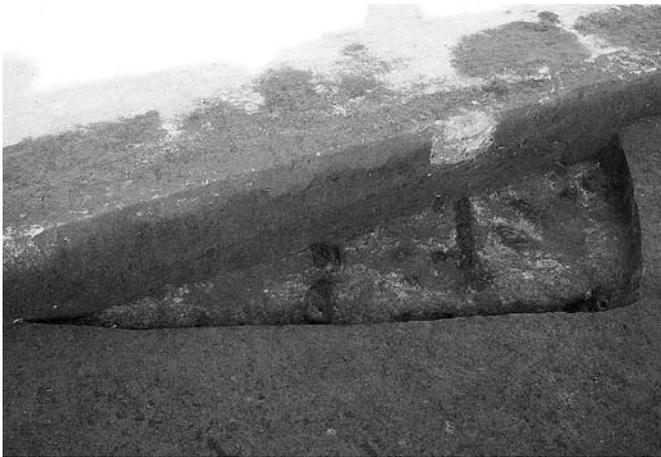
C区市13b号住居遺物出土状態（南から）



C区市13a・市13c号住居全景（南から）



C区市13a・市13c号住居掘方全景（南から）



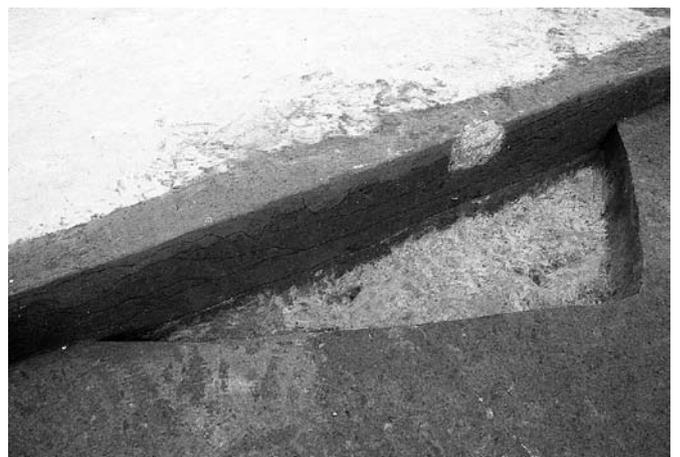
C区市16a号住居全景



C区市16a号住居炭化材遺物出土状態



C区市16a号住居炭化材遺物出土状態



C区市16a号住居掘方全景（南西から）



C区市16b号住居全景（南から）



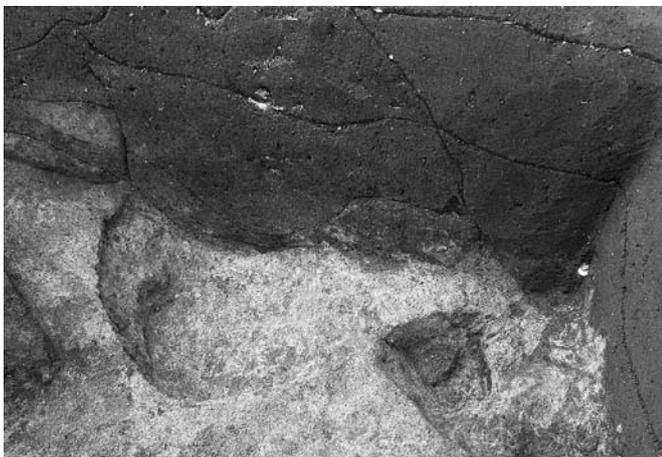
C区市16b号住居遺物出土状態（南から）



C区市16b号住居貯蔵穴全景（南から）



C区市16b号住居遺物出土状態（南から）



B区1号住居全景（東から）



B区2号住居全景（北東から）



B区2号住居遺物出土状態（北東から）



B区2号住居遺物出土状態（北東から）



B区2号住居掘方全景（北東から）



B区3号住居全景（南西から）



B区3号住居竈全景（南東から）



B区3号住居竈掘方



B区3号住居竈掘方全景（南東から）



B区4号住居全景（南東から）



B区4号住居地震地割れ痕（南東から）



B区4号住居竈全景



B区4号住居貯蔵穴土層断面（北東から）



B区4号住居地震のために凹んだ痕跡（南東から）



B区4号住居南壁土層断面（北から）



B区4号住居に食い込んだ地割れの土層断面（北から）



B区4号住居掘方全景（南東から）



B区市2号住居全景（南から）



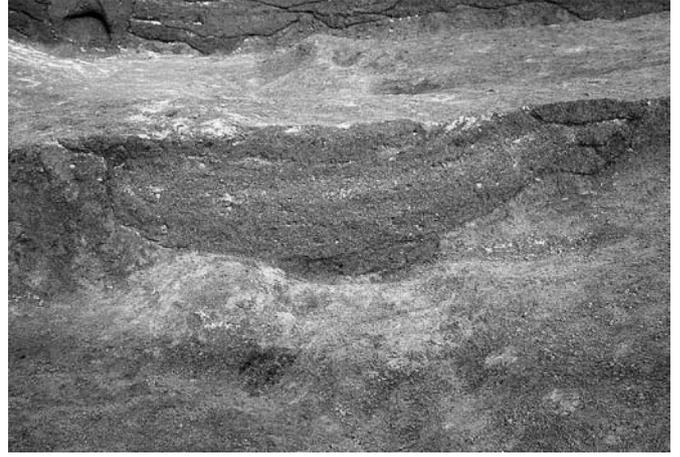
B区1号土坑全景（南から）



C区5号土坑全景（北から）



C区3号溝全景（南から）



C区3号溝土層断面（南から）



C区市3号溝全景



C区市3号溝土層断面（南から）



A区1号土坑全景（南から）



B区1号井戸土層断面（南から）



B区市1号溝全景（北から）



C区1号溝全景（西から）



C区2号溝全景（南から）



C区市2号溝全景（南から）



赤坂川

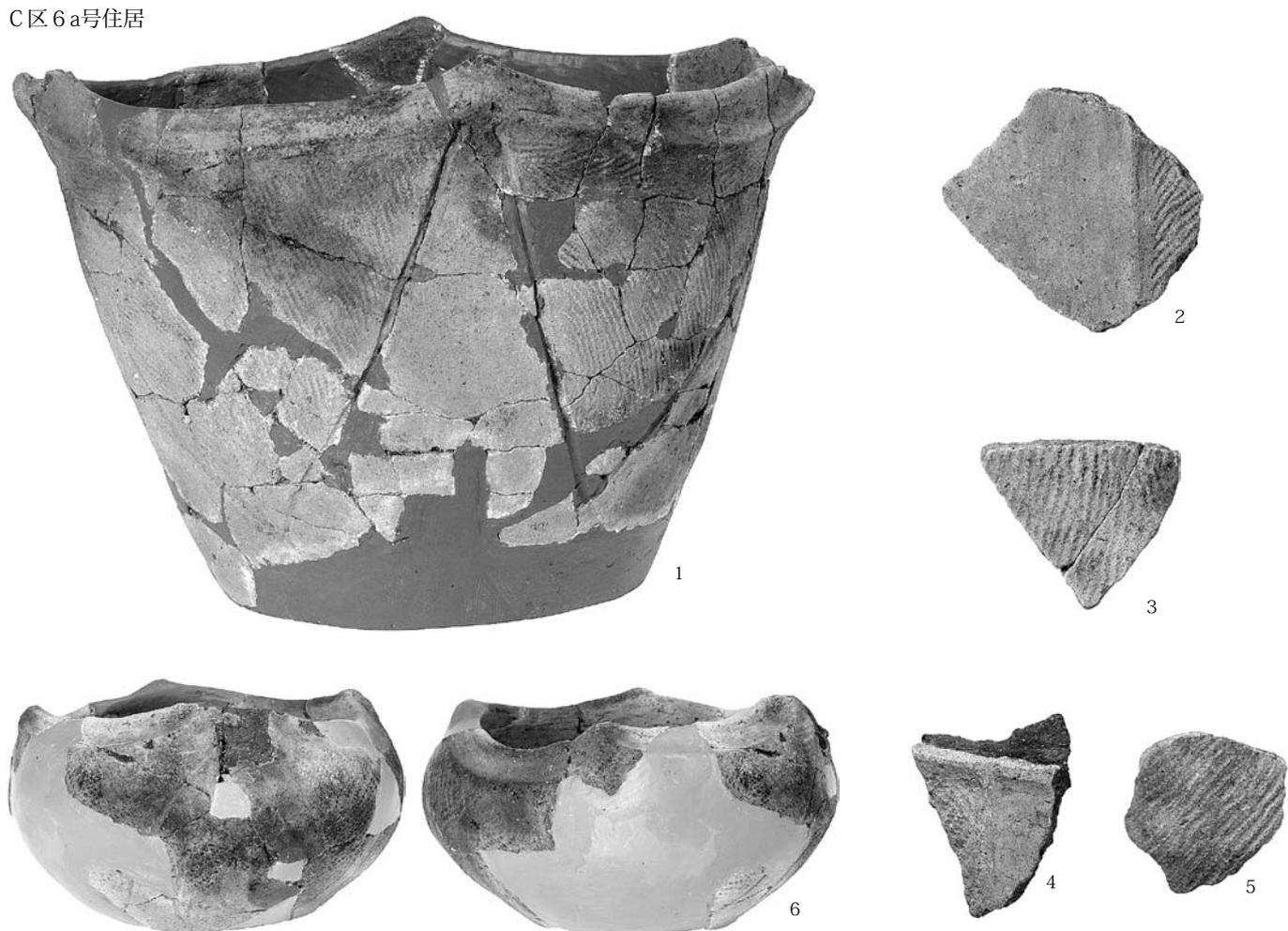


赤坂川合流

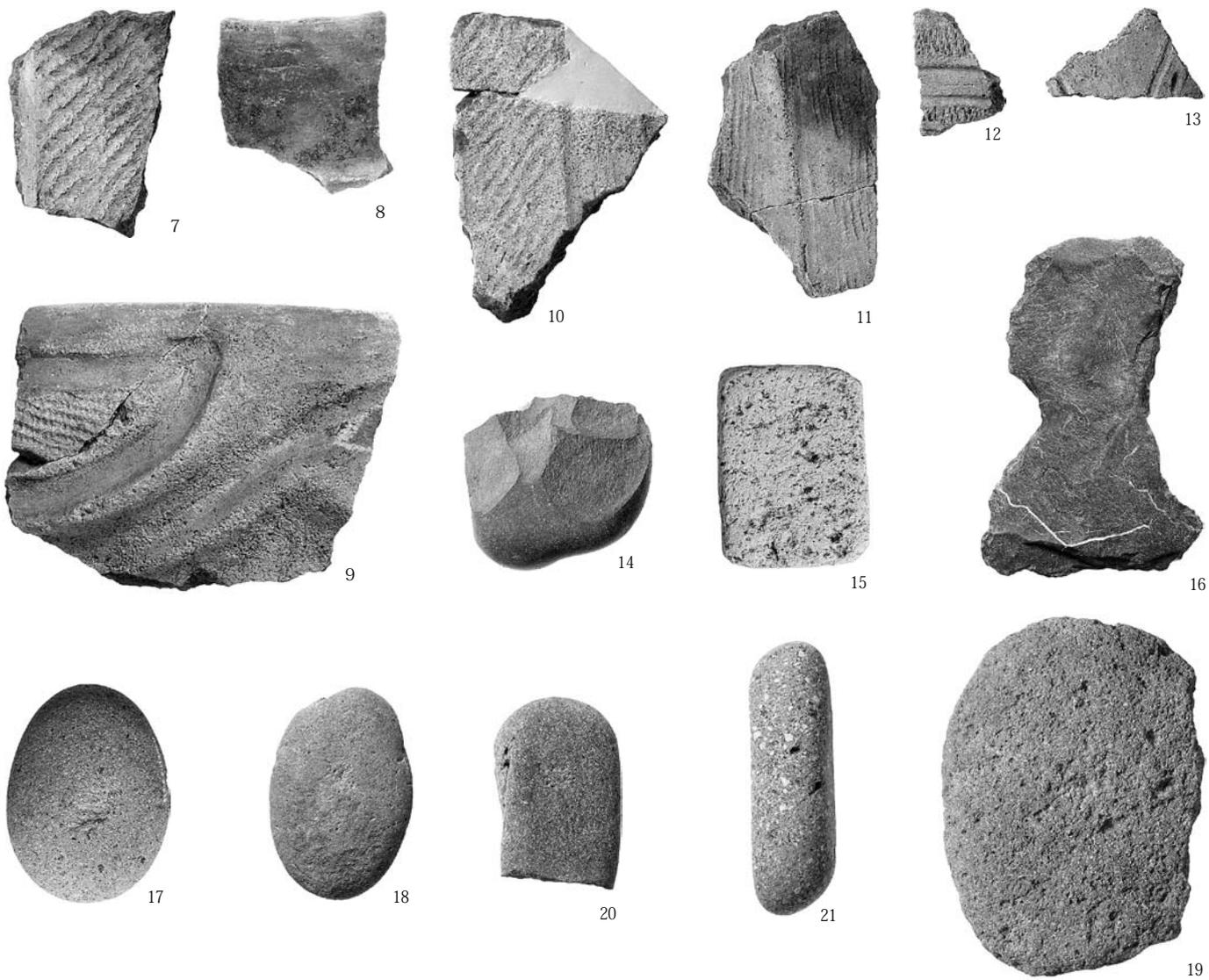
B区12号住居



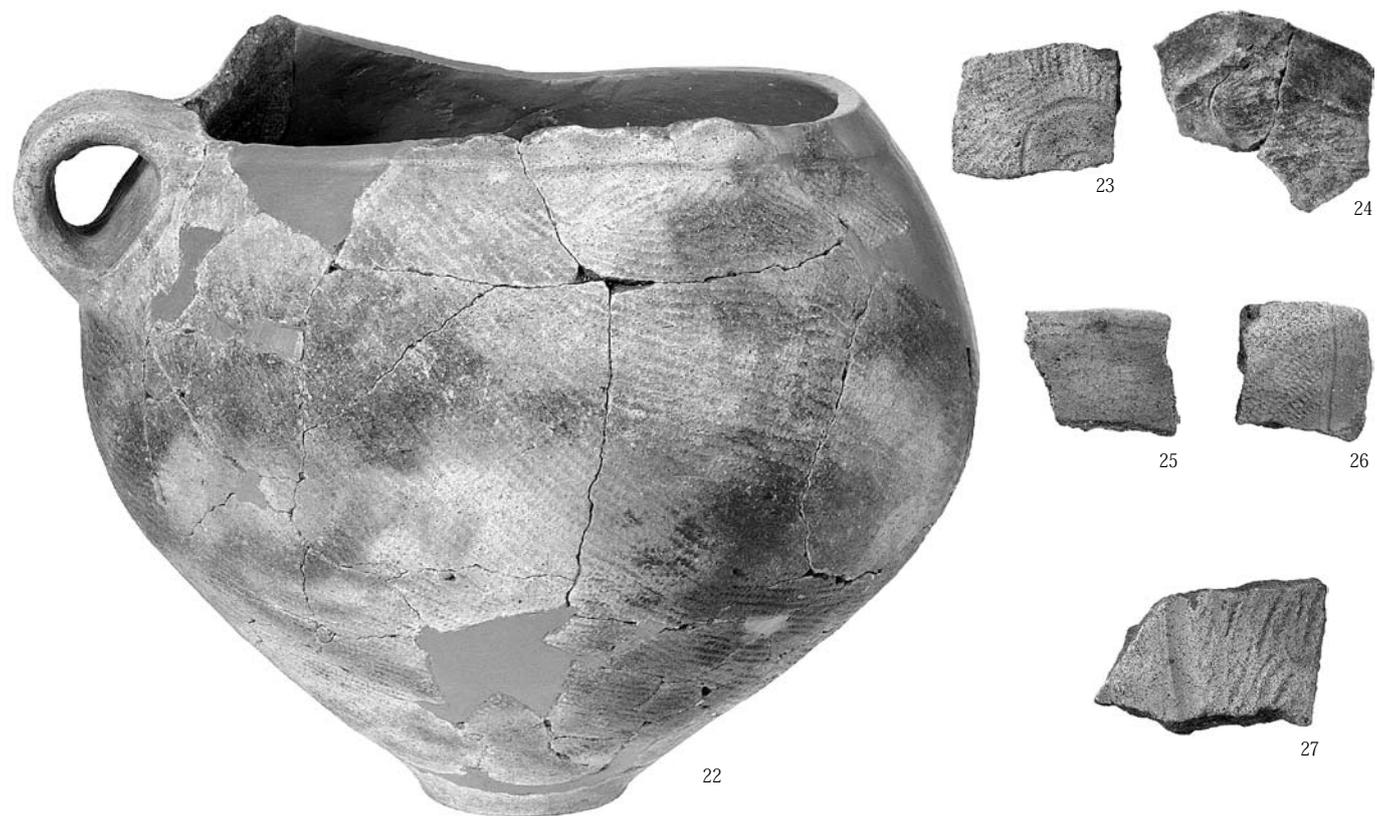
C区6a号住居

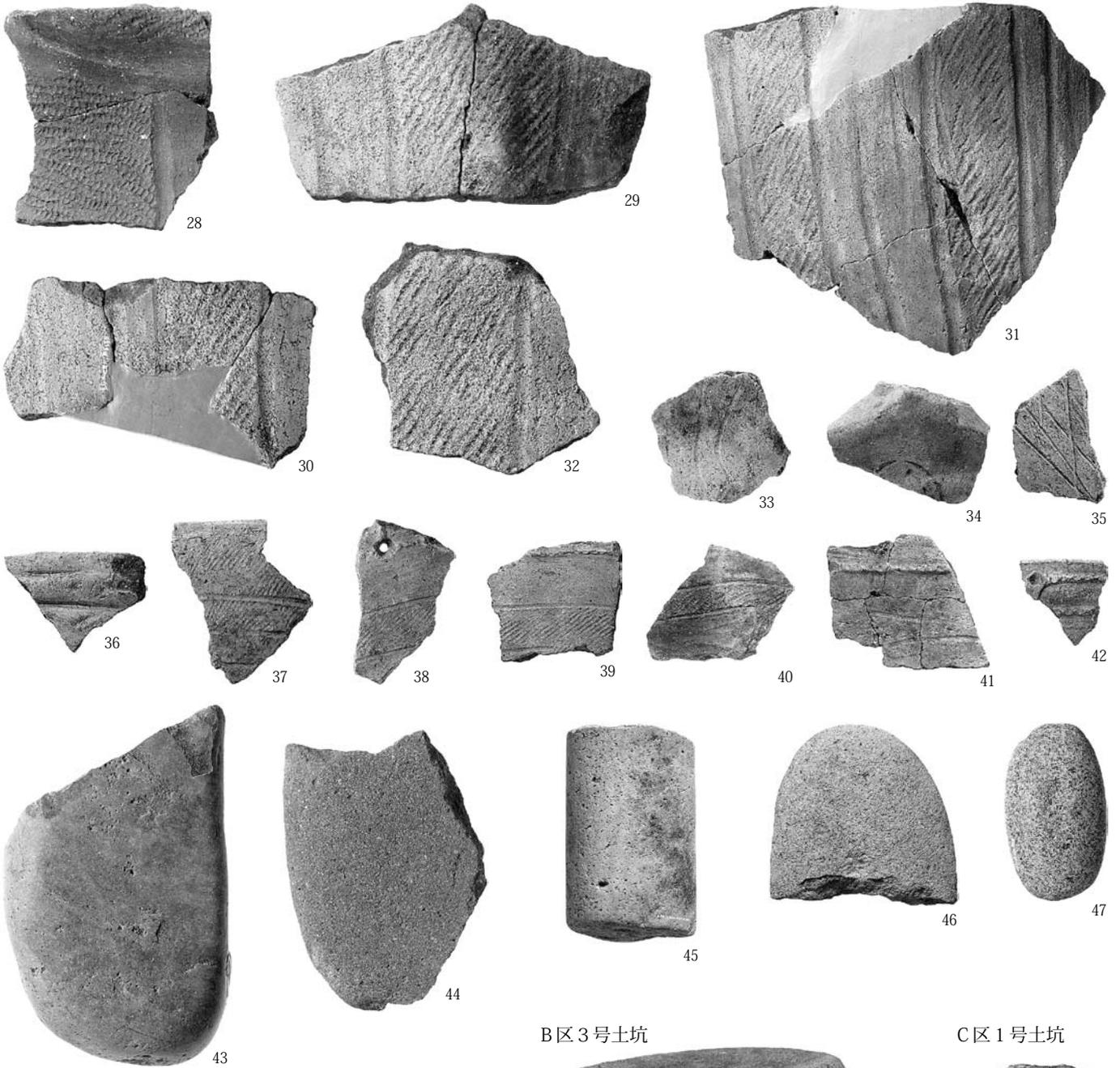


PL.20



C区6b号住居





B区1号埋囊



B区3号土坑



C区1号土坑



C区6号土坑

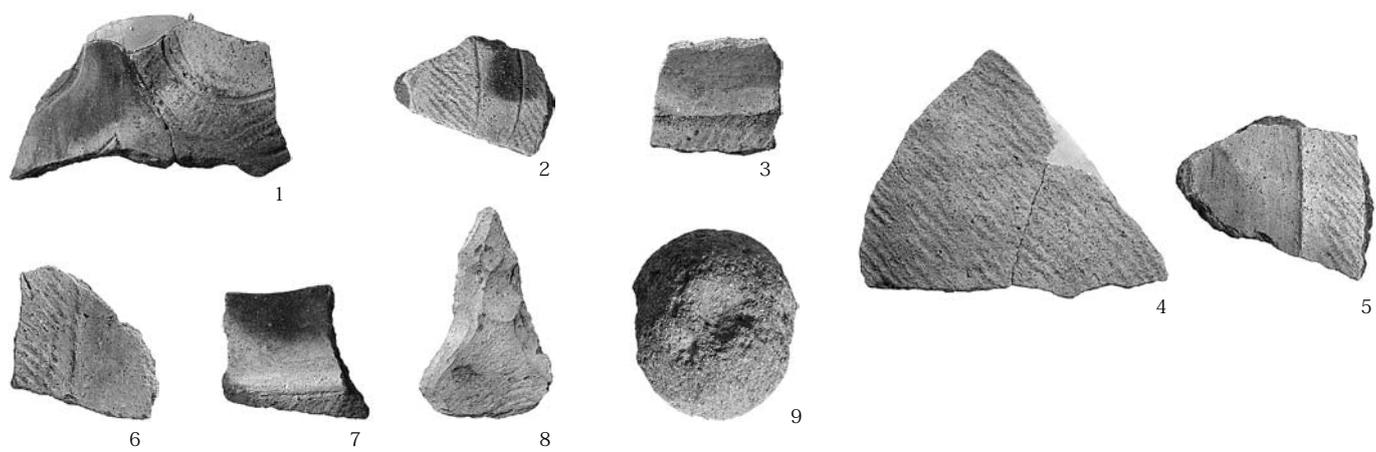


PL.22

C区2号土坑



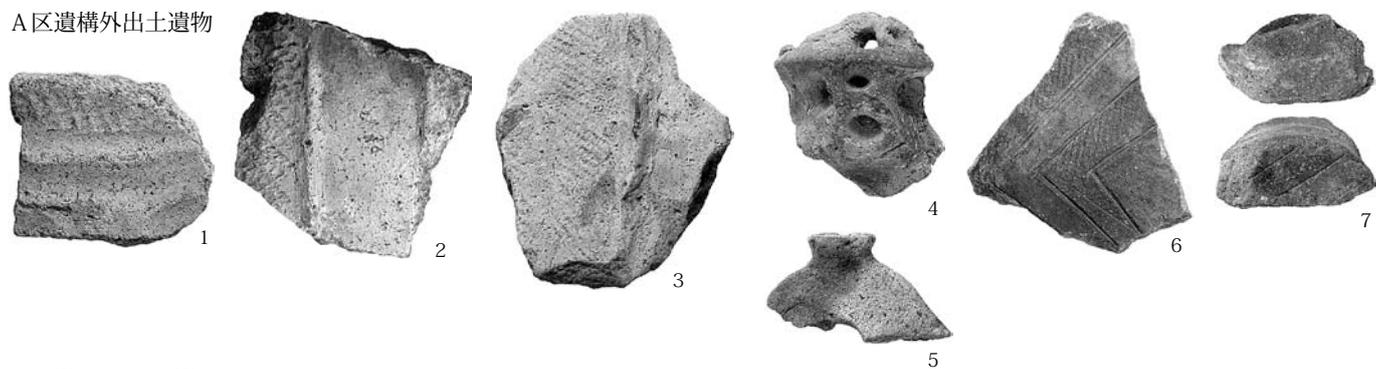
C区3号土坑



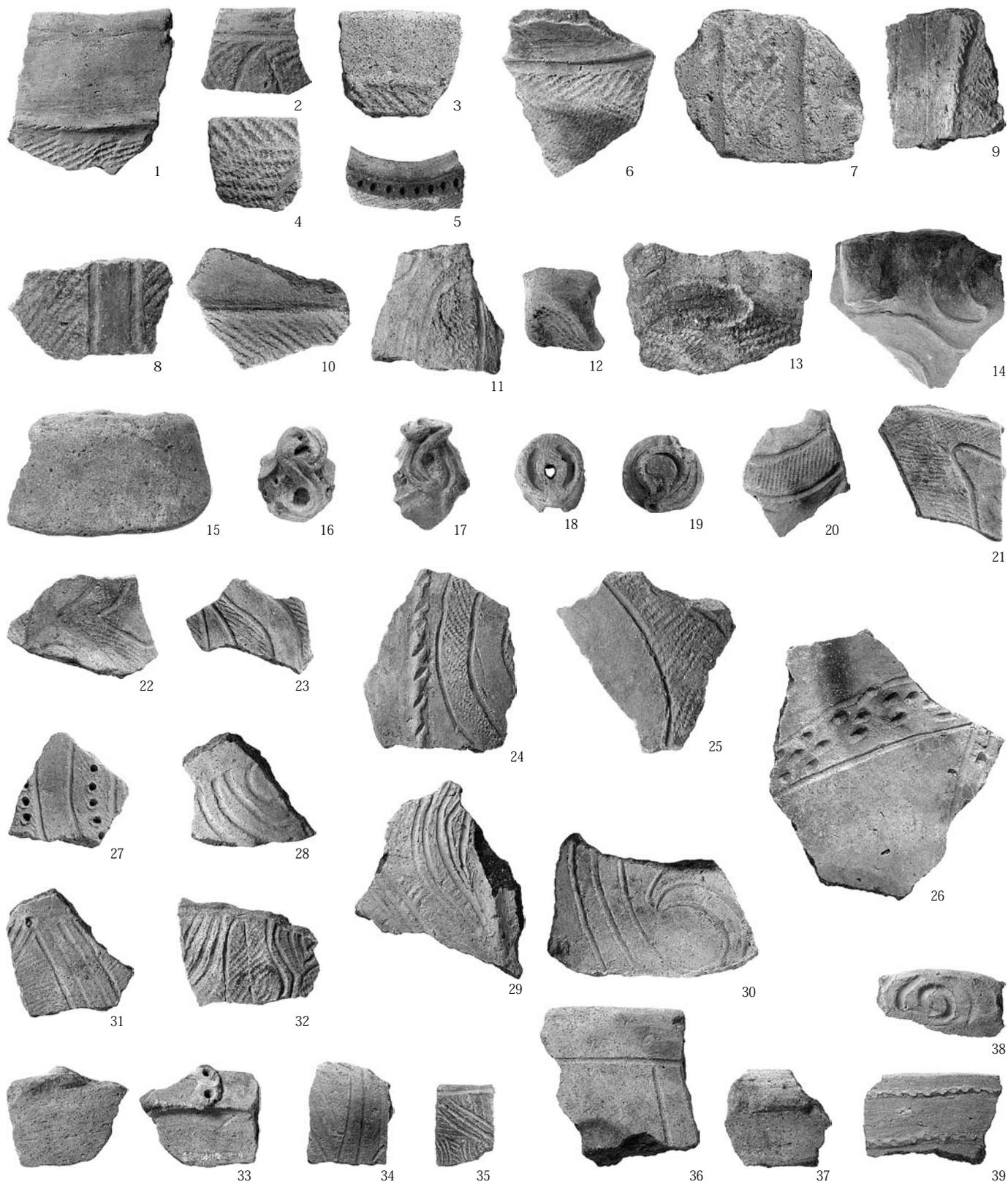
C区4号土坑



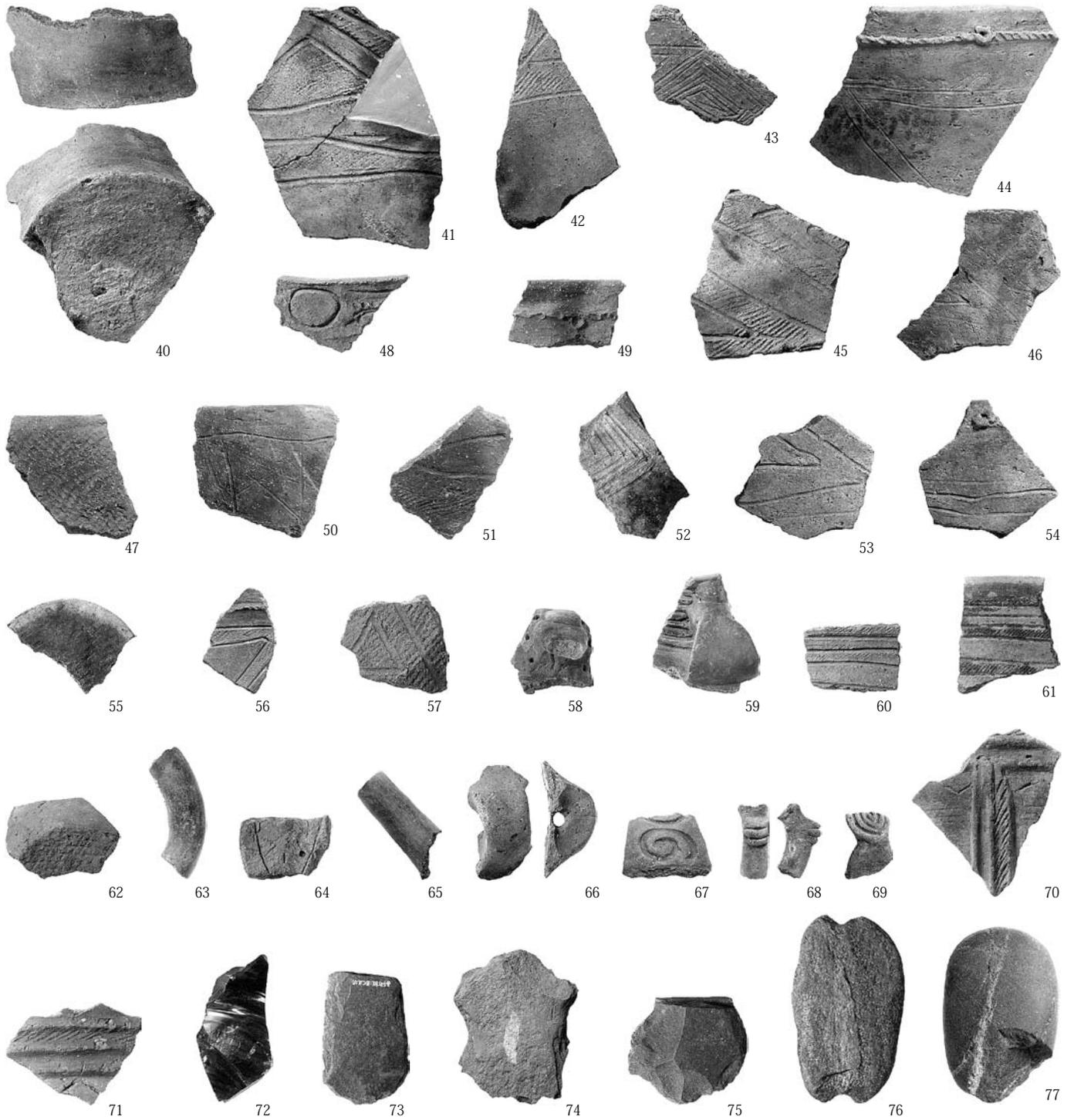
A区遺構外出土遺物



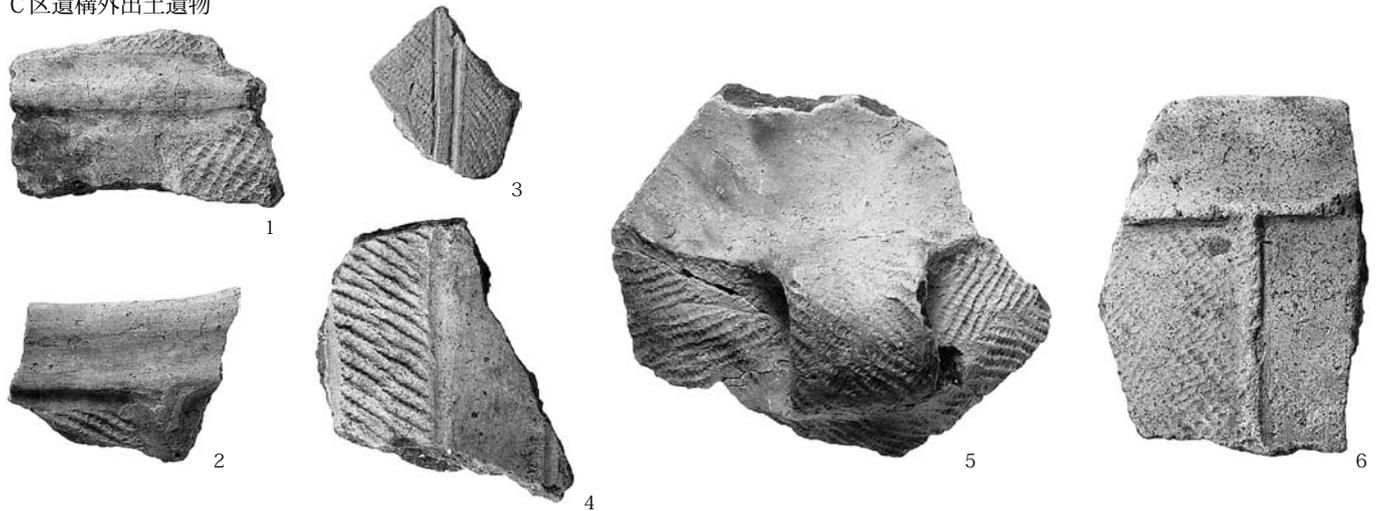
B区遺構外出土遺物

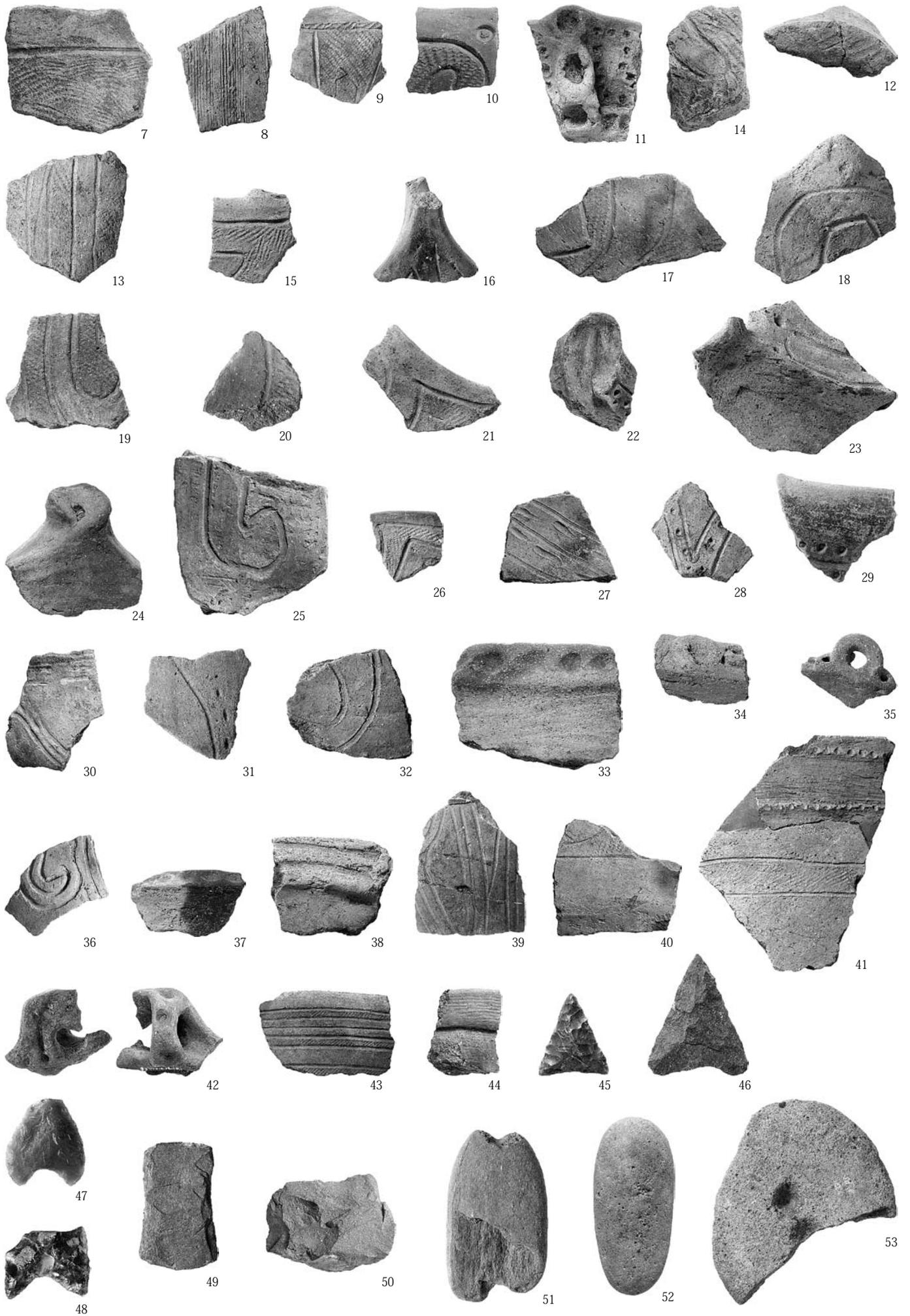


PL.24



C区遺構外出土遺物





PL.26

B区5号住居



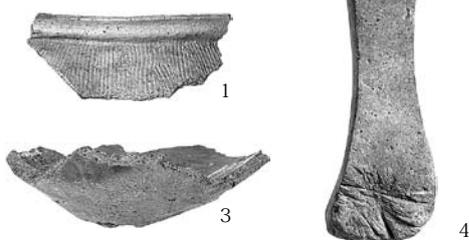
B区8号住居



B区9号住居



B区市8a号住居



B区市10a号住居



C区2号住居



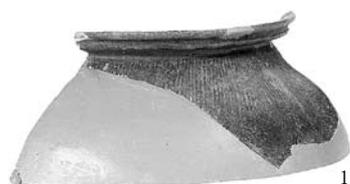
C区3a号住居



C区8号住居



C区3b号住居



C区4号住居



PL.28

C 区市13a号住居



C 区市13b号住居



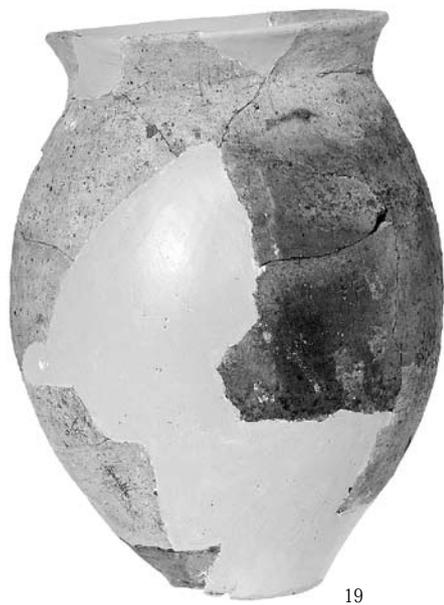
B 区2号住居



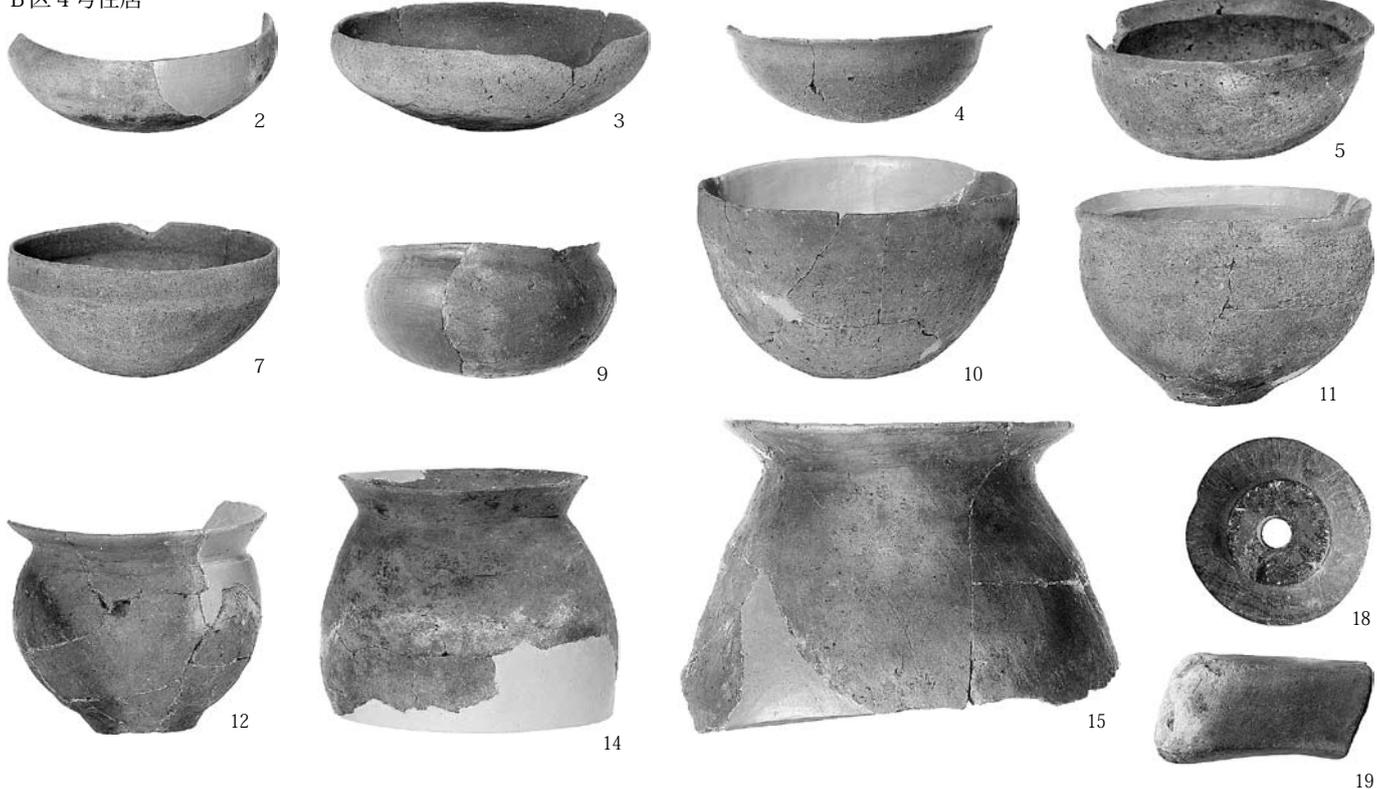
C 区市16b号住居



B 区3号住居



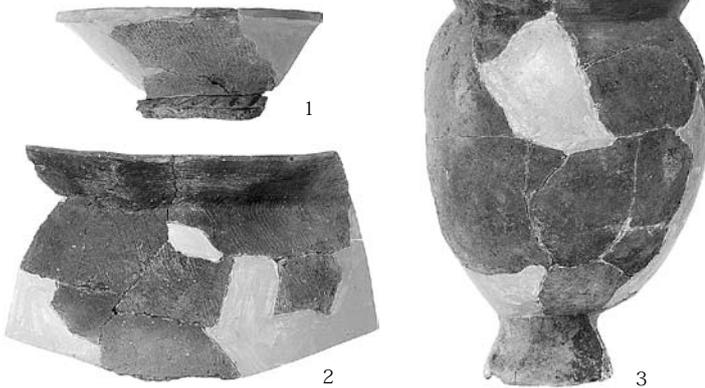
B区4号住居



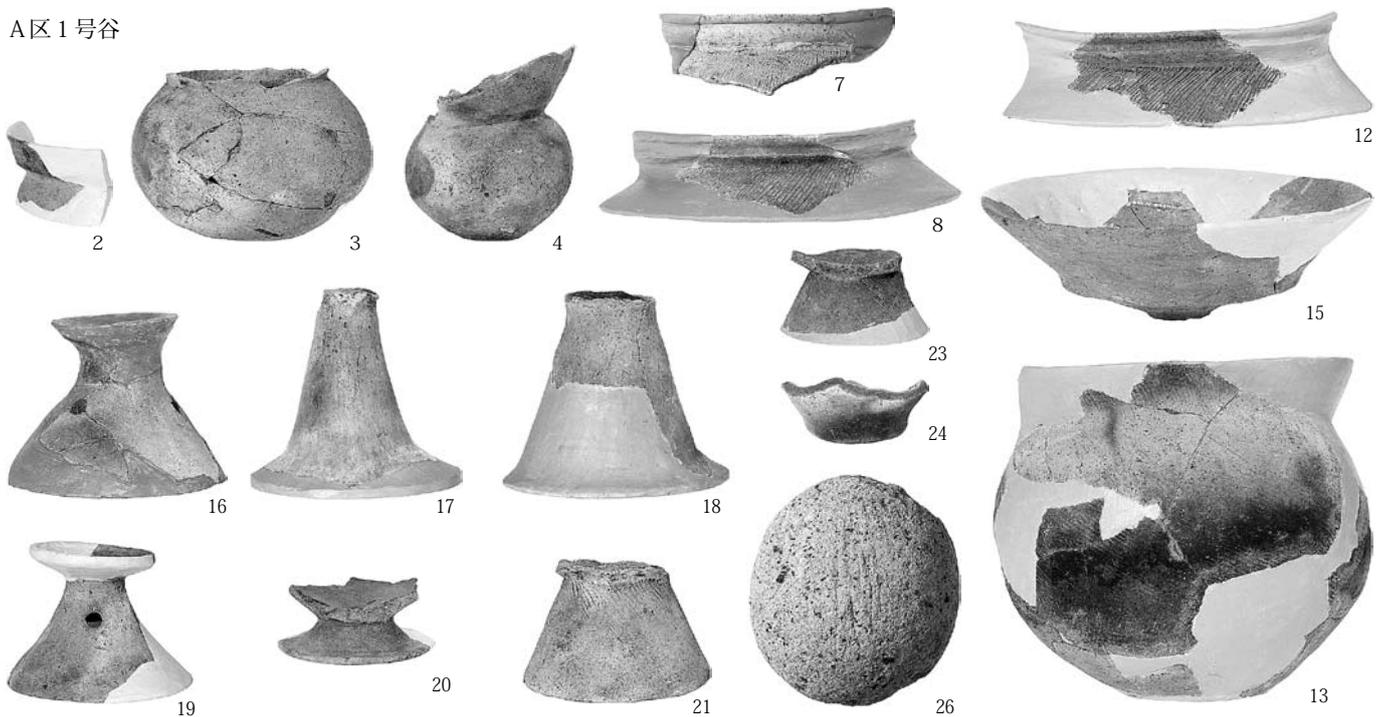
B区市2号住居



C区市13c号住居

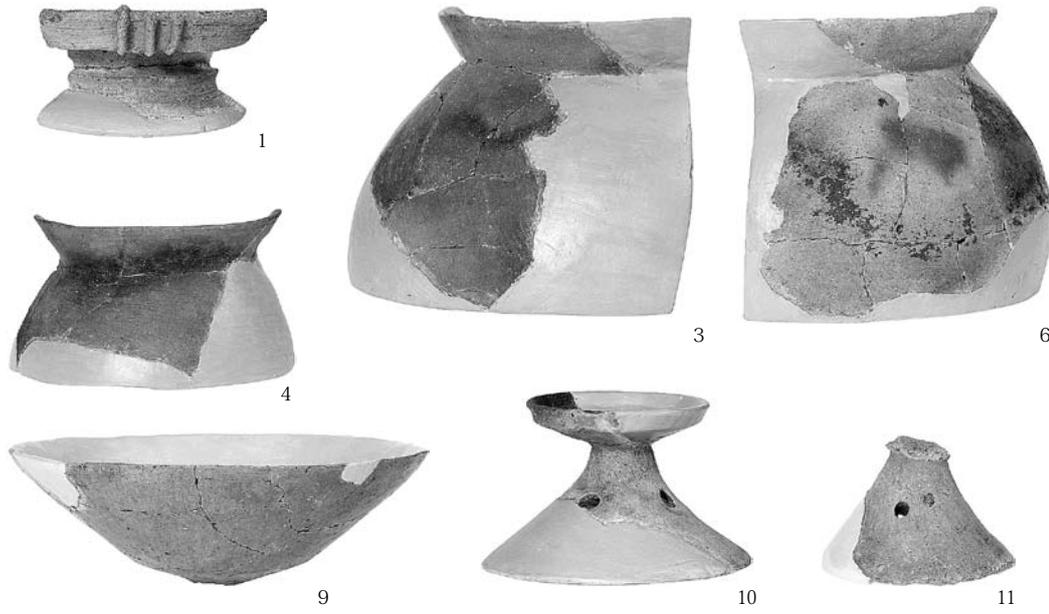


A区1号谷

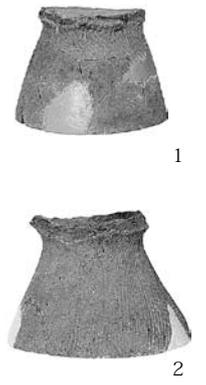


PL.30

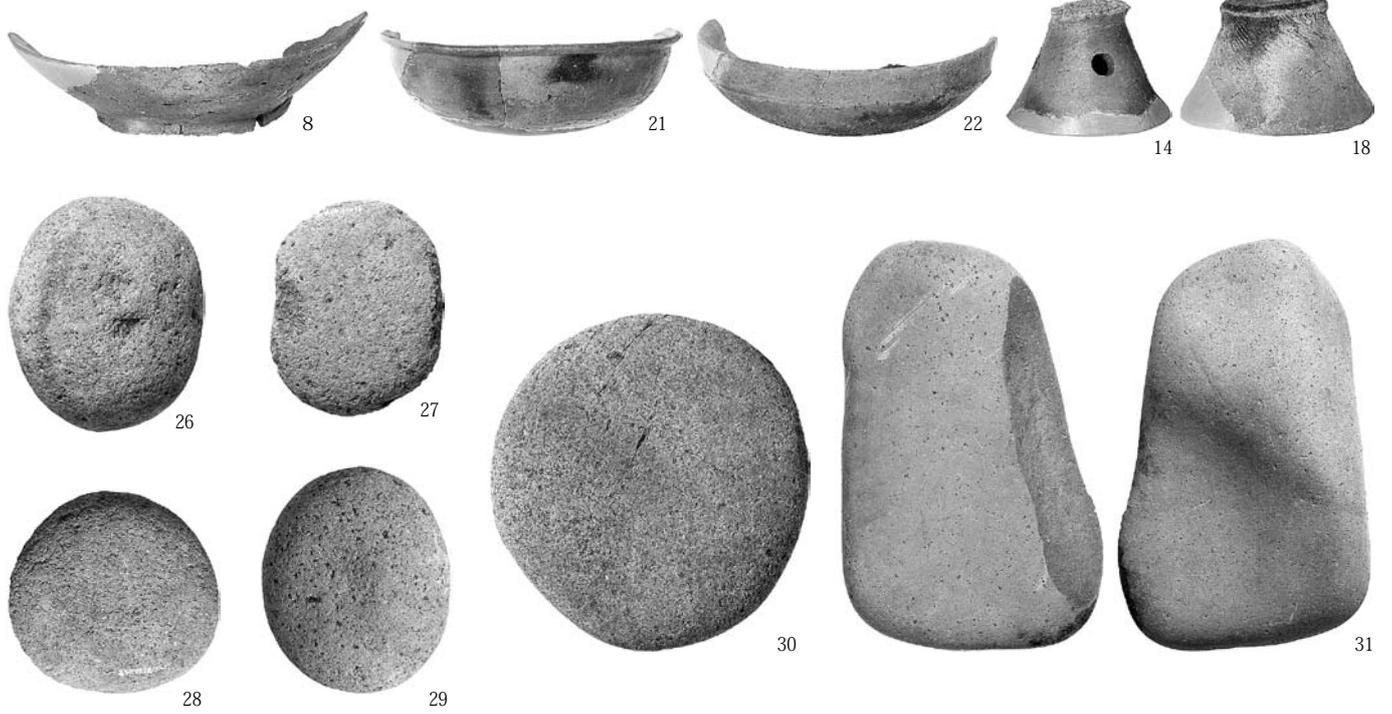
C区3号溝



C区市3号溝



B区遺構外



C区遺構外



抄 録

書名ふりがな	きたまちいせき
書 名	喜多町遺跡
副 書 名	J R 両毛線伊勢崎駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	
シリーズ名	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第519集
編著者名	綿貫邦男・岩崎泰一・大木紳一郎・唐澤至朗・坂口 一・笹澤泰史
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20110318
作成法人 I D	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住 所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	きたまちいせき
遺 跡 名	喜多町遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんいせさきしくるわまち・おおたまち
遺跡所在地	群馬県伊勢崎市曲輪町・太田町
市町村コード	10204
遺跡番号	IS057
北緯（日本測地系）	361914
東経（日本測地系）	1391145
北緯（世界測地系）	361926
東経（世界測地系）	1391134
調査期間	20071101-20080131
調査面積	1200
調査原因	J R 両毛線に伴う立体交差工事
種 別	集落
主な時代	縄文/古墳
遺跡概要	縄文－住居 2 ＋埋甕 1 ＋土坑12 / 古墳－住居32＋溝 3 ＋土坑 2 / 中近世－土坑 2 ＋溝 4 ＋井戸 1
特記事項	縄文時代中期、古墳時代前期から中期の集落
要 約	縄文時代中期の竪穴住居 2 軒と古墳時代前期から中期の竪穴住居 32 軒を検出した。古墳時代は前期が中心で、歴史上の大変革期である古墳出現期における当地域での中核的な集落を検出した。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第519集

喜多町遺跡

J R 両毛線伊勢崎駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成23年 3月11日 印刷

平成23年 3月18日 発行

編集／発行 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784-2

電話 0279-52-2511 (代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org>

印刷／株式会社 開文社印刷所
